

西脇市

## 喜多・城山城跡

— (一) 黒田庄多井田線 道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



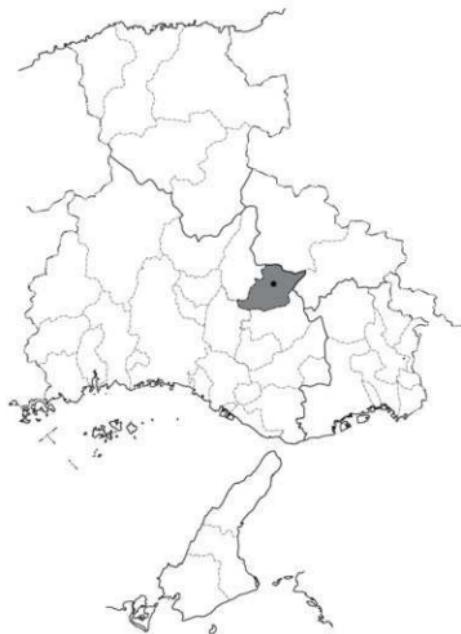
令和 2 (2020) 年 3 月

兵庫県教育委員会

西脇市

# 喜多・城山城跡

- (一) 黒田庄多井田線 道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -



令和2（2020）年3月

兵庫県教育委員会



## 例　言

1. 本書は兵庫県西脇市黒田庄村喜多に所在する喜多・城山城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および出土品整理作業は、兵庫県北播磨県民局加東土木事務所多可事業所による、一般県道黒田庄多井田線 道路改良事業に伴うもので、北播磨県民局長の依頼を受けた兵庫県教育委員会を調査主体とし、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センターが調査機関として兵庫県教育委員会から委託を受けて実施した。  
出土品整理作業は、北播磨県民局長から依頼を受けた兵庫県教育委員会が公益財團法人兵庫県まちづくり技術センターに委託して、兵庫県立考古博物館において実施した。
3. 発掘調査の担当者は以下のとおりである。  
確認調査（平成26年度）　兵庫県立考古博物館  
　　総務部 埋蔵文化財課 池田征弘  
本発掘調査（平成27年度） 公益財團法人 兵庫県まちづくり技術センター  
　　埋蔵文化財調査部 調査課 別府洋二・岸本一宏  
発掘調査は、内藤建設株式会社（西脇市下戸田8-3）に工事委託して実施し、下請業者の安西工業株式会社（神戸市西区上新地3-3-1）が主として発掘調査業務にあたった。
4. 発掘調査前の地形および調査後の地形・遺構の実測は空中写真測量図化として、株式会社GEOソリューションズ（西宮市津門大筋町2-23）に委託して実施した。その他の詳細実測は調査補助員の西本寿子および調査員がおこない、安西工業（株）の西本英二氏の多大な協力を得た。
5. 出土品整理作業は平成30（2017）年度から兵庫県立考古博物館で実施した。主として嘱託員等が整理作業を担当し、発掘調査担当者が作業指示等を行い、これに工程管理の職員が加わって実施した。また、金属器保存処理についても保存処理担当職員と嘱託員により兵庫県立考古博物館で実施した。なお、遺物実測および遺構・遺物図のデジタルデータは嘱託員が行なった。
6. 本書に使用した写真的うち、遺構については調査員が撮影したもので、発掘中の空中写真撮影については（株）GEOソリューションズに委託して撮影したものを使用した。また、遺物写真については国際文化財株式会社に委託して横山亮氏が撮影したものを使用した。
7. 喜多・城山城跡出土試料の自然科学分析は出土種実定および放射性炭素年代測定について実施し、いずれも株式会社加速器分析研究所（神奈川県川崎市多摩区登戸新町129-1）に委託して実施した。
8. 本書の執筆は金属器と石製品関係および報告書抄録を別府が行い、第5章第3節は西脇市教育委員会の岸本一郎氏に、第5章第4節は（公財）兵庫県まちづくり技術センターの山上雅弘氏にそれぞれお願いし、自然科学分析については報告文を掲載し、その他を岸本が執筆した。
9. 本報告で使用した図面・写真および遺物は、兵庫県立考古博物館および魚住分館で保管している。
10. 発掘調査・出土品整理にあたり、永恵裕和（兵庫県教育委員会）、岡田章一・松井良祐・山上雅弘（兵庫県立考古博物館）、岸本一郎・菅澤敏弘（西脇市教育委員会）、西田猛（小野市教育委員会）（順不同、敬称略）の各氏のご教示・ご協力を得た。記して感謝の意を表します。

## 凡　例

1. 本書で使用した方位は第V系国土座標（世界測地系）を基準とし、北は座標北をさす。標高の数値は国土交通省二級基準点を利用した海拔高（T.P.）を使用した。
2. 喜多・城山城跡の調査について、兵庫県教育委員会が設定した調査別の遺跡調査番号は以下のとおりである。

確認調査	平成26（2014）年度	遺跡調査番号	2014073
本発掘調査	平成27（2015）年度	遺跡調査番号	2015108
3. 土層断面の土層色調名は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものであり、土層名のうち、堆積物の粒度区分については、『新版地学ハンドブック』（大久保雅弘・藤田至則編著、築地書館株式会社発行）により、調査担当者が経験的に触感により判断したものである。
4. 遺物番号は本文・図版・写真図版とも同一とし、遺物の種類ごとに通し番号としている。また、遺物番号のうち、土錐には番号の前に「D」、石製品には「S」、金属器には「M」をそれぞれ冠し、種類ごとに通し番号としている。
5. 土器類実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、磁器は50%、陶器は30%、瓦質土器は20%の断面網かけにしている。
6. 本書に掲載した挿図のうち、第1図は国土地理院発行の電子地形図25000を使用し、図版2は加東土木事務所多可事業所から提供を受けた図を使用した。

# 本文目次

第1章 城跡の位置と環境	
第1節 位置と地理的環境	1
第2節 城跡の歴史的環境	1
第2章 調査の経緯・経過と体制	
第1節 発掘調査に至る経緯と経過	5
第2節 出土品整理作業の経過と体制	6
第3章 調査の結果	
第1節 遺構	
1. 上層の遺構	7
2. 下層の遺構	12
第2節 遺物	
1. 土器類	15
2. 土錘	21
3. 金属製品	24
4. 石製品	35
第4章 自然科学分析結果	
第1節 喜多・城山城跡における種実同定	37
第2節 喜多・城山城跡における放射性炭素年代（AMS測定）(1)	39
第3節 喜多・城山城跡における放射性炭素年代（AMS測定）(2)	43
第5章 総括	
第1節 喜多・城山城跡の変遷	45
第2節 金属製品	46
第3節 喜多・城山城周辺の城館	53
第4節 喜多・城山城跡における段状遺構	63

## 挿図目次

第1図 周辺の主要遺跡分布図	2	第11図 比延前田遺跡遺構配置図	57
第2図 喜多・城山城跡の種実	38	第12図 西脇城跡地籍図	58
第3図 暦年較正年代グラフ（参考）	42	第13図 坂本城跡測量図	59
第4図 暦年較正年代グラフ（参考）	44	第14図 黒田構江遺跡遺構配置図・全体復元図	60
第5図 龍手	47	第15図 城山城跡周辺の城館跡（伝承地含む）	61
第6図 唐櫃	49	第16図 段状遺構と配置図	63
第7図 罈ノ城復元図	53	第17図 広域城郭の段状遺構	64
第8図 豊生城縄張図	54	第18図 小規模城郭の段状遺構	65
第9図 福地城縄張図	55	第19図 美作の段状遺構	66
第10図 比延山城縄張図	56		

## 表目次

第1表 主要遺跡名表	3	第6表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{14}\text{C}$ 補正値）	44
第2表 出土土錐計測表	22	第7表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{14}\text{C}$ 未補正値、 暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代）	44
第3表 出土金属製品一覧	33	第8表 兵庫県出土中近世甲冑一覧	52
第4表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{14}\text{C}$ 補正値）	41		
第5表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{14}\text{C}$ 未補正値、 暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代）	41		

## 図版目次

図版1 喜多・城山城跡と周辺の地形	国版15 第II郭北西部 盛土土層断面
図版2 喜多・城山城跡と道路計画部分	国版16 第II郭北西部 盛土断面土層名
図版3 路線内の喜多・城山城跡現況地形	国版17 第III郭盛土・土堤土層断面
図版4 調査後全体地形	国版18 第III郭盛土・土堤断面土層名
図版5 主郭～第III郭平面	国版19 第III郭土堤・下層堅壁状遺構1埋土土層断面
図版6 第III郭詳細平面	国版20 第III郭土堤・下層堅壁状遺構2埋土土層名
図版7 第III郭上石積平面・立面	国版21 上層・下層遺構 垂直重複関係
図版8 第III郭虎口 平面・土層断面	国版22 下層遺構
図版9 第III郭土錐群	国版23 山上講前面石敷平面
図版10 第III郭西端 集石	国版24 主郭・第II郭出土土器・陶器
図版11 喜多・城山城跡 調査区内断面	国版25 第III郭出土土師器皿
図版12 中央部北半土層断面	国版26 第III郭出土青白磁・陶器・瓦質土器
図版13 第III郭平坦部 埋土土層断面	国版27 切岸・第VI郭出土土器・陶器・石鍋
図版14 第II郭・通路 埋土・盛土土層断面	国版28 各郭出土 磁器以前の土器1

図版29 各郭出土 梨城以前の土器2	図版42 出土金属器1
図版30 梨城以降山上講關係の出土陶器・磁器・瓦	図版43 出土金属器2
図版31 梨城以降山上講關係の出土瓦	図版44 出土金属器3
図版32 第Ⅱ郭・第Ⅲ郭土錐群出土土錐1	図版45 出土金属器4
図版33 第Ⅲ郭土錐群出土土錐2	図版46 出土金属器5
図版34 第Ⅲ郭土錐群出土土錐3	図版47 出土金属器6
図版35 第Ⅲ郭 主郭石積下出土土錐	図版48 出土金属器7
図版36 第Ⅲ郭 主郭崩落土出土土錐	図版49 出土金属器8
図版37 主郭北東部盛土出土土錐	図版50 出土金属器9
図版38 第Ⅲ郭盛土・主郭崩落土出土土錐1	図版51 出土金属器10
図版39 第Ⅲ郭盛土・主郭崩落土出土土錐2	図版52 出土金属器11
図版40 第Ⅲ郭盛土・主郭崩落土出土土錐3・切岸出土土錐	図版53 出土金属器12
図版41 主郭表土・第Ⅱ郭盛土層出土石製品	

## 写真図版目次

写真図版1上 調査前全景（北上空から）	写真図版12上 主郭南側の通路（旧第Ⅳ郭・西から）
下 調査後全景（北上空から）	下 主郭南東側の通路・斜路（西から）
写真図版2上 遠景（南上空から）	写真図版13上 第Ⅲ郭全景（南西から）
下 遠景（南西上空から）	下 第Ⅲ郭北邊土壘・石積（南西から）
写真図版3上 遠景（北西上空から）	写真図版14上 第Ⅲ郭土壘・集石（西から）
下 遠景（西上空から）	下 第Ⅲ郭土壘と石積（東から）
写真図版4上 近景（南上空から）	写真図版15上 第Ⅲ郭内平坦部・土壘内面の石積（南東から）
下 近景（北上空から）	下 第Ⅲ郭土壘中央部石積（南から）
写真図版5上 調査前全景（東上空から）	写真図版16上 第Ⅲ郭土壘西端部石積（南東から）
下 調査前調査区全景（北上空から）	下 第Ⅲ郭南東部の虎口石段（南東から）
写真図版6上 調査前全景（真上空から・上が北）	写真図版17上 主郭北東部斜面の石積（北東から）
下 調査前調査区全景（真上空から・上が北）	下 第Ⅲ郭西端の集石（西から）
写真図版7上 調査後全景（東上空から）	写真図版18上 第Ⅲ郭全景（真上から・上が北）
下 近景（南麓から）	① 第Ⅲ郭土壘（東から） ② 第Ⅲ郭土壘中央部截ち割り底面（南から） ③ 第Ⅲ郭南東部の虎口石段（西から） ④ 第Ⅲ郭南東部の虎口石段（北西から）
写真図版8上 調査後全景（北から）	写真図版19① 主郭北東部斜面の石積崩落状況（北西から） ② 第Ⅱ郭南側の通路理土土層断面（北東から） ③ 第Ⅱ郭西部盛土土層断面（南から） ④ 第Ⅲ郭虎口石段截ち割り土層断面（南南西から） ⑤ 第Ⅲ郭集石截ち割り土層断面（東から） ⑥ 第Ⅲ郭土壘中央部截ち割り土層断面（南西から） ⑦ 第Ⅲ郭土壘東部截ち割り土層断面（北西から） ⑧ 第Ⅱ郭南側通路南斜面理土土層断面（北西から）
写真図版9上 主郭全景（東から）	
下 主郭平坦面（西から）	
写真図版10上 急須形鉄製品出土状況（主郭・北西から）	
① 急須形鉄製品出土状況（近接・北西から）	
② 急須形鉄製品出土状況（近接・東から）	
③ 急須形鉄製品・石錐出土状況（南から）	
④ 石錐出土状況（南から）	
写真図版11上 第Ⅱ郭全景（東から）	
下 第Ⅱ郭西北部全景（北東から）	

写真図版20①	主郭から第Ⅲ郭の土層（南東から）	写真図版32上	第Ⅲ郭 養り金具（M36）出土状況
②	主郭の盛土と崩落土（東から）	中	第Ⅲ郭 養り金具（M37）出土状況
③	東西畔 主郭南側の通路の土層（北東から）	下	第Ⅲ郭 覆輪（M96）出土状況
④	主郭南側の通路下土層（東から）	写真図版33上	第Ⅲ郭 線（M48）・脇板（M45）出土状況
⑤	南北畔 主郭北側の土層（南東から）	中	第Ⅲ郭 線（M48）出土状況
⑥	北側斜面の土層（北東から）	下	第Ⅲ郭 脇板（M45）出土状況
⑦	第Ⅱ郭北半部下層の土層（南東から）	写真図版34上	第Ⅲ郭 土器皿と巻貝出土状況（北から）
⑧	第Ⅱ郭下斜面の土層（東から）	①	第Ⅲ郭 巷貝出土状況
写真図版21上	第Ⅲ郭西半部（西南西から）	②	第Ⅲ郭 土器皿と巻貝出土状況
下	第Ⅲ郭東半部（西から）	③	第Ⅲ郭 巷貝出土状況
写真図版22上	第Ⅲ郭西半部（東から）	④	第Ⅲ郭 巷貝出土状況
下	第Ⅲ郭西端部（東北東から）	写真図版35上	下層平坦面2と段状造構2（西南西から）
写真図版23上	下層造構全景（北西上空から）	下	下層平坦面2と段状造構2（西から）
下	下層造構全景（西上空から）	写真図版36上	第Ⅱ郭北部盛土（段状造構2埋土）土層断面
写真図版24上	下層造構西部全景（東上空から）		（東北東から）
下	下層造構北西部（南東上空から）	下	第Ⅲ郭最中央部截ち割り土層断面（東から）
写真図版25上	下層造構北西部（北北西から）	写真図版37上	下層段状造構3（北東から）
下	北側斜面の下層造構（南東から）	下	下層段状造構4（北東から）
写真図版26①	下層段状造構4埋土土器皿出土状況（南から）	写真図版38上	下層段状造構4埋土中の繩（南東から）
②	下層段状造構4土器皿・鉄釘出土状況（南から）	下	下層段状造構4埋土中の繩（北西から）
③	下層段状造構4土器皿・碁石出土状況（南から）	写真図版39上	第Ⅱ郭北西部盛土土層断面（南南西から）
④	第Ⅱ郭盛土内鉄釘出土状況（東から）	下	第Ⅱ郭下層の石列1東半部（西から）
⑤	下層段状造構4碁石出土状況（南から）	写真図版40上	第Ⅱ郭下層の石列1全景（西から）
⑥	第Ⅱ郭出土鉄釘	中	下層段状造構3北西側の石列2（西南西から）
⑦	下層段状造構4土器皿・鉄釘出土状況（東から）	下	下層段状造構3北西側の石列2（南南西から）
⑧	第Ⅱ郭出土鉄釘	写真図版41上	下層平坦面1と段状造構1（北東から）
写真図版27上	第Ⅲ郭崩落土内土器群出土状況（北東から）	中	下層堅壘状造構1（北北西から）
下	第Ⅲ郭崩落土内土器群出土状況（北北東から）	下	下層堅壘状造構1埋土土層断面（北北西から）
写真図版28上	第Ⅲ郭平坦面西部焼土検出状況（南から）	写真図版42①	下層段状造構2西半部（西南西から）
中	第Ⅲ郭平坦面西部焼土と土器群の検出面（東から）	②	下層段状造構2南西隅細部（北西から）
下	第Ⅲ郭西端集石部分青白磁出土状況（南西から）	③	下層段状造構1北斜面下の柱穴状造構（東から）
写真図版29上	第Ⅲ郭西端出土土器皿出土状況	④	下層段状造構3（南西から）
①	第Ⅲ郭土壌内土器皿出土状況（南東から）	⑤	下層段状造構4（東南東から）
②	第Ⅲ郭西端出土土器皿と銅製品（M29）出土状況	⑥	第Ⅱ郭下層の石列1（南から）
③	第Ⅲ郭 銭貨（M1）出土状況	⑦	北側切岸下層の溝状造構（南西から）
④	第Ⅲ郭 刀装具（M3）出土状況	⑧	下層堅壘状造構2と溝状造構（南東から）
写真図版30上	第Ⅲ郭 切羽金具（M2）出土状況	写真図版43①	山上講調査前現況（南南西から）
中	第Ⅲ郭 鋼台（M6）と鉄製品出土状況	②	山上講前面の敷石（南南西から）
下	第Ⅲ郭 菊重ね跡（M9）出土状況	③	山上講内部の石造品等（南から）
写真図版31上	第Ⅲ郭 金物（M15）、飾り金具（M35）、 脇板（M45）・金物（M47）出土状況	④	主郭北西部のコンクリート塊（東から）
中	第Ⅲ郭 金物（M35）出土状況	⑤	祠内にあった石造品（不動明王）
下	第Ⅲ郭 金物（M15）出土状況	⑥	北側山麓裾の一石一字塔（明治10年）

⑧ 兵主神社（南から）	写真図版56上	第Ⅲ郭土錐群出土土錐3
⑨ 南側山麓の八幡神社（南西から）	下	第Ⅲ郭主郭石積下出土土錐
写真図版44① 第Ⅲ郭付近掘削状況（西から）	写真図版57上	第Ⅲ郭主郭崩落土出土土錐
② 第Ⅲ郭東部調査状況（南西から）	下	主郭北東部盛土出土土錐
③ 第Ⅲ郭掘削前（南西から）	写真図版58上	第Ⅲ郭盛土・主郭崩落土出土土錐1
④ 北側切岸掘削状況（北西から）	下	第Ⅲ郭盛土・主郭崩落土出土土錐2
⑤ 急須形鉄製品出土場所の精査状況（北から）	写真図版59上	第Ⅱ郭、第Ⅲ郭盛土・主郭崩落土、切岸出土土錐
⑥ ラフターケーレンによるベルトコンベアの撤去状況	下	第Ⅲ郭出土甲冑関連銅製品
⑦ 現地説明会開催状況（第Ⅲ郭・西から）	写真図版60	主郭表土・第Ⅱ郭盛土層出土石製品
⑧ 現地説明会開催状況（第Ⅲ郭・東から）	写真図版61	出土金屬器1
写真図版45 主郭・第Ⅱ郭出土土師器皿	写真図版62	出土金屬器2
写真図版46 上 主郭出土土器・陶磁器	写真図版63	出土金屬器3
下 第Ⅱ郭・第Ⅲ郭出土土師器・須恵器・陶器	写真図版64	出土金屬器4
写真図版47 第Ⅱ郭・切岸出土土師器・須恵器・陶磁器	写真図版65	出土金屬器5
写真図版48 第Ⅲ郭出土土師器皿1	写真図版66	出土金屬器6
写真図版49 第Ⅲ郭出土土師器皿2	写真図版67	出土金屬器7
写真図版50 第Ⅲ郭出土土師器皿・陶器	写真図版68	出土金屬器8
写真図版51 第Ⅲ郭出土青白磁	写真図版69	出土金屬器9
写真図版52上 第Ⅲ郭・切岸出土陶器・瓦質土器	写真図版70	出土金屬器10
下 第Ⅱ郭・第Ⅲ郭出土石鍋	写真図版71	出土金屬器11
写真図版53上 各郭出土墓城以前の土器	写真図版72	出土金屬器12
下 各郭出土墓城以前の土師器・須恵器	写真図版73	出土金屬器13
写真図版54 各郭出土墓城以前・廃城以降の土器・陶器		
写真図版55上 第Ⅲ郭土錐群出土土錐1		
下 第Ⅲ郭土錐群出土土錐2		

# 報告書抄録

ふりがな	きた・じょやま じょうせき							
書名	喜多・城山城跡							
副書名	一般県道黒田庄多井田線 道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第512冊							
編著者名	岸本一宏 別府洋二 岸本一郎 山上雅弘 (株)加速器分析研究所							
編集機関	公益財團法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内) Tel 079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 Tel 078-362-3784							
発行年月日	令和2(2020)年3月25日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 Tel 079-437-5589							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (m <sup>2</sup> )	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
喜多・城山城跡	西脇市黒田庄町 喜多	282138	290164	35度 1分 41秒	134度 59分 38秒	20150911~20151225 (2015108)	本発掘 1299	記録保存調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
喜多・城山城跡	城跡	中世後期	郭・帯郭・土塁・ 虎口・集石・ 平坦面・段状遺構・ 壁塀状遺構	土器(土師器・陶器・磁器・輸入磁器)・ 金属器(刀・鉢・鎧・甲冑品)・ 石製品(石碑・碁石・砾石)			横手付急須形鉄製品・ 脇板・籠手	
概要	独立丘陵状の山塊に立地する小規模な山城。小郭群で構成されていた当初の山城を修築して、小土塁・石段等を用いた郭を造る。籠手や脇板などの甲冑品や刀・鉢・鎧などの武器・武具が出土。輸入磁器の優品や類例のない鐵瓶を保有していた。							

# 第1章 城跡の位置と環境

## 第1節 位置と地理的環境

本書で報告する喜多・城山城跡は、兵庫県中央部に存在する西脇市黒田庄町に位置する。

西脇市は加古川中流域または上流域に位置し、北は丹波市、南は加東市、南西は加西市、西は多可郡多可町、東は篠山市に接しており、西脇市黒田庄町は西脇市の北部に位置し、2005（平成17）年10月の合併により多可郡から西脇市に編入された。

西脇市黒田庄町の東部には狭隘で深い谷が存在し、主として谷の北端に沿って門柳川が西流するが、喜多・城山城跡は、この門柳の谷口の北端に位置し、北東に存在する友尾山塊から南西にのびた尾根突端にあり、ほぼ岩盤でできた独立丘陵状の山塊に位置する。なお、門柳川は喜多・城山城跡あたりで南にその方向を変え、津万井で南流する加古川に合流する。

黒田庄町域では、森林や原野の面積が7割以上を占め、加古川沿いの平野部を中心に農地が広がる。国道175号線が加古川西岸に、加古川東岸にはJR加古川線が町域を南北に貫き、加古川にはかつて高瀬舟が運航し、船町には船座が設けられていた。

## 第2節 城跡の歴史的環境

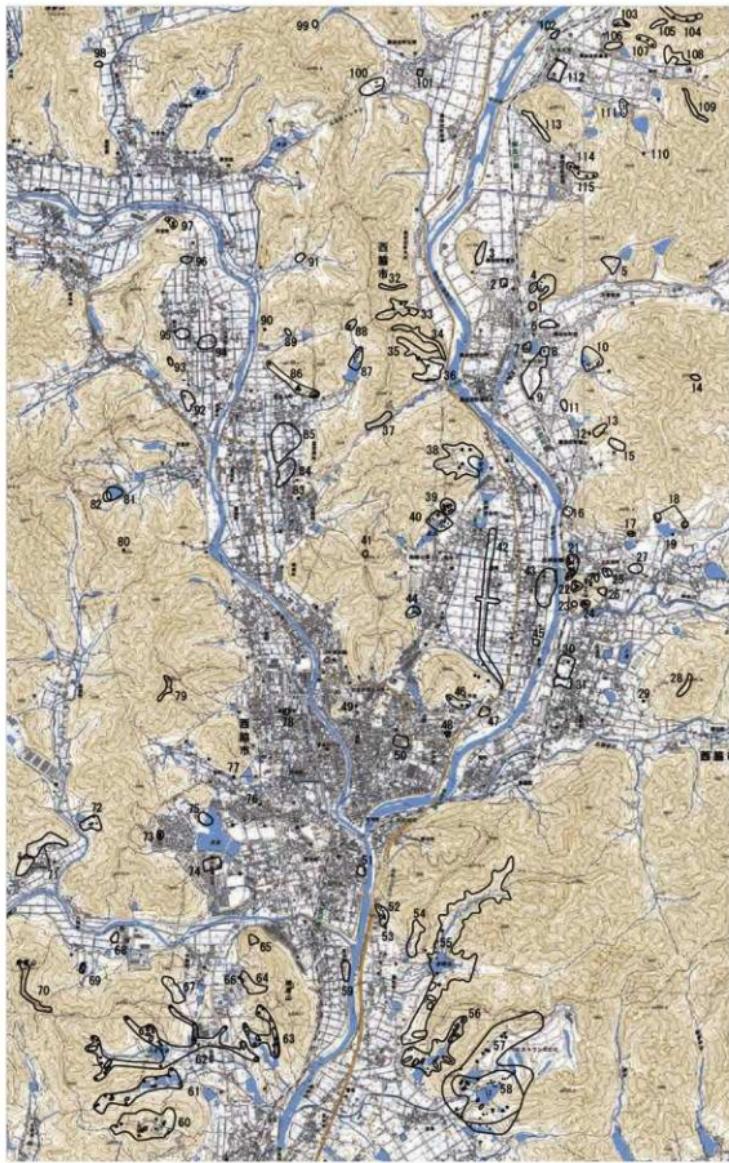
喜多・城山城跡が位置する加古川両岸の沖積平野部分や台地および丘陵部には、旧石器時代以降の遺跡や古墳、城郭が数多く存在している。喜多・城山城跡の発掘調査結果においても、中世城郭の遺構・遺物のほかに、遺構は検出されなかつたが、縄文時代後期や弥生時代後期末～古墳時代初頭、古墳時代中期～後期の土器のほか、平安時代後期～鎌倉時代の経塚に関係が深い土器も出土している。そこで、喜多・城山城跡周辺に存在するおもな遺跡を取り上げて、喜多・城山城跡の歴史的環境を述べる。

旧石器時代では鹿野宮ノ前遺跡（31）で削器、野村構居遺跡（51）で縦長剥片、市原新池遺跡（81）ではナイフ形石器といずれもサスカイト製の石器が出土している。また、岡・前田遺跡（9）や野村笠野遺跡（75）では旧石器時代～縄文時代の石器が出土している。

縄文時代では、大垣内遺跡（43）で縄文時代草創期の木葉形尖頭器が出土しており、楠丘遺跡（7）では早期の押型文土器片の出土とともに、焼燶を集積した土坑も調査されている。中期では北方の小苗遺跡、後期では富吉（富吉上）遺跡（85）、野中・ハゼノ木遺跡（95）で土器片がそれぞれ出土しているが、遺構は発見されていない。板波町遺跡（59）では縄文時代中期～後期の土器や石器が出土し、土坑などが検出されている。また、津万遺跡群（42）でも縄文時代後期～晚期の土器が出土している。

弥生時代では、黒田庄中学校遺跡（112）で前期の甕片が出土し、中期中葉では野中・ハゼノ木遺跡で円形の竪穴住居跡が調査され、土坑から多数の土器が出土した。富吉（富吉上）遺跡でも竪穴住居跡のほか中期中葉の土器や柱状片刃石斧が出土し、黒田庄中学校遺跡では中期以降の遺物が出土している。

中期後半では、大垣内遺跡で溝から中期後半の土器とともに分銅形土製品も出土している。野村構居遺跡では方形の竪穴住居跡に伴って土器も出土した。津万遺跡群でも中期～後期の竪穴住居跡などが調査されている。鹿野宮ノ前遺跡では中期後半の焼失住居を含む3棟の竪穴住居跡が調査され、銅剣形石劍の破片も出土している。大木遺跡（91）は中期後葉～末の短期間に営まれた高地性集落に含めて考え



第1図 周辺の主要遺跡分布図

第1表 主要遺跡名表

1 喜多・城山城跡	24 岡ノ山南古墳群	47 上戸田遺跡	70 角尾山城跡	93 大木城跡
2 喜多・天神前古墳群	25 西岡山古墳群	48 下戸田古墳群	71 合山窪跡群	94 野中・国影道路
3 喜多・熊野神社古墳群	26 岡ノ東古墳群	49 童子山窪跡	72 池ノ夙窪跡群	95 野中・ハゼノ木道路
4 喜多・友尾山古墳群	27 谷田遺跡	50 西脇山	73 緑風台窪跡群	96 羽安横木道路
5 喜多・秋谷石古墳群	28 比延山城	51 野村構居遺跡	74 野村喉守	97 道の上古墳群
6 岡・古門遺跡	29 橋山石棺墓	52 高松古墳群	75 野村露野遺跡	98 西安田窪跡
7 楠丘跡	30 比延前田遺跡	53 碓谷窪跡	76 苦木古墳	99 西ノ谷道跡
8 横樂寺遺跡(岡ノ城)	31 鹿野宮ノ南遺跡	54 石ヶ谷窪跡群	77 谷窪跡	100 植上古墳群
9 岡・前田遺跡	32 大伏山古墳	55 金城池窪跡群	78 高田遺跡	101 石原城
10 岡・福地池古墳群	33 大伏窪跡群	56 犀子谷窪跡群	79 矢苦山城跡	102 黒田構江道路
11 岡・ドン古墳群	34 大伏北山遺跡	57 吉馬窪跡群	80 西仙人山骨跡	103 黒田・小松山古墳群
12 福地経塚	35 大門窪跡群	58 吉馬古墳群	81 市原新池遺跡	104 黒田・北ノ山古墳群
13 蟻生城	36 大門烟瀬遺跡	59 板渡町遺跡	82 市原新池窪跡	105 黒田城
14 寺尾敷遺跡	37 煙瀬末谷窪跡群	60 光明寺闇道遺跡	83 下山古墳	106 黒田城
15 福地城	38 薩江・大谷窪跡群	61 中ノ池窪跡群	84 富吉古道跡	107 黒田・中池窪跡
16 福地百合山古墳	39 寺内古墳群	62 奥ノ谷窪跡群	85 富吉上遺跡	108 黒田・北山道跡
17 伊勢山古墳群	40 級本古墳群	63 離谷窪跡群	86 富吉・北山古墳群	109 黒田・小松山古墳群
18 北山古墳群	41 古木城	64 平野東窪跡群	87 富吉・奥山南北古墳群	110 黒田・木谷窪跡群
19 北垣内池窪跡	42 津万遺跡群	65 鳴尾山城跡	88 富吉・奥山南北古墳群	111 黒田・大山窪跡
20 岡ノ山古墳	43 大垣内遺跡	66 組々芝古墳	89 前島遺跡	112 黒田庄内学校遺跡
21 滝ノ上古墳群	44 大野古墳群	67 野平西窪跡群	90 東山古墳墓	113 前坂・北山道跡
22 岡ノ山西古墳群	45 烏丸城	68 八坂神社	91 大木道跡	114 前坂・大歳神社窪跡
23 岡ノ山古墳群	46 八日山古墳群	69 八坂南窪跡群	92 前島植上田遺跡	115 前坂・大歳神社古墳群

られる谷中の遺跡で、山腹から方形堅穴住居跡も検出されている。市原新池遺跡や前島遺跡（89）は調査未実施であるが、同じ立地の遺跡で石器・土器が採集されている。丘陵上の大伏北山遺跡（34）では中期後業の段状遺構、南側の大門烟瀬遺跡（36）では中期末と後期の堅穴住居跡などが調査されている。

後期では、大門烟瀬遺跡以外に前坂・北山遺跡（113）で後半の円形堅穴住居跡が調査され、岡・古門遺跡（6）では弥生後期の遺構が発見された。富吉（富吉上）遺跡でも後期の方形堅穴住居跡が調査され、土器も出土した。大垣内遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴住居跡が11棟調査されている。

弥生時代墳墓では、大伏北山遺跡で弥生末～古墳初頭の列石を持つ墳墓が調査され、埋葬施設は堅穴式石室と推定される。また、古墳前期と考えられる箱式石棺も調査されている。

古墳時代の集落では、上戸田遺跡（47）で古墳時代初頭の張り出しを持つ円形堅穴住居跡が調査され、富吉（富吉上）遺跡では前期～後期の土器が多く出土している。中期では、楠丘遺跡や鹿野宮ノ南遺跡で堅穴住居跡などが発見されている。高田井遺跡（78）では流路埋土と想定される土層から古墳時代中期の完形の小型壺や高杯・手づくね小壺が多く出土した。大門烟瀬遺跡では中期後半～後期の堅穴住居跡が数多く調査され、谷田遺跡（27）では終末期（飛鳥時代）の堅穴住居跡が調査された。

前期古墳では、岡ノ山古墳（20）が前方部を北に向けた全長57.6mの前方後円墳で、山頂に築造されている。加古川本流の中・上流域では、この大きさの前期型前方後円墳は北側では丹波市山南町の奥丸山古墳（全長48m）、南側では三本市愛宕山古墳（全長90m）まで現在のところ未発見である。滝ノ上古墳群（21）の20号墳は一辺16mの方墳で、川原石積みの堅穴式石室内に内行花文鏡・銅鏡・玉類などが副葬されていた。また、山陰型の土器も墳丘上から出土している。大伏北山遺跡では古墳前期と考えられる箱式石棺が調査され、鉄鎌・鉗・鑓が副葬されていた。天神前古墳（2）からは1924（大正14）年に方格T字（溝文）鏡が出土している。道の上古墳群（97）は弥生時代末に遡る可能性がある。

中期古墳では、岡ノ山西古墳群（22）の5号墳から円筒埴輪や蓋形埴輪片が採集され、円筒埴輪は苦木古墳（76）や福地百合山古墳（16）からも出土している。滝ノ上古墳群の14・22号墳は、周溝から須

恵器が出土しており中期後半の築造と判断されている。大伏南山古墳（32）からは刀劍類と鹿角製刀装具が出土し、中期末とされる。埋葬施設は箱式石棺で、市内の箱式石棺は経ヶ芝古墳（66）、横山石棺墓（29）、東山石棺墓（90）などがあり、経ヶ芝古墳は2基の箱式石棺を埋葬施設とする一辺11m程度の方墳で、副葬品は出土しなかったが、前期の可能性がある。横山古墳では刀子・玉類が副葬され、中期後半と思われる。これら3者は流紋岩質灰岩の板石を立てる形態（板石立置）のものである。下戸田古墳群（48）では円墳・方墳の2号墳～4号墳が調査され、中期後半～後期前葉の築造である。

後期古墳ではいわゆる群集墳や大型の横穴式石室が認められる。寺内古墳群（39）は28基の古墳で構成され、7世紀中頃に築造され、盟主墳である7号墳の横穴式石室は奥壁幅約1.7mで、被葬者は後の里長クラスの人物と思われる。また、古墳群は3～4基からなる8グループに分けられることから、同一氏族内の血縁小集団の奥津城であったと考えられる。高松古墳群（52）の26号墳は石室半分が遺存したのみであるが、2m近い羨道幅の大型石室と推定され、6世紀末～7世紀初頭の築造である。一方、7号墳は退化横穴式石室内に箱式石棺を収めたもので、7世紀後葉の築造である。下山古墳（83）は、確認できる市内最大の石室で、奥壁での玄室幅は2.2mを測る。なお、吉馬古墳群（58）の小丸山1号墳には横穴式石室が2基構築されていた。市内には数多くの古墳群があり、内容が不明なため前・中期古墳群である可能性もあるが、主要と思われる群集墳を第1図および第1表に記載した。

周辺では古墳時代以降鎌倉時代初期まで須恵器生産が盛んにおこなわれた。古墳時代では、最も古い前坂大歳神社窯跡（114）（T K10）やT K43～T K209型式期の童子山窯跡（49）、黒田大山谷窯跡（111）、T K217型式期の北堀内池窯跡（19）や黒田・中池窯跡（107）、ほかに7世紀代の窯跡には黒田末谷窯跡群（110）、谷窯跡（77）があり、加東市の奥ノ谷窯跡群（62）でも窯業が営まれていた。

奈良時代には野村庵寺（74）や八坂庵寺（68）で寺が建立され、野村庵寺では「寺」墨書き土器や埴輪片も出土している。野中・ハゼノ木遺跡では奈良時代の掘立柱倉庫群が調査されている。黒田庄中学校遺跡では縄錦皿を含む奈良時代～平安時代中頃の土器、岡・前田遺跡では円面鏡が出土している。

奈良時代～平安時代の窯跡では、大伏窯跡群（33）が8世紀後半～9世紀前葉、烟瀬末谷窯跡群（37）は8世紀後葉～9世紀中葉、石ヶ谷窯跡群（54）、金城池窯跡群（55）は8世紀後半～9世紀前半、大門窯跡群（35）が9世紀中葉である。その後、10世紀後葉～12世紀末頃までの間には藏谷窯跡（53）、石ヶ谷窯跡群・金城池窯跡群・鍋子谷窯跡群（56）、吉馬窯跡群（57）、奥ノ谷窯跡群・平野東窯跡群（64）、平野西窯跡群（67）、八坂南窯跡群（69）、池ノ尻窯跡群（72）、合山窯跡群（71）、市原新池窯跡（82）、西安田西窯跡（98）など広範囲に窯業が隆盛するが、その後は蒲江・大谷窯跡群（38）を残して急速に衰退する。12世紀末には常滑焼に似た緑風台窯跡群（73）が出現するが、短期間に終息している。

経塚は大伏北山遺跡で12世紀～13世紀のものが調査され、土師器筒形容器の経筒や外容器の須恵器甕が出土している。福地経塚（12）では久安5（1149）年銘の経筒、石原集落北西側の石原経塚では江戸時代に経筒が出土し、奥書に「黒田庄」名がみえる承安4（1174）年銘の法華経が残存していた。

中世の集落跡では津万遺跡群で11世紀以降の掘立柱建物跡、岡・前田遺跡や羽安横長遺跡（96）では鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物跡、黒田北山遺跡（108）や谷田遺跡では中世墓が調査されている。谷田遺跡では戦国時代後期～江戸時代の掘立柱建物跡で土豪層の屋敷跡である。城館関係では喜多・城山城跡（1）の南側には極楽寺遺跡（岡ノ城）（8）があり、比延前田遺跡（30）では戦国期の平地居館跡が調査されている。ほかにも数多くの城館跡が存在している。

記述には『西脇市の考古学』（西脇市郷土資料館 2007年）をはじめ多くの報告書等を参考にした。

## 第2章 調査の経緯・経過と体制

### 第1節 発掘調査に至る経緯と経過

喜多・城山城跡は、北播磨県民局加東土木事務所多可事業所による一般県道黒田庄多井田線道路改良事業地内にあたり、城跡が存在する丘陵東側から北東にかけての部分では、道路が狭隘でカーブも急であることから、丘陵東部を開削して丘陵の南側から北側まで緩やかなカーブとする計画である。

喜多・城山城跡は周知の埋蔵文化財となっており、この丘陵のほぼ全体を占めている。今回の道路計画にもとづき、用地内に兵庫県教育委員会が平成26（2014）年8月に確認調査（遺跡調査番号2014073）を実施した結果、丘陵下の平坦面では遺構・遺物が確認できなかったものの、丘陵部分では平坦に削平・加工された郭や土塁といった遺構が確認され、土師器皿が出土した。

今回の調査は、確認調査結果にもとづいて、兵庫県教育委員会が北播磨県民局長からの依頼〔平成27年5月27日付け 北播（加土）第1098号〕を受け、兵庫県教育委員会から調査機関として委託を受けて（公財）兵庫県まちづくり技術センターが本発掘調査を実施した。

調査面積は1,299m<sup>2</sup>、調査期間は平成27（2015）年9月11日～12月25日の実働66日間で、調査担当者は調査課の別府洋二・岸本一宏である。

本発掘調査にかかる時点では、道路用地内の樹木は伐採されており、郭の位置や形状が判別しやすい状況であった。掘削開始前に、現状の地形測量を株式会社G E Oソリューションズに委託して空中写真測量により実施し、現時点で確認できる城関係の遺構を地形図に重ねて詳細な調査範囲を判断するうえでの目安とした。

調査範囲は遺構が残存している部分に絞り込むと同時に、南側・東側の岩盤が露出した急峻で危険な部分は除外し、北側の崖面付近も危険なため2m程度控えた。また、北東部については郭（第Ⅲ郭）の可能性があったものの、急傾斜で危険なため、調査範囲から除外せざるを得なかった。

調査は腐植土の表土（腐植土）から遺構面まですべて人力により掘削し、掘削土中に含まれていた遺物の回収に努めた。また、掘削堆土はベルトコンベアで北側の崖下に集積した。ただし、前述のように、丘陵斜面が急傾斜や崖であることから、ラフタークレーンを使用してベルトコンベアを設置した。また、調査区全体の写真撮影・測量時のベルトコンベア撤去や、その後下層を掘削する際の再度設置についてもラフタークレーンを用いて実施した。

検出・掘削した遺構については、調査区全体の平板実測および調査区内の土層断面実測をおこない、遺物出土状況および個別遺構の平面・断面の実測および写真撮影をおこなった。また、広範囲の写真については足場の設置および高所作業車を使用して撮影し、調査区全体については空中写真および測量を先述のG E Oソリューションズに委託して実施した。

なお、調査の成果を公開するため、現地説明会を11月28日（土）に実施した結果、地元住民を中心として150名の参加者があった。

現地説明会実施後には、城関係遺構の構築法を確認するため溝状のトレチを設定して岩盤まで掘削した結果、下層に岩盤を加工した遺構があり、盛土により上層遺構が形成され、しかもその盛土層中に遺物が存在することが確認されたため、調査区のほぼ全面にわたって岩盤まで掘削することとした。

## 第2節 出土品整理作業の経過と体制

喜多・城山城跡の出土品整理作業は、平成30（2018）年度から開始し、平成31・令和元（2019）年度まで実施した。出土品整理作業は北播磨県民局長から兵庫県教育委員会への依頼によるもので、年度ごとの依頼文書番号は以下のとおりである。

平成30（2018）年度 平成30年3月2日付け北播（加土）第1954号

平成31・令和元（2019）年度 平成31年4月1日付け北播（加土）第1044号

出土品整理作業は公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターが兵庫県教育委員会から委託を受け、兵庫県立博物館で実施した。年度ごとの整理作業工程は以下のとおりである。

平成30（2018）年度：水洗い、ネーミング、接合・補強、実測・拓本、金属器保存処理

平成31・令和元（2019）年度：復元、写真撮影、写真整理、遺構図補正、トレース、分析鑑定、レイアウト、報告書印刷

ネーミングは、土器の出土遺構名や出土位置などを出土単位ごとに台帳に整理した番号を土器に書き込む作業で、接合・補強は、土器片を接合し、欠損している部分をモルタルで補強する作業である。また、土器等の実測・拓本後にもモルタルを使用して土器の欠損部分の復元作業を行い、遺物写真撮影を実施した。遺物写真は出土遺構・出土場所や種類ごとに整理を行った。また、現場で作成した実測図等について補足・修正を実施した。金属器保存処理は出土状態での形状観察、エックス線写真撮影、脱塩作業を実施し、錆取り作業の後、樹脂合浸作業を実施した。分析鑑定は、出土した銅製品内に残存していた種実の同定と、出土木炭およびアカニシと思われる貝殻、銅製品内に残存していた種実を試料とした放射性炭素年代測定を実施した。また、発掘調査現地で作成した実測図や測量図、出土品整理作業により実施した遺物実測図のトレースを行った。トレースした遺構・遺物の図面や、調査で撮影した写真・空中写真および、空中写真測量図・遺物写真的レイアウト作業を経て、報告書原稿執筆とともに報告書印刷を実施した。

2年間の出土品整理作業の体制は下記のとおりである。

事業主体 兵庫県教育委員会

実施場所 兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中1丁目1番1号）

整理担当 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

整理担当職員 (工程管理) 菊田淳子 深江英憲

(作業指示) 岸本一宏

(木器・金属器保存処理) 大本朋弥

整理作業担当嘱託員等

(実測・トレース・レイアウト) 柏原美音 古谷章子 尾鷲都美子 宮田麻子 佐伯純子

(ネーミング・接合補強・復元) 萩野麻衣 小野潤子 岡崎真子 森松沙耶香 門田諭佳

七尾宏美

(木器・金属器保存処理) 大前篤子 桂 昭子 児玉昌子 香山玲子

遺物写真撮影 国際文化財株式会社 横山亮

分析鑑定 株式会社加速器分析研究所

# 第3章 調査の結果

## 第1節 遺構

喜多・城山城跡は喜多集落の東側、岡集落北側の独立丘陵状山塊に位置する。標高114.2mで周囲との比高30~35mで、丘陵平面は南北約120m、東西約100mの楕円形に近く、北側と東側は削られている。東側は岩盤の崖面で、南側も岩盤の急傾斜で、西側のみ比較的緩傾斜となっている。独立丘陵といつても周囲のすべてが平地ではなく、道路を隔てた北東側の墓地とは低い尾根でつながっており、北東に存在する標高300m前後の友尾山塊から南西にのびた尾根が一度大きく曲んで標高90m程度の鞍部となるが、その鞍部が低いことから、大きく出した独立丘陵状の形態となっている。

山頂からは加古川流域を一望でき、同時に東側の門櫓の谷も奥まで見通すことができる好立地である。

喜多・城山城跡が存在する丘陵は北東~南西に長い平面楕円形を呈し、現状では東西110m、南北約90mで、いずれも急傾斜となっており、丘陵の北側裾は採石のため削り取られ、高さ10m程度の崖面となっている。また、丘陵頂の平坦部には山上講として祠が建っていた。

この丘陵は地元でも城跡としての認識があったようで、通称「じょやま」と呼ばれ、喜多集落の里山として古くからハイキングコースなどに利用されていた。しかし、近年は山上講を祀る人もいなくなり、山に入る人も少なくなっている。植林された松やその他の樹木の林となっていた。

### 1. 上層の遺構

#### ① 主郭（図版3~5・11、写真図版1・5~10・17）

位 置 山頂部のほぼ中央に位置する。

調査前の状況 北東寄り部分に標高114.0m~114.2m程度で、直径12m強の平坦な円形の部分が存在した。そこから西側および南側は傾斜面となっていたが、北側~東側にかけては幅1m弱で高低差40cm~80cm程度の落差がある円形の卓状を呈していた。

形状・規模 調査の結果、主郭平坦部分は標高113.9m~114mで、やや歪な円形を呈し、北西側と南西側はやや直線的な辺となっていた。平坦面の規模は南北約13.2m、東西約14.4mで、南半分は岩盤であった。北西側では幅約1mで約60cm~70cmの落差をもって第Ⅱ郭に続き、南西部分は盛土を掘り過ぎた部分があるが、第Ⅱ郭との落差は約45cm程度と思われる。西端部では盛土が第Ⅱ郭側に一部流出したため、平坦面は緩やかな傾斜面となっていた。東側では第Ⅲ郭との落差は幅2m~2.5mで落差1.2m~1.4m程度であるが、最大部では落差約1.9m、その幅は約4.5mである。したがって、裾までの主郭規模は南北約15m、東西は17m程度で最大20mの規模となる。また、主郭の南側裾から南東部裾にかけては後述する通路（第Ⅳ郭）が取り付いており、主郭南東部分には平坦面から通路に至る斜路が岩盤を削って造られていた。斜路の平坦部分の幅は30cm~40cmである。

なお、主郭上面部分には土塁や柱穴などの遺構は検出できなかった。

堆積状況 主郭の南半分は岩盤を削って平坦面や斜面に加工しており、平坦面の南半部では厚さ5cm程度の腐植土直下に風化岩盤層が5cm~10cmあり、その下は硬い岩盤であった。ただし、斜面下部では風化岩盤で盛土をおこなっていた部分が多く認められた。

いっぽう、主郭北半部のうち、S~Nの断面では、岩盤の面が平坦面よりも約30cm~約70cm低くなっ

ており、徐々に北側に落差約1mまで傾斜したのち、さらに急に約80cmの段差をもって下がったのち、北に向かってさらに傾斜していた。これらの岩盤の上に厚さ約30cm～約1.7mの盛土をおこなって、主郭平坦面形状を整えていた。この盛土には径約8cm～20cmを超える地山の凝灰質砂岩の角礫も多く含まれていた。なお、岩盤の緩傾斜部分や段差部分は下層の平坦面2や段状遺構2の底面であり、後述する。

特に北東部の第Ⅲ郭につながる部分では、岩盤面が標高112.4m程度に急に低くなってしまい、主郭平坦面の標高が114m程度であることから、幅約3m～5m、長さ約6mの範囲に厚さ約1.2mの盛土が遺存しており、盛土の中には径10cm～25cmの凝灰質砂岩の地山角礫を積み上げて石垣様の積み石とし、盛土の流出を防いでいた。ただし、調査前の現況平面図や土壘断面図でも明らかなように、積み石は崩落し、主郭盛土も積み石を超えて第Ⅲ郭にかなりの量が崩落・流入していた。

**遺物出土状況** 主郭平坦面西部の岩盤が下がり始める部分で、主郭頂部を平坦にするための盛土層から横手急須形鉄製容器（M38）の完形品が出土した。また、北東部の盛土層中および石積みから15世紀代と思われる土師器皿・壺、土錘などが出土している。また、平坦面の盛土層から縄文土器や古式土師器、平安時代後期～鎌倉時代の須恵器の壺・壺・鉢のほか土師器筒形容器なども出土しており、その時期の経塚が複数存在していたようであるが、土坑などの遺構は検出できなかった。また、砾石も出土している。

## ② 第Ⅱ郭（図版3～5・11・14、写真図版1・5～7・11）

**位 置** 東主郭の北側から西側および南西側に接して存在する平坦面である。

**調査前の状況** 主郭の北側～北西側は比較的明確に主郭裾と平坦面の識別ができるが、主郭西側については主郭からの盛土が流出し、主郭から続く緩傾斜となっており、主郭との識別が難しい状況であった。これは、山頂に上る山道がここを通っていたためでもあろう。また、第Ⅱ郭西側はさらに大きく流失しているようであった。

**形状・規模** 主郭の北側から南西側までを取り巻くかたちの平坦面で、主郭のすぐ西側では幅7m程度の平坦面が半島状に突き出る形で遺存し、主郭北西側でも6m程度の平坦部が突き出ていた。主郭北側の第Ⅱ郭東端部での平坦面の幅は約2.5mで、そこから主郭に沿って幅を広げていき、北西に突き出た部分につながる。主郭南西部での第Ⅱ郭平坦面の幅は約4mで、これも幅を少し広げながら西側突出部に続いている。西側および北西側突出部間は平坦面が最大幅約7mにわたって大きく抉れており、地滑りにより流失したものと思われる。また、西側突出部の南西側も少し抉れており、ここは山道となっていた部分である。なお、平坦面の標高は最も高い部分で113.25m、西端では112.85mである。

調査後の状況では、北側で東西約14.5m、南北規模は約17mの平坦面で、土墨は伴っていない。

**堆積状況** 南東部では主郭からの流入土が最大35cm堆積していたが、それ以外の部分では、主郭と同様に下層遺構を埋め立てて平坦面を造成していた。西部では東端部付近で主郭からの流入土が厚さ約30cm堆積しており、岩盤面の標高はそれよりさらに25cm低い113.0mであった。岩盤面はそこから徐々に西側に傾斜しており、西へ約7mの位置では岩盤の標高が111.7mであり、そこから急に傾斜が強くなつて約2.2m西側の調査区西端での岩盤面の標高は110.7mとなるが、この部分で少し平坦になることから、この部分にも下層の段状遺構が存在している可能性もある。これら岩盤から第Ⅱ郭平坦面までの最大の厚さ約1mはすべて盛土でおこなわれ、粘質土層と中礫を含む砂質土層を交互に積んでいる部分もあった。西側および北西側張り出し部の間が大きく流失していた理由は、岩盤の傾斜角度が急になり、盛土も厚かったためでもあろう。

**遺物出土状況** 第Ⅱ郭からは盛土および下層遺構埋土を中心に、15世紀代と思われる土師器皿・須恵器鉢・土鍤や少量の金属製品・石鍋・碁石・砥石など、古式土師器のほか、須恵器塊や土師器筒形容器といった、経塚にかかわる遺物が出土している。また、箱式石棺の部材とも思われるような板状の石も盛土中に存在し、主郭および第Ⅱ・第Ⅲ郭から古式土師器や須恵器も出土していることから、古墳時代前期や中期～後期の箱式石棺が存在していたのかもしれない。ただし、墓域等の遺構は検出できなかった。

### ③ 第Ⅲ郭（図版3～11・13・17～20、写真図版1・5～7・13～20・27～34・36）

**位置** 主郭の北東側に接して存在する三角形状の平坦面で、北東側の友尾山方向にのびる尾根稜線の上端に位置している。

**調査前の状況** 北側には東西方向の帯状の盛り上がりがあり、その南側は谷状の窪地となっていたことから、土壙を伴う平坦面であることは容易に想定できた。ただし、土壙の石積みは完全に埋もれており、西端の礫群も表土や主郭崩落土に覆われていた。また、主郭北東部盛土が第Ⅲ郭側に崩落・流入していたことから、主郭北東斜面と第Ⅲ郭平坦面の境界は判別しにくい部分が多く認められた。

**形状・規模** 平面三角形で、北側から東側にかけて内側に石積みをもつ土壙を構築し、平坦面は岩盤をほぼそのまま利用しており、北東部へ向かって約13%の勾配面となっていた。また、南東隅部には虎口の石段が遺存しており、西端部分には礫の集積（礫群）が認められた。

礫群は東西2m、南北3m弱の長方形の範囲に礫が集中していた部分で、上端面が土壙の遺存上端面と同じ高さで、下端は第Ⅲ郭平坦面とは同じ高さであった。礫は径10cm～40cm大のもので、ほとんどが角礫～亜円礫の川原石で板状の門柳石も含まれていた。土壙石積みの多くに使用されていた地山角礫は少なく、北側の切岸際に位置していたことから、河原などから運んできた戦闘用の礫であると同時に土壙石積みの補修用であったと推定している。

土壙は内側に石積みを設け、外側は切岸と同じ傾斜をもっており、横断面は台形に近い。土壙の下端幅は2.8m程度、上端幅1m前後であるが、北東隅では1.8mと幅広くなっている。北東隅で南側に折れ曲がり、約2m続くが、調査時にはそこから南側は幅・高さとも減じて低くなっていたことから、虎口まで続いているかどうかは不明である。土壙の高さは最大で90cm遺存しており、内側のほぼ全面に、主として凝灰質砂岩の地山礫を用い、少量の門柳石も使用して石垣状に積み上げて石積みとし、土壙の崩落を防ぐとともに第Ⅲ郭の面積を確保していた。また、西端部でも礫群との間に長さ90cm以上、高さ40cm程度の南にのびる石積みの壁を設けていた。石積みは第Ⅲ郭の底の平坦面から上に積み上げられており、大小さまざまな大きさの礫をランダムに配置しており、表面の面を揃える傾向は認められるものの、凹凸が多く、隙間もかなり認められた。この状況のため、石積みが崩落している部分が数箇所で認められた。また、石積みの下端ラインは第Ⅲ郭平坦面と同じで、第Ⅲ郭平坦面北端の多くの部分では標高111.8m程度であるが、西端から東へ4m付近から西側へは平坦面の底とともに石積み下端も徐々に高くなり、西端では標高112.5mで約70cm高くなっていた。石積みの東西延長は約11.4mを測る。

第Ⅲ郭は土壙も含めた東西規模が約12.5m、東側での南北規模は約9.5mで、第Ⅲ郭平坦面の東西規模は石積みの延長と同じ約11.4m、東端での南北規模は約7.5m、西端では南北1.2m程度であったと思われる。なお、第Ⅲ郭西部では火を焚いた形跡がある部分が少なくとも3箇所確認された。

第Ⅲ郭の東辺は、土壙が途切れた南側に約2m離れた位置から南側に、平坦面東端に沿った東斜面には小さな礫を用いて地覆石状の直線的な礫の並びが約4mのびており、そのほぼ中央部で虎口の石段を検出した。石段は直方体に近い地山礫や門柳石の板状石を使用したもので、2段～3段検出した。虎口

の幅は約1.2m～1.5m、石段の深さは約60cmで、落差は30cm程度である。石段の東側下端には礫が散らばっており、第Ⅲ郭東側の通路から虎口に入る際の石敷きであった可能性もある。また、この部分に虎口が存在していることから、登城道は北東方向の尾根伝いであったことが推察できる。

第Ⅲ郭の南西部については主郭北東部の崩落が激しく、明確にできなかったが、北西～南東方向の直線であった可能性がある。

**堆積状況** 第Ⅲ郭平坦面は岩盤面をほぼそのまま利用していたが、土内面手前で岩盤の傾斜が急に変化していたことから、この部分に盛土をおこなってその上に土墨を構築していた。第Ⅲ郭平坦面には多くの土砂が流入しており、平坦面部分の西寄りでは約70cmの厚さ、北東部でも約60cmの堆積が認められた。また、主郭と接する部分にあたる第Ⅲ郭南西部～西部では特に多く、約85cm、最大約1.5mの厚さで主郭側からの崩落・流入土が認められ、崩落土には石積みに使用されていた一辻10cm～25cm大の角礫のほか、中礫なども多く含まれていた。これらは石積みも含めてもとは主郭北東部の盛土層である。

**遺物出土状況** 主郭に近い部分では、15世紀代と判断される多数の土師器皿や土師質の漁網錐、古瀬戸の陶器、瓦質に近い擂鉢のほか、アカニシと思われる巻貝も7点ほど出土した。さらに、出土した銅・鉄製品の大半がこの部分から出土したものである。これらの遺物の大半は主郭を造る際に行った盛土内に含まれていたものが崩落したものと判断している。また、漁網錐には方向に規則性をもった30点余りを含む約70点が集中して出土した部分があり、錐を装着した状態で置かれていた網が腐朽して漁網錐のみ遺存したものかもしれない。なお、礫群から輸入青白磁片が3点出土した。

#### ④ 通 路（第Ⅳ郭）（図版3～5・11・14、写真図版1・5～7・12・19・20）

**位 置** 主郭の東側から南側および第Ⅱ郭の南側に接して存在し、南側は岩盤の急斜面となっている。

**調査前の状況** 調査前の現況観察では第Ⅱ郭の南に接しており、東側へは続かず、幅も3m強と推定されたことから、第Ⅳ郭と呼称していた。

**形状・規模** 調査の結果、第Ⅱ郭の南側から主郭の南側を通って、第Ⅲ郭に続く細長いものであることから、通路と判断した。平坦な部分の幅は60cm～2mであるが、多くは90cm前後の幅で、第Ⅱ郭の南西部分が最も広い。第Ⅱ郭との高低差は西端が最も低く約40cm、南側が最も大きく落差約90cmである。通路の標高は第Ⅱ郭の南部分が最も低く112.1m、西端ではやや上がって112.4mとなる。最も高い北東端では、標高112.7mである。総延長は約32mである。主郭との高低差は主郭南側で1.6m、主郭南東側の斜路がある部分が最も高低差が少なく約1.1m、主郭東側では約1.3mで、第Ⅲ郭と接する部分では差がやや大きくなって約1.9mを測る。

**堆積状況** 第Ⅱ郭南西側や主郭南東部では岩盤を掘削して平坦面としているが、第Ⅱ郭南側～主郭南部および主郭東側では斜面下側に若干の盛土をおこなっていたようである。

**遺物出土状況** 表土や埋土から土師器皿21や14世紀末～15世紀前葉と思われる古瀬戸天目碗25のほか、土師器壺・筒形容器や鉄釘も出土している。

#### ⑤ 第Ⅴ郭（図版3・4・11、写真図版1・5～8）

**位 置** 第Ⅲ郭から北東方向に尾根後線を5mほど下った位置で、郭の可能性がある緩斜面である。

**調査前の状況** 調査前の地形観察および測量図で緩斜面が存在していた。

**形状・規模** 調査の結果、明確な平坦面は存在しなかったが、緩傾斜面が認められた。平面形状は三角形に近く、等高線並行方向での長さは約5m、尾根後線方向の幅は約2mと判断している。

**遺物出土状況** 繩文土器片81が表土直下から出土したのみである。

## ⑥ 第VI郭（図版3・4・11・12、写真図版1・5～8・21・22）

**位置** 第II郭・第III郭の北端から始まる切岸を約8.7m下方に降りた位置にある帶郭・横郭である。

**調査前の状況** 一見して帶郭と確定できるほど明確に残存していた。東側は尾根稜線部分で途切れるが、西側は調査区外の第II郭西側斜面下まで続いている。西部では土壠状の高まりも認められた。

**形状・規模** 長さ約35mにわたって調査を行い、幅2m～3mの規模で、東側は幅を減じて尾根稜線手前で消失していた。平坦面の標高は東端で105.0mであるが、約3m東側から中央部にかけては104.5m、西部では一度104.0mまで崖地状に下がるが、西端では104.7mの高さになる。崖地状部分を中心にして上端幅1m程度の土壠状の高まりがあり、上端の標高は104.3m前後である。中央部で土坑状の落ち込みを検出したが、性格等は不明である。なお、第VI郭南側斜面の切岸は、調査区内での東西延長は30m～35m、切岸上端には粘質土と砂質土を交互に盛土して、流出を防ぐとともに角度は44°程の急傾斜としていた。平面的には弧状を描いてやや張り出しており、西側調査区外に続く。

**堆積状況** 表土と、覆土・土壤化層の第2・3層の下に遺構面があり、切岸も含めて岩盤層の上に盛土を施していた。第VI郭では幅1.5m以上盛り出し、切岸では垂直方向で最大1.7m厚の盛土があった。

**遺物出土状況** 第VI郭の崖地部分から石鍋、切岸の表土からは古漁戸施釉陶器、盛土や覆土から須恵器鉢・土師器皿といった14世紀後半～15世紀代の遺物のほか、89の古墳時代中期の須恵器片も出土した。

## ⑦ 第VII郭（図版3・4、写真図版1・5～8）

**位置** 第III郭から北東方向にのびる尾根稜線上で、第V郭の北東に接して斜面下側に位置する。

**調査前の状況** 調査前の地形観察および測量図により、第VI郭が東側で収束した東側に狭い面積の緩傾斜部分が存在したことから、郭の可能性を推定して第VII郭と呼称した。

**形状・規模** 調査の結果、緩傾斜部分は人為的な加工が認められず、郭ではなかったとの判断に至った。

## ⑧ 第VIII郭（図版3・4、写真図版1・5～8）

**位置** 東側第VI郭北側には、下端が不明確で遺存状況も悪いが、高低差3mほどの切岸状の斜面があり、その裾の東寄りに位置する。

**調査前の状況** 調査前の地形観察および測量図により、平面半月形の緩傾斜部分が存在したことから、郭の可能性があると判断して第VIII郭と呼称した。

**形状・規模** 調査の結果、緩傾斜部分が認められたものの、落差6m以上の崖面直上で危険を伴うことから、調査部分は極めて限られた。郭であったかどうかの最終判断はできていない。

**遺物出土状況** 第VIII郭南側の切岸状部分の表土直下から土師器皿74が出土したのみである。

## ⑨ 山上講（図版3・23、写真図版1・5・6・43）

城がある丘陵の東側は、現道まで落差20mを超える岩盤の絶壁になっていることから、かつて大峰山信仰の行者が行場としていたらしく、主郭平坦部の北端に、地元で「門柳石」と呼ばれる流紋岩の板状亜角礫を積み上げて周囲を囲み、地山の板石を截せた祠が建っており、そこに役行者（役小角）の石像が置かれて山上講として祀られていた。祠右側の柱石には江戸時代の天明7（1787）年の年号が刻まれ、奥の梁石には、明治42（1909）年修繕の文字が刻まれ、昭和7（1932）年記録の柱状の石が祠の手前に転がっており、祠上部のコンクリートには昭和38（1963）年補修の文字が記されていた。

なお、祠は2015年11月20日に解体して降ろされ、城の北西にある天満宮の脇に置かれている。

祠前面では、東西2.5m、南北約2.6mで二重に区画した敷石部が表土直下から検出された。

祠周辺や第VI郭などで表土層から近世後半～近代の施釉陶器・染付磁器などのほか、棟瓦も出土した。

## 2. 下層の遺構

上層の山城は主郭の北半分と第Ⅱ郭・第Ⅲ郭から第Ⅵ郭への斜面にかけて大きく盛土を施して形成されていた。城の構築方法を探るため上層遺構の盛土部分を除去した結果、その下層から山城遺構と考えられる、岩盤を平坦に削った平坦面や、山側の岩盤を掘り崖めて長方形かそれに近い形状に加工した段状平坦面のほか、斜面で小規模な堅壠状の溝も発見された。

なお、これらの遺構は最終段階の調査で発見したため、詳細な図などを作成することができず、電子平板図と部分的な土層断面図に限らざるを得なかった。

### ① 平坦面1（図版11・21・22、写真図版23・24）

位 置 主郭の南半分から第Ⅱ郭にかけての下層部分に位置する。

形状・規模 周主郭の南半分を占める部分では上層主郭と同一の岩盤面になっていたが、西側は緩斜面となっていた。第Ⅱ郭により削平を受けたためであろうか。なお、西端では段状遺構4と接する。

平坦面の平面形状は東西に長い楕円形に近く、東西約17m、南北約9mで、北側の平坦面2や段状遺構1と接する斜面の幅は約0.5m～2.5mで、平坦面1の平坦部と平坦面2との高低差は約90cm、段状遺構1は約1.4m下方に存在する。柱穴や東石等は検出されなかった。

### ② 平坦面2（図版11・12・21・22、写真図版23・24・35・41）

位 置 上層主郭北半部の盛土下から第Ⅱ郭にかけて、平坦面1の北側に位置する。

形状・規模 平坦面1の北側～西側にかけて続く岩盤を加工した平坦面である。東部での平坦面の標高は113.2m前後、西部では113.0m前後である。平坦面は幅4m程度であるが、東端部では段状遺構1と接し、その西隣の段状遺構2は平坦面2の平坦面北部を削り込んでおり、平坦面2の幅は約2m～3mとなっている。また、平坦面2の西部南端には段状遺構4が平坦面1との間に存在していることから、平坦面2の平坦部幅は2m程度と狭くなっている。さらに、北西部では段状遺構3も平坦面2の平坦面を1m程度削り込んで構築されている。平面的には弧状を呈しているが、総延長は約22mである。なお、平坦面2の中央部に平坦面の裾が長さ約6mにわたって確認でき、幅は約1.5mである。厳密な高低差は確認できないが、標高が112.25m前後であることから、90cm程度である。

平坦面南端山側の裾には一列に並んだ、一辺20cm～30cm程度で上面が平らな東石状の礫を5～6点検出した。東側3点は東石中心間が約2mで等間隔であるが、東から4点目は3点目とは約3m離れており、等間隔にはなっていないが、一直線に並ぶ。上屋のような構造物があった可能性が高いが、東石はこの例以外は並んだものが検出されなかつたため構造は不明である。また、段状遺構2の南西隅の上側に柱穴状の穴を2基検出したが、段状遺構2に関係したもの可能性が高い。

堆積状況 西部では第Ⅱ郭上面まで厚さ40cm程度であったが、北側は80cm程度の盛土厚があり、大きな礫なども混ぜて埋めていた。埋土をみると、段状遺構2の上端まで水平に埋めていることから、段状遺構2とは時期差がある可能性がある。その後、平坦面2は主郭造成のため盛土されていた。

遺物出土状況 土器師皿などが盛土層から出土した。

### ③ 段状遺構1（図版13・21・22、写真図版23・24・42）

位 置 東側主郭北東部、石積み下に位置し、平坦面2の東端部と接している。

形状・規模 平坦面1・2がある岩盤の北東部を削り込んで造成したもので、平坦面は台形に近い形状を示す。北西～南東方向に長く約7m、山側では長さ5mで、北東～南西方向では約2.3mの幅を測る。平坦部北東端から先は緩やかな傾斜面となり、第Ⅲ郭の土塁付近から北側は岩盤の傾斜角度が急にな

る。平坦部の標高は112.7m～112.9mで、平坦面1、平坦面2の平坦部分との高低差はそれぞれ約1.2m、約30cmで、いずれも段状造構1が低いが、段状造構2は段状造構1よりも約60cm低い。平坦部分の西側壁には2点、中央部の平坦部端付近に1点それぞれ東石状の礫が存在していたことから、構造は不明であるが、上屋等が設けられていた可能性が高い。なお、本遺構北側の第Ⅲ郭土塁手前にあたる部分で柱穴状の円形の掘り込みを2基検出した。

**堆積状況** 主郭北東部盛土・石積みは段状造構1の埋土にもあたり、1m近い厚さの盛土が認められた。また、第Ⅲ郭土塁は岩盤の傾斜変換部分に1.4m程度の盛土をおこなって構築されていたことも判明した。

**遺物出土状況** 主郭北東部盛土部分にあたることから、上層遺構で既述したように、多量の遺物が出土している。土器器皿をはじめ土鍤、家具や武器・武具類の部品である銅製品・鉄製品のほか、鉄釘や貝も出土している。これらは、上層の主郭を造成する際に、下層のものを整理して盛土中に埋めたものと推測される。また同時に、武器・武具類が多くを占めるところから、下層遺構も城郭関係であったことを示すものと言えよう。なお、土層断面Jラインの下端、岩盤の窪んだ部分あるいは掘り窓めた部分で鉄刀が出土している。

#### ④ 段状造構2（図版11・12・15・17・20・21・22、写真図版23～25・35・36・41・42）

**位 置** 平坦面2の北側に位置し、上層主郭の北端部分にあたる。

**形状・規模** 台形に近い平面形状を呈し、平坦面2の平坦部分を「コ」字形に削り込んで平坦部を造出している。平坦部分南端での東西長は7m程度、最大約8.2mで、南側の上端では長さ7.5mほどである。平坦部は岩盤部分のみでは最大1.2mの幅であるが、南北中央部およびGラインの土層断面観察により、盛土によって平坦面を北側に広げていた可能性が高いことが判明した。それによると、平坦部の南北幅は2.5m以上であったと判断できた。平坦部の標高は112.1m前後で、平坦面2よりも約1.1m低い。

段状造構2の南側壁には壁全体に直線的に並ぶ5基の柱穴があり、柱間が東端のみ約1.6mであるがその他は約1.8mと等間隔になっており、この部分に板塀などの構造物があったと判断できる。また、南壁直下には「コ」字形にめぐる幅15cm～20cm程度の排水溝が掘り込まれており、斜面下側は土手状に岩盤を掘り残していた。

#### ⑤ 段状造構3（図版11・15・21・22、写真図版19・23・24・37・39・40・42）

**位 置** 平坦面2の中央部北西側で、上層第Ⅱ郭の西側突出部となっていた北部にあたる。

**形状・規模** 平坦面2の岩盤を「コ」字形に削り込んで構築された段状造構で、北西に面した部分が長い長方形の平面である。平坦部の規模は長さ約4m、岩盤での幅は約2mであるが、もう少し幅が広かった可能性が高い。南東側肩の長さは4.8m程度で、平坦部と平坦面2との高低差は約1mである。平坦部には岩盤を掘り込んだ柱穴があり、6基検出した。柱穴の並びから、3m×2.6m程度の2間四方の建物が建っていたと判断できる。また、北西隅の柱穴は岩盤北側の斜面部で検出されたことと、建物と平行に近い石列2が斜面部で検出されたことから、平坦部の北西部は盛土によって平坦部を幅約3mまで拡張していた可能性がある。石列2は、上端の高さが平坦部と同じで、崩落にくくように縦方向に並べられた地覆石状のもので、長さは約2.5m遺存していた。

なお、石列2の北側でも、岩盤傾斜面から約70cm上を上端とした、石列1と呼称した石積み状のものを検出している。石列1は内側にあたる南面を面を揃えるように3段程度遺存しており、外側にあたる北面に崩落しているものが認められたことから、この部分に土塁状のものが存在していた可能性があるが、この部分の盛土が厚いことから、盛土の崩壊を防ぐ目的で埋め込まれたことも否定できない。な

お、石列1は3mほどの長さが遺存していた。

**堆積状況** 石列1の部分は岩盤が傾斜していることもあり、第II郭上面まで厚さ約1.5mの盛土をおこなっていた。なお、段状遺構3や石列1の盛土層からは遺物はほとんど出土しなかった。

⑥ 段状遺構4 (図版21・22、写真図版23・24・26・37・38・42)

**位 置** 平坦面2の南端に位置し、上層第II郭の南西隅部分にあたる。

**形状・規模** 平坦面1西端部分の岩盤を「L」字形に削り込んで長方形の平坦部分を造出している。南北方向に長く約5m、東西幅は約2mで、平坦部から柱穴は検出されなかったが、東石状の礫や、北辺には石列も認められた。この遺構は多くの礫で埋められていたことから、平坦部で検出した東石状の礫や石列が段状遺構4に伴っていたかどうかの判断ができなかったものの、建物が存在していた可能性は否定できない。

**遺物出土状況** 段状遺構4は第II郭構築の際に多くの礫で埋められており、礫の下端、平坦部直上から土師器皿や土錘、碁石などのほか、土壙の破片が出土した。

⑦ 堪堀状遺構1 (図版19・21・22、写真図版23~25・41)

**位 置** 調査区西端近くで、上層切岸遺構の下層で検出した。

**形状・規模** 角度約40°の岩盤を等高線と直交方向に溝状に掘り込んだ堪堀状の遺構で、上端の標高は約109.7m、下端は約106.6mである。斜面での延長約5.1m、下部での幅は約2.0mで、横断面は傾斜の緩いV字形で、中央は溝状となり、幅約40cmの部分が約20cm深くなっている。検出面からの深さは約60cmである。下端は上層遺構構築時に削られたものと思われる。

**堆積状況** 墓土は地山風化土で、主として西側からの自然堆積と思われる。

⑧ 堪堀状遺構2 (図版21・22、写真図版23~25・42)

**位 置** 堪堀状遺構1の東側、溝状遺構を挟んで約9m東に位置し、堪堀状遺構1と同じ状況である。

**形状・規模** 上端・下端の標高および深さは堪堀状遺構1とはほぼ同じで、斜面での残存長もほぼ同じであるが、幅は約2.2mである。深さも下端は堪堀状遺構1と同様、上層遺構構築時に削られたと思われる。

⑨ 溝状遺構 (図版21・22、写真図版23~25・42)

**位 置** 堪堀状遺構1と2の間に位置し、堪堀状遺構2につながっている。

**形状・規模** 等高線とはほぼ並行方向に構築されたもので、長さ約7.0m検出した。岩盤を溝状に掘り込んだうえ、斜面下側を土手状に削り残しており、段状遺構2の溝の形態と類似する。東端は堪堀状遺構2につながるもの、西側の堪堀状遺構1とはつながっていないが、西側が徐々に幅を減じていることから、上層遺構構築時に堪堀状遺構1とのつながり部分が削られたものと思われる。溝も含めた幅は最大約80cm遺存していたが、段状遺構であったとしても傾斜面が急であることから、幅の狭いものであったと思われる。

## 第2節 遺物

### 1. 土器類

以下、報告書掲載分として抽出されていた土器類について記述するが、それ以外の土器類の内容や数量について筆者は把握していないことをあらかじめお断りしておきたい。

#### (1) 主郭

##### ① 北東部盛土 (図版24、写真図版45・46)

図示した土器のうち1~11は主郭の北東部の盛土から出土したものであり、後に述べる第Ⅲ郭での出土位置と重複する部分が多いが、ここでは取上げ単位にしたがって、主郭出土として報告する。

**土師器皿** 主郭出土として報告する土器類は、11を除いた10点が土師器皿である。1は1/6程度の破片であるが、口径はやや大きく12.5cmを測る。体部から口縁部にかけて外反気味にのびた後、端部付近で外反する。端部は尖りぎみである。器高1.5cmで、内面にはハケの痕跡が残る。後述する土師器皿のA2類に属する。2は底部を欠失するが、いわゆる「へそ皿」で、H類とした。口径7.8cmで器表摩滅が激しい。残存高は1.9cmである。3は口径7.4cmで底部を欠損し、残存高は1.6cmである。体部は内湾し、口縁部付近で器厚を増す。端部は丸くおさめる。F2類もしくはG類に属する。4は口径7.3cm、器高1.2cmで形態的にはG類にあたる。内面にはヘラミガキ様に單位が残るナデをほぼ單一方向に施している。5もG類にあたり、口径7.1cm、器高1.2cmである。内面見込み部分には單一方向、体部内面には弧状に粗い目の強いハケを仕上げ状に施しており、特徴的である。6はF1類またはG類で、口径7.0cm、器高1.5cmである。ナデ仕上げである。7は口縁部がかなり肥厚し、口縁部外面を強くナデすることにより口縁下部に稜線をもつもので、B類やE類に近いが、口径は7.3cmと小さい。器高1.6cmでナデ仕上げである。8は口径7.2cmで器壁が厚くG類にあたる。器高は1.4cmで器表は摩滅している。9の内面も5と同様の1cmあたり4条の粗い仕上げハケを施しているが、遺存状況が悪い。口径7.2cm、器高1.4cmで体部と底部の境が明瞭なものである。F1類と思われる。10は底部中央が上げ底状であるが、器厚・形態的にはG類である。口径6.8cm、器高1.8cmでナデ仕上げである。

**土師器壺** 酸化焰焼成であるが硬質である。口径20.1cmを測る。やや長い口縁部は直立し、端部は玉縁状に外側に膨らませている。外面は平行タキ、内面には当て具痕が残る。体部の形態が不明であるが、15世紀中頃の時期と考えられる。外面には煤が付着し、口縁部に沈線状の窪みが全周するようである。主郭北斜面西部の盛土層から出土している。

#### (2) 第Ⅱ郭

##### ① 段状造構4埋土 (図版24、写真図版45~47)

第Ⅱ郭出土としているが、図示した12~20・22~24・27の13点のうち、大半を占める9点が第Ⅱ郭下層の段状造構4の埋土から出土したものである。

**土師器皿** 12~15・19・20・22~24に図示した。12は1/8程度の小片であるが、口径21.2cmを測り、体部と口縁部の境の外面には強いナデによる凹面を造出している。A類としたものに近い。13はD類に近い形態で、口径12.4cm、器高は1.9cmである。底部の器壁は薄手である。14はC類に属し、口径12.0cm、器高2.7cmである。器壁はやや薄く、底面にはエビオサエ痕を多く残す。15は体部に指頭圧痕を多く残し、器壁は薄い。ナデ仕上げであるが、底面には掌に似た痕跡が残る。口径11.4cm、器高2.8cm

で、C類にあたる。19はB類であろう。口径10.2cmで、口縁部外面の強いナデにより口縁下に後線がつくられている。体部外面に指頭圧痕が残るが、器表が摩滅している。20は口径12.2cmで、口縁部付近が肥厚し、底部付近は器壁が薄く、B類に分類される。22はF1類で口径は7.8cmである。器高は1.5cmで器表が摩滅している。23は歪が大きいもので、半分以下しか残存していないが、口径は7.4cm、器高1.6cmで、F1類と思われる。24はF3類で口径6.9cm、器高1.4cmである。器表は摩滅している。

#### ② 第Ⅱ郭各所（図版24、写真図版46・47）

16～18・27の4点が第Ⅱ郭の各所から出土した。16は第Ⅱ郭南西部、17は第Ⅱ郭南半、18は第Ⅱ郭西半部表土下、27は中央部出土である。

**土師器皿** 16は口径11.0cmと大きく、B類で、口縁部が肥厚する。ナデ仕上げで、器高は2.3cmである。17もB類で肥厚した口縁外面上部をナデで稜線を造り出している。口径10.4cm、器高2.6cmで器表は摩滅している。18は口径10.3cmで17とよく似た形態でB類である。器高は2.2cmでナデ仕上げである。

**須恵器鉢** 27は1/8以下の小片であるが、口径23.0cmを測る。口縁端部は上方に拡張したものを内傾させている。東播系須恵器の森田編年の第Ⅲ期第4段階の特徴を示し、15世紀前半に位置付けられている。

### （3）通路（第Ⅳ郭）

#### ① 通路（第Ⅳ郭）各所（図版24、写真図版47）

図示した21は南側斜面、25は南斜面表土、26は西端部からそれぞれ出土している。

21は土師器皿で、口径が7.6cmと小さいがD類またはE類であろう。器高は1.6cmで横ナデ仕上げである。25は古瀬戸天目焼で、口径12.7cmである。底部を欠失するが、口縁端部が薄く外反していることから、古瀬戸後期のI～II期の天目B類と判断した。14世紀末～15世紀第1四半期とされている。26は土師器皿と思われるが、硬質である。口径21.3cmの端部は肥厚や拡張はせずに受け口状の凹面をなす。体部外面は平行タキ、内面は当て具痕をナデ消している。この口縁部の端は管見では見当たらない。

### （4）第Ⅲ郭

第Ⅲ郭から出土した土器類は土師器皿40点、青白磁2点、古瀬戸2点と瓦質擂鉢1点を図示した。

#### ① 第Ⅲ郭西部（図版25・26、写真図版46・48～50・52）

西部の主郭流入土や、主郭の石積（盛土）下、土壘・石積の崩落部分などから出土した土師器皿で、29・30・33～35・38～44・46～48・53～57・59・61・64・66・67の25点と70の古瀬戸が出土。

**土師器皿** 29は1/8以下の小片であるが、口径16.0cmと大きく、外反気味の体部を有するもので、京都系土師器皿A類のうちのA1類とした。口縁端部はやや内湾し、内面は凹面となる。横ナデ仕上げで残存高は2.1cmである。器壁が薄いものである。30は1/4程度の破片であるが、口径13.8cmで、体部が外反し、残存高が3.5cmと深いことから、A2類とした。33は体部が直線的で底部が小さいと推定され、1/4弱の破片であるが、口径が14.7cmと大きいことからA3類とした。残存高2.8cmで器表は摩滅している。34は体部が直線的であることからA3類としたが、A2類とすべきかもしれない。1/4程度の破片であるが、口径13.6cm、器高2.9cmである。ナデ仕上げ。35は口径12.0cmで器壁が厚くB類の可能性があり、ナデ仕上げである。38・39は口縁部付近の器壁が厚く、口縁部外面下部ににぶい稜線が認められる。38は口径10.3cm、器高2.6cm、39は口径10.1cm、器高2.1cmである。ともにB類である。40は歪が大きいが、口径10.9cm、器高2.1cmを測る。口径に比して器壁が薄く、C類とした。底部の器壁は

薄く、底部～体部外面には掌痕が残る。41も歪が大きく底部を欠失するがC類と思われる。口径10.9cm、残存高は2.2cmである。42もC類で、楕円形に歪み、長径は10.8cmである。内面底部には粗目のナデを單一方向に施している。器高は2.3cmで、口径に比較して器壁が薄い。43は口径10.1cmで器厚は4～5mmとC類に較べてやや厚くD類とした。器高は2.4cmで、底部～体部外面に掌痕を残す。44もD類で、1/4程度の破片であるが、口径は10.5cmを測る。残存高は1.9cmである。平面の写真は撮影していないが、内面には5条/cmの粗目のナデが施されている。46は楕円形に歪んでおり、口径9.4cmでE類とした。器高1.7cmである。47の口径は9.3cmで、口縁部付近の器壁が特に厚くなっている、外面にぶい稜がある。器高2.2cmで体部内面にはヘラミガキにみえる粗目のナデを單一方向に施している。E類。48は1/3程度の破片で、口径9.2cmを測る。口径に比して器壁が薄く、F1類とした。器高1.9cmで内面はナデ調整。53はF2類で、口径7.0cm、器高1.5cm。内面に粗目のナデ、底面に掌痕が残る。54は口径6.9cm、器高1.4cmでF3類。内面にはナデ、外面上には掌痕が明瞭に残る。器壁は薄い。55・56もF3類で、内面に4条/cmの粗目のハケを施す。55は口径6.8cm、器高1.6cmで、56は口径6.9cm、器高1.2cmである。57は口径6.6cm、器高1.8cmで、楕円形に歪んでいる。F3類で、内面にヘラミガキにみえる粗目のナデを施し、外面上はナデ仕上げである。59はG類で、口径7.3cm、器高1.4cmである。内面にヘラミガキにみえる粗目のナデ痕が微かに残る。61は口径7.1cmで、器高は2.0cmと深いが、G類とした。体部～口縁部は厚手のつくりとなっている。64は体部と底部の境が不明瞭で、口径6.8cmの厚手のつくりとなっている。G類で、器高は1.9cm、内面は粗いハケのようである。外面上はナデ。66・67は京都系の通称「へそ皿」で、H類とした。66は口径6.8cm、器高1.8cmで、体部は外反しながらび、口縁端部は丸くおさめる。内面のナデは一周して引き抜いている。67は体部が外反せず直線的である。口径6.4cm、残存高は1.5cmで、内面のナデは66と同手法である。66・67はともに15世紀代のものと判断される。

**施釉陶器** 70は古瀬戸の平碗であろう。口径13.9cm、器高5.7cmで、輪高台部分は極めて低い。外面上部は露胎である。古瀬戸後期のⅢ～Ⅳ期と思われ、15世紀第2四半期～15世紀中頃とされている。

## ② 西端集石部（図版25・26、写真図版48・50・51）

西端の集石部分では上面や集石内から28・36・37・45・60・62・65の土師器皿7点と、68・69の輸入青白磁2点および古瀬戸71が出土した。

**土師器皿** 28は1/6程度の破片であるが、口径17.0cmを測り、体部から外反気味の体部でA1類である。口縁端部はさらにやや外反し内面に凹面をもつ。残存高は2.8cmである。ナデ仕上げ。36は口径10.4cmで器壁が厚くB類とした。器高は2.0cm程度で、内面はナデ仕上げである。37もB類で口縁部付近の器壁が特に厚く、端部外面をナデすることでやや下部に稜が認められる。外面上には掌痕が残る。口径は10.6cmである。45は2/5程度の破片で、口径は10.2cm、残存高は2.7cmを測る。体部外面中央に沈線状の凹面が全周しており、内面には凸部として認識できる。ナデ調整で、D類とすべきであろうか。60はG類で、口径7.2cm、器高1.5cmを測る。内外面ナデ調整である。62は歪が大きいが、口径6.8cm、器高1.3cmで、体部～口縁部は厚手である。G類。内面には一定方向の粗目ナデをヘラミガキ状に施す。外面上はナデ仕上げである。65はG類としているが、体部と底部の境は全く認められず、器高1.0cmと浅いものである。口径は6.5cmで、内面に4条/cmの粗目のハケを弧状に施す。

**輸入磁器** 68は龍泉窯系青白磁の獸脚部分で、香炉あるいは置物か燭台と思われる。残存高5.6cm、残存長5.7cm、残存幅3.5cmである。足首付近から下および腹の部分は露胎となっている。腹の部分に

1 cm × 0.8 cm の円孔が穿たれている。足首の皺まで表現された優品の破片である。14～15世紀代と推定している。69は景德鎮窯の青白磁で、外径3 cm 程度の筒部の下端から曲折して外径5.4 cm の筒部へとつながる部分の破片で、下の筒部には透孔が穿たれている。その肩部には草花文の装飾が貼り付けられている。筒上部には円形の剥離痕があり、把手か装飾が付けられていたと推定している。透孔がある下の筒状部は六角形を呈し、各辺に1個の装飾が貼り付けられていたようだ、2個残存している。軸は内外全面に認められ、器台か置物の可能性があるが、不明である。14世紀代の景德鎮最終段階のものであろう。

**施釉陶器** 71は口径15.3 cm を測る。底部を欠失するが、古瀬戸の平塊と思われる、口縁部が外反することから、古瀬戸後期のⅢ期と推定される。15世紀第2四半期とされている。

### ③ 第Ⅲ郭中央部 (図版25・26、写真図版49・50・52)

中央部では、主郭の石積下付近や下層、焼土付近、土壘下などから、土師器皿の31・32・49～52・58・63の8点と、72の瓦質擂鉢1点が出土している。

**土師器皿** 31の体部は外反しないが、1/4程度の破片で、口径13.5 cm 、器高3.3 cm であることから、A 2類とした。口縁部のみやや外反し、器表は摩滅している。32もA 2類で、体部は外反気味で口径は11.8 cm である。1/4弱の破片で、残存高は2.4 cm 。器表は摩滅している。49はF 1類で、口径8.4 cm 、器高1.6 cm である。外面はナデ調整で指頭圧痕を残す。50もF 1類で、口径7.3 cm 。口径に較べて器厚がやや薄い。残存高は1.4 cm である。51は口径7.3 cm であるが、底部と体部の境が不明瞭でF 2類とした。器高1.4 cm で内面はナデ調整。外面には掌痕にみえる圧痕を残している。52は内外面ナデ調整で、口径7.1 cm 。底部と体部の境が不明瞭で、口縁部器壁はやや厚みを増す。F 2類で、器高は1.8 cm ある。58はG 類で、口径7.3 cm 、器高1.7 cm を測る。内面には一方向と弧状に粗目のハケを施す。外面はナデ調整。63は口径6.8 cm 、器高1.5 cm で、体部と底部の境が不明瞭である。G 類で、内面に粗いハケを弧状に施す。

**瓦質擂鉢** 72は瓦質の擂鉢片で擂目は一本引きである。78と同一個体の可能性もある。口径27.5 cm 、残存高11.4 cm で、擂目は4本1単位として単位間は広く開けているようにみえる。内面は使用により平滑で摩滅している。口縁端部は下方にのみ少し拡張し、端面は外傾する平面で、端部や下にぶい稜線がめぐる。管見では山地や時期を明らかにできないが、15世紀代の可能性を考えている。

## (5) 切岸～第VI郭

図示したのは、北側斜面の切岸から出土した土師器皿2点・古瀬戸2点・石鍋口縁部1点、第VI郭から出土した石鍋体部1点、第VI郭北側斜面から出土した土師器皿1点・瓦質擂鉢1点である。

### ① 切岸 (図版27、写真図版47・52)

土師器皿73は切岸東半部、75は西半部で、どちらも下層遺構検出のための掘削時に出土した。古瀬戸76は中央部表土、77は東半部切岸埋土からそれぞれ出土している。

**土師器皿** 73は京都系のA 1類で、口径15.6 cm 、残存高2.7 cm である。口縁端部内面は若干窪ませているようである。横ナデ調整。75は口径が12.2 cm と大きく薄手であることからA 1類としたが、外反する体部から下部の特徴はH類であるかもしれない。残存高は2.4 cm である。

**施釉陶器** 76は口径14.6 cm 、器高6.5 cm で、体部外面下半以下は露胎で、ロクロケズリが観察できる。輪高台は極めて低く、口縁端部は外反する。77の口縁端部は外反気味である。体部下半は露胎で、底部を欠失する。口径15.8 cm で、残存高は5.5 cm である。ともに古瀬戸の平塊で、口縁端部が外反することから、古瀬戸後期のⅢ期と思われる。15世紀第2四半期の年代が与えられている。

② 第VI郭北斜面（図版27、写真図版47・52）

土師器Ⅲ74は表土から、瓦質擂鉢78は斜面下端の表土からそれぞれ出土したものである。

土師器Ⅲ 74はA1類で、1/8以下的小片であるが、口径は14.4cmを測る。体部から口縁部へは外反気味で、口縁部内面は、少し窪ませている。残存高は2.2cmである。

瓦質擂鉢 78の瓦質擂鉢片は1/8以下の小片であるが、口径30.1cmで、一本引きの擂目が2本遺存している。須恵器にも近いが、口縁部の形状が似ていることから、72と同一個体の可能性がある。

（6）築城以前の土器

築城以前の土器で図示したものは、縄文時代・弥生時代後期～古墳時代初頭・古墳時代中期～後期の土器のほか、平安時代後期～鎌倉時代のものである。

① 縄文時代（図版28、写真図版53）

図示した79～83のうち、79～81は縁帶文系の粗製口縁部片で、深鉢と思われる。内外面は摩滅が著しいが、条痕を施していると思われる。82は粗製浅鉢と思われる口縁部片で、内外面条痕と思われる。83は体部の破片であるが、器種不明である。内面は条痕、外面はナデのようである。79・80は主郭縁辺の盛土部分から、81は第V郭へ至る斜面の表土層から、82は第Ⅲ郭の主郭下端部から、83は主郭の北裾からそれぞれ出土したものである。縄文時代後期に生活の一部として主郭部分を利用していたと思われる。

② 弥生時代後期～古墳時代初頭（図版28、写真図版53）

図示した84～88のうち、84～86は底部片で、87・88は脚部片である。84は壺と思われ、やや突出した平底の底径は5.2cmで、内面にはハケが一部残っている。85は器種不明であるが、壺の可能性がある。突出ぎみの平底で底径3.4cmである。内面はナデ仕上げのようである。86も器種不明であるが壺かもしれない。尖底に近く、わずかに径2.3cmほどの平面に近い部分があるが、剥離面かもしれない。内外面は摩滅により調整不明である。87は裾部の破片で、脚端径は9.4cmと小さいことから、小型器台が台付鉢であろう。透孔は認められない。器表が剥離しているため調整不明である。88は下部で少し外反していることから、脚端に近い部分と思われる。台付鉢の可能性がある。透孔は確認できない。器表摩滅のため調整不明である。これらの土器は庄内期の特徴を示していると思われる。

84は第II郭南西部の盛土層から、85・87は主郭北裾の主郭造成盛土層から、86は第II郭の西部盛土層から、87は主郭北西部の盛土層内からそれぞれ出土したものである。庄内期に生活の痕跡あるいは墓があったのかもしれないが、その遺構は確認できなかった。

③ 古墳時代中期～後期（図版28、写真図版53）

図示した89・90は須恵器である。89は壺の口縁部片で、口径は11.2cmで、端部には凹面をもち、口縁部下に1条の突帯、口縁部外面には擂波状文を1帯巡らす。内面には自然釉がかかる。TK47型式前後と思われる。切岸西半部の下層遺構検出時に盛土層から出土したものである。90は直立に近いが、TK217型式の壺身である。口径は10.7cmで立ち上がり部が受け部よりも高いことから、古段階のものであろう。外面にヘラケズリは認められない。第Ⅲ郭の理土から出土したものである。

④ 平安時代後期～鎌倉時代（図版28・29、写真図版53・54）

この時期のものは、91～93の須恵器壺と、94～97の経筒と想定される土師器筒形容器、98～100の外容器と思われる須恵器壺、外容器蓋と思われる101～103の須恵器鉢のほか、104～106の土師器壺がある。

須恵器壺 91は口径14.2cmでN灰色6/の色調を呈する焼成良好な破片で、一見すると古墳時代後期

～奈良時代あたりにみえるが、底部外面に回転糸切り痕が認められる。浅い形態であることから、鎌倉時代の可能性があるが、正確なことは不明である。第Ⅱ郭北部の盛土層から出土した。92は口縁部の小片で、口径は15.4cmを測る。口縁端部は内側に少し肥厚する。外面には重ね焼き痕跡の変色部分が認められる。第Ⅱ郭南西部の埋土から出土した。93は回転糸切りの平底で、平高台はほとんど突出しないが、内面には小さな段が認められる。12世紀中頃のものであろうか。主郭北西部の盛土層から出土した。

**土師器筒形容器** 94は口径19.5cm、残存高6.8cmで、口縁部は丸くおさめる。体部外面には平行タタキ痕が残り、内面はハケ後横ナデ仕上げである。口縁部は横ナデであるが、外面に粘土紐の接合痕が残る。主郭北西部の盛土層から出土した。95は口縁端部に内傾する面をもち、口縁部も内傾する破片で、口径22.2cmを測る。外面には平行タタキ痕が残り、内面下端には横方向のヘラケズリが認められる。内面には横ナデによる凸凹を残している。第Ⅱ郭の西部の盛土層から出土した。96は通路（第Ⅳ郭）西端で出土したもので、口径18.7cm、最大径21.1cm、残存高は18.1cmである。口縁部は内済し、端部には内傾する幅広い平坦面を有する。体部の内外面には粘土紐の接合痕が認められ、内面はヨコナデ後タテナデ、外面はヨコナデ後斜め多方向のナデ調整である。97は底径15.9cmの平底底部で、底面はヘラ切り後一定方向にハケまたはイタナデを施している。内面はハケのちヨコナデで、粉と思われる圧痕が認められる。外面には指頭圧痕を残す。96と同じ場所で出土している。

**土師器筒形容器**は少なくとも2個体以上あったようである。

**須恵器壺** 98～100は外面平行タタキ、内面ナデ調整で、瓦質に近い。口縁端部は98・99が垂直面をもち、100は端部が丸い。98の口径は26.8cm、99は口径22.0cm、100は21.4cmである。98・99が主郭西部の盛土層、100は主郭北東部の盛土層から出土したものである。時期の判断は難しいが、12世紀～13世紀の可能性がある。なお、この壺は経筒の外容器として使用されていたと想定している。

**須恵器鉢** 101は口縁端部が外傾するあまり拡張しない面をもち、小片であるが、口径27.5cmを測る。102は片口部まで遺存する破片で、口径26.4cm、残存高7.1cmである。口縁端部は垂直に近い凹面を呈し、上方に少し引きのばされている。101が第Ⅱ期第2段階で12世紀末～13世紀初頭。102は第Ⅲ期第2～3段階で14世紀前半～後半とされるものである。ともに内面はあまり平滑でなく、経筒外容器の蓋に使用されていた可能性がある。103の底部は底径9.1cmで内面には使用痕が認められる。

**土師器壺** 104は口径22.4cm、105は19.4cmである。体部は不明であるが、口縁部の形態から12世紀後半～13世紀前半と思われる。106の小片も口縁部の形態から同時期であろう。

#### (7) 山上講関係の土器類・瓦 (図版30・31、写真図版46・47)

山上講関係では、主郭出土の107・108が施釉陶器皿で、第Ⅱ郭出土の109の施釉陶器皿は108と同一個体の可能性があり、ともに口径10.3cm程度で目跡が残る。3点とも外面～底部は露胎である。主郭出土の110は施釉陶器灯明皿で、切り欠き部分が認められる。108・109と同じ灰色を呈している。111・112は主郭出土の施釉陶器灯明具と思われる皿部の破片である。口径は5.9cm。現下端側面に刺突がある。113は東斜面出土の染付小碗、114は第VI郭出土の青磁の花瓶であろう。残存高は7.3cm。主郭出土の115は染付の瓶と思われる。底径7.0cmである。主郭および第V郭出土の116～119は焼した棟瓦で、116は無文の軒瓦である。長さ26.1cm、幅26.8cmで、土器類も含めて近世後半～近代のものであろう。

## 2. 土 錘

土錘は212点を図示した。すべて管状土錘で、その内訳は、第Ⅱ郭出土が10点、第Ⅲ郭の土錘群が68点、第Ⅲ郭の石積下部分出土が29点、第Ⅲ郭西部の主郭盛土崩落部出土が19点、主郭北東部盛土から出土したものが17点、第Ⅲ郭のその他の部分から出土したもののが68点、切岸からは1点のみ出土した。これらの出土場所別に順に報告する。また、他に小片が数十点近く認められたが、報告していない。なお、第Ⅳ郭（通路）や第VI郭からは出土していない。

土錘はすべて土師質のもので、器表磨滅や折損および端部の一部破損が多く、遺存状況はあまり良好ではない。ほぼすべてが二次的に被熱した結果、軟質になっているためでもある。また、器表に赤色スリップが一部残存しているものが認められることから、製作時には表面全体に塗られて赤色を呈していたと推定される。これら土錘の所属時期は、出土層位などから15世紀中頃前後と推定される。

土錘についても、土師器皿と同様に法量と形状等により大きいものから順に3分類をおこなった。分類は、集中して多く出土した第Ⅲ郭の土錘群を基準にした。A類は長さ4.7cm程度以上で、最大径が1.1~1.3cmのもので、最大径1.2cmが最も多い。B類は長さ3.1~4.2cm程度で、最大径が1.0~1.2cm程度のものである。C類は長さ2.5~3.1cmで、最大径が0.8~1.1cmのもので、C類に中には長さ2.5~2.55cmで、最大径0.75~0.8cmの一群があり、それらをC'類とした。あるいはD類とすべきかもしれない。なお、今回は分類から外したが、太く短いものがあり、分類しておく必要があるかもしれない。

### ① 第Ⅱ郭（図版32、写真図版59）

出土したD 1~D10を図示した。A類・B類・C類・C'類の各類型の土錘が出土しており、類型別の偏りは認められない。

### ② 第Ⅲ郭土錘群（図版32~34、写真図版55・56）

D 11~D 78に図示した。類型別には、可能性があるものを含めると、A類は21点、B類は12点、C類が27点、C'類は5点、不明3点である。出土状況からは、連なったものや規則的に並んだようにみえる部分もあることから、漁網に装着されたままの状態であったと思われるが、土錘の装着種類と順序などについては全く不明であり、漁網の枚数や破れたものであったかなど、不明のままである。

なお、部分的に赤色（橙色）スリップが遺存しているのは、D 11~D 13・D 16・D 18・D 22・D 24・D 25・D 28・D 32・D 35・D 45~D 49・D 54・D 56・D 61・D 65・D 67・D 68・D 72~D 74で、類型による差異は認められない。

### ③ 第Ⅲ郭石積下部（主郭斜面下）（図版35、写真図版56）

D 79~D 107に図示した。土錘群や第Ⅲ郭の西部・主郭北東部盛土などとともに、基本的には主郭の盛土層などに含まれていた点において、細かな出土位置の差に過ぎない。赤色スリップは10点遺存する。

### ④ 第Ⅲ郭西部（主郭盛土崩落部）（図版36、写真図版57）

D 108~D 126に図示した。各類型が出土しており、赤色スリップは4点に部分的に遺存する。

### ⑤ 主郭北東部盛土（図版37、写真図版57）

D 127~D 143に図示した。ここではA類とB類および類型化しなかったものの3種がある。

### ⑥ 第Ⅲ郭（その他部分）（図版38~40、写真図版58・59）

D 144~D 211に図示した。各類型があり、偏りは認められない。赤色スリップが遺存するものは15点認められ、そのうちD 192・D 198では多くの部分で残存している。

第2表 出土土鍾計測表

番号	類型	法量			番号	類型	法量			番号	類型	法量		
		長さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)			長さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)			長さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)
D 1	A	5.50	1.35	8.5	D 40	B	3.22	1.17	3.7	D 79	A	5.23	1.30	7.3
D 2	AかB	(3.80)	1.10	(4.4)	D 41	B	3.19	1.30	5.1	D 80	A	4.90	1.12	5.5
D 3	AかB	(3.10)	1.15	(4.1)	D 42	B	3.12	0.98	(2.9)	D 81	A	4.80	1.12	5.4
D 4	AかB	(2.30)	1.10	(2.8)	D 43	B	3.13	1.08	3.0	D 82	A	(4.80)	1.22	(6.8)
D 5	A～C	(2.30)	1.15	(2.9)	D 44	C	3.14	1.00	2.8	D 83	Aか <sup>+</sup>	(4.41)	1.17	(4.8)
D 6	B	3.90	1.10	(4.6)	D 45	C	3.00	0.90	(1.7)	D 84	Aか <sup>+</sup>	(4.43)	1.12	(4.7)
D 7	Cか	(2.20)	0.90	(1.2)	D 46	C	2.95	1.10	3.2	D 85	Aか <sup>+</sup>	(3.80)	1.10	(3.8)
D 8	C <sup>+</sup>	(2.15)	0.75	(1.2)	D 47	C	2.85	0.97	2.5	D 86	Aか <sup>+</sup>	(3.55)	1.12	(4.0)
D 9	C <sup>+</sup>	(2.00)	0.80	(1.0)	D 48	C	(2.83)	1.02	(2.8)	D 87	Aか <sup>+</sup>	(2.30)	(1.20)	(2.2)
D 10	C	2.90	0.80	1.4	D 49	C	2.84	1.00	(2.6)	D 88	B	4.00	1.04	4.5
D 11	A	5.20	1.22	7.5	D 50	C	2.75	0.98	2.6	D 89	B	3.80	1.18	(4.0)
D 12	A	5.28	1.20	6.4	D 51	C	2.73	0.98	2.5	D 90	B	3.70	1.10	(3.9)
D 13	A	(5.16)	1.22	(6.3)	D 52	C	2.70	1.00	2.7	D 91	B	(3.63)	0.97	(2.6)
D 14	A	5.13	1.19	5.9	D 53	C	2.70	0.90	2.1	D 92	Bか <sup>+</sup>	(3.48)	1.13	(3.7)
D 15	A	5.10	1.18	(5.8)	D 54	C	2.70	0.90	(1.6)	D 93	B	3.40	1.10	3.7
D 16	A	5.08	1.22	(6.8)	D 55	C	2.60	0.99	(2.3)	D 94	AかB	(2.68)	1.20	(3.1)
D 17	A	5.01	1.20	(5.6)	D 56	C	2.60	0.90	2.0	D 95	AかB	(2.30)	(1.01)	(2.0)
D 18	A	4.98	1.18	6.5	D 57	C	2.60	1.00	(2.3)	D 96	C	2.98	0.98	2.0
D 19	A	4.92	1.07	(5.7)	D 58	C	2.60	0.92	(1.5)	D 97	C	2.88	0.89	1.5
D 20	A	4.93	1.30	6.2	D 59	C	2.60	0.98	(1.9)	D 98	C	(2.65)	0.90	1.7
D 21	A	4.90	1.18	(5.2)	D 60	C	2.60	0.80	(1.5)	D 99	Cか <sup>+</sup>	2.59	1.00	(2.5)
D 22	A	(4.90)	1.12	(4.8)	D 61	C	2.60	0.87	1.3	D 100	C	2.50	0.90	(1.5)
D 23	A	4.83	1.20	(5.7)	D 62	C	2.52	1.00	2.5	D 101	Cか <sup>+</sup>	2.55	0.90	2.0
D 24	A	4.80	1.21	6.4	D 63	C	2.50	0.95	(1.6)	D 102	Cか <sup>+</sup>	(2.02)	0.91	(1.4)
D 25	A	4.78	1.18	(5.5)	D 64	C	2.58	0.86	1.5	D 103	C	(2.32)	0.77	(1.0)
D 26	A	4.68	1.30	6.1	D 65	C <sup>+</sup>	2.55	0.80	(1.2)	D 104	CかC <sup>+</sup>	(1.80)	(0.80)	(0.9)
D 27	B	3.89	1.20	5.6	D 66	C <sup>+</sup>	2.50	0.81	1.5	D 105		3.30	1.30	4.8
D 28	B	3.50	1.05	(3.6)	D 67	C <sup>+</sup>	2.45	0.77	1.1	D 106		3.10	1.35	5.2
D 29	Aか <sup>+</sup>	(3.50)	1.02	(3.6)	D 68	C	(2.80)	0.91	(1.2)	D 107		(2.41)	1.10	(2.2)
D 30	Aか <sup>+</sup>	(2.96)	1.07	(3.6)	D 69	C	(2.49)	1.05	(2.4)	D 108	A	4.50	1.00	(4.4)
D 31	Aか <sup>+</sup>	(2.70)	1.02	(3.4)	D 70	C	(2.70)	1.04	(2.4)	D 109	A	4.20	1.15	(5.4)
D 32	Aか <sup>+</sup>	(2.55)	1.15	(3.3)	D 71	C	(2.15)	1.10	(2.0)	D 110	A	4.00	1.05	(4.2)
D 33	Aか <sup>+</sup>	(2.15)	1.10	(2.5)	D 72	C <sup>+</sup>	(2.44)	1.00	(1.2)	D 111	Aか <sup>+</sup>	(4.15)	1.30	(5.7)
D 34	Bか <sup>+</sup>	3.88	1.00	(3.5)	D 73	C <sup>+</sup>	(2.42)	0.80	(1.2)	D 112	Aか <sup>+</sup>	(2.80)	(1.25)	(3.6)
D 35	B	3.78	1.20	5.0	D 74	Cか <sup>+</sup>	2.30	1.14	2.6	D 113	Bか <sup>+</sup>	3.75	1.05	(4.0)
D 36	B	3.52	1.18	4.3	D 75	Cか <sup>+</sup>	2.20	1.05	(2.5)	D 114	Bか <sup>+</sup>	(3.60)	1.05	(3.6)
D 37	B	3.45	1.10	3.6	D 76		2.20	1.10	2.4	D 115	Bか <sup>+</sup>	(2.85)	1.00	(2.6)
D 38	B	3.40	1.00	3.1	D 77		2.25	1.40	4.6	D 116	AかB	(2.90)	(1.05)	(3.0)
D 39	B	3.30	1.18	3.8	D 78		3.32	1.32	4.4	D 117	BかA	(2.40)	(1.00)	(2.4)

番号	種型	法量			番号	種型	法量			番号	種型	法量		
		長さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)			長さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)			長さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)
D118	BかA	(2.40)	(1.00)	(2.2)	D150	A	5.10	1.05	5.7	D182	Bか	(3.10)	1.05	(2.9)
D119	AかB	(1.95)	(1.10)	(2.0)	D151	A	5.00	0.95	(4.5)	D183	Bか	3.12	1.02	(2.8)
D120	BかC	(2.95)	(1.20)	(3.9)	D152	A	4.95	1.15	(4.5)	D184	Bか	(3.00)	1.00	(4.8)
D121	C	2.55	1.00	(2.2)	D153	A	4.89	1.12	5.2	D185	Bか	(2.45)	(1.05)	(2.8)
D122	Cか	(2.40)	(1.15)	(2.6)	D154	A	4.75	1.10	(5.3)	D186	Bか	(1.55)	(0.95)	(1.2)
D123	Cか	(1.95)	(0.85)	(1.6)	D155	A	4.65	1.00	(4.2)	D187	CかB	(2.70)	(1.10)	(1.9)
D124	BかC	(1.65)	(0.85)	(1.2)	D156	A	4.60	1.00	4.1	D188	C	2.83	0.90	(1.7)
D125	Cか	(1.45)	(0.90)	(1.3)	D157	AかB	(4.50)	1.00	(4.2)	D189	C	(2.75)	1.10	(2.5)
D126	C	(2.60)	0.80	(1.2)	D158	AかB	4.35	1.10	5.3	D190	Cか	2.75	0.70	(1.2)
D127	A	4.75	1.27	6.1	D159	Aか	(4.20)	1.10	(3.9)	D191	C	(2.65)	0.90	(2.1)
D128	B	4.20	1.27	5.5	D160	Aか	(4.10)	1.10	(4.4)	D192	C	2.65	0.85	1.6
D129	B	4.15	1.35	6.2	D161	AかB	(4.00)	1.15	(5.4)	D193	Cか	2.50	0.90	(1.9)
D130	B	4.15	1.25	5.3	D162	Aか	(3.00)	(1.25)	(3.7)	D194	Cか	(2.45)	(0.85)	(2.0)
D131	B	4.1	1.25	5.8	D163	AかB	(2.60)	(1.35)	(3.1)	D195	Cか	2.35	0.85	(1.3)
D132	B	3.95	1.35	5.8	D164	Aか	(2.50)	(1.35)	(3.6)	D196	Cか□	(1.70)	1.05	(1.6)
D133	Bか	(3.65)	1.20	(4.3)	D165	Aか	(2.20)	(1.20)	(2.9)	D197	Cか	(1.89)	(0.86)	(0.8)
D134	AかB	(3.25)	(1.20)	(4.1)	D166	AかB	(4.20)	1.10	(5.0)	D198	C	(2.65)	0.80	(1.0)
D135	Bか	(3.15)	(1.10)	(3.3)	D167	B	4.10	1.20	4.9	D199	Cか	(2.60)	0.80	(1.4)
D136	Bか	(3.00)	(1.00)	(2.4)	D168	B	4.10	1.10	5.0	D200	C	(2.50)	0.90	(1.4)
D137	Bか	(2.60)	(1.00)	(2.1)	D169	Bか	3.90	1.10	(4.6)	D201	C	(2.35)	0.80	(1.2)
D138	AかB	(3.25)	1.15	(3.9)	D170	Bか	(3.90)	1.05	(3.8)	D202	C	(2.25)	0.80	(1.2)
D139	AかB	(3.20)	1.25	(4.5)	D171	B	3.80	1.00	3.8	D203	C	(2.25)	0.80	(1.1)
D140	AかB	(3.00)	1.30	(4.0)	D172	Bか	(3.75)	(1.20)	(5.3)	D204	Cか	(2.15)	0.75	(0.9)
D141	AかB	(2.25)	(1.20)	(2.9)	D173	Bか□	3.65	1.40	(5.2)	D205	Cか	1.95	0.70	0.8
D142		2.90	1.15	3.2	D174	Bか	3.60	1.10	(3.6)	D206		4.70	1.88	10.0
D143		1.95	1.00	1.6	D175	Bか	(3.60)	1.05	(3.0)	D207		2.40	1.20	3.5
D144	A	5.60	1.10	(6.6)	D176	B	(3.55)	1.10	(3.9)	D208		2.15	1.20	2.4
D145	A	5.20	1.15	6.1	D177	B	3.45	1.10	4.0	D209		2.20	1.35	4.1
D146	A	5.20	1.05	5.4	D178	BかA	(3.40)	1.10	(4.6)	D210		2.05	1.20	2.1
D147	A	5.15	1.13	5.6	D179	B	3.30	1.10	3.3	D211		1.10	0.85	(0.9)
D148	A	5.15	1.15	(5.5)	D180	Bか	(3.25)	1.00	(2.7)	D212	A	(4.25)	1.10	(5.0)
D149	A	5.10	1.10	6.0	D181	BかA	(3.20)	1.18	(3.8)					

## (7) 切岸 (図版40、写真図版59)

D212に図示した。岩盤面まで掘削中に切岸東半から出土したA類である。一端が欠損している。

### 3. 金属製品 (図版42~53、写真図版59・61~73)

喜多・城山城跡の調査では、多くの金属製品が出土している。保存処理のための台帳作成に際しては、170点を登録。その中から金属製品以外のもの等が省かれ、破片同士が接合されて点数は減じたため、国化したもの90点、写真のみ掲載したもの31点の合計121点を報告する。

出土した金属器のほとんどが城跡に伴うものと思われるが、発掘調査における所見では意図的に埋置するなどの現位置を保っていると考えられるものは、M39の刀以外はない。金属製品の出土分布は、主郭から3点、主郭西側の第Ⅱ郭から6点、主郭北東の第Ⅲ郭から111点、通路（第Ⅳ郭）から1点と、第Ⅲ郭からの出土が際立って多い。銅製品は全点、第Ⅲ郭からの出土である。

主郭の岩盤上からは特殊な横手急須形鉄製品（M38）や釘（M85・M86）、第Ⅱ郭からは鉄製小札・楔・鎌・釘が出土している。鉄製の小札は唯一の出土であり、甲冑関係の部品が多く出土した第Ⅲ郭からは鉄製小札は出土していない。第Ⅳ郭からは釘が1点出土している。

以下、便宜的に銅製品と鉄製品に分けて報告する。M1~M37及び写真のみ掲載したM91~M113の60点は銅製品、M38~M90及び写真のみ掲載したM114~M121の61点は鉄製品であるが、M45のように銅製品と鉄製品両者を組み合わせてひとつの部品を構成していたものも本来、多く存在していたのであろう。

#### (1) 銅製品

M1~M37及び写真掲載のM91~M113は銅製品である。銅製品の出土は第Ⅲ郭に限られている。銅製品は全体に腐食が進んでおり、緑青で守られた部分以外は地金が黒い粒状となっていた。

##### 銭貨

M1は、銅銭の連錢である。宋錢と思われる12枚の穴開き銭が連なっており、唯一銭文を読むことができるのも左辺の「寶」字のみ観察でき、上辺を「至」の一部とすれば「至道元寶」（初鑄年995）あるいは「至和元寶」（同1054）と思われる。被熱により変形しており、側面には別の銅粒が付着している。

写真のみ掲載したが、同様に被熱により大きく変形した連錢11枚が溶着するM91が出土している。唯一読むことのできる銭文は行書の「元豐通宝」（初鑄年1078）と思われる。

##### 刀装具

M2は、刀の鈔に合わせる大切羽で、2mmほどの厚さの銅板を楕円形に成形し、中央に刀の断面形の穴を穿っているが、成形は粗い。また上下左右にも直径2mmの円孔を穿っている。表面には細かい研磨痕が観察できる。裏面の茎孔に沿って幅3mm、外周に沿って幅6mmほどの黒化部が残っており、別部材と密着していた痕跡と思われる。茎孔の長さ2.35cm、幅0.71cmを測るが、丁寧な加工ではない。

M3は、上端部が丸く欠損しているが、楕円形に曲げた環状を呈する。外面の中央に沿って甘い棱を作り出し、内面は溝を巡らせる。刀鞘の貴金属具の「栗形」等と思われる。

##### 甲冑関連銅製品

M4~M27は甲冑に関連した銅製品である。

M4は、厚さ3mmほどのやや厚めの銅板を折り曲げて方形にし、接合部中央に直径3mmほどの円孔を穿って、軸を通すことで座金物台座との接合に備えている。両側面には6.5×5.0mmの孔が貫通しており、鎧を通して孔となる。八方の角を三角形に面取りして切子頭とした「切子頭の鎧台」である。兜や

袖、鎧の台座の鎧、盾櫃などに用いられた座金具である。菊座や素文の座金、素鎧、剣足（割ビン）の留め具を伴ったものが、愛媛県湯築城跡から出土している。

M5は、菱形のやや湾曲した銅板に四ツ目の花角或いは花菱の文様を刻んだもので、外縁も文様に合わせて弧や山を描く。別作りの銀の剣足（割ビン）を中央に粗く開けた方孔に通している。長方形の孔を穿った厚さ0.8mmの長方形板（ $1.98 \times 0.95\text{cm}$ ）を本体の文様の上に重ねて通し、足端を開いて留めている。銀の剣足は2足をもつ厚さ0.12mmの薄い銅板を方筒状に折り曲げて作られている。文様の彫金は裏面には表れず、線の中に連続した梢円形が観察できる部分があることから、鍛り彫りの技法を用いている。剣足にはめた長方形板は文様の上に被さるため、本来の使用状況を残すものではないものと思われる。本来は菱形板と長方形板の間に家地とした布帛や皮革を挟んで留めたものか。菱の文様は雲峰寺蔵の伝武田信玄（謙信）馬標に類似するが、もとより一般的なものであろう。

M6は、鎧台で、直径2.55cm、高さ0.55cmの円形笠状を呈し、中央に方形の孔が開く。厚さ0.5mmの銅板を笠状に加工し、表面に透彫り・毛彫りで葛の葉を模した図案を右回りに配して彫金している。側面には一部布が付着していた。側面・内面には文様ではなく、透孔の周辺は裏面側に盛り上がっている。

M7は、M8に近接して出土した鎧で、直径2.5mmの銅線を円環状に丸め、両端部は $0.25 \times 0.2\text{mm}$ の断面長方形に成形して剣足にして広げており、銀として布帛などを用いた家地に留めたものであろう。鎧の外径1.35cm、内径0.75cm。剣足の立ち上がりは0.5cmほどである。

M8は、銀の菊座で、薄い銅板を円形の笠状に加工して中央に $2.0 \times 2.5\text{mm}$ の方孔を穿っている。側面から上面の中途まで刻みを入れて菊花状に飾る。側面の刻みは内面でも観察できる。M7と組み合わさり、中央部が凹むことから、強い力で下方に引っ張られたものであろう。或いは、M10の笠銀などと組み合ったものかもしれない。

M9は、復元直徑が4cmを超える大型の「菊重の銀（きくがさねのびょう）」で、兜や鎧、龍手等を飾った「据文金物（すえもんかなもの）」として用いられたものかもしれない。直徑2cm程の無文の半球状の笠頭の内面に各々3mmほどの厚みを持つ板状の剣足を接合し、足端部は両外へと折り曲げている。脚と笠の間に4枚の座金具を入れる。厚さ0.5cmの蓋形の菊座は、外面立ち上がりから中心付近7mmまで輪花状に刻みを入れる。その上に輪花状の周縁と表面に花弁を刻んだ円盤状の菊座を置き、さらにその上に側面と上面周縁に刻み目を入れた円盤状の小刻座2枚を重ねている。菊座の中央に穿たれた方孔は $5.5 \times 5.6\text{mm}$ を測り、やや歪である。笠頭部の表面は黒色の光沢を有している。

M10は、銀の笠頭で、少し放射状に溝が観察できる半球状頭の内面に長さ1.2cm、直徑0.25mmの剣足を接合している。ほかの座金具に組み合って用いられたものであろう。

M11は、菊花の座金具の中央に断面長方形の剣足が貫かれており、さらに笠の頭が付隨したものであろう。剣足は残存部では割れていない。蓋形の菊座の上には2枚の円盤状の重なりが観察できるが、M9やM12と異なり、別作りの小刻座を重ねたものではない。

M12は、同じく銀の菊座であるが、菊座の周縁部をすべて失っている。無文の高さ0.37cmの半球状の笠頭の中央に小さな突起があり、剣足を接合している。2枚の円盤状の小刻座を挟んで、蓋形の菊座を重ね、方形孔に幅0.37cmの剣足を通してしている。

M13は、ほぼ全容のわかる「菊重銀」である。無紋の半球状の笠頭の中央には小孔が穿たれ、剣足を接合している。2枚の周縁に刻みを入れた円盤状の小刻座を挟んで、蓋形の27弁の菊座を重ね、側面にも弁を刻むが、内面には文様は表れない。中央の方形孔に幅0.3cmの剣足を通してしている。剣足は厚さ1

mm程度の板状の銅板を二つ折りにして作っている。割足の足先は開いていない。本体に取り付ける前のものか。この他に、少しだけ足の開いた割足部分（M92）が出土している。

M14は、「笠鉢（かさこはぜ）」である。平面形は紡錘形であるが、6条のくびれを作り出す。裏面はやや平坦となる。緒（紐）を通すための円形の双孔を抜いている。円孔の径は0.4cmである。肩上と胸板、立拳と脇板の連結、籠手を肩上に取り付ける際等に用いるものである。

M15・M16は、銅製の鋳造品を加工したもので、梢円形の環状を呈し、外周側面には稜を作り出し、内面はU字状にくぼませる。方形の窓は外周より直線的に作る。M16がやや大きく、孔の大きさもM15が $0.50 \times 1.28\text{ cm}$ に対して、M16では $0.84 \times 1.66\text{ cm}$ を測る。おそらく2本の紐をまとめる「責鉢（せめこはぜ）」や「茱萸（ぐみ）」などの金物であろう。M15の孔内には有機質様のものが詰まっていたが、紐ではなかった。

M17・M18は、長方形状を呈した銅板で、裏面はほぼ平らであるが、両側面が片刃状に薄くなる。M17は短辺の中央に方孔を有する。X線撮影では非常に髣（す）が多く見られることから、鋳造品を叩き延ばしたものと思われる。部位・用途は不明であるが、製品の材料の可能性がある。写真掲載のM107も銅板を折り曲げたものであるが、後述する覆輪よりは厚く、重い。熱による変形が著しい。

M19～M26、写真掲載のM93～M106は、薄く細長い銅板を断面がU字形の穂状に丸めたもので、覆輪の破片である。鉄製品M45の周縁の一部に被せてあるものが残存しており、兜や鎧の脇板など様々な金具類（かなぐまわり）に付属するものである。断面の内幅は0.42～0.55cm、深さは0.38～0.5cmを測り、0.5cm前後の厚みのあるものの周囲に被せたものである。形状には、内湾したもの（M19・M21・M22・M23）、直線的なもの（M20・M24・M25）、外反したもの（M26）があるが、土圧などの影響もあり本来の形状を保つものが不明である。

M19・M20は、先端部で、やや細くして丸めた先端から1cmほど上部の縁を少し広げて鼻としており、両縁を貫通する小孔を穿ち、M19では直径0.15cmの鉢でつないでいる。鉢の一方には平たい頭が残る。

写真掲載のM108～M110は、やや幅の広い銅製の薄板の側縁をU字形に折り返したもので、M110は、幅1cm程の板の両側縁をU字形に折り返したもので、他の覆輪とは異なる。

これらのM4～M26は甲冑に使用される金具類で「金物」と呼ばれるものであろう。

M27は、周縁部のほとんどを仄くやや曲がった薄い銅板である。縱方向に一方が広がる2条のわずかな隆起部が走る。この隆起部が手の甲を模したものであるなら、「手甲（てっこう）」の一部とすることができる。但し、M54のごとく鉄製の手甲の部品も出土しており、両者が組み合うかは不明である。

#### その他の銅製品

M28・M29は、厚さ0.5mm程度の薄い銅板を巻いて円筒形にしたものである。M28は、やや中膨らみの形状を呈し、両端部は一旦浅くくびれさせ、玉縁状に作る。縱方向の接合痕が観察できる。長さは5.6cm、直径は1.3cm、口径1.2cmを測る。M29は、直径が上端部で1.1cmを測り、長さはやや長くなる。一端は巻が重なり、もう一端は開いている。両者の形状は近いものの、大きさや作りが異なっている。当初、甲冑に伴う紐を留める管金物と考えたが、京都市法住寺殿跡W10土壙出土のものに口径1.1cm、中央部径1.35cm、長さ4.8cmを測る同形の金銅製品があり、鞍（しおで）の管或いは鞍通しの管としている。鞍に伴う金具で、鞍を伴う馬具が存在していた可能性を示す。同様の銅製品が朝来市加都遺跡から出土している。

M30は、銅板を緩やかに湾曲させた円盤状に成形し、周縁をすこし玉縁状に成形したもので、縁辺に並行した銅製の方形鎖を接着したものである。鎖の足周辺が盛り上がり、裏面には接合の痕跡が観察できないことから、彫付けであろう。円盤が半円状なのかも不明であるが、甲冑の部品には同形態のものが見られず、襷の引手が類似した形を持つ。甲冑の部品であるなら、鎖は紐を通して締める引通の力金となるものであろう。裏面は平滑に仕上げているが、表面には幅1mmほどの細かい削痕が周縁に沿った位置や弦方向に観察できる。鎖の接合以前のものと思われる。周縁部や破損部を除く表面は鎖も含めて黒色の被膜が見られ、黒色漆の塗布或いは、襷の引手等の加工に用いられる杉葉や松屑を憚べた煙の中の煤や脂を何度も付着させる「憚べ（くすべ）」による色付けと思われる。裏面は整形痕を残さず平滑である。X線撮影では細かい鬆状の痕跡が多く見られることから、鋳造した銅板を加工したものと思われる。

M31は、M30の方形鎖と同形態であるが、厚さが0.27cmと少し厚い。表面は風化している。

M32は、厚さ0.8mmの薄い銅板を加工したもので、図の右方の辺と下方が直角に折り曲げられていたが、失われている。図の左方下部は斜め方向に山を作つて整形されており、その上方に円孔が穿たれている。容器或いは別部材の角を覆うような部品と思われる。また、写真を掲載したM111・M112も薄い銅板で、大きめの穿孔を有する。他にもM113のような薄い銅板が数片出土している。豊岡市出石町の宮内堀跡からは同様の穿孔のある箱型の銅製品が出土している。

M33も同様に、厚さ0.8mmの銅板を折り曲げ、歪な半円形の上面から鋭角気味に取りつく側面を形成している。上面と側面の近接した位置に各々円孔をつなげて穿っている。内面に大量の小さな種子が付着しており、その容器として用いられたものか、種子はのちに小動物などによって持ち込まれたものは判断つかない。エノコログサと同定されたこの種子は<sup>14</sup>C分析によると13世紀のものとされている。  
(第6・7表)

M34～M37も同様に、銅板を細工したもので、M32・M33よりも少し厚い銅板を用いている。長方形の平面を作り、一辺に山形の凹凸を切り出して装飾しており、中央上端に釘孔と見られる穿孔を持つものである。他辺の三方を折り返して側面や底面を形成しており、いずれも他の器物に被せて装飾する用途と思われる。

M34-1及びM34-2は同一個体と思われるが、接合できない。M34-1は銅板の一片を短く折り返したものである。銅板の厚さは非常に薄い。M34-2は下辺を折り返し部で失う。右辺を短く折り返し、斜めに取りつく上辺はやや開き気味に折り返している。

M35は、X線写真で見ると駆が多く、おそらく鋳造品の銅板を厚さ1.1mm程度まで加工しており、左辺の中途で折取られている。上辺には緩やかな山形が三つ作り出され、残る右辺と下辺の2辺は折り曲げられている。下辺の折り曲げは直角に近いが甘く、0.5cmと短い。右辺の折り曲げは鈍角で、側面は中途で折取られている。側面の上縁にも山形が作られていたらしい。下辺の折り曲げが先行していたらしく、右辺の折り曲げの際には下辺の折り曲げに切れ目を入れて折り曲げている。上辺のおそらく中央に円孔が開けられている。表面は平滑に仕上げてあるが、裏面には主に横方向の細い切削痕が残り、下辺内面にも観察できる。裏面端部や側面の内面には縦方向の擦痕が観察できる。

M36は、右辺が屈曲部で折り取られ、左辺の側面も中途で折損している。上辺は山形が三つ切り出され、中央は宝珠状に突出する。中央の山形の下に円孔が穿たれている。また、側面にも一部円孔が残る。側面上辺にも山形が作られていたらしい。下辺の折り曲げは甘く、0.5cm幅である。側面の折り曲

げはやや斜め方向に傾き、角度は鈍角となる。内面には横方向の幅の狭い切削痕が残る。円孔の周辺には敲打痕と思われる稍円形の痕跡が見られる。

M37は、小型のもので、下半部と一側面を失う。上辺は宝珠状に成形し、上辺近くの中央に円孔を穿つ。円孔の裏面の周囲がやや盛り上がり、表面周辺も窪んでいる。表から裏へと力が加わっており、針或いは鉢を打った際の痕跡であろう。側面は表面の山形裾から立ち上がり、やはり山形を作り出す。その下部は大きく円弧を描いて抉っており、木の葉を模したものかもしれない。裏面には縦方向の切削痕が残る。

これらのM34～M37の飾り金具は、「唐櫃（からびつ）」の装飾であろう。唐櫃には外側に4本ないし6本の脚が付くが、その脚端を装飾・補強した飾り金具に類例が認められる。M35・M36は折り返しが開くが、唐櫃の脚には据広がりの笈足のものがあり、断面が多角形のものもある。M37は、唐櫃の脚上端に上下逆に取り付けるものであろう。

## （2）鉄製品

### 横手急須形鉄製品

M38は、主郭の表土下、岩盤直上から出土した横手急須形鉄製品である。出土した時点では横手に付く把手が折れ、錆彫れで覆われていたが、X線写真で観察する限りでは一鋸で作られた鋳造品と思われる。径の大きい低い輪高台から内湾気味に立ち上がり、やや扁平な球状を呈して肩部を作り、直立した頭部から肥厚させて側面と上面に面を有する口縁部へと続く。胴部最大径の位置に突帯を巡らせ、その上部から頭部にかけて並行沈線を巡らせる。下から6条の沈線、平坦な部分を経て、4条の沈線、平坦部を経て横手の上面にとりつく段を経て頭部となり、頭部には4条の沈線を巡らせている。底部の内外面は平らである。

胴部の沈線から肩部の沈線にかかる位置に、円筒状の注口を斜め上方に向けて鋳出している。注口端部を欠く。上から見ると、注口と横手は直角よりもやや鋭角の位置に配されている。

板状の横手は、頭部付け根の肩部からやや斜め下方に鋳出しており、緩やかに下方へと湾曲している。上部13.8cm、下部11.0cmの長さをもつ横手は徐々に幅を減ずる。端部は左右先端に三つの山形を作り出す。中央の山は宝珠状に中央を突出させている。横手が本体から突き出る位置には2条の突帯を巡らせている。全体の重量に対して、基部で幅1.7cm、厚さ0.8cmの横手では華奢である。

### 武器等

M39は、鉄刀である。第Ⅲ郭の北辺に築かれた土壘の断ち割りの際に、その基底部で検出された。わずかに平坦になった地山に掘りこまれた溝状の落ち込みから出土した。残存長62.04cmのわずかに背側に反る直刀で、ほぼ全面に刀身に沿った方向の繊維方向をもつ木質が残存する。鞘と柄であろう。基には目釘孔2孔が見られ、1孔の部分から茎端を欠く。現存茎端から9cmの位置には刀身に直行する方向の有機質が見られ、1mmほどの太さの糸巻きの痕跡と思われる。またその位置から厚さが減少することから、それ以下が茎であり、糸巻きの1cm程に鞘の端と思われる木質が途絶える部分が観察できる。刃幅2.4～2.8cm、刀身の厚さは0.7cmと比較的の厚い。刃長が53cm弱と短いことから脇差か小太刀になるものと思われる。M2の切羽金具とも釣り合う大きさである。

M40は、鉄鎌である。茎端を欠ぐため、残存長9.7cmを測る。先端部は両刃の整形である。断面方形の刃部から断面円形の据広がりとなり、直角に四周を切り込んで間となし、方形断面の茎へ続く。第Ⅲ

郭西端の土師器皿と土鍤との間から出土している。

M41は、鉄製小札である。札尻側の過半を失う。所謂、「碁石頭伊予札」と呼ばれるもので札頭を中心から削り、その左右を丸く作る。2列6孔を配している。幅は2.7cmと広いが、厚さは0.1cmと薄く仕上げている。表面の漆等は観察できなかった。第II郭の川原石集積近くから1点のみ出土した。鉄製の小札は唯一の出土である。

M42は、同じく第II郭の北西部から出土した。断面長方形の鉄板で、失われた下端に向かって幅と厚みを減じている。上端部はわずかに幅・厚さを増す。上面は平坦ではない。楔として作られたものであろう。

M43は、幅3.0cm、厚さ0.15cmの扁平な鉄板で、両端部を失う。M52～M56などよりもやや厚く、側縁の折り返しもない。器表面の処理の痕跡も観察できない。

M44は、鎌の刃部である。主郭には山上講の祠があり、周辺には他に現代の鎌や斧の頭などが地表面に廃棄されていたが、本品は第II郭北半の褐色土を掘削した段階で出土している。山城が存続していた時期のものかは不明である。茎端部、刃先を欠くが、刃幅11cm強の片刃の鎌であり、刃は団の裏面に付く。刃部は緩やかな曲線を描くが、背は極端に湾曲する。刃部と茎部との境に明瞭な屈曲を有する。茎端は斜めに切って細くしており、細い部分を折り曲げて柄との接合に備えていたものであろう。

#### 甲冑関連

M45～M75は甲冑に関連した鉄製品である。

M45は、やや内湾する鉄板3枚を蝶番で横長に連ねたもので、両側の鉄板の上辺外側を山形に高く作っている。一方の山形は欠損するが、両側の鉄板の大きさにあまり差はない。一方の山形の上縁から側縁の一部にかけて銅製の縁金（覆輪）が残存している。甲冑の「脇板（わきいた）」と思われる。

蝶番は中央の鉄板の両短辺中央を凸形に突出させて内側に環状に曲げ、両側の鉄板の短辺には凹形を作り出して突出部を環状に曲げて、両者を組み合わせて軸棒を通すものである。両側の鉄板には、蝶番の横に4ヶ所、直径3mmほどの円孔を穿ち、また、山形に向かった三角形の位置にもやや大きめの穿孔を設ける。三角形の頂点を除く2孔は直径5mmを超える大き目の卵形や円形の孔で、「脇鉢付の穴（わきこはぜつきのあな）」と呼ばれるものであろう。この孔の配置は大鎧の脇板に多く、胴丸・腹巻とともにあるが、腹巻には少ない型式と言われている。また、径2～3mmの小孔を下側縁に沿った位置にも配している。中央の板には蝶番の横に3mmほどの円孔を三角形に配して開けている。上幅と下幅の差はあまりなく、復元すると20.5cmほどの長さになる。

一部外面に黒色を呈した平滑な部分が残存しており、漆などの表面処理を行った可能性が考えられる。出土時には銅製の覆輪と共に銅製の薄板が付着していた。鉄地銅板貼りで、金銅製品であった可能性もある。但し、M47が重なって出土しているなど、種々の部品と共に保管していたものかもしれない。

M46は、短辺側がばらばらだった破片を繋いで復元している。現状ではX線撮影を含めても穿孔は確認できなかった。脇鉢付の穴は山形の失われた部分にあったのかもしれない。薄い鉄板を緩やかに湾曲させ、その両側縁を湾曲の突出方向へと短く折り返している。上の長側縁は一方に大きく弧状に幅を広げ、山形を形作っている。下の長側縁も緩やかに弧状を呈しており、幅の広がった短側縁には折り返しは認められない。幅の狭い短側縁の中央には、両端が直径2cm程の半円形に広げた中央部の幅0.9cmの鉄板を折り曲げたものが付着しており、本体短辺を挟み込み鉄の鋸で止めるものである。折り返した部

分を0.5cmほど余らせ、そこに軸棒などを入れて蝶番としたものであろう。凹面の器表面の一部に表面処理を施したような平滑面が観察できる。長さが9.4cmを測る。

M46も甲冑脇板の一部と思われるが、M45より一回り大きく、蝶番など仕様が異なる。小札を取り付ける円孔がないことから、別部品の可能性がある。

M47は、台形状の薄い鉄板を加工したもので、湾曲したのち折れ曲がるが、後世に折れたものであろう。台形の上下辺は小さく折り返して湾曲の外側へと立ち上げている。両側辺は細かく10の山形を成形しており、各山の部分に穿孔が見られる。また上下辺に沿った中央にも穿孔が2個一対で配されている。凹面側に緑青が付着した痕跡が残るが、銅製品と組み合わされたものではなかろう。M45に密着して出土しているが、脇板に付属するものではなく、鎖で縫じ付けたと思われる周縁の穿孔や一部の辺に小さな山形を連ねて形作るなどM48～M62の籠手を構成する部品との共通性が多く、緩やかな湾曲の形状も籠手に伴う可能性を示している。

M48～M53は、籠手などに取り付けられた「縫（しの）」と思われる。厚さ0.1cmほどの鉄板を幅1.6～1.85cmほどの細長い板状にし、断面が中膨らみ状に湾曲させた「丸縫」と呼ばれるもので、両長側縁を短く折り上げて丸く縫を形作る。短辺は折り曲げない。

M48は、唯一全容がわかるもので、緩やかに曲がり、長さ12.4cm、幅1.85cmを測る。短辺の一方は直角に切れて2孔或いは3孔を抜く。もう一方の短辺は斜めに切れ、端面中央には細い溝が走り、二つの山形を作っているのかもしれない。二つの孔を抜き、両孔には鎖の菱輪と思しき鉄線が残存する。また中央に沿って2孔一対の小孔が2ヶ所配されている。

M49も、緩やかに曲がっており、湾曲の度合いは大きい。M48と同様に斜めに切られた短辺を二つの山形に作り、2孔を穿つ。また中央に沿って2孔が開けられている。短辺の方向を揃えるとM48とは逆方向に曲がっている。

M50も、湾曲したものであるが、より薄く、短く折り曲げた両側縁が玉縫状にならないものである。中央に沿って2孔が残る。

M51は、穿孔の位置から斜めに作られた短辺の破片と思われるが、中央に沿った位置の穿孔は対にはならないようである。

M52・M53も、周縁を折り返し、断面が中膨らみ状となることから丸縫と判断したが、M55～M62のような板物の可能性もある。直角に切れる短辺の破片であり、短辺近くに穿孔が見られる。M53には側縁に沿った位置にも穿孔が見られる。

M54は、直角三角形の斜辺を、弧状に切った鉄板で、弧を描く部分及び短辺の縁を短く折り返している。三角形の各角には直径2mmの円孔を穿ち、その間を等間隔に直径1mmほどの小円孔を配している。先端の大きな穿孔や斜辺の小孔には鎖の菱輪が通されており、さらにその菱輪に丸輪を繋いだものが見られ、鎖に取り付けられていたものとわかる。手甲の「大指（おおゆび）」と思われるが、銅製品であるM27の手甲とは組み合わないかもしれない。

M55は、湾曲した薄い鉄板を長方形に成形し、一長辺と一短辺を湾曲の凸面方向へと短く折り返して、長辺の周縁に2孔一対の穿孔をもつ。他方の長辺には五つの小さな山形を作り、そこに各々穿孔を施しており、上下両端の穿孔には鎖の鉄線が残存する。一方の鎖は丸輪と思われ、さらに丸輪が繋がっている。他の短辺の偏った位置に半分の菊座に笠と鎖が突出している。菊座から幅3mmの長方形の板を外に延ばして環状に曲げ、裏面は半月状になって本体に取りつく。その中央に軸の頭が残るように観察

される。これは小さな蝶番であろう。構造はM46の蝶番に類する。

M56は、角を丸く作ったやや湾曲した薄い鉄板で、残っている周縁は湾曲の突出方向へと短く折り返しているが、縁は太くはない。短辺と側縁の三か所に五つの穿孔が残り、おそらく2孔一対となる。側縁穿孔部の中央に長円形の菊座を置き、その上縦方向に二つの菊座鉢を打つ。裏面は剥落しており、鉢を打つ用途は不明である。

M57は、鉄製の菊座鉢である。突出した軸に径6.5mmの菊座、さらに径10.2mmの側面まで刻みをもつ菊座を重ねる。その下にも複数枚の金具が重なるように見えるが、錆びれかもしれない。下面は薄い鉄板に取りつく。

M58～M62も同様に、周縁を上方に折り返したわずかに湾曲した薄い鉄板で、周縁に小さな穿孔を巡らせてている。

M58は、三方を折り返しているので、凸面側の器表面が平滑なため、漆塗布などの表面処理を行っていたものかもしれない。M59も同じく、一方を折り返した薄板で、器表面凸面側に表面処理の痕跡が残る。

M60は、幅約3cmの薄い楕曲した鉄板の両長側縁を湾曲の凸面側に短く折り返したもので、両短辺は折れ曲がり、失われているが、当初のものではない。一方の長側縁に2孔一対の穿孔がある。

M61は、直角の側縁が残るもので、短く折り返し、穿孔を施している。

M62も、一側縁を折り返して、穿孔するものである。

M58～M62はその形態が方形をなし、M48～M53の縫と同じく縁を折り返し、菱輪で幣ぐ板所と思われる。座盤として籠手等に縫じ付けた「箇金（いかだがね）」「骨牌金（かるたがね）」と呼ばれるものであろう。M58・M59の表面には黒く光沢をもった平滑な部分があり、漆を塗布或いは焼き付けた痕跡かもしれない。M47・M55・M56も平面形は異なるが、同様の鉄板に鎖を取り付けるための穿孔が見られることから、同じように使用されたものと思われる。

M63・M64は、やや厚手の鉄板で、両側縁が薄くなる断面紡錘形のものである。M63は両端部に穿孔を持つようである。M64には一方の端部に穿孔らしきものが観察できる。「板所（いたどころ）」として用いられたものか。

M65～M75及びM114～M119は鎖である。

M48の縫、M54の大指、M55などの板所にも鎖の一部が残存している。基本的には、断面径2mmほどの針金を、直径0.6～0.8cm前後の環状に曲げて接合した「丸輪（まるわ）」を、断面径1mmほどの針金で作った直径0.4cmほどの「菱輪（ひしわ）」で繋いだ「喧合せ鎖（はみあわせくさり）」である。針金本体は中空になっており、金型孔から押し出す押出成形によって作られたものと思われる。

M65は、丸輪単体で、輪の合わせ目は一部隙間がある。M66は丸輪に3本の菱輪が連結し、うち1本の菱輪は丸輪の一部がさらに連結している。写真掲載のM114～M119も丸輪単体或いは丸輪に菱輪が付いたものである。

M67は、丸輪三つを菱輪で繋いだものであるが、菱輪が二重になっているものである。菱輪は丸輪より細く作られる。

M68は、菱輪のかしめた状況がよくわかり、梢円形に曲げて、合わせ目には隙間が残っている。

M69は、丸輪2点を菱輪で繋ぎ、さらに丸輪各々に菱輪が2点つながったものである。

M70は、丸輪4点を菱輪4点で繋いだ基本形の「四入」のものである。

M71も同様となり、丸輪に菱輪4点がつながるものであるが、丸輪の径が6mm～8mmと大きさが揃っていない。菱輪も梢円形に強く留めるが、大きい丸輪には径7mmの菱輪が繋がっている。

M72は、二連以上の幅で、長手方向に丸輪を五連以上繋げている。銅製品の縁青が付着しているが、繋がって用いられたものかは不明である。

M74は、一部に丸輪を3連繋いだ幅1.7cmのものを9連以上繋いだ布状のものが見られる。

M75は、出土した時には鉄の塊で、鉄滓かと思われていたが、保存処理終了時点で137g近い鎖の塊であることが判明した。この塊も帶状に鎖が繋がっている部分が観察できる。

M54の大指やM48の薙に鎖の一部が残存することから、籠手の板物を繋ぐのに鎖を用いていたことがわかり、これらの鎖も籠手を構成する部品であった可能性が高い。

#### 釘

M76～M90は鉄製釘である。M76～M84は第Ⅲ郭、M85は主郭西の板石上、M86は主郭岩盤上、M87・M88・M89は第Ⅱ郭集石、M90は通路（第Ⅳ郭）から出土している。

断面が方形を呈する角釘で、頭部を叩いて薄くし直角に折り曲げた頭巻釘である。M87では頭部の一方から切れ目を入れた後、上方を叩き伸ばして折り曲げていることがわかる。このM87やM77・M78は折り曲げた頭部が開いており、木材などに打ち込んで使用したものではないようである。M79・M90は先端部付近が頭部と同じ方向に直角に曲がっており、木材同士をつなぐ以外の目的に用いられるものであろう。これに対してM85・M89は頭部直下が折れ曲がっており、打ち込む際の失敗かもしれない。全体が残存するものは少ないが、4種類ほどの大きさの差があり、M76は他の釘に比べると非常に細く作られる。針或いは調度品や身に着けるものに用いたものかもしれない。また、M88は両端部を欠損するが非常に長く作られている。釘ではないかもしれない。M80・M81・M83は太さに比して短く、他の遺跡ではあまり見当たらないタイプのものである。

他に第Ⅲ郭から釘と思われる破片（M120・M121）が出土しているが、太さに比して短いものと思われる。

参考文献は第5章第2節にまとめている。

第3表 出土金属製品一覧

番号	図版	写真版	金属種	製品名	種別	分類	出土郭	位置	土層	備考	縦 (cm)	横 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)
M 1 42	61	銅製品 銀	達鉢	實物	第三郭				盛土下層(シルト)	宋銭12枚	2.92	2.79	2.13	39.00
M 2 42	61	銅製品 大切引	刀装具 武器	第三郭 長瑞	第三郭				盛土下層(シルト)		5.00	4.39	0.20	18.30
M 3 42	61	銅製品 精貴金具	刀装具 武器	第三郭	第三郭				主郭石積下(細砂)		3.00	1.70	0.70	5.00
M 4 42	59-61	銅製品 銀台	座金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		1.15	1.20	0.90	4.10
M 5 42	59-62	銅製品 銀食物	座金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		2.37	4.08	1.39	3.80
M 6 42	59-61	銅製品 銀台	座金物 甲賣	第三郭	第三郭				主郭石積下(細砂)		2.55	2.55	0.55	1.80
M 7 42	63	銅製品 銀	座金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		1.90	1.35	0.25	1.60
M 8 42	59-63	銅製品 銀刀	座金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		1.80	1.60	0.45	1.00
M 9 43	59-62	銅製品 銀座	金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(3.76)	(3.35)	2.18	18.60
M 10 43	63	銅製品 芝柄	金物 甲賣	第三郭	第三郭				主郭石積下(細砂)		1.00	(0.85)	(1.30)	0.80
M 11 43	59-63	銅製品 金柄	金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		1.73	1.70	(1.00)	2.00
M 12 43	59-63	銅製品 金柄	金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(1.21)	(1.27)	(0.70)	1.70
M 13 43	59-63	銅製品 金柄	金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		1.70	1.70	(1.90)	2.30
M 14 43	61	銅製品 芝柄	金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土縁辺下階層の下(シルト)		0.70	3.12	0.35	2.10
M 15 43	61	銅製品 貴軒	金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層		1.25	1.95	0.80	2.30
M 16 43	61	銅製品 貴軒	金物 甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		1.53	2.20	0.80	2.30
M 17 43	64	銅製品 茶盤		第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(3.75)	(1.05)	(0.15)	3.10
M 18 43	64	銅製品 茶盤		第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		4.05	0.95	0.14	3.20
M 19 44	63	銅製品 製輪	甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(4.10)	(1.00)	0.75	2.10
M 20 44	63	銅製品 製輪	甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(4.90)	0.65	0.60	2.30
M 21 44	63	銅製品 製輪	甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(4.90)	(1.80)	0.70	3.40
M 22 44	63	銅製品 製輪	甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(3.52)	(0.91)	0.70	1.40
M 23 44	63	銅製品 製輪	甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(2.75)	(2.05)	1.20	1.70
M 24 44	63	銅製品 製輪	甲賣	第三郭	第三郭				土竪石垣		(6.00)	0.60	0.50	2.80
M 25 44	63	銅製品 製輪	甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(6.50)	0.60	0.65	3.10
M 26 44	63	銅製品 製輪	甲賣	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(7.35)	(1.40)	0.65	3.60
M 27 45	65	銅製品 手甲	稚手 甲賣	第三郭	第三郭				主郭石積下(細砂)		(5.73)	(4.65)	0.60	5.00
M 28 45	64	銅製品 刃の茎	鞍具 甲馬	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		5.60	1.30	1.30	9.80
M 29 45	64	銅製品 刃の茎	鞍具 甲馬	第三郭	西端						6.80	1.60	1.10	13.20
M 30 45	65	銅製品 把手		第三郭	第三郭				盛土下層		(5.20)	(2.80)	1.45	9.20
M 31 45	65	銅製品 把手		第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(2.39)	0.60	(1.19)	1.80
M 32 45	65	銅製品	容器?	第三郭	第三郭				主郭出土中(石塙下)(縦帶下細砂)		(3.70)	(5.00)	(0.30)	6.40
M 33 45	65	銅製品	容器?	第三郭	第三郭				主郭出土中(石塙下)(縦帶下細砂)		(3.75)	(6.45)	(1.90)	5.90
M 34-1 46	65	銅製品	飾り金具	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(1.05)	(1.30)	(0.40)	16.50
M 34-2 46	65	銅製品	飾り金具	第三郭	第三郭				盛土下層(シルト)		(2.15)	(3.15)	(0.45)	4.00
M 35 46	66	銅製品	飾り金具	唐櫛	第三郭	第三郭			盛土下層		(3.42)	(7.95)	(0.92)	2.00
M 36 46	66	銅製品	飾り金具	唐櫛	第三郭	中央			主郭石積下		3.96	(6.00)	(1.20)	21.70
M 37 46	66	銅製品	飾り金具	唐櫛	第三郭				地山直上		(4.00)	(2.73)	(1.18)	16.80
M 38 47	67	銅製品	楕円急須状	鉢底	容器	主郭	西端		小段下階下色砂砾		全長21.0	口径2.7	裏耳5.5	底径5.5 65.30
M 39 48	68	鐵製品		刀	武器	第三郭	土壘		下層		6.24	3.85	1.91	360.30
M 40 48	68	鐵製品	腰袋	武器	第三郭	西端			主郭石積み下		9.70	1.15	0.90	19.80
M 41 48	68	鐵製品	伊予小札	小札	甲賣	第三郭			河原石積稜北		(2.70)	2.70	0.10	3.20
M 42 48	68	鐵製品	棍	工具	第三郭	北西側					(7.30)	2.28	0.73	40.40
M 43 48	68	鐵製品	板状		第三郭				盛土下層(シルト)		(6.70)	3.00	0.15	12.30
M 44 48	68	鐵製品	鎌	農具	第三郭	北半					(12.95)	3.65	0.48	75.30
M 45 49	69	鐵製品	駄板	甲賣	第三郭				盛土下層		(12.50)	(6.80)	2.50	93.30
M 46 49	69	鐵製品	駄板	甲賣	第三郭				盛土下層		(9.40)	(2.72)	(1.30)	30.70
M 47 49	69	鐵製品	金物	甲賣	第三郭				盛土下層		6.03	6.33	3.90	17.90
M 48 50	71	鐵製品	丸櫛	稚手	甲賣	第三郭			盛土下層(シルト)		12.40	1.85	0.60	13.30
M 49 50	71	鐵製品	丸櫛	稚手	甲賣	第三郭			盛土下層		(9.40)	1.60	0.55	7.00
M 50 50	71	鐵製品	丸櫛	稚手	甲賣	第三郭			土竪縫跡下(縫の下シルト)		(2.80)	1.70	0.35	1.20
M 51 50	71	鐵製品	丸櫛	稚手	甲賣	第三郭			石積土 細砂		(4.70)	1.80	0.40	1.70
M 52 50	71	鐵製品	丸櫛	稚手	甲賣	第三郭			盛土下層(シルト)		(2.25)	(1.20)	(0.30)	0.80
M 53 50	71	鐵製品	丸櫛	稚手	甲賣	第三郭			盛土下層(シルト)		(2.45)	(1.00)	(0.20)	0.70
M 54 51	70	鐵製品	大指	手甲	甲賣	第三郭	東端		盛土下層(シルト)		2.80	2.30	0.68	2.20
M 55 51	70	鐵製品	金物	金物	甲賣	第三郭			石積下砂砾		4.98	2.98	1.00	5.90
M 56 51	70	鐵製品	金物	金物	甲賣	第三郭			盛土下層(シルト)		2.00	3.95	0.80	2.20
M 57 51	70	鐵製品	斬	甲賣	第三郭				盛土下層(シルト)		1.72	1.42	(1.62)	1.80
M 58 51	70	鐵製品	骨牌	稚手	甲賣	第三郭			盛土下層		(3.05)	2.90	0.40	3.80
M 59 52	70	鐵製品	骨牌	稚手	甲賣	第三郭			盛土下層(シルト)		(3.60)	(2.40)	(0.30)	3.20
M 60 52	70	鐵製品	骨牌	稚手	甲賣	第三郭			盛土下層(シルト)		(4.40)	3.00	0.50	3.10
M 61 52	70	鐵製品	骨牌	稚手	甲賣	第三郭			盛土下層(シルト)		(1.60)	(1.95)	0.08	0.60
M 62 52	70	鐵製品	骨牌	稚手	甲賣	第三郭			盛土下層(シルト)		(1.05)	(1.65)	0.20	0.40

番号	国版	写真 図版	金属種	製品名	種別	分類	出土郭	位置	土層	備考	縦	横	高さ	重さ
											(cm)	(cm)	(cm)	(g.)
M 63 52	68	鉄製品	鏡板				第三郭	盛土下層(シルト)			(5.15)	0.95	0.40	3.20
M 64 52	68	鉄製品	鏡板				第三郭	盛土下層(シルト)			(3.20)	(0.75)	0.20	1.50
M 65 52	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)	丸輪1			0.73	0.68	0.20	0.30
M 66 52	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層	丸輪2			1.08	0.78	0.50	0.40
M 67 52	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	石積下細砂				1.05	1.12	0.60	0.50
M 68 52	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)	丸輪2 丸輪3			0.80	1.63	0.50	0.50
M 69 52	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)	丸輪2 丸輪5			1.14	1.67	0.70	0.70
M 70 52	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)	丸輪4 丸輪7			1.63	1.55	0.80	1.50
M 71 52	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)	丸輪4 丸輪3			1.30	1.69	0.80	1.50
M 72 53	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)	丸輪7 丸輪13			2.05	2.80		2.70
M 73 53	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)	一部剥状			2.13	3.47	2.00	9.40
M 74 53	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)	丸輪11 丸輪19			2.27	3.50		8.90
M 75 53	73	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)	剥離状			7.36	8.84		136.60
M 76 53	73	鉄製品	釘	建築部材	西端						(2.66)	0.34	0.26	0.50
M 77 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第三郭 西端			積石(集石)の下			3.40	0.30	0.45	1.10
M 78 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第三郭			盛土下層			(4.50)	0.40	0.50	1.40
M 79 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第三郭			大石周辺			5.20	0.45	0.40	4.50
M 80 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第三郭 西端			主石積下	土師埴土鋪面		(2.60)	0.60	0.60	1.70
M 81 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第三郭			盛土下層(シルト)			(1.80)	0.40	0.45	1.10
M 82 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第三郭 西端			主郭堆石列下	床面		(2.65)	0.50	0.60	2.00
M 83 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第三郭 西端			集石堆			(5.80)	0.80	0.60	7.20
M 84 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第三郭 西端			集石堆			7.60	0.60	0.55	6.50
M 85 53	73	鉄製品	釘	建築部材	主郭			猿出部	右柄柱石上部		6.25	0.45	0.50	3.10
M 86 53	73	鉄製品	釘	建築部材	主郭 平坦部			岩盤上埋土			(5.60)	0.30	0.40	2.20
M 87 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第二郭 南			集石下			6.50	0.55	0.45	5.10
M 88 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第二郭 南半			集石下			3.95	0.70	0.45	5.80
M 89 53	73	鉄製品	釘	建築部材	第二郭 南			集石下			(8.70)	0.40	0.40	3.30
M 90 53	73	鉄製品	釘	建築部材	過路			表土下灰白色粘土質土			4.35	0.55	0.50	4.10
M 91 —	61	銅製品	鍼	連鉄	寶物	第三郭	土塗柱部下巻後の下シロ土	本段16枚			2.80	2.90	2.70	52.90
M 92 —	63	銅製品	釘足	鏡	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				(1.30)	0.30	0.20	0.40
M 93 —	63	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	主郭底土中(石塙下)(緩層下細砂)				(4.20)	0.70	0.70	2.90
M 94 —	63	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				(2.70)	0.50	0.50	0.90
M 95 —	63	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				(4.00)	0.50	0.50	1.30
M 96 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				(8.70)	0.70	0.20	3.10
M 97 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	主郭底土中(石塙下)(緩層下細砂)				(4.10)	0.70	0.40	2.60
M 98 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				(4.00)	0.50	0.50	1.00
M 99 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	主郭底出土中(石塙下)(緩層下細砂)				(3.00)	0.70	0.50	1.20
M 100 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				(2.00)	0.60	0.40	0.50
M 101 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭 中央	主郭石積下		地山直上		(4.00)	0.50	0.40	0.90
M 102 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭 中央	主郭石積下		地山直上		(3.30)	0.50	0.60	1.40
M 103 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				(2.90)	0.60	0.50	1.20
M 104 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				(2.10)	0.60	0.40	0.70
M 105 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				(1.50)	0.50	0.50	0.60
M 106 —	64	銅製品	要輪		甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				(3.70)	(5.00)	(0.30)	0.60
M 107 —	64	銅製品	板状			第三郭	盛土下層(シルト)				(6.00)	1.30	0.80	7.60
M 108 —	64	銅製品	板状			第三郭	盛土下層(シルト)				(2.80)	1.30	0.50	1.30
M 109 —	64	銅製品	板状			第三郭	盛土下層(シルト)				(2.30)	1.00	0.40	2.10
M 110 —	64	銅製品	板状			第三郭	盛土下層(シルト)				(3.50)	1.00	0.30	1.80
M 111 —	65	銅製品	薄板			第三郭	盛土下層		M27類似		5.70	2.20	0.20	2.30
M 112 —	65	銅製品	薄板			第三郭	縁邊盛土下層(シルト)				1.90	1.10	0.20	0.40
M 113 —	65	銅製品	薄板			第三郭 西端	床面				1.60	1.10	0.20	1.60
M 114 —	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				0.80	0.60	0.40	0.10
M 115 —	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				1.00	0.80	0.40	0.20
M 116 —	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				1.00	0.80	0.40	0.30
M 117 —	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭 中央	主郭石積下		地山直上		0.70	0.70	0.40	0.20
M 118 —	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				1.00	0.80	0.40	0.30
M 119 —	72	鉄製品	鏡	鏡手	甲寅	第三郭	盛土下層(シルト)				0.80	0.90	0.40	0.40
M 120 —	73	鉄製品	釘	建築部材	第三郭		盛土下層(シルト)				(2.80)	1.20	1.20	1.50
M 121 —	73	鉄製品	釘	建築部材	第三郭		盛土下層(シルト)				(3.20)	1.20	1.50	2.20

#### 4. 石製品 (図版27・41、写真図版52・60)

##### 石鍋

S1は、主郭西法面下、褐色砂礫から出土した。鍔を含んだ口縁部の破片で、破面には二次加工の痕跡は見られない。鍔はやや上向きの断面三角形を呈しており、その頂部には尖り気味の部分が観察できる。鍔の上下ではわずかに上方が厚いがほとんど差がない。鍔の上下の裾には沈線状の加工痕が残される。鍔より短く立ち上がる口縁部の角は丸くなるが、上面を有している。

外面鍔の下に極少量の煤が観察できる。外面は縱方向の削りの後、その上方を横方向の削りで仕上げている。内面も同様に鍔の裏近くまでは縱方向、鍔の裏から上は横方向の成形痕が見られる。

S2は、第VI郭西半の褐色土から出土した。底部から鍔の一部を残した破片で、破面には二次加工の痕跡は認められない。外面の底部より少し上から鍔の下まで煤が付着しており、鍋として利用した痕跡を残す。但し一部鍔や底部の欠損部にも煤か焦げが残存している。口縁部や鍔の頂部を欠くが、底部から聞いて口縁部に至る。鍔の上下裾には沈線状の成形痕が残ることから、断面は三角形状を呈していたものと思われる。外面の底部から1.5~2.0cm幅の削りが3段程度見られ、鍔の下は縱方向の加工がなされている。内面には横方向の細かい擦痕が残され、鍔の裏付近には縱方向の擦痕が見られる。これらは石鍋としての製作痕跡であろう。

これらの石鍋は温石などに再加工されたものではなく、石鍋として持ち込まれたものであろう。鍔等の形状から15世紀代のものとされる。

S3・S4は、砥石である。

S3は、主郭中央西寄りの表土より下から出土しており、東播系須恵器の付近から見つかった。灰オリーブ色の粘板岩製で、縦94.7cm、横41.1cm、厚さ8.8cmの長方形を呈する仕上げ砥である。一短辺を欠くが、その破面の角も丸く摩滅している。両長側面は長軸方向に対してやや斜め方向の細かい擦痕が走る。また、別の一短面には面に直行した粗い切削痕が残る。ともに製品として切り出した際の切断痕であろう。

表側の面を主として使用しており、一部に偏った使い減りが見られる。裏面には細かい縱方向の乱れた傷が多く残り、他は長側縁の一部を鋭く面取りし、よく磨られて摩耗するが、表の面とは異なる。平坦にするための調整痕であろう。

S4は、第II郭南半疊群付近から出土した。黒灰色の粘板岩を用いており、残存長74.4cm、横23.9cm、厚さ11.9cmの三角形状を呈し、短辺や一部器表面が剥離している。一長側面も段状に割れ面を残すが、いずれの面にも一部に摩耗部が見られ、成形・調整をおこなって形を整えている。もう一方の弧状をなす長側面には面に直行する擦痕が残り、製品として切り出した切断痕の可能性が高い。多面に使用痕と思われる擦痕が観察でき、尖頭部には幅1cm、深さ2.5mmほどの溝状に摩耗した部分が見られる。小型の砥石として再加工し、手に持て刃に当てる使い方をしていたものであろう。

S5・S6は、黒の基石として持ち込まれたと思われる円礫である。

S5は、第II郭南半疊群より出土した。黒色を呈した扁平な円礫で、擦痕などの加工痕は見られない。17.7×14.9cm、厚さ5.06cm、重さ1.9gを測る。

S6は、第III郭西端集石下から出土した。褐色に黒色の縞が入ったやや長円形の扁平な円礫である。17.9×14.7cm、厚さ6.5cm、2.2gを測る。

S7は、第II郭南半疊群より出土した円礫で、投弾と思われる。7.72×6.83×5.79cmの花崗岩と思わ

れる不整形な礫で、器表面は風化・摩耗が著しいが、使用による摩滅ではなさそうである。重さ377.2gを測る。

S8は、主郭北西に設定したトレンチの最下層、地山岩盤直上から出土した。本来この山塊で産出する石ではなく、何らかの理由で意図的に持ち込まれたものであろう。器表面は著しく風化・摩耗している。より古い時代の白石などの可能性もある。

木戸雅寿 1995「石鍋」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 真陽社

# 第4章 自然科学分析結果

## 第1節 喜多・城山城跡における種実同定

株式会社 加速器分析研究所

### はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

### 1. 試料

試料は、銅製品内に残存していた種実類である。なお、同遺跡の山城整地層で出土した木炭を対象に放射性炭素年代測定が実施されている（第2節参照）。

### 2. 分析方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

### 3. 結果

銅製品内に残存していた試料は、草本2分類群に同定された。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

- ・エノコログサ属 *Setaria* 穂・果実 イネ科

穂は茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。内部に果実があるがデンブン質のため分解しやすい。アワは丸みをもつものが多く、つき部の大きさが小さい特徴をもつことなどから識別できる。本試料はアワを除くエノコログサ属である。

- ・イネ科 Gramineae 穂

穂は灰褐色～茶褐色で紡錘形を呈す。表面には微細な毛が確認できる。

### 4. 考察

銅製品内に残存していた種実は、草本のエノコログサ属穂・果実36個、イネ科穂1個が同定された。保存状態が良く、銅製品に接していたため緑青の色が沈着したとみなされ、遺存性も良かったと考えられる。ただし、アリはイネ科の雑草類を集積する場合があり、後世にアリが集積した可能性も考えられる。

エノコログサ属、イネ科は人里植物ないし雑草であり、日当たりの良い乾燥地などに生育する。

文献

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説、養賢堂、494p.
- 笠原安夫 (1988) 作物および田畠雑草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣 出版、p.131-139.
- 南木睦彦 (1991) 栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通I、雄山閣出版株式会社、p.165-174.
- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-283.
- 渡辺誠 (1975) 縄文時代の植物食、雄山閣、187p.



第2図 喜多・城山城跡の種実

## 第2節 喜多・城山城跡における放射性炭素年代(AMS測定)(1)

株式会社 加速器分析研究所

### 1. 測定対象試料

喜多・城山城跡は、兵庫県西脇市黒田庄町岡（北緯35° 1' 41"、東経134° 59' 39"）に所在する。測定対象試料は、新段階の山城整地層内から出土した木炭 6 点である（第4表）。推定年代は15世紀頃と考えられている。なお、同遺跡で出土した銅製品内に残存していた試料を対象に種実種同定も実施されている（第1節参照）。

### 2. 測定の意義

山城構築年代の検討のため。

### 3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 M に達した時には「AAA」、1 M 未満の場合は「AaA」と第3表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4. 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度 (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5. 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である（第4表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は  $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第4表に、補正していない値を参考値として第5表に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、

下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい ( $^{14}\text{C}$ が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 ( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第4表に、補正していない値を参考値として第5表に示した。
- (4) 暗年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暗年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第5表に示した。曆年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 6. 測定結果

測定結果を第4表、第5表に示す。

試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、試料1が $180 \pm 20\text{yrBP}$ 、これを除く5点（試料2～6）では、 $740 \pm 20\text{yrBP}$ （試料5）から $680 \pm 20\text{yrBP}$ （試料3）の間にまとまる。曆年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、試料1が $282 \pm 1\text{cal BP}$  (1668～1949cal AD) の間に4つの範囲、試料2～6の5点の中で最も古い試料5が $686 \sim 670\text{cal BP}$  (1264～1280cal AD) の範囲、最も新しい試料3が $672 \sim 573\text{cal BP}$  (1278～1377cal AD) の間に2つの範囲でそれぞれ示される。試料1は17世紀～20世紀頃の推定年代よりも新しい値を示した。試料2、4～6の4点は13世紀頃、試料3は13世紀から14世紀頃となり、これらは推定年代よりも古い値となつた。なお、試料1の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する（第5表下の警告参照）。

今回測定された試料はすべて木炭で、いずれも樹皮は確認できなかった。ただし、試料1、3は枝状を呈する。このため、試料2、4～6については、以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる（古木効果）。このため、試料2、4～6について、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率はいずれも61%を超える正常な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第4表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-190362	1	遺構：第II・III郭	木炭	AAA	-27.14 ± 0.18	180 ± 20	97.82 ± 0.27
IAAA-190363	2	遺構：第II・III郭	木炭	AaA	-26.58 ± 0.17	710 ± 20	91.51 ± 0.26
IAAA-190364	3	遺構：第II・III郭	木炭	AAA	-26.94 ± 0.17	680 ± 20	91.84 ± 0.25
IAAA-190365	4	遺構：第II・III郭	木炭	AAA	-27.27 ± 0.14	720 ± 20	91.43 ± 0.26
IAAA-190366	5	遺構：第II・III郭	木炭	AAA	-27.35 ± 0.16	740 ± 20	91.21 ± 0.26
IAAA-190367	6	遺構：第II・III郭	木炭	AAA	-25.98 ± 0.18	710 ± 20	91.57 ± 0.25

[IAA登録番号 : #9673]

第5表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-190362	210 ± 20	97.40 ± 0.27	176 ± 22	282calBP - 268calBP (12.7%)* 214calBP - 168calBP (38.9%)* 153calBP - 146calBP (5.6%)* 15calBP - 1calBP (11.1%)*	287calBP - 260calBP (17.9%)* 222calBP - 140calBP (57.1%)* 25calBP - ... (20.4%)*
IAAA-190363	740 ± 20	91.22 ± 0.26	712 ± 22	679calBP - 661calBP (68.2%)	689calBP - 652calBP (94.5%) 577calBP - 574calBP (0.9%)
IAAA-190364	720 ± 20	91.47 ± 0.25	684 ± 22	672calBP - 652calBP (59.2%) 578calBP - 573calBP (9.0%)	678calBP - 644calBP (70.6%) 588calBP - 565calBP (24.8%)
IAAA-190365	760 ± 20	91.01 ± 0.25	719 ± 22	680calBP - 664calBP (68.2%)	690calBP - 655calBP (95.4%)
IAAA-190366	780 ± 20	90.77 ± 0.25	739 ± 22	686calBP - 670calBP (68.2%)	704calBP - 660calBP (95.4%)
IAAA-190367	720 ± 20	91.39 ± 0.25	707 ± 22	677calBP - 660calBP (68.2%)	687calBP - 651calBP (91.7%) 580calBP - 571calBP (3.7%)

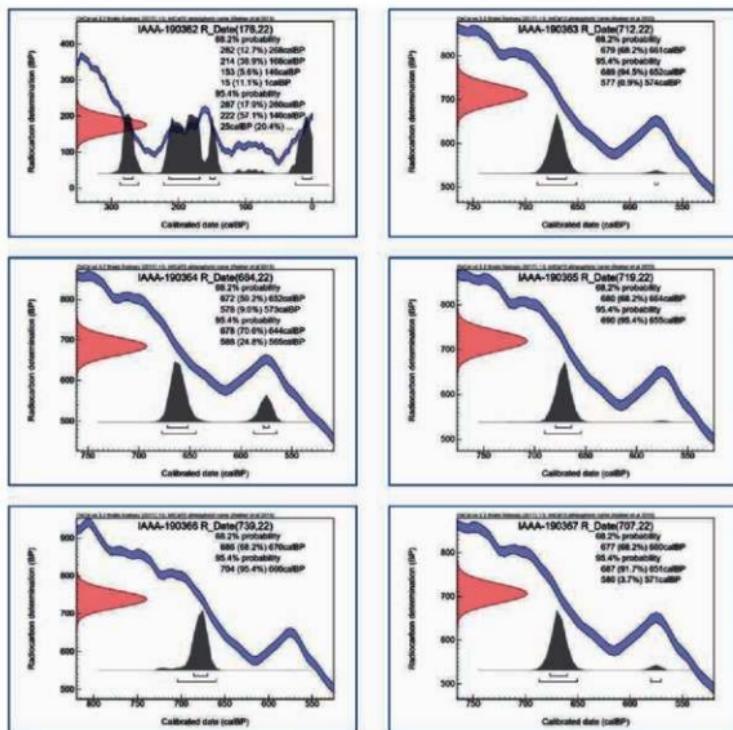
[参考値]

\*Warning! Date may extend out of range

Warning! Date probably out of range

(この警告は較正プログラムOxCalが発するもので、試料の<sup>14</sup>C年代に対応する較正年代が、当該曆年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

## 文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 ( 1 ), 337–360Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 55 ( 4 ), 1869–1887Stuiver, M. and Polach, H. A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data. *Radiocarbon* 19 ( 3 ), 355–363

第3図 曆年較正年代グラフ（参考）

## 第3節 喜多・城山城跡における放射性炭素年代(AMS測定)(2)

株式会社 加速器分析研究所

### 1. 測定対象試料

喜多・城山城跡は、兵庫県西脇市黒田庄町岡（北緯 $35^{\circ}1'41''$ 、東経 $134^{\circ}59'39''$ ）に所在する。測定対象試料は、銅製品内から出土した種実1試料（エノコログサ属穎・果実36個）、第Ⅲ郭西端の盛土層から出土した貝殻1点である（第6表）。貝殻の推定年代は14世紀後半から15世紀代と考えられている。なお、銅製品内から出土した種実を対象に種実種同定も実施されている（第1節参照）。

### 2. 測定の意義

銅製品の年代や山城の改築年代の検討のため。

### 3. 化学処理工程

#### (1) 種実の化学処理

第2節と同じため省略。

#### (2) 貝殻の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い付着物を取り除き、超純水に浸し、超音波洗浄を行う。
- 2) 試料の表面を塩酸で約30%溶かし、汚染された可能性のある部分を除去する（Edg）。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。なお、試料が特に少量の場合、塩酸の処理を行わない場合がある（Non）。
- 3) 試料中の炭酸カルシウム( $\text{CaCO}_3$ )を分解し、二酸化炭素( $\text{CO}_2$ )を発生させる。

以下、第2節（4）以降と同じ。

### 4. 測定方法、5. 算出方法

省略

### 6. 測定結果

測定結果を第6表、第7表に示す。

銅製品内から出土した種実試料の $^{14}\text{C}$ 年代は $770 \pm 30\text{yrBP}$ 、曆年較正年代（ $1\sigma$ ）は $1227 \sim 1275\text{cal AD}$ の間に2つの範囲で示される。

第Ⅲ郭西端の盛土層から出土した貝殻試料の $^{14}\text{C}$ 年代は $1040 \pm 30\text{yrBP}$ 、曆年較正年代（ $1\sigma$ ）は $1303 \sim 1385\text{cal AD}$ の間に2つの範囲で示される。推定された年代を含む結果である。

試料の炭素含有率は、種実が45%、貝殻が97%で、試料種ごとに適正な値となっており、化学処理、測定上の問題は認められない。

第6表 放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C} (\text{‰})$ (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-190483	種実	銅製品内	種実	Aaa	-10.64 ± 0.22	770 ± 30	90.86 ± 0.29
IAAA-190484	貝 (128)	第Ⅲ郭西端 盛土層	貝殻	Edg	0.86 ± 0.19	1,040 ± 30	87.87 ± 0.28

[IAA登録番号:#9699]

第7表 放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

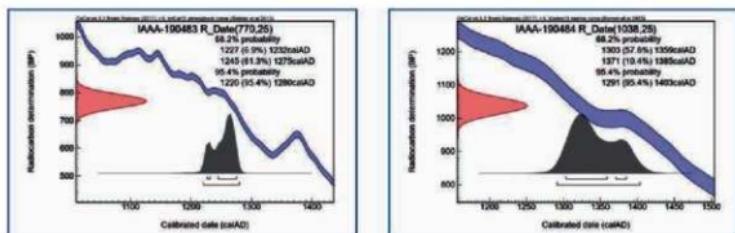
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-190483	540 ± 30	93.55 ± 0.30	770 ± 25	1227calAD - 1232calAD (6.9%) 1245calAD - 1275calAD (61.3%)	1220calAD - 1280calAD (95.4%)
IAAA-190484	620 ± 20	92.59 ± 0.29	1,038 ± 25	1303calAD - 1359calAD (57.8%)* 1371calAD - 1385calAD (10.4%)*	1291calAD - 1403calAD (95.4%)*

[参考値]

\* OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017) にて Marine13 marine curve (Reimer et al 2013) を使用し marine100%で較正

### 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), 337–360  
 Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 55 (4), 1869–1887  
 Stuiver, M. and Polach, H. A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data. *Radiocarbon* 19 (3), 355–363



第4図 曆年較正年代グラフ(参考)

# 第5章 総括

## 第1節 喜多・城山城跡の変遷

喜多・城山城跡が存在する丘陵のうちの東側半分を調査したにすぎず、北側斜面下半は大きく削り取られていたため、山城全体の遺構を検出したわけではない。また、下層の遺構については調査の最終段階になって検出したことから、年度末の限られた期間・経費のなかで十分な調査を実施できなかった。

なお、繩文時代後期や弥生時代後期末～古墳時代初頭などにも利用され、中世経塚の存在も窺えた。

### 1. 上層の遺構

山頂部には主郭の平坦面や北側に土壘を作った第Ⅲ郭や通路など、北側斜面には切岸とその下に帯郭の第Ⅳ郭を備えていたが、南側斜面は角度40°を超える岩盤の自然崖面で、特に加工はされていなかった。西側については特に下方に樹木の繁茂が激しく、詳細な観察ができなかったが、比較的緩傾斜となっていたことから、主として北側を防御することを主眼とした山城であったことがわかる。

山頂部は盛土により下層遺構を埋めて広い平坦面を確保しており、北側斜面も山頂部北端を盛土することにより急傾斜の切岸になるように造成していた。

### 2. 下層の遺構

山頂には岩盤を整形してやや広範囲の平坦面を2面造り出し、その周間に小規模な段状遺構を配置しており、北側切岸部分には堅掘状遺構や段状遺構を設けていた。また、段状遺構や平坦面には柱穴や東石を伴うものがあり、建物や橋・堀といったものが設けられていたことが想定できた。

### 3. 出土遺物

出土遺物のうち、土師器皿・土錘・金属製品の量が多いことが特徴としてあげられる。金属製品には甲冑関係が最も多いため、断片的な部分が多く、唐櫃の飾り金具も認められた。土錘は報告したものだけでも212点と量が多く、網を用いて付近の河川・池などで魚を捕る目的と同時に、攻撃された際の防御として、山上から網を投げるといった用法も考慮しておくべきであろう。また、切岸に面した中央部で礫が多く集積されていたことも防御用として判断できるであろう。

### 4. 時期

出土遺物はほぼ上層城跡に改築するための盛土層から出土しており、下層遺構の時期を示すものとされている。土師器皿および古瀬戸などの土器・陶器が示す時期はほぼすべてが15世紀中頃を中心としており、金属製品の時期にも齟齬はない。また、輸入青白磁はやや古く14世紀代であるものの、特殊なものであることから、長期保管されたものといえよう。ところが、放射性炭素年代測定では、木炭・巻貝・種子のいずれも13世紀代の結果が出ており、考古学的な時代判断と大きく異なっている。これをどう解決するかは今後の課題である。

### 5. 背景

喜多・城山城跡にかかる文献は全く残っておらず、城主などは不明であるが、主として北側からの攻撃に対しての防御を目的としたもので、同時に、北側および東側の谷奥まで見通せる立地と高さであることから、本拠地は南側にあった可能性もある。約100m南側には方形居館とみられる岡ノ城(極楽寺遺跡)が存在していることから、関係があるかもしれない。

## 第2節 金属製品

### 1. 金属器の出土状況

喜多・城山城跡の調査では、頂上部が後世に山上講の祠などによって削平されており、また北側の山裾周辺が土取りによって失われていた他は、その主要部のほとんどを調査対象とすることができた。残念ながら時間的制約によって築城当初の小型の郭のすべてを検出することはできなかった。但し一部実施できた下層の調査では、遺物はほとんど出土していない。

金属器についても唯一、遺構に伴う可能性が高いものが、M39の刀である。第Ⅲ郭土壘の断ち割りの際に地山直上から出土した。下層に構築されたわずかな平坦面とその最奥部の溝状の落ち込みから出土している。当初、その形状(反りをほとんど持たない直刀)や数少ない原位置を保つ出土状況から古墳時代のものの可能性や、麓に鎮座する兵主神社に奉納された古刀を地鎮に用いたなどが考えられたが、山城に属する時代のものと判断した。築城当初の小郭が成形されていた時期や、それを埋めて土壘を修築した際に埋められたものであろう。

出土した金属器のうち単品で用いられるものは錢貨や鉄瓶・鎌など数点に限られ、ほとんどが木材や皮革、布などの有機質部品や他の金属部品と組み合わされた甲冑などの製品の部品を構成するものである。それらは郭内に散乱したような状態で出土している。

例えば基本的には建築部材である釘は、比較的城内の広い範囲に散乱するが、第Ⅲ郭からの出土が最も多く、なかでも郭内西端の集石周辺から多く出土している。しかしながらその場に建物の存在を裏付けるほどの釘の量や状況は見られない。また、釘各々の規格性はあまりなく、まとまってひとつの建物の建築に用いられたものとは思えない。

金属器が最も多く出土した第Ⅲ郭においては、例えば銅製の細長い覆輪は、第Ⅲ郭埋土のかなり上層から出土し始め、第Ⅲ郭の床面にあたる土壘の基底部からも出土している。土壘の反対南側にあたる主郭裾から多くの覆輪の破片が出土しており、その状況は主郭部を構築した盛土内や上面にあった金属器が主郭の崩壊、あるいは修築の際の整地によって第Ⅲ郭内に広がったような様相である。この堆積土中からは、多くの土師器皿や土鍤、巻貝、炭なども出土している。

出土した遺物の中で有機質の部品の残存がほとんど確認できなかった。同じ埋土中からは炭片や巻貝なども出土したが、甲冑部品や調度品部品に伴う有機質材は全く失われている。金属器に接している有機質は金属器の鋒によって一部残存することが多いことはよく知られているが、M15・M16などのわずかな痕跡を除くと、原位置から出土したと思われるM39の刀の鞘等以外は有機質の痕跡すら残存していない。

また、M1・M91の連銭やM107などの銅製品が著しく溶解して変形していることが挙げられる。また、銅製品のいくつかには文様が刻まれ、金メッキを施した金銅製品であった可能性が高いが、肉眼では全く観察できなかった。残念ながら兵庫県立考古博物館の蛍光X線分析装置が使用できなくなったため、その可否は今のところ保留するとして、火を受けて表面の鍍金部分が失われた可能性も残される。或いは、銅の部品として意図的に本体から外して保管されていたなどが考えられる。

## 2. 金属器の種類

出土した金属器の製品名・部位・用途をできるだけ推定したが、それでも用途不明の部位・部品が残ってしまった。多種多様な金属製品が含まれていることも特徴の一つであろう。

### 横手急須形鉄製品

所謂、鉄物の鉄瓶であるが、中世に属する鉄瓶そのものの出土例が非常に稀であり、また環状の把手や釣手ではない直線的な長い横手と、円筒形の注口を持った鉄製品は類例を見つけることができなかつた。横手の付く金属製品には柄香炉や铸造に用いる柄付きの取鍋などがあるが、いずれも注口や柄の先端部の形状が異なる。半島や大陸には「雞斗」と呼ばれる横手付き・三足付きの金属器が存在し、戦場で簡便に煮炊きができる携帯用の炊事具とされているが、時代的には古くかけ離れている。

やかん形の釣手を持つ鉄瓶は富山県関はつ大滝遺跡などから出土している。また、釣手を有する銅製の容器は同時代の豊岡市宮内掘跡から出土しており「油差し」としている。本製品も同様の灯火具としての油差し、或いは酒器などの用途が考えられる。

鉄製の鉄物では非常に重く、鉄瓶本体と横手のバランスの悪さを考えると、一般に普及していたものではなかろう。大陸や半島からの搬入品とも考えられるが、同じく北播磨で活躍した鉄物師集団による特注品の可能性も残されている。山一つ西に越えた近隣の多可町中区の茂利・宮の西遺跡では同時代の鉄鍋と思われる鉄型や工房の一部が検出されている。また、加古川支流杉原川に沿った多可町内では梵鐘の铸造遺構などが複数見つかっており、金属器生産の工人集団の存在が色濃く見られる。そしてその活動は铸造のみならず、その周辺の工程を含んだものであったことが想定できる。

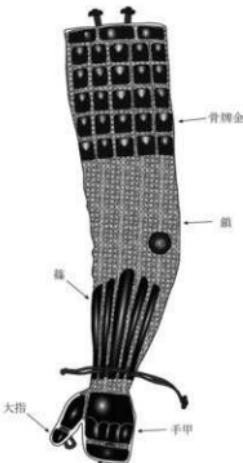
いずれにしても非常に特殊なそしてかなり上級の文物であり、青磁香炉や天目茶碗、碁石などとともにこの城にいた人間の階層を示す逸品である。

### 籠手

第Ⅱ郭から出土した鉄製の小札の存在から、城内で甲冑が用いられていたことを想定できた。さらに第Ⅲ郭から出土した金属器の中にも甲冑の部品が含まれていることがわかつた。

鉄製品の中に手甲の大指(M54)と思われるものが見いだされ、周縁に配された小孔に鎖が通されていることから、鎖で縫じられた籠手が存在することが分かった。

また、別の部品にも鎖が付属すること、それらも大指と同様に緩やかに湾曲し、周縁の一部や全部が短く折り返され(捻り返され)ていることが判明した。それらは板所の縫や骨牌金・後金であり、籠手に付属するものが多く含まれていることがわかつた。骨牌金は甲冑本体の脛(しころ)や脣(脣具足・鎖具足)、足を防御する佩楯や脣当、甲懸けにももらしいら、籠も佩楯や脣当にも用いられることがあり、鎖同様、甲冑の様々な部分に使われており、籠手にのみ使われるわけではないのだが、少なくとも籠手に伴う部品は存在していたことは確かである。



第5図 篠手

大指や薺と同様に周囲に穿孔を持つものも、龍手に伴うものと考えているが、どの部位に用いたものかは不明である。

#### 脇板

また、脇壺を防護するための金具廻である脇板も出土している。M45の脇板は、鉄板を横方向に3枚蝶番で繋いだもので、上縁・側縁に覆輪を懸けていたものである。底辺と側辺が直角に交わり、上幅と下幅はほぼ同幅であり、上辺の山形の突出も緩やかである。脇板であるなら大鏡・胴丸の左側、腹巻の両側に用いられたもので、大鏡の右側の脇楯となる可能性もある。

脇板については愛知県猿投神社蔵の櫻鳥絲威鏡に付属するとされる脇板が3枚蝶番繋ぎであるが、古い大鏡に伴う脇板としては例の少ないものとされている。猿投神社の脇板は上縁の山形が低く、下縁の穿孔は両脇部にのみ見られる。脇楯にも3枚蝶番繋ぎのものの類例がある。

M46も脇板と考えるが、保存状態が悪かったため、結束や他品との組み合わせのための穿孔が確認できなかった。小札を取り付ける穿孔がないもので山形を作り出すものには、馬尾板や杏葉などがあるが、馬尾板で二段に作られるものは先の猿投神社の例しか知り得なかった。また、摘手甲(つまみてっこ)の指形を打ち出さないものも考え、蝶番は指側の摘との連結部としたが、やはり周囲の穿孔のないことから同定には至らなかった。脇板としてもM45と蝶番の仕様や全体の大きさが異なることから同一の鏡に付随していたとするのは難しい。

覆輪は、兜の底や鏡の胸板・脇板など様々な金具廻の周縁を縫取って、補強・装飾するものである。覆輪とした全ての破片の長さを足すと、計95cm近くなり、脇板(M45)の上縁部・側縁部を復元した長さ計32cmを大きく上回る。もう一つの脇板(M46)にも覆輪を施していたとしても余りが出るため、兜の底や鏡の胸板など別の金具廻が存在した可能性が考えられる。或いは部品として取り外していたものかもしれない。

これらの龍手や脇板は、甲冑の本体である兜・胴・袖以外の小具足に含まれるものである。本体主要部分を占めている小札がこの第Ⅲ郭からは全く出土していない状況は、革小札を用いていたか、もともとなかった可能性もある。

神戸市瑞谷城跡では、倒壊した埠列建物から13領分の胴丸が出土しており、脇板も含まれている。

また、岡山県中島遺跡で検出された中世居館址は、文献に見られる「中島城」の比定地とされており、その16世紀末に埋没した掘から、銅製の覆輪を鋲留めした脇板が出土している。鶴目(しとどめ)と呼ばれるハトメ金具も残存しているが、過半を失っている。上縁の山形が突出しており、覆輪の下端までの高さは8.5cmを測ることから本来はもっと高くなるものである。

滋賀県閔津城跡からも完形の脇板一点が出土している。一枚板の鉄板で作られたもので、18.5×9.7×1.1cmを測る。下辺には縁に沿って2列の円孔が開けられている。閔津城跡からは、15世紀から16世紀の遺物が多く出土しており、脇板は天正頃のものとされている。

喜多・城山城跡から出土した脇板は、復元長20.5×6.8×2.5cmを測り、中島城・閔津城两者よりも高さが低い。そのため草摺を綴るために円孔が高さのはば中央に設けられている。また、上縁の山形の高さも両者よりも低い。鞍部からの山形の高さは、喜多・城山城跡から出土したM45が1.7cm、閔津城出土のもので2.8cm、中島遺跡出土のもので3.2cmを測る。

甲冑の脇板の出土例には、僧兵が所持したと考えられる福井県白山平泉寺旧境内出土のものも見られ、山城や居館跡だけではない。また、平安武士の墓とされる京都府法住寺殿跡からは脇楯が出土して

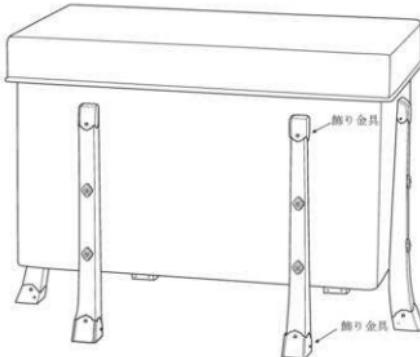
いる。この鏡1に伴う脇橋の大きさは、上幅27cm、下幅28cm、高さ9cmで、上縁の軸部での高さは5cmほどある。

このように甲冑関連の遺物は、城跡以外にも墓跡、経塚、山林寺院、屋敷跡などからも出土しており、これらの資料の図化・データ化が進めば、中近世甲冑の研究も促進されるであろう。

#### 唐櫃

M34～M37の飾り金具は、強いて甲冑と関連させれば、甲冑を保管する鏡櫃に使われていたものが想定される。一般には江戸時代以前の唐櫃は書物などを湿気から防ぐ収納具であるが、山口県防府天満宮の正長二年(1424)銘の黒漆塗鏡唐櫃の脚にも同様の金具が付属しており、15世紀代には甲冑の保管・移動に用いられたことが推測できる。

但し、喜多・城山城跡から出土した飾り金具は、釘或い



第6図 唐櫃

は鉄を打った痕跡が残るもの、他の板状の銅製品と同様、部分的に折り取られており、櫃本体の木質部が焼失した状態のままでなく、再加工・再利用の段階にある。

### 3. 出土した金属器から推定されること

出土した笠鉢や菊座には、銅製・鉄製のものがあり、銅製のものには大小が存在し、全く同じ型式で統一された作りを持つものがない。M15とM16、M28とM29のように同じ種類・機能を持つと思われる製品にも微妙な大きさや作りの違いが見られる。伝世した甲冑の鉢は、その用いられる部位によって大きさなどは異なるが、文様や形態は統一的に作られている。奉納するために作られた最も豪華な甲冑と、実戦の場におかれた甲冑とは比べようもないが、今回出土した鉢の様相は、伝世品のそれとは違つて、一つの甲冑のセットに付属したものではないようである。

また、笠鉢の削足の中にあまり開いていない状態のものがあることや、本来の組み合わせ方とは違うように組まれているものがあることから見て、組み上げられた一領の甲冑がそのままの状態で保管されていたものではない。刀の切羽金具が単体で出土していることなどから見ても、刀装具や甲冑の部品が取り外された状態に置かれていた様子が伺われる、そしてそれが整地によって散逸した可能性を考える。

さらに、別用途で作られた可能性が高い銅製品(例えば馬具など)、特に銅板を用いた部品が多く、その多くには折り取られ、切り取られた状況が観察された。銅板を別部材から取って、甲冑などの補修材料にしていた可能性を指摘できる。

これらの状況から、それは甲冑や刀装具を扱う補修・修理の工房の存在が浮かび上がる。

調査区内ではあまり強い火を使った焼土などは検出されておらず、第Ⅲ郭ではわずかに焚火程度の焼土が、主郭では炭の広がりが認められる程度であった。また、轔の羽口や炉壁、焼土塊、スラッグなども確認されていない。しかしながら銅などの鋼が溶解するほどの温度は普通の焚火や火災では得られないことから、やはり城内のどこかに金属製品特に銅製品を扱う工房が存在しており、補修用の部品などをストックして、甲冑などの補修・修理をおこなっていたものと考える。おそらく修築以前に存在し、のちに削平等を受けたものであろう。

同様の城郭内金属器工房の存在は、戦国大名の居城内（愛媛県、伊予河野氏の湯築城など）のみならず、より小規模な山城（高知県西山城など）でも確認され、南北朝期の陣城とされる三本市の吉田住吉山遺跡でも検出されている。これらの城は規模の大小があり、その城としての性格の差もあるが、供膳具や煮炊具、貯蔵具が出土するなど居住・生活の痕跡が残されており、日常的な生活が営まれていたという共通点がある。居城だけではなく長期にわたる在陣においてもこのような修理工房が設けられたのであろう。

金属器の補修・修理工房は、火所としての炉や、炭や材料の保管場所が常設されていたことが推測される。それではそこで働く工人はどうしていたのだろう。ここで思い出されるのが多可に本拠を持つ工人集団である。彼らは必要な時だけ道具を持って多可から通っていたのではなかろうか。工房に伴う道具類の出土が見られないことからも、所謂、出張修理のような形態を採っていたものと思われる。铸造では出吹きなどと称される工人の一つの生産スタイルに則った形態である。

このように山城常駐の生活において最も重要なのは飲食に関わるものであるが、次には戦時に備えての武器・武具の修理・修繕であることがわかってきた。そしてさらに精神衛生面に対応するものも必要とされたのであろう。それが茶碗・茶臼などの喫茶具や、香道具、碁石などであり、実際の発掘で常駐的な生活痕跡が強く確認できる城からは、今でいうこれらの嗜好品も少なからず見つかっており、喜多・城山城跡においてもその傾向が見える。それは決して優雅な生活を表すものではなく、また威信財とするには小型すぎるものである。不穏な時代を生きた武士たちが望んだ心落ち着く時間を演出する道具なのかもしれない。

参考として兵庫県内の城館などから出土した甲冑の一覧を挙げておくが、すべてを網羅してはいない。

#### 【参考文献】

- 徳間良彦 1981.1 「図録日本の甲冑武具事典」柏書房株式会社
- 山岸素夫、宮崎真澄 1990 「日本甲冑の基礎知識」株雄山閣
- 永井久美男 1996 「日本出土銅総覧」兵庫埋蔵銅調査会
- 第8回播磨考古学研究集会実行委員会編 2007.2 「城館からみた中世の播磨」
- 第8回播磨考古学研究集会実行委員会編 2008.2 「城館からみた中世の播磨」 第8回播磨考古学研究集会の記録
- 財古代学協会 1984.3 「法住寺殿跡」平安京跡研究調査報告第13輯
- 財愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998.3 「湯築城跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第66集
- 財愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000.3 「湯築城跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第83集
- 滋賀県教育委員会 2016.3 「閔津城遺跡」国道422号補助道路整備工事に伴う発掘調査報告書

- 岡山県教育委員会 2009.3「中島遺跡 宮南遺跡 国長遺跡 天神河原遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告221  
財)かながわ考古学財団 2011.3「鎌倉市下馬周辺遺跡見学会資料」
- 西脇市教育委員会 1992.3「播磨・水尾城跡の調査と研究」
- 夢前町教育委員会 2006「播磨置塙城跡発掘調査報告書」
- 神戸市教育委員会 2004「平成13年度 神戸市埋蔵文化財年報」
- 神戸市教育委員会 2012.3「兵庫津遺跡 第53次発掘調査報告書」
- 神戸市教育委員会 2014.3「兵庫津遺跡 第57次発掘調査報告書」
- 神戸市教育委員会 2017.3「兵庫津遺跡 第62次発掘調査報告書」
- 兵庫県教育委員会 2000.3「三田城跡」兵庫県文化財調査報告第194冊
- 兵庫県教育委員会 2004.3「小犬丸大谷遺跡」兵庫県文化財調査報告第265冊
- 兵庫県教育委員会 2007.3「加都遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第324冊
- 兵庫県教育委員会 2007.3「宮内堀脇遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第311冊
- 兵庫県教育委員会 2008.3「梶原遺跡・梅ヶ作遺跡・北山遺跡・大月北山古墳群」兵庫県文化財調査報告第342冊  
兵庫県教育委員会 2009.3「宮内堀脇遺跡Ⅰ」兵庫県文化財調査報告第365冊
- 兵庫県教育委員会 2011.3「茂利・宮の西遺跡」兵庫県文化財調査報告第370冊
- 兵庫県教育委員会 2011.3「田ノ口遺跡」兵庫県文化財調査報告第408冊
- 兵庫県教育委員会 2011.3「吉田住吉山遺跡群」兵庫県文化財調査報告第409冊

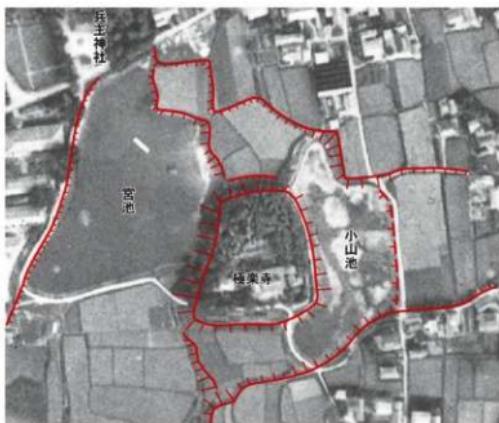
第8表 兵庫県出土中近世甲冑一覧

遺跡名	立地	住所	甲冑部位	その他の武器・道具	備考	調査主体	報告書番号	報告年
喜多・城山城跡	山上	西脇市黒田庄町喜多	鍛製甲冑小札・監板・施手・新金具	鎧板・刀・刀装具・鉢錐	勝丸13割分	兵庫県教委	兵庫県第512番	2020.3
端谷通跡	山上	神戸市西区城谷町	鍛製甲冑小札・胸板・脇板・押付板・釘・鉢錐玉・鉢錐	鍛製八枚金具・漆袴小札・草摺		神戸市教委	平成13年度年報	2004
吉田南道跡 北王子道跡	平地	神戸市西区玉津町吉田 明石市北王子町	小札・平小札	算・目貫・箭箙金具・兜前立物・盾壁金・鉢錐	方形居館	兵庫県教委	兵庫県第149番	1995
水谷城跡	山上	西脇市水毛町	算・目貫・箭箙金具・小札板	盾金具		西脇市教委		1992.3
鏡ノ城道跡	山上	加美町中区門前		真籠・刀子		中則教委		1999
猪瀬通跡	平地	尼崎市猪瀬区猪瀬	鎌状真籠		方形居館	尼崎市教委	猪瀬古V	1975
猪瀬城跡	山上	尼崎市參宮町宮置	小札・斧	刀子・真籠・鉢錐玉		夢前町教委		2001.
福田片岡通跡	平地	たつの市布景町片岡	鰐小札	刀・刀装具・刀子・小柄・鉢錐		兵庫県教委	兵庫県第97番	2006
小太夫大谷道跡	平地	たつの市市堀西町小太夫	小札	切羽	方形居館	兵庫県教委	兵庫県第285番	1991.2
宇佐御殿堀尾敷跡	平地	佐用郡佐用町宇佐福	城毛	小柄・真籠	利神城築	兵庫県教委	兵庫県第463番	2014.3
感化山城	山上	相生市久野町	小札・新留金具・盾金具・覆輪・綠金具	小柄・切羽	相生市教委	兵庫県教委	兵庫県第403番	1989
吉田往古山道路群	山上	三木市志染町吉田	小札・盾り金具	小柄・真籠	南北朝期	兵庫県教委	兵庫県第16番	2011.3
釜所城址	山上	三田市	小札・三田市			兵庫県教委	兵庫県第194番	1983
三日市城	山上	三日市天神				兵庫県教委	兵庫県第194番	2000.3
浜井清通跡	平地	神戸市中央区	小札		13~14世纪	神戸市教委	53次調査	2012.3
兵庫津通跡	平地	神戸市中央区	小札		14世纪	神戸市教委	57次調査	2014.3
兵庫津道跡	平地	神戸市中央区	小札		15世纪	神戸市教委	62次調査	2017.3
丹波田口道跡	平地	丹波市青垣町田口	伊予札		田口城築	兵庫県教委	兵庫県第468番	2011.3
但馬 宮内町筋道跡	平地	朝来市山東町東家首守 豊岡市出石町	小札	鉢錐・圓・切羽・刀・小柄・鉢錐玉	古代以前か 此陽山城築	兵庫県教委	兵庫県第342番	2008.3
						兵庫県教委	兵庫県第365番	2009.3

### 第3節 喜多・城山城周辺の城館

#### (1) 岡ノ城

西脇市黒田庄町岡（黒田荘大志野郷）。城山城の南約500mに位置する。大阪層群から成る高位段丘の開析谷が取り囲む東西約80m、南北約120m、西方低地から比高約6mの高台で、現在は極楽寺の境内となっている。高台の西方は扇状地を北から南へ開削した門柳川の旧河道で、宮池が築かれている。南方から東方、北方にかけては、段丘を開析した谷が取り囲み小山池が築かれていたが、現在は埋め立てられている。高台の内側部は、南側から東側にかけて寺院施設や庫裡が立てられているが、北側は畠地や竹藪となっており、そのなかに一辺約11mの基壇状の高まりが残っているが、城館に伴うものかはわからない。



第7図 岡ノ城復元図

(空中写真は1947年(昭和22年)米軍撮影36V-25TRS-R514-2をトリミング、拡大した)

1987年度（昭和62）の圃場整備に伴う確認調査では、高台の西辺と北東角の裾で幅1m程度の溝が検出され、北東角裾の溝は、高台の北辺裾に沿って続くことが現地形から推定された。また、道路改良工事に伴う北東角部の調査でも高台の裾に沿ってL字形に曲がる溝が検出され、城館を廻る空堀の一部とみられている。さらに、高台北面斜面も急峻で人工的に削られた切岸と考えられる。

以上のような旧地形の観察や発掘調査の成果からみて、極楽寺境内の高台は、南北約120m、東西約80m程度（平坦部は約60m四方）の方形居館とみることができる。

なお、寺伝によれば、極楽寺は戦国時代に黒田荘大志野郷地域を支配した村上氏の創建と伝えられている。岡ノ城は戦記物などには登場しないが、村上氏については、応永26年（1419）に黒田庄の代官を請け負った村上弾正忠盛弘がいる（『九条家文書』）。また、天正6年（1578）と天正7年と考えられる羽柴秀吉の村上源太宛ての書状がある（『村上文書』）。

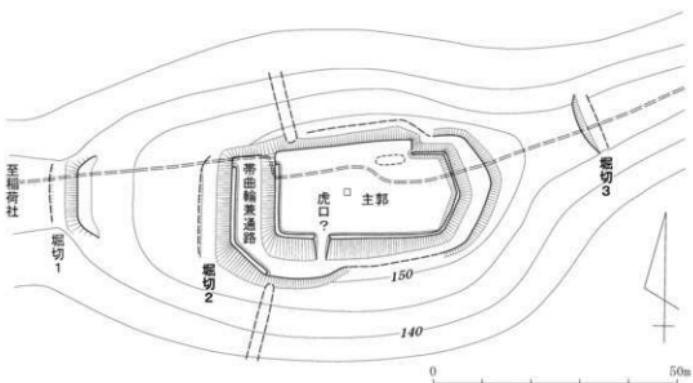
【参考文献】「黒田庄町岡地区（岡遺跡）圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する実績報告書」昭和62

年度 黒田庄町教育委員会

『多可郡黒田庄町岡遺跡』 兵庫県文化財調査報告第119冊 1993 兵庫県教育委員会

#### (2) 蟻生城

西脇市黒田庄町福地（黒田荘大志野郷）。岡ノ城の南約1kmに位置する。城郭遺構は標高476mの三角点山から西方に派生する尾根上に立地する。眼下には加古川本流とその氾濫原が広がる。山容はあまり急峻ではなく、主郭部の標高154m、平地との比高74mを測る。



第8図 蟲生城縄張図

城郭造構は小規模な単郭ではあるが、よくまとまっている。主郭は幅20m、長さ35mで、ほぼ長方形の平面形である。北面を除く三方に低い土塁を巡らせるが、東方尾根筋に面する土塁は比較的規模が大きい。南辺の中央西寄りに平入虎口がある。また、北東隅には目的は不明であるが、クラシク状に折られた部分がある。主郭の東西には主郭との比高2~3mの帯状の曲輪が腰曲輪状に取り巻くが、本来は主郭を全周する帯曲輪兼通路であった可能性が高い。このうち、西側には低い土塁が設けられ、切岸下には浅い堀切2の痕跡がある。また、曲輪の幅も他の部分より広く普請も丁寧である。主郭部から東西尾根上には、やや離れて浅い堀切1・3が掘られている。西側の堀切1の内側には小規模な曲輪が付く。以上のように、蟲生城は防御機能は乏しいが、主郭部はコンパクトにまとめた城郭である。なお、蟲生城に関する確かな史料はない。

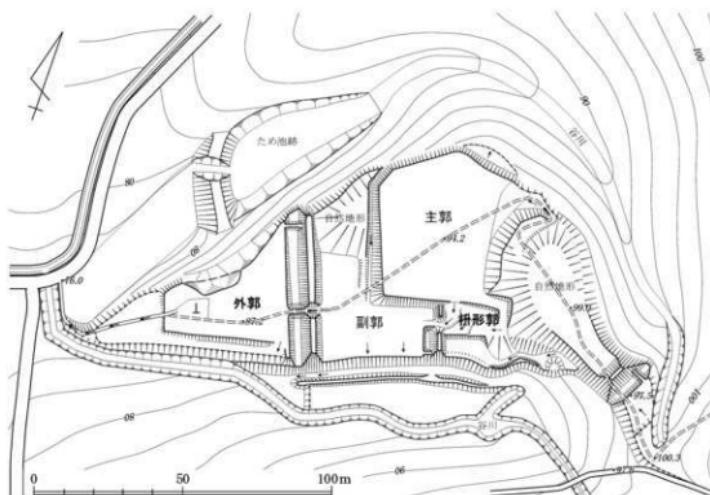
【参考文献】『播磨・水尾城跡の調査と研究』 西脇市文化財調査報告書3 1992 兵庫県西脇市教育委員会

### (3) 福地城

西脇市黒田庄町福地（黒田荘大志野郷）。蟲生城の南方約300m、福地集落奥地区の東方山麓に所在する。城の立地は、背後（東方）に標高457mの三角点山がそびえているほか、北方が蟲生城の築かれた尾根、南方が中世黒田荘と比延莊を画する伊勢山に塞がれ、展望がきくのは西方の加古川とその氾濫原のみである。

福地城は谷の奥から広がる急傾斜の扇状地を開析した2本の谷川に挟まれた尾根状地形の全体を使用して築かれ、その規模は長さ（東西）約200m、最大幅（南北）約110mを測る。

大きく4箇所の曲輪で構成され、主郭と考えられる曲輪は、南北約45m、東西約40mの五角形で、内部は丁寧に普請されている。背後の尾根は主郭よりも5mほど高い尾根筋で、常識的には主郭を設けるべき場所であるが、ほぼ自然地形で、加工はほとんど行われていない。ただし、城郭の東端は土塁と開口部閉塞土塁付の堀切で防御を図っている。主郭の西から南へかけては、最大高低差3mの切岸下に幅17~22mのL字形の副郭をめぐらせるが、北端には自然地形が残る。副郭南辺の切岸下には土塁付の横



第9図 福地城縄張図

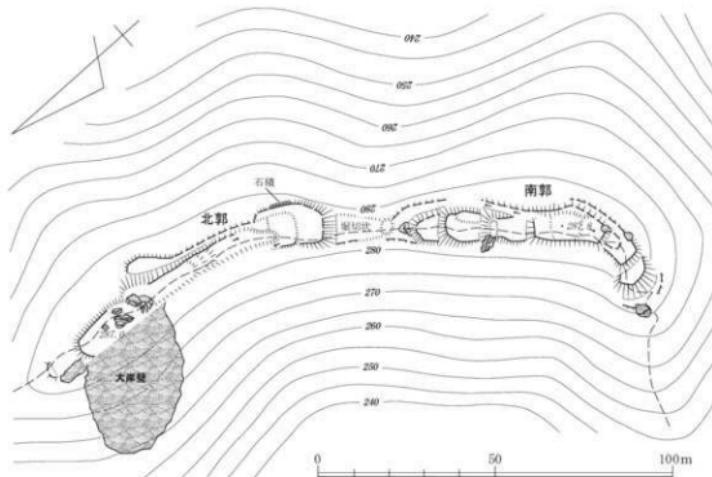
堀を設けて防御を図っている。また、主郭との間には溝状の痕跡が認められることから、あるいは主郭との間に横堀を設定しようとしたのかもしれない。副郭の東側の構造は特異で、平入虎口の両側に食い違いの土塁付空堀を設定し、空堀に開口部閉塞土塁を設けるなど、厳重に防御が図られている。内側の空間は南北約18m、東西約22mあるが、南方向に傾斜し、内部も凹凸があることから未加工に見える現状である。しかし、南辺には土壘状の痕跡があり、北端には1折れして主郭へ入るような通路状の痕跡が認められる。以上の観察から、この空間は樹形郭と考えられる。

城郭の正面方向、副郭の東辺には、長さ約55mの直線土塁が設けられている。土塁は基底幅約4m、上面幅約2.5m、高さ約1.5mで、前面に上面幅約5.4m、底幅約3m、深さ約1.2m（いずれも現状）の空堀を設けた長間の土塁付空堀である。空堀の北端には、ここにも開口部閉塞土塁が認められる。南端から約3分の1の場所に土橋を渡る平入虎口があり、内外の高低差は約2mを測る。事実上の大手虎口であろう。

虎口の前面は長さ約40mほどの三角形を呈する外郭がある。南側と北側には切岸が認められる。内部は平坦ではあるが、削平は不十分である。おそらく、駐屯地機能を有する曲輪であろう。

以上のように、福地城は、長間の土塁付空堀や横堀、食い違い虎口や開口部閉塞土塁、さらに樹形郭など、播磨の戦国期城郭としては、きわめて進んだ防御機能を有している。しかし、眺望が利かない立地や未加工と思われる部分があること、蟲生城との関係、戦記物を含めて史料が全くないことなど、その築城起因には不明な点が多くある。

【参考文献】岸本一郎「三木合戦前の北播磨の城郭」『ひょうご考古』第2号 1996 兵庫考古研究会



第10図 比延山城縄張図

#### (4) 比延山城

西脇市比延町・鹿野町字城山（比延莊）。比延山城は『播磨國風土記』託賀郡都麻里条に記された「比也山」に比定される比延山に築かれた山城である。比延山は平地との比高約220mで、2つのピークをもつ南北約150mの山頂を有するほぼ独立山である。西麓に加古川に沿った丹波・但馬と通じる街道、北麓に丹波篠山を経て京都に通じる街道、南麓に播磨清水寺を経て丹波・揖津へ通じる街道などが通じるなど交通戦略上の要衝である。

曲輪は急峻で細長い山頂の2つのピークにかけて連郭式に築かれており、延長は約150mを測る。2箇所のピークを中心とする北郭と南郭に分かれ、両者の間は幅約20mの堀切状となっている。また、北郭の北方約30mの尾根上にも不明瞭な曲輪が存在する。

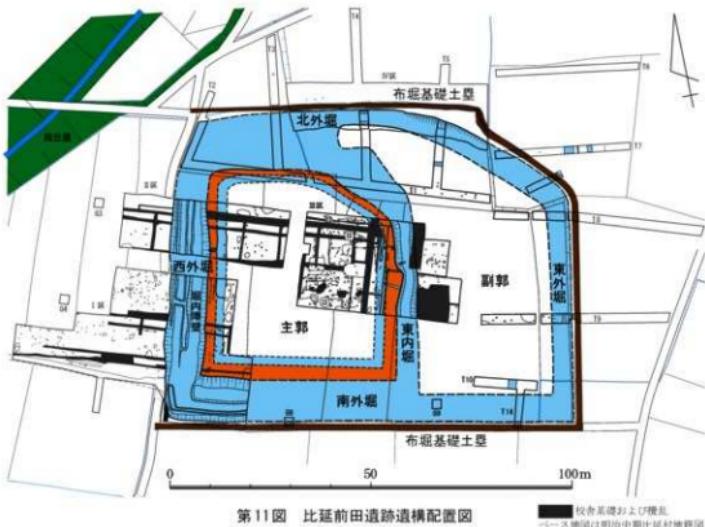
北郭は岩盤の露出する最高地点から2～3段の曲輪が認められるが、曲輪は自然地形をわずかに加工した程度で、内部の削平、切岸の造成ともにきわめて悪く、防御機能は乏しい。しかし、南郭に近い曲輪の東側には石積みが認められるほか、東斜面には腰曲輪も存在する。

南郭は山頂の主郭から北（北郭方向）へ3段、南へ2段の曲輪が造成されているが、北郭にくらべて曲輪がまとまり、切岸もはっきりしている。また、通路状の痕跡も認められる。しかし、曲輪の面積は小さく削平も不十分で、虎口もはっきりしない。なお、城山の大字は、合併以前は比延町と下比延村であったことから、比延山城は『赤松家播磨作城記』の「下披絵城」であろう。

【参考文献】『鹿野宮ノ前遺跡・比延前田遺跡Ⅲ』 西脇市文化財調査報告書第14集 2004 西脇市教育委員会

#### (5) 比延前田遺跡（三の丸）

西脇市比延町字前田（比延莊）。加古川を望む比高9mの中位段丘端に位置する。現在ほぼ全城が市立比延小学校の敷地となっているが、地元ではこの付近を「三の丸」と称している。小学校の改築と周辺



第11図 比延前田遺跡遺構配置図

の調査整備に伴い4回にわたる発掘調査が行われ、その概要が明らかとなっている。

居館は複郭構造の方形居館で、全体規模は東西約100m、南北約80mの1町四方の規模が復元できる。また、居館の東北角は長さ約30mにわたって鬼門除けの角落としが行われている。このうち、主郭は一辺約50m（堀の内側）の方形、東に取り付く副郭は、その北半分の構造が明らかではないが、およそ南北約70m、東西約45mの規模に復元できる。主郭内の周囲には土壘と排水溝がまわっているが、副郭内については不明である。また、主郭や副郭の内部では多くの柱穴や井戸、土坑などが検出されたが、建物配置を復元するには至っていない。

堀幅は、南外堀と西外堀と北外堀の西部で約10m、主郭・副郭間の東内堀が約5m、東外堀と北外堀が約4mを測る。東内堀は箱堀であるが、西外堀と南外堀の底には、いわゆる障子堀状の堀内壁塗が掘られているほか、東外堀は急峻な築堀となっている。さらに、北外堀、東外堀、南外堀の外側に二重の布堀基礎がある。布堀基礎は幅20~40cmで、堀の外肩に沿って0.9~1.2mの間隔で平行する。布堀基礎には太さ10~15cmの丸太杭を5~15cm間隔で打ち込んでいる。この布堀基礎は居館の西辺を除く三方に廻らされていたことを確認しており、その延長は約340m、使用された杭は約13,600本と推定している。

この布堀基礎に関しては、2条の布堀基礎が細部まで平行していることから、一定の間隔を必要とした設備であること。打ち込まれた杭の密度が高く、しかも二重に設けられており、柵とするには頑丈すぎること。外側と内側の布堀基礎の間隔が狭く、また、堀との間も通行できる間隔がないことなど、二重の柵とは考えられないことから、土塁状の土塙と考えている。構造としては、杭を打ち並べて木や竹の横木を渡し、内側に堀の掘削などで生じた土砂を入れた構造が想定される。土塁は通常堀の内側に築かれるが、比延前田遺跡は、北外堀、東外堀の堀外は居館内部よりも高く、堀外から城館の内部が見下



第12図 西脇城跡地籍図

ろせる地形である。そのために、外堀の堀外に土塹を設けて居館の内部を見透かされるのを防ぐとともに、堀の外側に土塹状の土塁を築くことによって、堀の法高を高くしたのではないかと考えられる。

出土遺物は、14世紀から16世紀末までのものがあるが、15世紀後半から16世紀後半のものが主体を占める。比延前田遺跡に関する歴史的史料はないが、南103m（1町）には住吉神社があり、こちらも中世には幅1.5m、一辺56mの溝を方形に巡らせる。しかも、居館の西外堀と神社の東溝が一直線になることから、両者は一定の計画の下で普請されたことが考えられる。居館の存する比延莊は住吉神社領で古代檍鹿袖山に含まれる地域である。天正6～7年と考えられる羽柴秀吉の書状や天正8年、同11年の秀吉代官の寄進状や安堵状は、住吉神社宮坊や宮坊主宛に出されており、住吉神社が比延莊の政所であったと考えられる。比延前田遺跡の居館も中世住吉神社との関連で考えるべきであろう。

【参考文献】『比延前田遺跡』 西脇市文化財調査報告書第8集 2000 西脇市教育委員会  
 〔比延前田遺跡Ⅱ〕 西脇市文化財調査報告書第9集 2001 西脇市教育委員会  
 〔鹿野宮ノ前遺跡・比延前田遺跡Ⅲ〕 西脇市文化財調査報告書第14集 2004 西脇市教育委員会

## （6）西脇城

西脇市上野字芝添（這田莊黒田郷）。西脇城は中位段丘端に築かれた居館である。居館の位置からは、南方に広がる条里遺構が残る低位段丘上の耕作地を一望することができたが、現在は市街地が広がり、居館跡や条里遺構はまったく見ることができなくなった。



第13図 坂本城跡測量図

居館跡は、かつては「城の垣内」と俗称される場所にあり、明治期に作成された「上野字限地図」で遺構を明瞭に知ることができる。それによると、城は東西約110m、南北約100mを測る方形居館で、南面は比高約6mの段丘崖に、西面は比高4~5mの谷に面し、東には幅10mを測る空堀跡と考えられる細長い水田が残っている。段丘側となる北面には東西方向の幅6~7mの細長い畠とその中央に幅5mほどの林地があることから、空堀の中央に土橋を設けた虎口が想定される。居館内部は東西約90m、南北約85mで、内部は畠となっていることから、用水を引き込めない微高地であったことがうかがえる。また、居館内部の周囲には幅4mほどの帯状に山林・草地が残っていることから、土星を廻らせていたことが考えられる。西脇城に関する確かな史料はないが、当地方では規模の大きな居館であり注目される。

【参考文献】『野村構居遺跡Ⅱ』西脇市文化財調査報告書6 1997 西脇市教育委員会

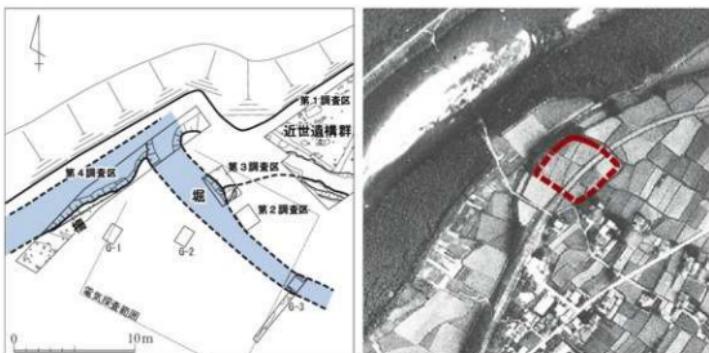
### (7) 坂本城（竹ヶ谷城）

西脇市坂本字竹ヶ谷。加古川本流の津万平野（這田莊津万郷）と加古川支流杉原川の日野平野（富田莊）の境にある標高260m、平地との比高約190mの「城ヶ辻」と呼ばれる山頂に築かれた延長約50mの小規模な山城跡で、東山麓には藤原期の十一面觀音を本尊とする西林寺がある。

遺構は高低2箇所の削平段から成り、堀や土塁といった防御設備は全く存在しない。主郭は幅11m、延長26mで南東角付近には幅8mで約3m突出する部分があり、この突出部から南方向の切岸に低い石積みが何か所か認められる。また、突出部から副郭へ向かって通路がのびていることから、この突出部は1折れる袖折れ虎口である可能性が高い。副郭は幅7m、延長16mを測る。現在、主郭との間は比高約2mの緩やかなスロープとなっているが、本来は切岸であったと思われ、主郭との連絡は、南東角から主郭虎口への通路を使用していたと考えられる。

坂本城は、平成18年に防災無線中継所と散策道に伴う東屋建設に伴い、一部が発掘調査された。調査では、建物跡などは検出されなかったが、輸入銭や染付碗、土師器の小皿の小片が出土している。いずれも細片で時期の推定はできない。

坂本城は2つの莊園の境界に築かれている。これは、坂本城の築城主体者が両方の莊園に実効支配力を有することを意味する。坂本城は史料には登場しないが、物見を目的とした砦と考えられる。



第14図 黒田橋江遺跡遺構配置図・全体復元図

(空中写真は1947年(昭和22)年米軍撮影38V-25TRS-R514-2をトリミング・拡大して使用した。)

### (8) 黒田構江遺跡（多田構居）

西脇市黒田庄町黒田字構江（黒田莊）。黒田地区は広大な古期扇状地上に開けた集落である。居館はこの扇状地が加古川によって削られ段丘化した突端に位置し、旧河道との比高4mを測る。

1995年に県営住宅の建設に伴って発掘調査と電気探査が行われ、居館を取り巻くと考えられる堀やそれにともなう柵列などが発見されている。堀は段丘崖側となる西面と北面2箇所で検出され、北面の堀は幅約6m、深さ約4mで、電気探査によって延長35m以上を測っている。西面の堀では堀の内側に柵列が検出されている。調査範囲が限定されたことから、居館内部の遺構については不明である。居館の全体規模は、JR加古川線の東側に四角く低い水田が存在したことから、これを堀の痕跡と考えると、一辺50m程度と考えられる。なお、黒田構江遺跡は、現在の小字は構江であるが、江戸時代には「多田」という地名があったことから、「播磨鑑」にいう「多田構居」であろう。

なお、「播磨鑑」などでは多田構居は黒田城とともに、黒田官兵衛の祖父黒田重隆を城主とするが、確実な史料は見つかっていない。

【参考文献】『県営黒田住宅建設に伴う黒田構江遺跡発掘調査実績報告書』1995年度 黒田庄町教育委員会

### (9) 黒田城、石原城、喜多村構居、鳥村城

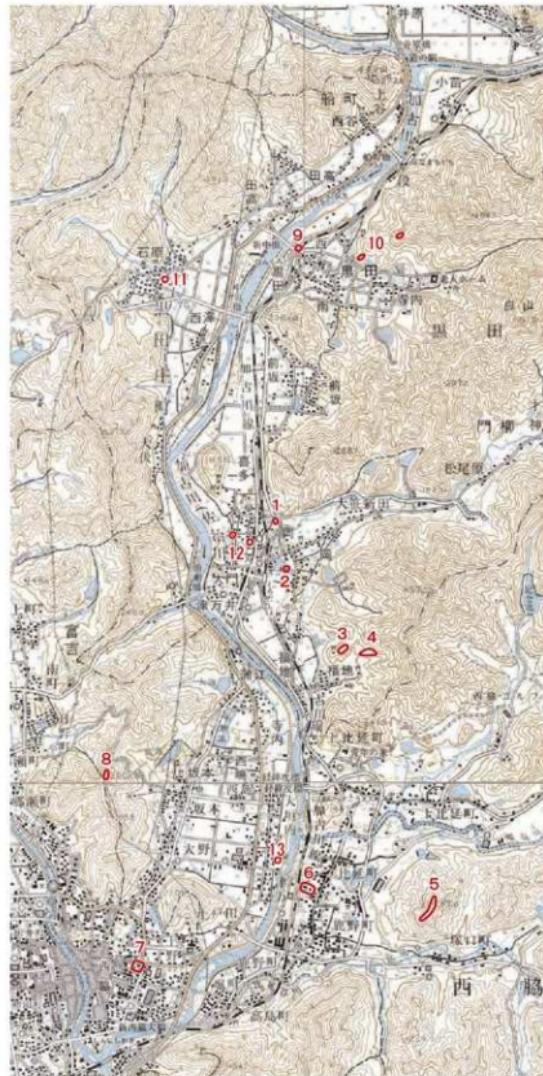
#### 黒田城

黒田城は、多田構居の西約600mの小字「城山」にあったといわれている。城山稲荷が鎮座する尾根とそこから尾根続きの山頂部が城跡とされる。稲荷神社部分は境内の整備により城跡の痕跡を思わせる地形は残っていない。北面の斜面に帶曲輪状の遺構やその北端には壘塹状の地形があるが、城郭遺構とするには疑問がある。また、南面の斜面にも城郭遺構を思わせる地形はない。山頂部についても、緩やかな地形とはなっているが、城郭遺構を思わせる地形ではなく、一部土橋状の地形も境界土壠である可能性がある。さらに上部の山頂に人工的に削平した部分があるが、麓の莊嚴寺の修験や雨乞いのための護摩焚き場であった可能性もある。黒田城は、「播磨鑑」や「播陽古城記」に掲載されているが、確かな史料はなく、その遺構についても現状観察からは不明と言わざるを得ない。

## 石原城

石原城は加古川西岸の石原集落内にある。石原集落は西方の西ノ塔谷や野尾谷が形成した扇状地上に立地し、扇状地の前面は加古川の旧河道が網の目のように広がる。居館のあった場所は現在よくわからないが、天和3年(1683)に成立した紀行文『千草日記』に、作者が姉の住む石原村を訪れる際に「夕くれはおいなどともひうしろの山にのほるに、あねのみ給ふところはむかしの城をやしきになして、堀などもはしはしこる。土手もなをくづれもやらで、かたへには川ながれたり」と残しており、石原城が江戸初期には堀や土塁を残していたことがわかる。この記述から石原城跡の位置を推定すれば、小字「中烟」の一角で薬師堂南の方分区画が並ぶ場所である可能性が高い。石原集落は方形の地割がよく残っており、これを基礎にすれば、規模は一辺50m四方と思われる。

なお、この東側は加古川の氾濫原で小字「竹



第15図 城山城周辺の城館跡（伝承地含む）

(国土地理院 5万分1地形図「生野」「篠山」「北条」「三田」を使用)

- 1 城山城
- 2 間ノ城
- 3 藤生城
- 4 福地城
- 5 比延山城
- 6 比延前田遺跡
- 7 西脇城
- 8 坂本城
- 9 黒田横江道跡
- 10 黒田城
- 11 石原城
- 12 喜多村構屋
- 13 島村城

ヶ鼻』である。

石原城の城主は石原氏とされる。史料の検討から、石原氏は後藤氏の一族で鎌倉時代より在京する武士であり、給分地である黒田庄石原村を本貫地として苗字とし、居館も造営したと考えられている。

【参考文献】 依藤保「祇園執行日記に見える石原氏」『歴史と神戸』168 神戸史学会

#### 喜多村構居

喜多村構居は、喜多集落の小字「中所」の現在のJAみのり黒田庄支店付近にかつて「やしき跡」と呼ばれた竹藪があり、現在ここが構居跡だとされている。ところが、同じく中所の西端、加古川の旧河道を望む高低差約5mの段丘上に、明治42年当時、かまい藪（かな藪）と呼ばれた面積約3反の竹藪があった。竹藪は一段高くなってしまっており、中は平坦で四周は高くなっていたらしい。また周囲は溝のように低くなっていたという記録がある。かまい藪はまさに土堀と堀を廻らせた居館跡の形状を示している。さらに、加東市以北の加古川沿いの居館のほとんどが加古川を望む段丘上に、一辺を加古川に接した形で作られている事実がある。これらの点から、喜多村構居は、現在いわれているJAみのり黒田庄付近ではなく、加古川を望む段丘上のかまい藪が遺構であった可能性が高い。かまい藪は現在なくなっているが、面積から推定すれば、一辺約54mの居館であったことが復元できる。なお、喜多村構居は『播磨鑑』や『播城志』に記載されているが、確かな史料はない。

#### 鳴村城

鳴村城は、西脇市島字城が推定地とされているが、字の地域は加古川の旧河道や氾濫原で居館が作られた場所とは思えない。付近で可能性があるとすれば低位段丘上の小字「曾根」または「大将軍」であるが、居館を思わせる地割などは認められない。また、史料・地元伝承などは残されていない。

ところで、古城記の類は、鳴村城の城主を備前三石城主浦上村宗の臣下、鳴村彈正左衛門尉貴則とし（『播磨鑑』）、大永年間に播磨国野里合戦で、浦上氏のもとで赤松氏と戦い敗死した（『播磨古城記』『播州古城記』）としている。また、『赤松家播磨作城記』には印南郡平津庄の鳴村之城、鳴村彈正左衛門尉盛貫、居城赤松義祐長臣天正年中破城也と記している。さらに、鳴村・播州（住）なる人物が赤松幕下同郎従宗徒侍として挙げられている。西脇市（這田莊津万郷）の鳴村城の鳴村貴則と印南郡平津庄の鳴村之城の鳴村盛貫との関係はどうなのであろうか。

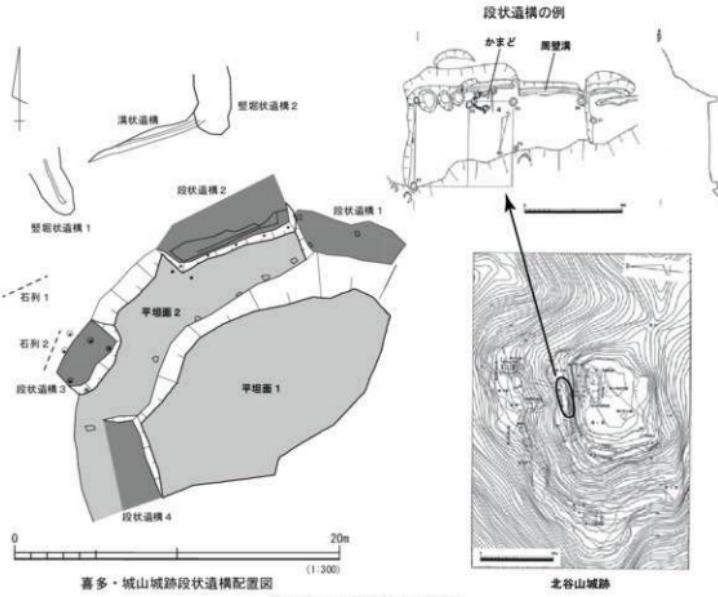
## 第4節 喜多・城山城跡における段状遺構

### 1. はじめに

喜多・城山城跡の発掘調査において段状遺構<sup>(1)</sup>と呼ばれる簡易な建物痕跡4カ所（段状遺構1～4）が検出された。同様の遺構は近年の中世山城の調査においてしばしば検出されているが、研究の上ではあまり関心をもたれることがなかった。しかし、同遺構の存在は曲輪未形成の山城の分析に重要な役割を果たすことをかつて指摘した（山上2002a・b）。

段状遺構が検出される山城では山頂曲輪を未形成のまま残すものがしばしば見られるが、この種の遺構は戦国時代前半（15世紀中頃～16世紀前半）以前に多く確認できるもので、曲輪未形成山城<sup>(2)</sup>と呼んでおきたい。その一方で山頂曲輪が造成されるいわゆる通常の遺構（本来は通常の山城構造であるが本稿ではあえて曲輪造成城郭と呼称する）についても斜面などに段状遺構が検出される事例があるが、こういった遺構の多くは曲輪造成が不完全な部分に確認された。このことから山城において山頂の曲輪造成の普及および範囲の拡大と段状遺構の存在は相関関係にあると考えた。このため曲輪造成を行う山城が一般化するとされる戦国時代後半（16世紀中頃～後半）以前は、山頂あるいは尾根上の曲輪に未形成の場所が多く存在し、この部分に施設が立地する場合、段状遺構が構築されることになるとえたのである。このことから、曲輪の未形成（未造成）→造成への漸移的な構造の変遷を想定して、城郭構造の変遷過程として説明したのである。

ところで、現在の城郭研究は戦国時代末期および織田系城郭などの防御施設あるいは防御のための構



第16図 段状遺構と配置図

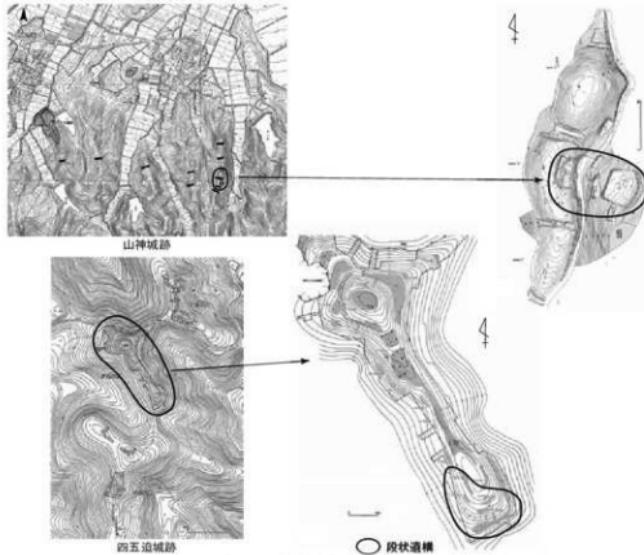
造から廻及させて古段階の遺構を解釈することが多いが、古段階特有の構造の存在については研究が低調で千田嘉博・中井均らの切岸に対する指摘（千田2000、中井2014）などを除くと、その表現に簡素・簡易・未成形などの言葉が多用されるとおり、具体的には漠然とした印象が拭えない。古段階特有の構造について、新たな視野での研究が望まれるが、微細な痕跡しか残さない山城構造からは、手がかりとなる視点が見えてこない現状にある。

こういった問題への取り組みとして筆者は先の検討によって山頂の曲輪が山城の防衛・駐屯のための唯一の居場所であるという認識に再考の余地があることを指摘した。そして古段階の遺構では城内駐屯時の居所が山頂あるいは尾根上ではなく、風雨などの影響を避けて斜面あるいは谷地形に降りた場所に設置されることが多いことを事例によって検討した<sup>(3)</sup>。これは山頂曲輪のみを居所と考えてきたこれまでの通説に警鐘を与えるものだが、段状遺構の立地が居所明確の上で重要であることも同時に明らかにした。

このように城郭史に関わる問題として段状遺構に着目したとき古段階の城郭構造の解明に大きな役割を果たすことが見込まれるのである。

## 2. 曲輪未形成山城と段状遺構

先ず、古段階の城郭構造について以前に筆者が検討した内容を確認しておきたい。（山上2002-a）曲輪造成山城の場合、山頂や尾根上が戦闘時の防衛の場所であり、同時に非戦闘時の駐屯場所になるので、城兵の居所機能は1カ所に集約される。これに対して、曲輪未形成山城の場合は生活痕跡が山頂ないし尾根上に検出できず斜面ないし谷中にあることが段状遺構の検出からしばしば認められる。これは

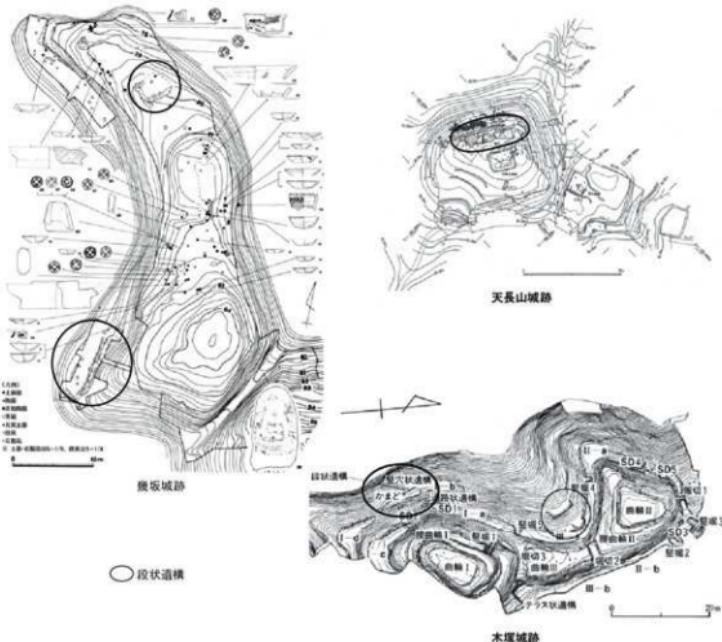


第17図 広域城郭の段状遺構

戦闘時の防御のための場所と、非戦闘時（ただし臨戦態勢での）の居所が異なる事を示しており、機能が分化した二元的な構造を持つためであるとして、戦国時代前半以前の山城の居所構造が異なることを述べた。

しかし、これに対して小丘陵で斜面が急傾斜の喜多・城山城跡のような事例では駐屯地となる場所が限定されるので、このような場合は山頂の曲輪縁部（多くの場合は曲輪端）に段状造構が築かれるパターンがあり、喜多・城山城跡もこの事例にあてはまる。しかし、山上2002-aではその点について検討できていなかった。過去の事例を振り返ってみても四五迫城跡（広島県福山市、新市町教育委員会1992）、山神城跡（三重県玉城町、三重県教育委員会1992）などのように、二元的な構造を持つ山城は比較的広域・大規模な山城が多い傾向があるが、小規模山城の場合は山頂縁部に段状造構が検出される事例が目立つ。ただし、山頂に段状造構が検出されるといつても多くの場合は山頂の窪地や、斜面に一段下がった場所が多いので、以前の検討ではこのことを二元的な構造が原理となっていると解釈した。しかし、喜多・城山城の事例から見てもわかるとおり山頂部に段状造構が築かれていることは明らかで、造成の不徹底が段状造構を構築する要因となったのであり、居所の構築原理の差ではない事は明らかである。このため小規模城郭の場合の構造については新たに検討する必要が出てきた。

そこで改めてこのような事例について事例を精査すると16世紀前半～中頃の幾坂城跡（京都府京丹後市、大宮町教育委員会1998）や天長山城跡（山口県萩市、山口県教育委員会1992）、岡山県の14世紀代の苦田



第18図 小規模城郭の段状造構

ダムに伴って調査が行われた河内城跡・城崎城跡（岡山県苦田郡鏡野町、岡山県文化財保護協会2003）、14～15世紀代の曲輪未形成山城（主郭などの尾根上の曲輪）である木塚城跡（高知県高知市、春町町教委員会2004）などで山城の山頂脇に段状造構が見つかっている。これらからその存続期間を見ると、14世紀の苦田ダムの事例から16世紀の幾坂城跡や天長山城跡まで長期間に渡って存在する事がわかる。

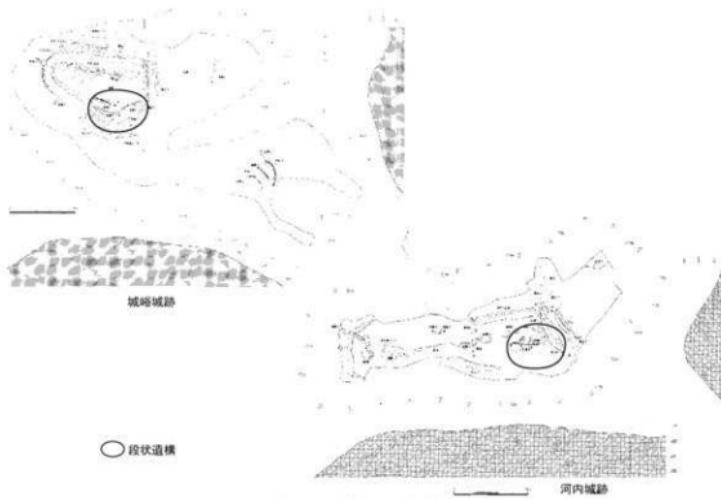
さらに河内城跡・城崎城跡や木塚城跡などでは主郭斜面をやや下った場所に帯曲輪ないし小規模な横堀状の防御施設が発達するが、山頂は自然地形を残したままとなる。特に木塚城跡では山頂（主郭など）は全くの自然地形だが山頂曲輪の周間に帯曲輪を数条回続し、前面の切岸を造成によって急傾斜にした構造を持っており、古段階の遺構の特徴と見ることができる。

いずれにしても、「防御拠点」、「駐屯地」の二元的な構造を持つ比較的大規模な山城に対して、小規模山城では切岸・帯郭を防御施設とし、山頂縁部に段状造構を設ける曲輪未形成山城が広く分布することは確かなようである。

### 3. 喜多・城山城跡の段状造構

喜多・城山城跡の段状造構について、ここでは本稿の記述に必要な点を述べる。先ず、段状造構についてであるがこの種の遺構の構築にあたっては基本的に山側の岩盤を掘り削りて長方形に平坦面を加工する。段状造構3ではこの盛土前面に土留のための石列2が構築され、柱穴の検出から内部に掘立柱建物が建った。また、柱穴が検出されない他の段状造構については根太を用いた簡易な建物が建った可能性が高い。こういった特徴は他の事例と比べて一般的なものといえる。

次に、同城の構造変遷の中で段状造構を見ておきたい。調査によって同城では3時期の構造変遷が想定できる。最終段階は上層造構で山頂域に曲輪I・IIが構築される時期である。この前段階が下層造構の段階となるが段状造構が構築される最下層と、これを埋設して平坦面2が造成される段階の2時期が



第19図 美作の段状造構

あると考えられる。これについては図版11・12の観察によって段状造構2を埋め立てて、(図版12の17・19~25層)平坦面2前方に同一平坦面を構築する状況から想定が可能である。これは平坦面2の削平平坦面の範囲が切岸斜面に面していないことから考えても頷けるものである。また、段状造構は緩斜面に建物を建てる必要から構築されるが、平坦面2と併存した場合は段状造構がそもそも必要ないはずで、このことを見ても平坦面2の前方が盛土によって迫り出していた(下層に段状造構2)と考える方が合理的である。以上の点から下層造構は2時期あると見ておきたい。

この3時期の山城の構造は、最終段階である上層造構面が削平および盛土によって曲輪面を確保するので、曲輪造成山城と評価できる。下層造構の内、平坦面1・2で構成される段階も曲輪を造成するのでやはり曲輪造成山城としていいだろう。一方、最下層の段階は平坦面2がないので斜面に段状造構が築かれるが、平坦面2がないことによって平坦面1の切岸がない状態となると、周囲に造成土が見られないことから山頂が自然地形であった可能性が高い。以上から曲輪未形成山城であった可能性が高い。つまり同城では最下層の段階が曲輪未形成山城で、以後は曲輪造成山城へと変遷したと考えられる。

さらには付言すると上層造構は山頂曲輪を形成し、被攻撃面である北斜面の切岸を造成して急傾斜とし、中段に腰曲輪を構築して近距離で敵を攻撃する足がかりを確保する。また主郭東脇には土塁(内壁石垣)で閉鎖した小曲輪を構築する。ここが駐屯機能を担ったと思われるが、これは最下層の段状造構が分散的に担った機能をこの場所に集約したと考えていいだろう。

下層造構の時期は出土遺物より15世紀中頃～後半とされ、遺物量などからみると山城としては顕著な生活痕跡を残している。一方、上層造構は主郭の盛土造成や第Ⅲ郭の土塁などの構築から曲輪形成山城となるため、戦国時代後半を想定したいが、この時期の遺物の出土がないため具体的な年代は不明である。また、これに伴う生活痕跡が希薄であるので短期間で廃絶した可能性が高い。

一方、下層造構にはこの他、北斜面に2本の堅堀がある。この堅堀は曲輪直下で堅堀間を横堀で連結するが、上面を大きく削平され痕跡のみが残されていた。この造構は造成土によって埋設されるので下層造構に位置づけられるが、切岸が迫り出す平坦面1・2の段階より以前、最下層の段状造構に併存するもの可能性が高いだろう。

山頂城から少し離れた場所に構築されたこのような堅堀の特徴は先の河内城跡・城崎城跡などにも近いが、喜多・城山城跡の場合は小規模な単位で築かれていた。あるいは後世の造成によって削平されたために他のものが喪失した可能性も残される。

以上の通りであるが段状造構と城跡の構造についてまとめると、喜多・城山城跡では曲輪未形成山城(最下層造構)→曲輪形成山城(下層上面および上層造構)という構造の変遷をたどること。最下層造構では山頂縁部に段状造構を構築して駐屯地を確保し、斜面に対して堅堀を持つ簡易な構造であった。主郭の造成は後世の山神を祀った小祠の影響も考えられるが、段状造構の存在と平坦地2の未構築から見ると曲輪縁辺の造成には消極的で、建物などの施設毎に段状造構を構築せざるをえない構造であったと思われる。

#### 4. 曲輪未形成山城の展開

喜多・城山城跡の下層造構において15世紀に曲輪未形成山城の段階が存在し、最下層に段状造構が検出され、その後曲輪造成山城へと変遷したことが明らかになった。また、この山城は小規模城郭であり、斜面が急傾斜となる地形のため、段状造構は斜面ではなく山頂周縁の傾斜地形に構築されていた。

なお、喜多・城山城跡の最終段階が曲輪造成される構造へと変化した事実は、同一山城の中でこの種の変遷を明らかにする初めての成果となった。この事実は、これまでの想定を明らかにする上で貴重である。同様の事例では前述の木塚城跡でも2回以上の改修が行われるが14~15世紀の山城である同城では曲輪未形成構造のまま維持されており、城郭史における変化を知る上では今回の方が大きな意味をもつ。

ただ惜しまれるのは当城の変遷過程から見ると15~16世紀前半以降にこの構造の変化があったことは確実であるが、もう少し正確な時期を抑えられなかつた点である。これまでの検討では16世紀中頃には曲輪造成山城が出現し始めるとしてきたが、これよりも以前に構造の変化が見られたのかどうかについては確定はできていない。今後、事例の増加を待って検討したい。

最後に文中にも記したが現在の城郭研究において戦国時代前半以前の造構研究が具体性を欠くのは、これまでの研究が曲輪構造を戦国末期の姿を固定的に捕えていたことに問題があった。今後の戦国時代後半（16世紀中頃）以前の城郭構造の把握には防御施設構造の他に、主郭（山頂・尾根上）が曲輪未形成構造であるかどうかや、居所と駐屯地の機能分化、段状造構の把握などの視点も重要な検討要素となり、こういった視点を加えることで構造解明が進む可能性があるのではないだろうか。喜多・城山城跡の調査はそのことを考える上で重要な示唆を与えてくれる。

註)

1. 段状造構は建物の造成基礎を確保するための平坦面を指して用いた。従って、この用語は腰曲輪や帯曲輪、あるいは城道として構築された平坦面とは異なる。
2. かつて筆者は（山上2002）においてこの種の造構を曲輪未形成造構と呼んだが、傾斜面を持ち段状造構が存在するのは山城に限定されるので、本稿以後は曲輪未形成山城と呼称する。この造構は防御施設の痕跡のみで曲輪面の平坦化が不十分な造構を指す。ただし、城郭の外郭や付属曲輪などに自然地形を残す城郭も多いが、こういった山城でも山頂あるいは尾根上の中心曲輪（主郭など）が造成され曲輪形成が行われるものはない。
3. このような立地を山寺との関係とする考えが多いが、すべてを山寺との関連で見てしまうことには山上2002-aで示したとおり反対である。

#### 引用文献

- 山上雅弘2002-a 「16世紀前半代の中世山城の構造について」『村田修三先生退官記念論集』
- 山上雅弘2002-b 「第1節 朝日城跡の段状造構」『中郷朝日遺跡群』豊岡市教育委員会
- 千田嘉博2000『織田系城郭の形成』東京大学出版
- 中井均2014『切岸』『中世城館の考古学』高志書院
- 岡山県文化財保護協会2003『苦田ダム建設に伴う発掘調査1』
- 広島市教育委員会1986「北谷山城跡発掘調査報告書」
- 京都府大宮町教育委員会1998「幾坂古墳群・幾坂経塚・幾坂城跡発掘調査概報」
- 山口県教育委員会1992「天長山城跡」
- 新市町教育委員会1992「四五迫城跡 - 大佐カントリークラブ(仮称)」建設に伴う埋蔵文化財調査
- 三重県埋蔵文化財センター1992『埋蔵文化財調査報告 - 第2分冊 - 泉賀窯跡 山神城跡』
- 春野町教育委員会2004『木塚城跡II』

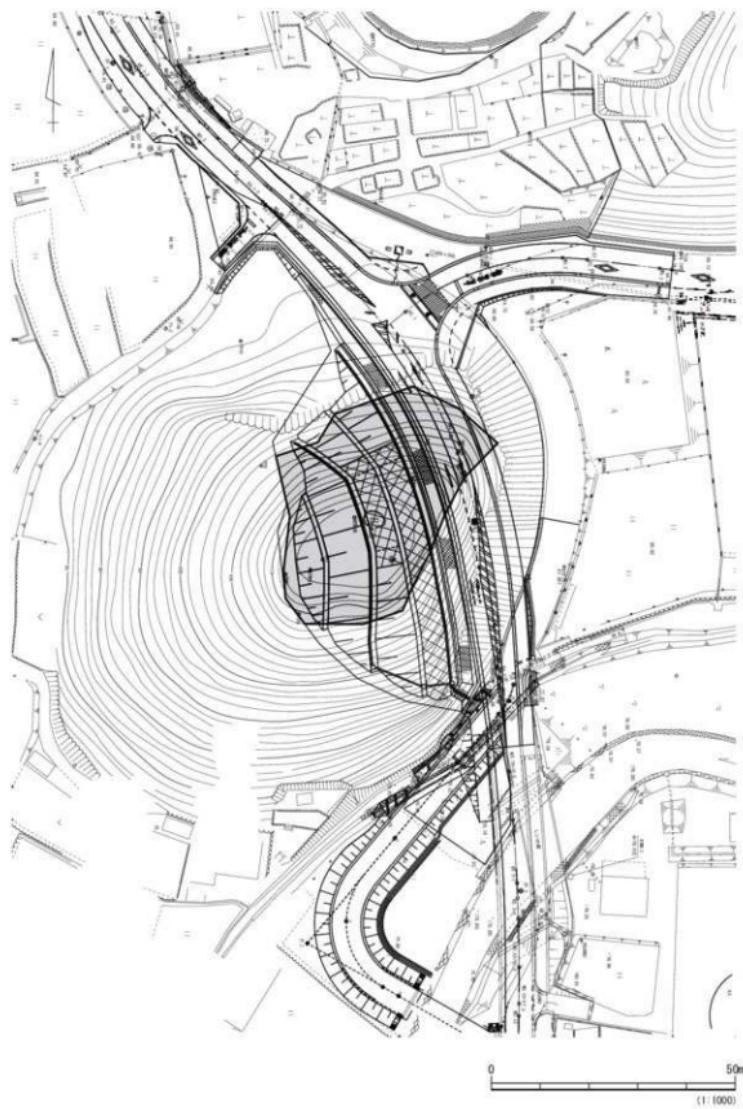
# 図 版





喜多・城山城跡と周辺の地形

図版2

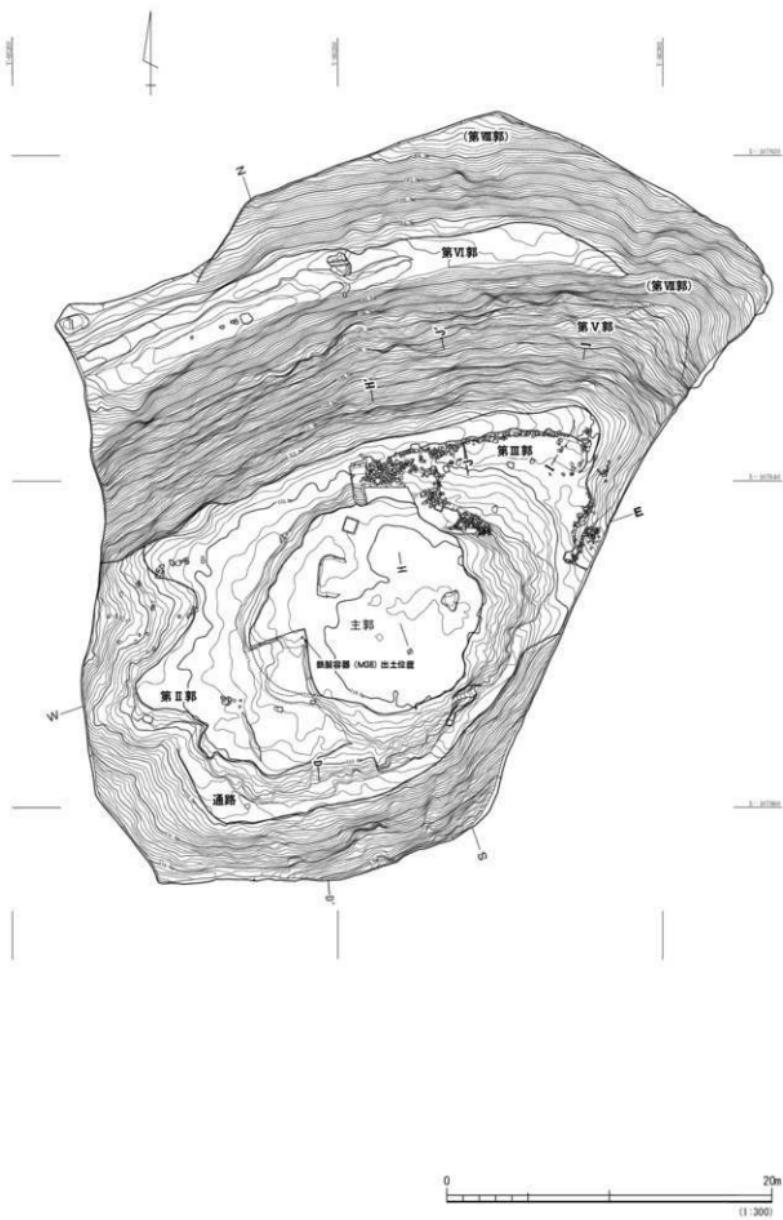


喜多・城山城跡と道路計画部分

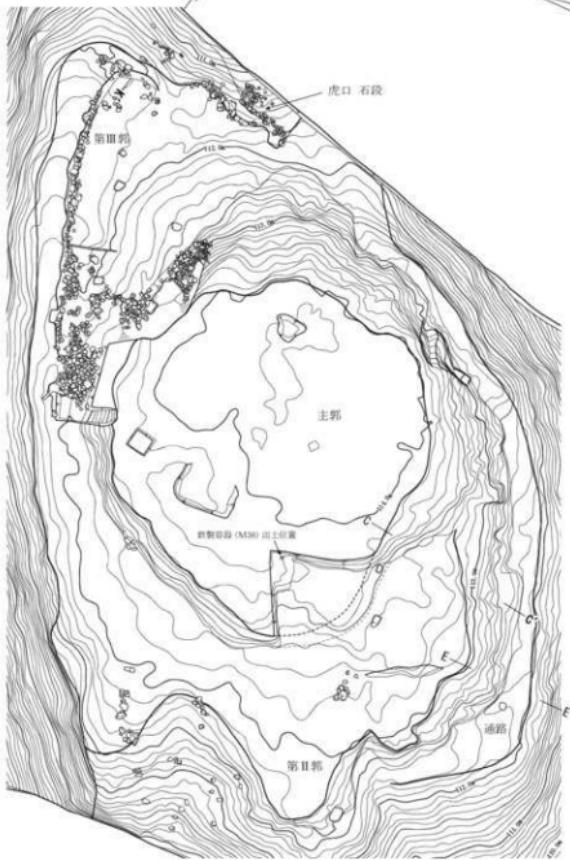


### 路線内の喜多・城山城跡現況地形

図版4



調査後全体地形



主郭～第Ⅲ郭平面

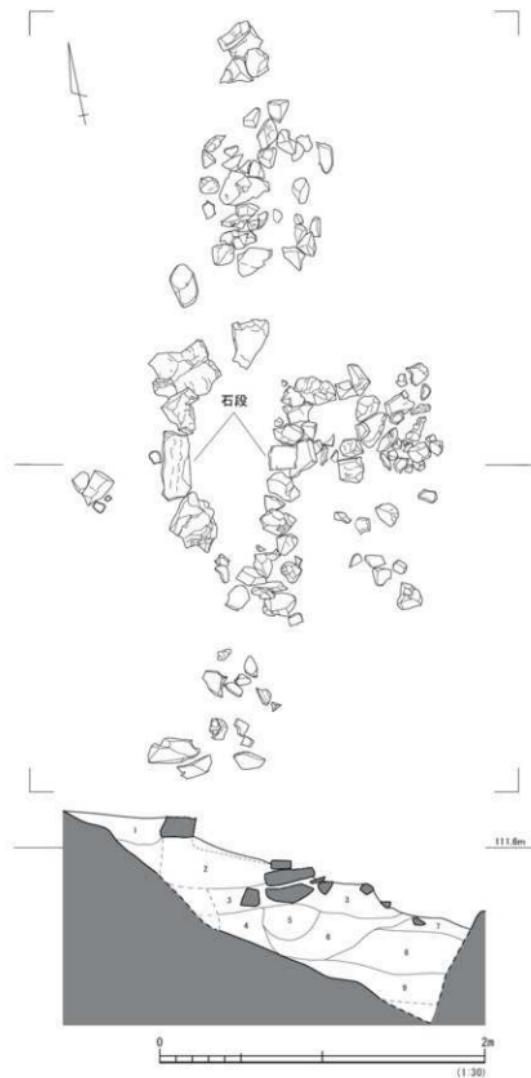


第三郭詳細平面



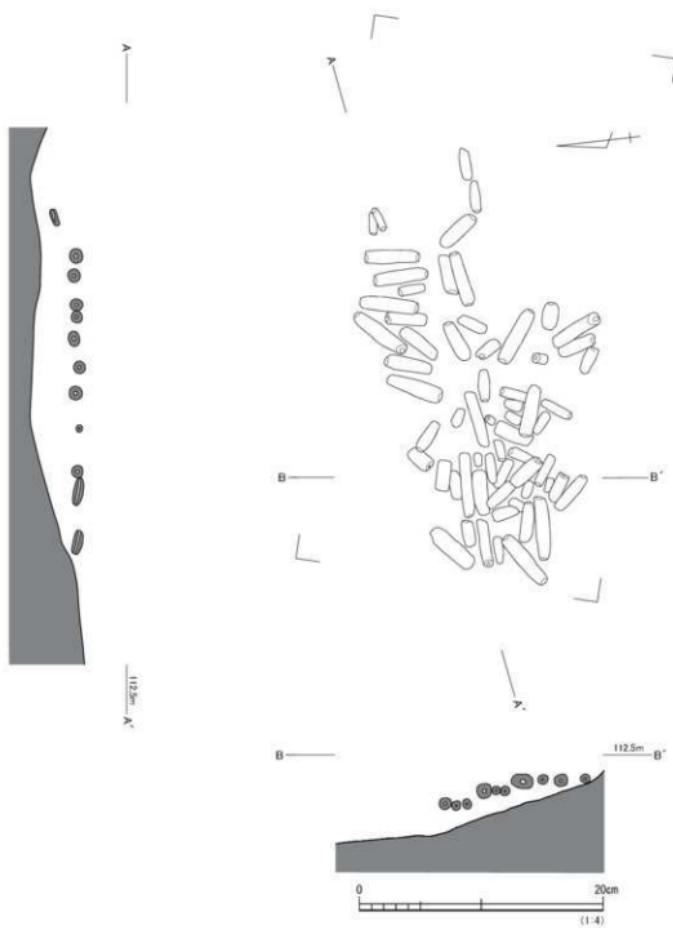
第三 郭土壁石積平面・立面

図版8



1. 10YR6.5/6 明黄褐  
 2. 7.5YR6.4/3 機 機 (黃褐色)  
 3. 10YR6.4/4 にじい(黃褐色)  
 4. 10YR6.6/4 明黄褐  
 5. 10YR6.8/2.5 にじい(黃褐色)  
 6. 2, 5/5R6.5/5.8 明黄褐 (黃褐色)  
 7. 2, 5/5R6.4/4 黄褐 (黃褐色)  
 8. 10YR6.4/8 明黄褐  
 9. 2, 5/5R6.5/6 明黄褐 (黃褐色)
- 細粒砂～中粒砂～粗粒砂～細粒砂多く含む。径5cm大までの中粒含む。やや縮まる (第Ⅲ郭の面)。  
 細粒砂～粗粒砂で粗粒砂～細粒砂混在。径3cm大までの中粒やや多く含む (10%未満)。上面行若は土漬化してやや縮まる。  
 細粒砂で粗粒砂～細粒砂混在。マトリクスは細粒砂～粗粒砂で粗粒砂～細粒砂含む。機は角錐で山石 (弱灰質砂岩)。  
 径5～25cm大の角錐・山石を40%含む。機は角錐で山石 (弱灰質砂岩)。径5～25cm大の角錐・山石を40%含む。機は角錐で山石 (弱灰質砂岩)。  
 細粒砂で粗粒砂～細粒砂混在。径3cm大までの中粒含む。やや砂質。  
 細粒砂～粗粒砂で粗粒砂～細粒砂含む。径3cm大までの中粒含む。やや砂質。  
 細粒砂で粗粒砂～細粒砂含む。径3cm大までの中粒含む。やや砂質。  
 細粒砂で粗粒砂～細粒砂含む。径3cm大までの中粒含む。やや砂質。  
 細粒砂～粗粒砂で粗粒砂～細粒砂含む。径3cm大までの中粒含む。やや砂質。

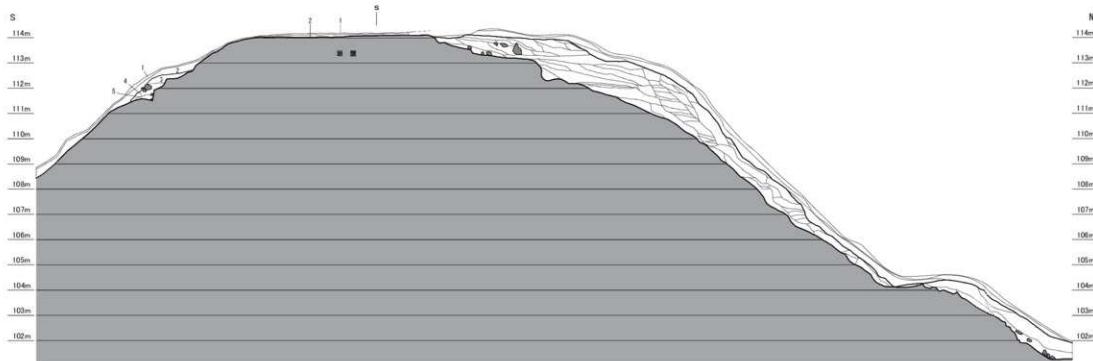
第三郭虎口 平面・土層断面



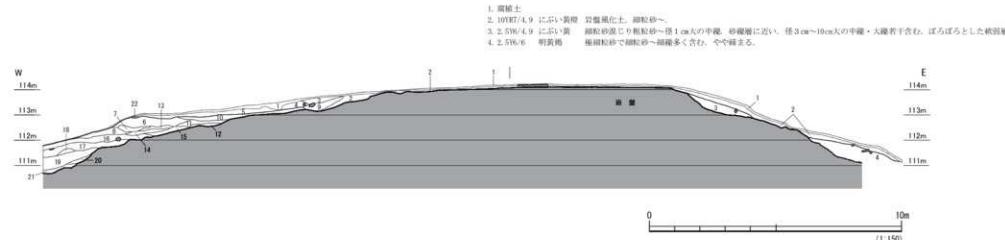
第三郭 土錠群

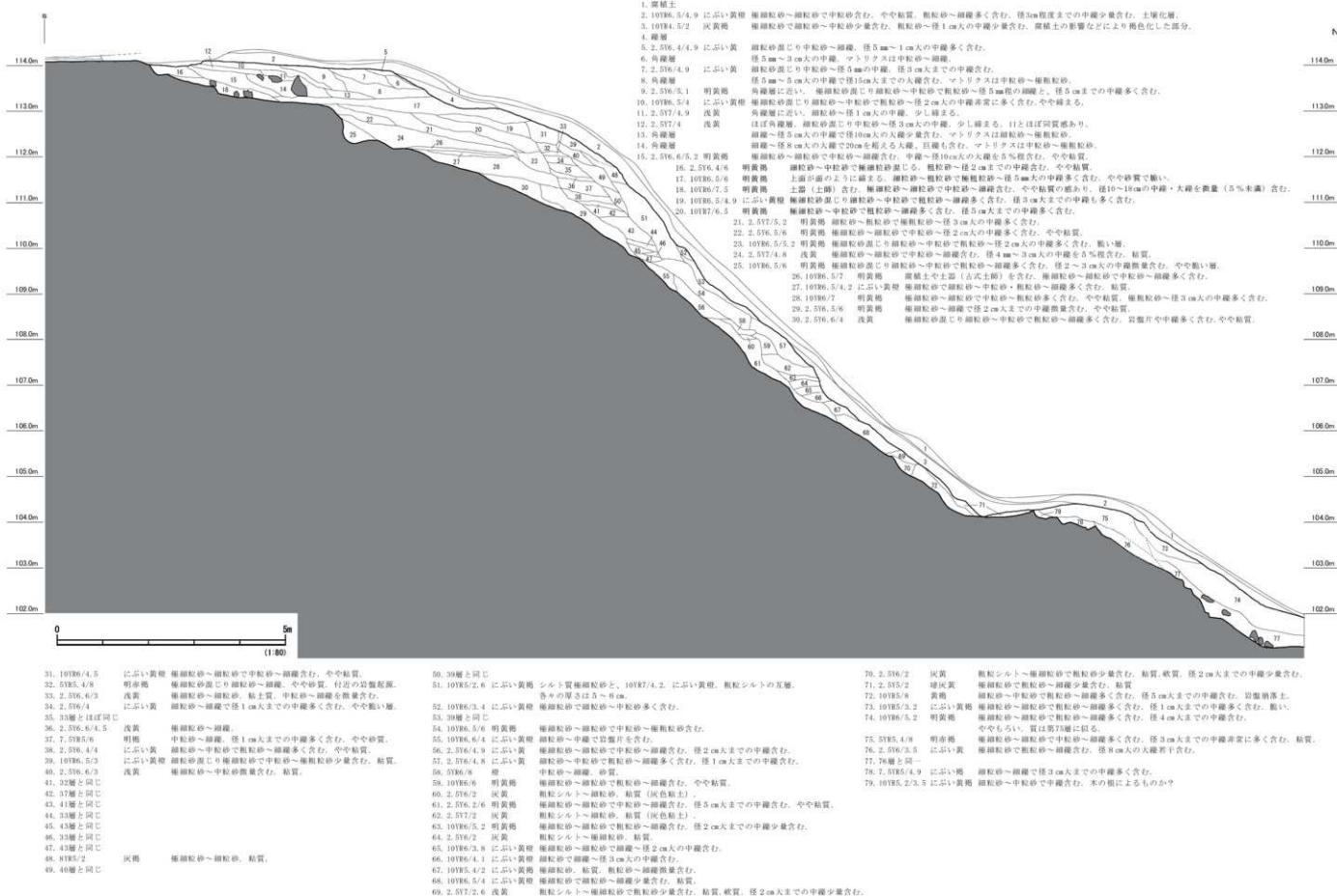


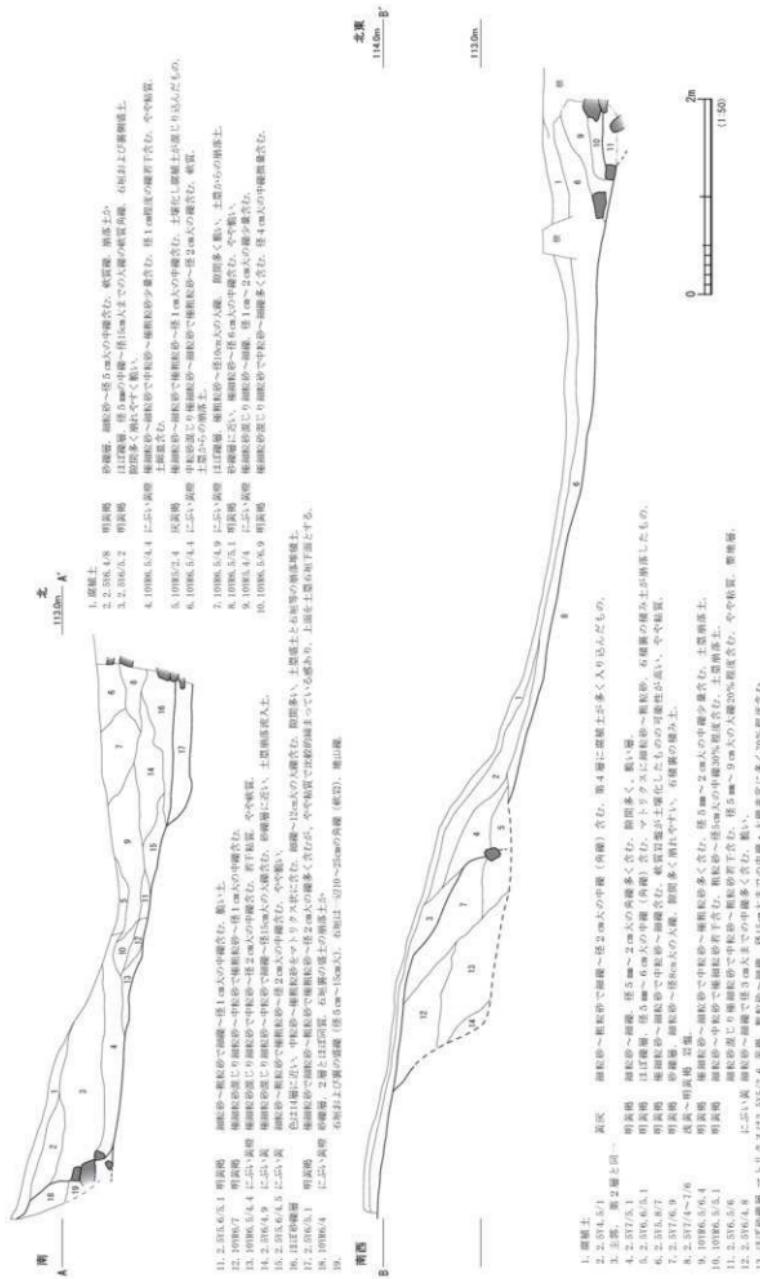
第Ⅲ郭西端 集石



1. 黄褐色土  
2. 101W/4.9 に高い黄褐色 砂質風化土。細粒砂。  
3. 2. SW/4.9 に高い黄褐色 細粒砂混じり粗粒砂～径1cmの大の中礫。砂質層に近い。径3cm～10cmの大の中礫・大礫若干含む。ぼろぼろとした軟弱層。  
4. 2. SW/6 明黄褐色 細粒砂～細粒砂～細粒砂多く含む。今や確定。







第三輯 平民思想家

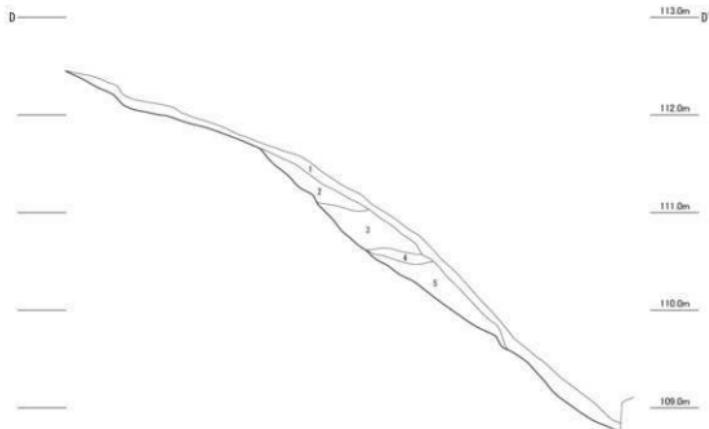
図版14

主郭~通路間

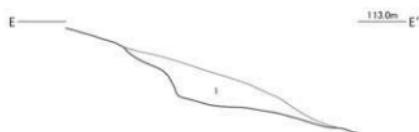


1. 10TR6/3 にぶい黄褐色 中粒砂～径3 cmの大の中礫(角礫)、異質崩壊土、根による腐植あり。  
 2. 2. SY6/5.1 明黄褐色 岩盤崩壊土、中粒砂～径5 cmの大の中礫(角礫)。  
 3. 褐灰岩盤

通路 南北方向

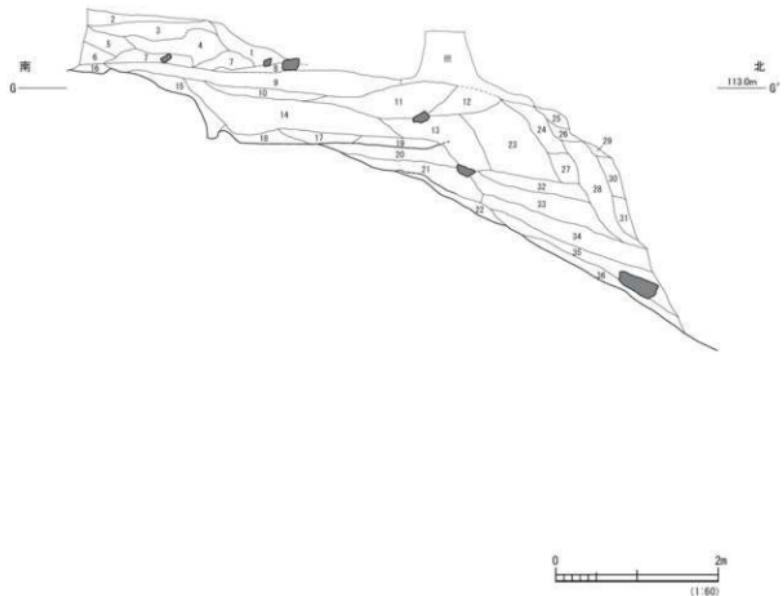
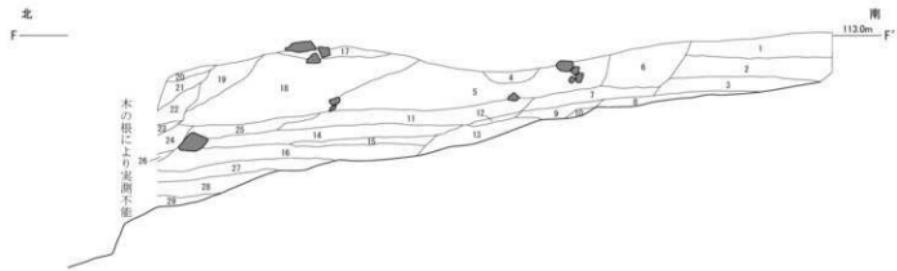


1. 10YR6/3	にぶい黄橙	中粒砂～径3 cmの大粒砂(塊状)。岩盤崩壊土。根による構造あり。
2. 5YR6/3	明褐色	細粒砂～細粒砂～粗粒砂～塊状混合。径1 cm～3 cmの大粒砂の中粒砂30%程度混む。
3. 2.5Y6/3	にぶい黄(黄色系)	細粒砂～粗粒砂若干含む。均質。粘土層には泥炭状物質含む。
4. 10YR5.6/1	明黄色	細粒砂～粗粒砂～中粒砂～粗粒砂多く含む。径1 cm～1 cmの大粒砂含む。やや點状、塊状構造。
5. 10YR5.8/3	にぶい紫褐	細粒砂～細粒砂～中粒砂～粗粒砂多く含む。徑2 mm～2 cmの大粒砂多く含む。やや凹凸。



1. 1938.6.5.1 明黄梅 粒径約~径3cm程の中種(角錐・軟質)。軽い土(岩盤崩壊土)。





第 II 郭北西部 盛土土層断面

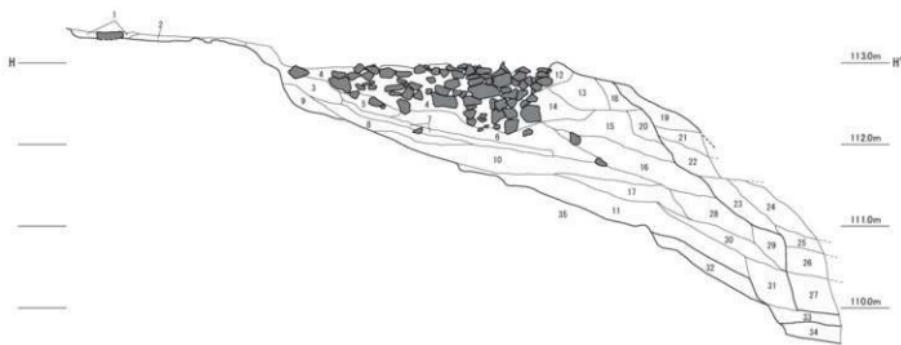
F-F'

1. 2. 376.2/4 黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒少々含む。やや粘質。
2. 2. 376.8/4 淡黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径8cm大までの半粒・大粒多く含む。やや粘質。
3. 10/196.6/4.2 にぶい黄褐  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径4cm大までの半粒20～30%含む。黒い。
4. 7. 578.2/2 灰褐  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径4cm大までの半粒含む。底質土層のよう。
5. 2. 517.4/6 淡黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径4cm大までの半粒含む。底質土層のよう。
6. 2. 516.4 にぶい黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径4cm大までの半粒・大粒10%含む。黒い。
7. 10/196.5/4.8 にぶい黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径4cm大までの半粒含む。やや粘質。
8. 2. 516.3/5 にぶい黄  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径5cm大までの半粒含む。やや緑まる。
9. 10/196.4/2 にぶい黄褐  
細粒砂～中粒砂～細粒少々含む。径1cm大までの半粒非常に多く含む。黒い。
10. 10/196.5/4 明黄褐  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒含む。径3cm大までの半粒少々含む。緑まる。
11. 2. 376.5/3 黄褐  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径6cm大までの半粒30%含む。黒い。
12. 2. 375.8/4 にぶい黄  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径2cm大までの半粒含む。やや緑まる。
13. 2. 376.4/3 にぶい黄  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径2cm大までの半粒非常に多く30%以上含む。やや黒い。
14. 10/196.4/2 にぶい黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径4cm大までの半粒含む。やや粘質。
15. 10/196.8 にぶい黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒含む。径1cm大までの半粒含む。底質土層のよう。
16. 2. 517.5/5 明黄褐  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒含む。底質土層のよう。
17. 10/196.4/4 にぶい黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径5cm大までの半粒含む。やや粘質。
18. 2. 516.5/9 明黄褐  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底5cm大までの半粒・大粒多く含む。黒い。
19. 2. 516.4/4 にぶい黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径4～15cm大の半粒・大粒多く含む。黒い。
20. 2. 516/4 にぶい黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底1cm大までの半粒含む。地土色。
21. 8/196/2 灰褐  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒含む。底1cm大までの半粒含む。灰色(底土色)。
22. 2. 516.6/3.8 淡黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒非常に多く含む。径2cm大までの半粒微量含む。やや粘質。
23. 2. 517.2/6 淡黄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径1cm大までの半粒微量含む。やや粘質。
24. 10/196.4/4 にぶい黄  
砂礫層の上に、細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径5cm大までの半粒含む。底質土層のよう。
25. 10/196.7/6 明黄褐  
砂礫層に沿い、細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒非常に多く含む。底5cm大までの半粒含む。底質土層のよう。
26. 2. 516/4 地柄  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒多く含む。径1cm大までの半粒含む。底質土層のよう。
27. 10/196.3/8 にぶい黄  
砂礫層に沿い、細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒含む。底3cm大までの半粒含む。底質土層のよう。
28. 2. 516.3/8 にぶい黄  
表面土のよう。細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒含む。底2cm大までの半粒微量含む。やや粘質。
29. 2. 516/8 灰  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒含む。径1cm大までの半粒含む。粘質。

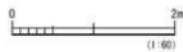
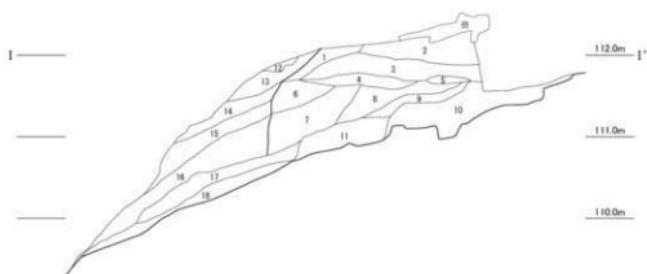
G-G'

1. 2. 376.5/6 明黄褐  
細粒砂～半粒砂の大半の半粒含む。径1～5cm大の半粒(角砾) 20%程度含む。
2. 2. 376/6 明黄褐  
細粒砂～半粒砂の大半で細粒砂と粗粒砂共合む。径2～4cm大の半粒(角砾) 10%程度含む。
3. 角砾層  
細粒砂～半粒砂の大半の半粒(角砾) 含む。マトリックスは2.515.4/4 黄褐 細粒砂～粗粒砂。
4. 2. 375.6/4.9 にぶい黄  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径1～3cm大の半粒10%程度含む。やや緑まる。
5. 2. 516.6/5 淡黄  
半粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径4～4.5cm大の半粒5%程度含む。
6. 2. 516.5/6.9 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径1～4cm大の半粒25%程度含む。やや緑まる。
7. 角砾層  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。マトリックスは2.516.5/5.1 明黄褐。細粒砂～中粒砂。
8. 2. 516.4/7.5 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底2cm大までの半粒含む。底質土層のよう。
9. 2. 377.6/8 黄  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径0.5～5cm大の半粒10%程度含む。
10. 10/196.6/6 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒含む。径0.5～3cm大の半粒多く含む。やや粘質。
11. 2. 376.7/8 淡黄  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径0.5～10cm大の半粒・大粒15%程度含む。
12. 10/196.5/5.2 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径0.5～2cm大の半粒5～10%含む。
13. 10/196.6 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径0.5～10cm大の半粒・大粒多く20～30%含む。
14. 2. 517/5.1 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径0.5～3cm大の半粒20%程度含む。やや黒い。
15. 10/196.5/6 にぶい黄  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒青苔に多く含む。径0.5～3cm大の半粒5%程度含む。やや粘質。
16. 2. 376/6.2 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底0.5～3cm大の半粒微量含む。やや粘質。
17. 2. 376.4/4 にぶい黄  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径0.5～1cm大の半粒10～15%含む。やや粘質。
18. 10/196/7 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径0.5～5cm大の半粒少々5%程度含む。
19. 2. 376/4.8 にぶい黄  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒含む。やや緑まる。
20. 10/196.4/9 にぶい黄  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒含む。径0.5～3cm大の半粒10%程度含む。上面が特に緑まる。
21. 10/196.5/6 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径0.5～2cm大の半粒10%程度含む。
22. 2. 516.6/4 淡黄  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底0.5～3cm大の半粒20%程度含む。
23. 2. 516/4.3 にぶい黄  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底0.5～3cm大の半粒多く20～30%含む。
24. 2. 516/5.2 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底0.5～1cm大の半粒含む。底質土層のよう。
25. 2. 516/6 明褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底0.5～1cm大の半粒含む。底質土層のよう。
26. 10/197/2.8 にぶい黄  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒含む。粘土。
27. 10/196.4/4.9 にぶい黄  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒含む。径0.5～1cm大の半粒含む。やや粘質。
28. 10/196.5/8.4 にぶい黄  
中粒砂～細粒で半粒砂～細粒含む。径0.5～1cm大の半粒多く含む。黒い。
29. 10/197/2.5 にぶい黄  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒微量含む。粘土。(26層と同じ)
30. 10/196.5/6.1 明黄褐  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底1cm大までの半粒少々含む。底質(26層と同じ)
31. 2. 516.4/3 にぶい黄  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底1cm大までの半粒微量含む。粘質(26層と同じ)
32. 10/196.5/5.1 明黄褐  
細粒砂～中粒砂で半粒砂～細粒少々含む。径1cm大までの半粒含む。やや緑まる。
33. 10/196.4/5.1 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底2cm大までの半粒含む。底20cm大の半粒1点含む。やや緑まる。
34. 2. 516.6/6 明黄褐  
細粒砂～半粒砂で半粒砂～細粒少々含む。底2cm大までの半粒少々含む。
35. 10/196/7 明黄褐  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒含む。底3cm大までの半粒多く20%程度含む。半粒1点含む。やや粘質。
36. 10/196/5.9 明黄褐  
細粒シルト～細粒砂で半粒砂～細粒含む。底2cm大までの半粒多く含む。やや粘質。

土壘截ち割り断面



土壘截ち割り断面



第Ⅲ郭盛土・土壘土層断面

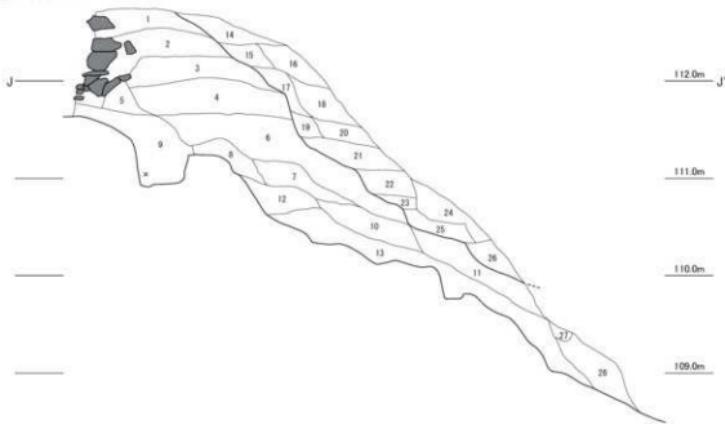
土壤截ち割り断面 H-1

- |                  |       |   |
|------------------|-------|---|
| 1. 10786.4.9     | にぶ・黄葉 | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径1~2 cmまでの中細粒多く含む。                                    |
| 2. 10787.4.9     | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径5 mm程度の中細粒多く含む。やや軽い。                                 |
| 3. 10787.6.4     | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂含む。径5 mm程度の中細粒多く含む。軽い。                                     |
| 4. 10785.2.4     | 明黄葉   | 径1~40cmの粗粒。マトリクスは樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径1~1 cmまでの中細粒含む。                     |
| 5. 10786.5.3.4   | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径2 cm大までの中細粒多く含む。                                     |
| 6. 10786.5.9     | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径2 cm大までの中細粒多く含む。                                     |
| 7. 2. 10785.5.1  | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。よく軽い。   |
| 8. 10786.4.6     | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。軽い。   |
| 9. 10786.4.4     | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径4 cm程度までの中細粒多く含む。軽質。                                 |
| 10. 2. 10786.5   | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径5 cm程度までの中細粒多く含む。やや軽い。                               |
| 11. 2. 10785.5.4 | 黄葉    | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径3 cm大までの中細粒多く含む。やや軽質。表面土のような感じの土。                    |
| 12. 2. 10785.4   | 黄葉    | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径5 mm大までの中細粒多く含む。軽い。                                  |
| 13. 10786.6      | 明黄葉   | 樹脂砂粒に覆われて、中細粒砂より入り砂質が多い。  |
| 14. 10786.5.5.3  | 明黄葉   | 中細粒～細砂で1 cm大までの半程10%程度含む。やや軽い。  |
| 15. 10786.5.5.2  | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径3 cm大までの中細粒非常に多く20%含む。やや軽い。                          |
| 16. 2. 12 返混土    | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径15 cm大の中細粒(15cm×15cm×10cm)の粗粒。マトリクスは 2.3% 5.1%細粒～細砂。 |
| 17. 10786.4.9    | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径4 cm程度までの中細粒多く含む。軽質。                                 |
| 18. 2. 10786.5   | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径5 cm程度までの中細粒多く含む20%程度含む。やや軽い。                        |
| 19. 2. 10786.4   | にぶ・黄  | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径3 cm大までの中細粒含む。軽い。                                    |
| 20. 10786.6      | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。軽い。   |
| 21. 10786.5.4    | にぶ・黄葉 | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径2 cm大までの中細粒含む。やや軽質。                                  |
| 22. 10786.6.2    | にぶ・黄葉 | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。軽い。   |
| 23. 9789.4       | にぶ・黄葉 | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。軽い。   |
| 24. 10785.2      | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。軽質。   |
| 25. 10786.5.7    | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径10cmの大のん1点含む。やや砂質で軽い。第26層の粗粒がテミナ式に入る。                |
| 26. 10785.9      | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。軽質。第26層がテミナ式に入る。                                      |
| 27. 10785.7.6    | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。やや砂質。第26層がテミナ式に入る。                                    |
| 28. 10786.5.3    | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径2 cm大までの中細粒多く含む。やや軽い。                                |
| 29. 10786.5.4    | にぶ・黄葉 | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径5 cm大までの中細粒多く含む。やや砂質。                                |
| 30. 10785.1.5    | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。径1 cm大までの中細粒含む。やや軽質。                                  |
| 31. 10786.5.3    | 明黄葉   | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。マトリクスは樹脂砂粒～細砂多く含む。軽質。                                 |
| 32. 9789.6       | にぶ・黄葉 | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。軽質。   |
| 33. 10786.4.1    | にぶ・黄葉 | 樹脂砂粒を細かく粒度で中細粒～細砂多く含む。軽質。   |
| 34. 6785.6       | 根     | 粗粒を崩壊化し、粗粒砂より大粒。  |
| 35. 2. 10787.4   | 根     | 粗粒を崩壊化し、粗粒砂より大粒。  |

大問題文割り解説 11

- |                  |       |                                     |
|------------------|-------|-------------------------------------|
| 1. 10/30?/7.4    | に似る黄葉 | 細胞砂～繊維で幅 2 cm 大までの中稭非常に多く含む。ほぼ砂質層。  |
| 2. 10/30?/5.6, 9 | 明黄葉   | 細胞層、細胞砂～細砂 5 cm の中稭含む。やや砂質。         |
| 3. 10/30?/6.1    | 明黄葉   | 細胞砂～繊維で幅 5 cm 大までの中稭非常に多く含む。砂繩層に近い。 |
| 4. 2/5, 5/6, 4/6 | 明黄葉   | 細胞砂～繊維で幅 5 cm 大までの中稭非常に多く含む。砂繩層に近い。 |
| 5. 7/5/25?/2     | 灰葉    | 細胞砂～繊維で幅 5 cm 大までの中稭非常に多く含む。砂繩層に近い。 |
| 6. 2/5/6/5.1     | 明黄葉   | 細胞砂～繊維で幅 5 cm 大までの中稭非常に多く含む。砂繩層に近い。 |
| 7. 2/5/6/7       | 明黄葉   | 細胞砂～繊維で幅 5 cm 大までの中稭非常に多く含む。砂繩層に近い。 |
| 8. 10/30?/4.1    | に似る黄葉 | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭やや多く含む。若干砂質。    |
| 9. 10/30?/6.8    | 黄葉    | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭含む。やや砂質。        |
| 10. 2/5/6/5.5    | 明黄葉   | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭含む。やや砂質。        |
| 11. 10/30?/6.6   | 明黄葉   | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭含む。砂繩層に近い。      |
| 12. 7/3, 8/4/7.8 | 灰葉    | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭含む。砂繩層に近い。      |
| 13. 10/30?/5.2   | 灰葉    | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭含む。やや砂質。        |
| 14. 2/5/6/3      | に似る黄葉 | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭含む。やや砂質。        |
| 15. 2/5/7/2      | 灰葉    | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭含む。やや砂質。        |
| 16. 10/30?/6.5   | に似る黄葉 | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭含む。やや砂質。        |
| 17. 9/30?/8      | 明黄葉   | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭含む。やや砂質。        |
| 18. 2/5/6/5.7    | 灰葉    | 細胞砂～繊維で幅 3 cm 大までの中稭含む。やや砂質。        |

土壌截ち割り断面



土壌截ち割り断面



下層堅堀状遺構 1



第Ⅲ郭土壌・下層堅堀状遺構 1 埋土土層断面

## 土壌截ち割面 J-J'

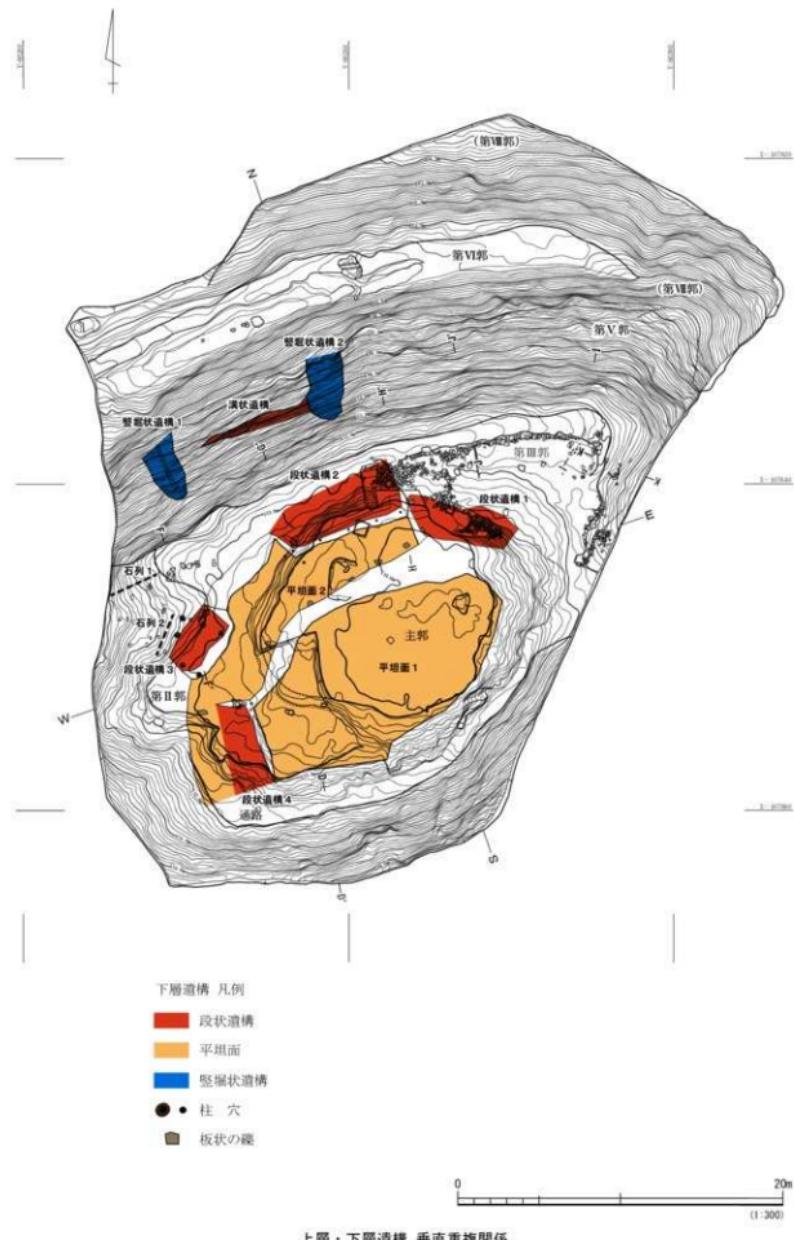
1. 10186. 5/5. 1 にぶい黄褐色  
細粒砂～中粒砂～細繊維含む。径1cm大までの中繊維含む。やや緑色。  
2. 10187. 4/9 にぶい黄褐色  
細繊維層。径2cm大までの中織。大織の発達層。細粒砂～細繊維がマトリクス。  
3. 10186. 4/9 にぶい黄褐色  
細粒砂3cm大までの中織含む。ほほ砂飛揚層。  
4. 2. 517. 7/1 黄褐色  
細粒砂で中粒砂～細繊維含む。径5cm大までの中繊維多く含む。やや緑色層に近い。  
5. 10186. 2/9 にぶい黄褐色  
細粒砂で粗粒砂～細繊維若干含む。土壌が乾燥したもの。硬質。  
6. 10186. 4/8 明黄色  
細粒砂～細粒砂で中粒砂～細繊維含む。径2cm大までの中繊維少く含む。  
7. 10185. 4/8 黄褐色  
細粒砂层に細繊維層で中粒砂～細繊維少く含む。径1cm大までの中繊維含む。粘質。  
8. 10186. 5/1 明黄色  
細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細繊維含む。径2cm大までの中繊維少く含む。やや砂質。  
9. 10186. 4/1 にぶい黄褐色  
細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細繊維含む。径2cm大までの中繊維少く含む。やや砂質。  
10. 7. 518. 4/8 明黄色  
細粒砂～中粒砂～粗粒砂少く含む。径4cm人の中繊維点合む。粘質。(第7層に近い)  
11. 10186. 8/8 黄褐色  
細粒砂～粗粒砂で中粒砂～粗粒砂含む。径20cm大までの中繊維含む。粘質。  
12. 10186. 4/3 にぶい黄褐色  
細粒砂～細粒砂で細繊維含む。径4cm大までの中繊維含む。やや粘質。  
13. 10186. 5/1 にぶい黄褐色  
細粒砂～粗粒砂で細粒砂～粗粒砂含む。径5cm～20cm人の中織。大織30%程含む。粘質。  
14. 10187. 1/5 にぶい黄褐色  
細粒砂で粗粒砂少く含む。径1cm大までの中繊維微量含む。  
15. 10186. 6 明黄色  
細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細繊維含む。径5mm大の中繊維微量含む。  
16. 10185. 4/3 にぶい黄褐色  
細粒砂～細粒砂で粗粒砂含む。やや粘質。  
17. 2. 516. 4/4 にぶい黄褐色  
粗粒砂シルト。粘質。粘土。  
18. 10187. 1/5 にぶい黄褐色  
西側斜面。  
19. 2. 517. 3 にぶい黄褐色  
細粒砂～中粒砂～粗粒砂で粗粒砂～細繊維少く含む。径2cm大までの中繊維少く含む。やや砂質。  
20. 10185. 4/3 にぶい黄褐色  
細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細繊維少く含む。粘質。  
21. 10186. 4 にぶい黄褐色  
細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細繊維少く含む。粘質。  
22. 7. 518. 5/2 灰褐色  
細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細繊維少く含む。径2cm大までの中繊維少く含む。やや粘質。  
23. 7. 518. 6 灰褐色  
粗粒砂シルト。中粒砂～粗粒砂含む。粘質。粘土。  
24. 10186. 4/3 にぶい黄褐色  
細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細繊維少く含む。粘質。  
25. 10186. 5 明黄色  
粗粒砂シルト～中粒砂で粗粒砂～細繊維含む。粘質。粘土。  
26. 10186. 5/3 にぶい黄褐色  
細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細繊維少く含む。径2cm大の中繊維少く含む。粘質。  
27. 10185. 1/8 灰褐色  
粗粒砂シルト～中粒砂で粗粒砂～細繊維少く含む。径5mm大の中繊維少く含む。ほほ粘土。  
28. 10185. 4/4 にぶい黄褐色  
細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む。粗粒砂～細繊維少く含む。径4cm大までの中織10%程含む。やや粘質。

## 土壌截ち割面 K-K'

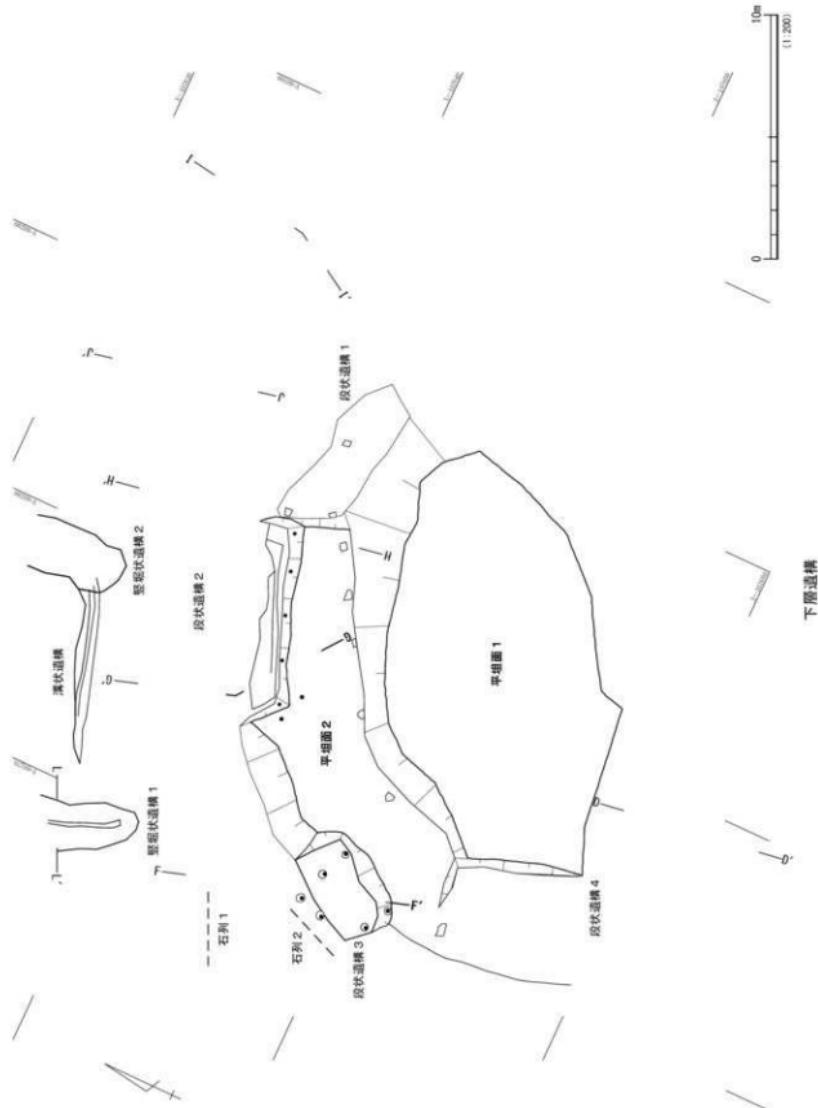
1. 10186. 4/4 にぶい黄褐色  
ほほ砂飛揚層。細粒砂～細繊維で2cm大までの中繊維含む。  
2. 10185. 4/6 黄褐色  
細粒砂～中粒砂で粗粒砂～粗粒砂～径2cm大までの中繊維含む。やや砂質。  
3. 2. 516. 5/1 明黄色  
ほほ砂飛揚層。細粒砂～ほほ砂～ほほ砂層。  
4. 10186. 4/6 明黄色  
細粒砂～中粒砂で細繊維少く含む。径2cm大までの中繊維含む。やや砂質で粘い。  
5. 2. 516. 5/3 明黄色  
ほほ砂飛揚層。中粒砂～径5cmの大の中織。  
6. 2. 516. 4/8 明黄色  
砂飛揚層。中粒砂～径10cmの大の中織。  
7. 2. 516. 4/4 にぶい黄褐色  
粗粒砂～細粒砂で中粒砂～細繊維含む。径2cm大までの中繊維含む。後世の堆土と思われる。

## 下層整層状構造 1

1. 粘土。  
2. 2. 516. 3/1 黄灰(乳白色) 細粒砂層にじり粗粒砂層。やや粘質。  
3. 2. 516. 4/8 にぶい黄褐色  
粗粒砂～中粒砂で粗粒砂～細繊維少く含む。径2cm大までの中繊維含む。やや砂質。  
4. 2. 516. 5/7 明赤褐色  
粗粒砂で中粒砂～細繊維含む。径5mm～2cm大の中繊維少く含む。



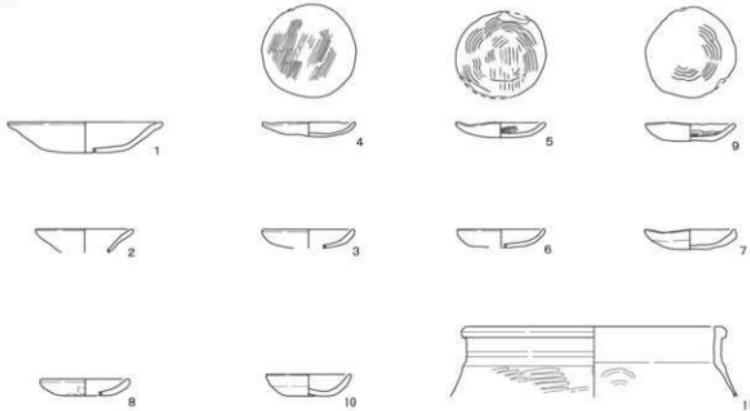
図版22



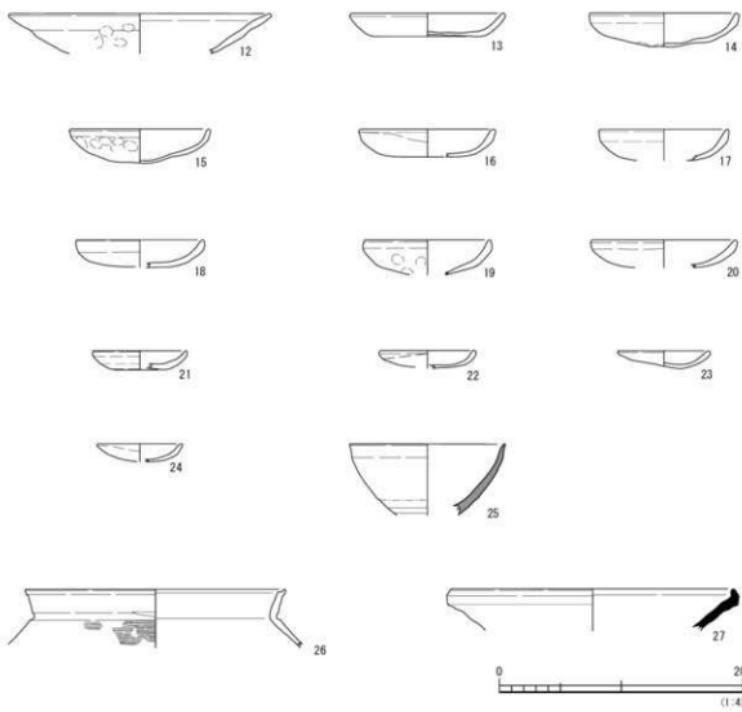


山上講前面石敷平面

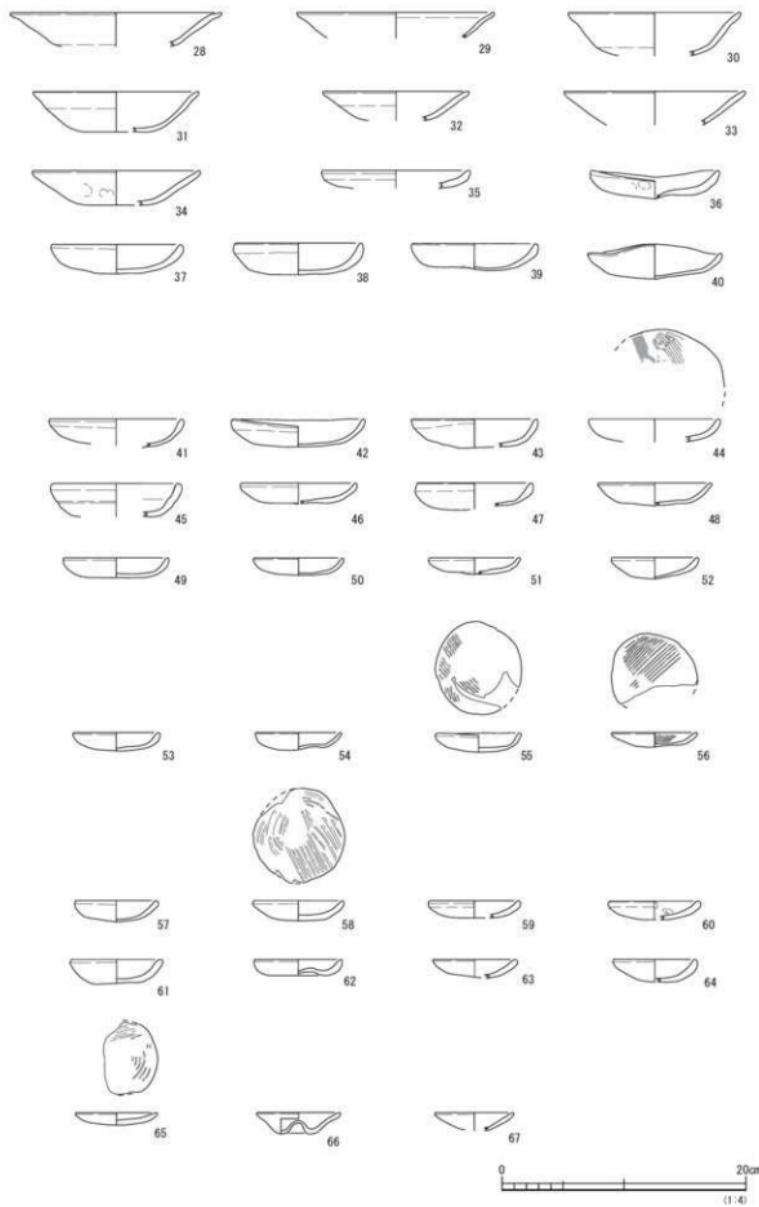
## 主郭



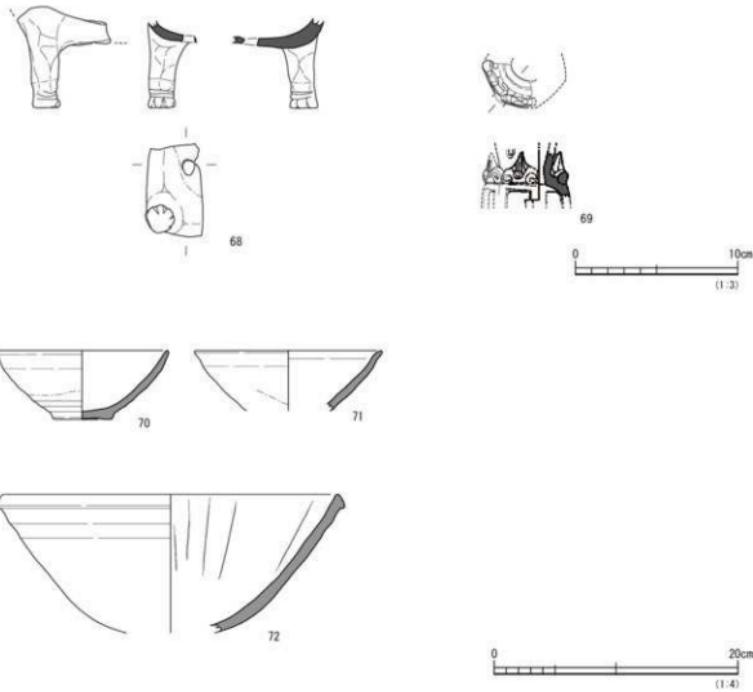
## 第Ⅱ郭・通路（第Ⅳ郭）



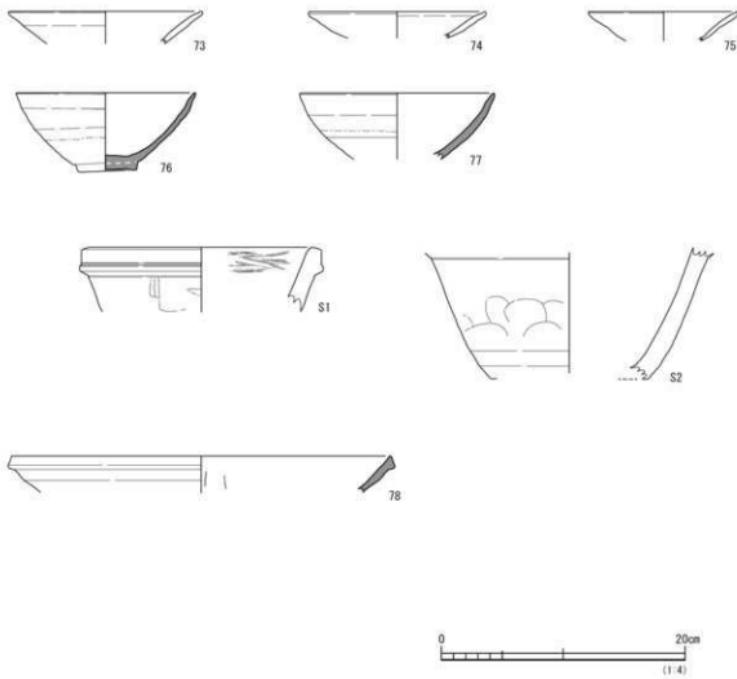
主郭・第Ⅱ郭出土土器・陶器



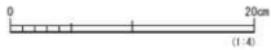
第III 郭出土土師器皿



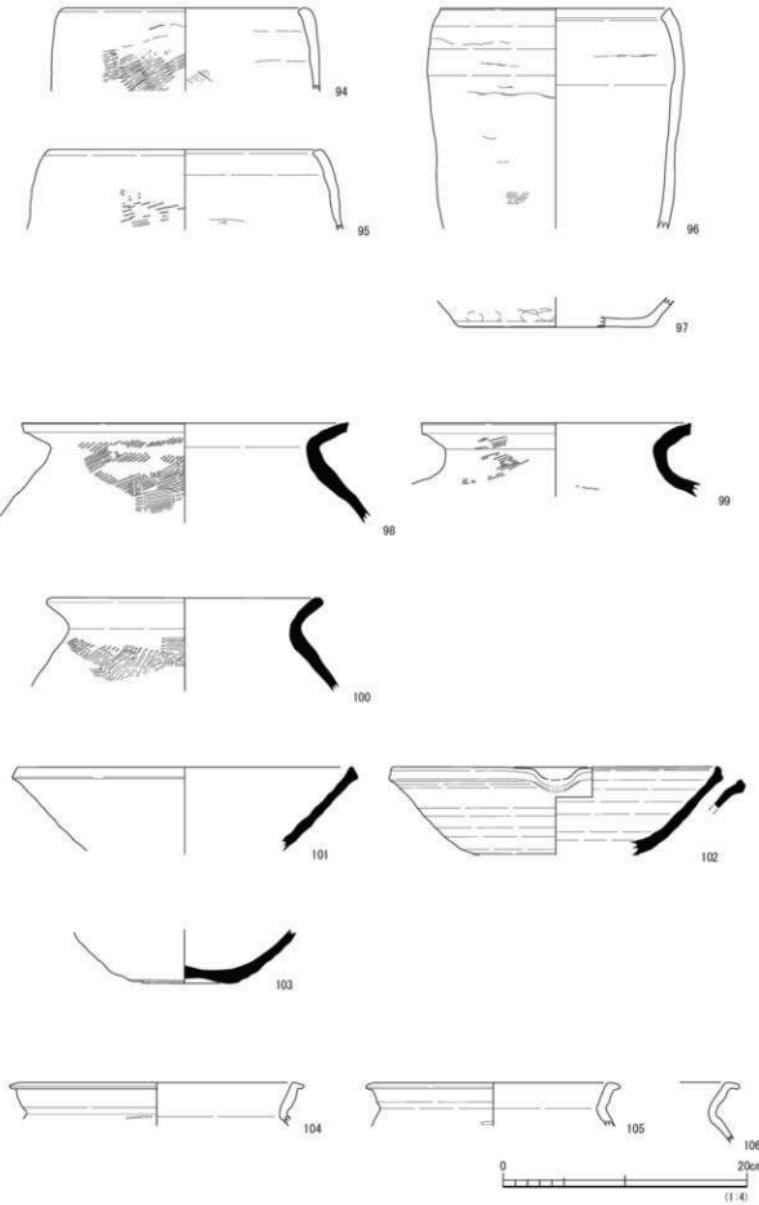
第Ⅲ郭出土青白磁・陶器・瓦質土器



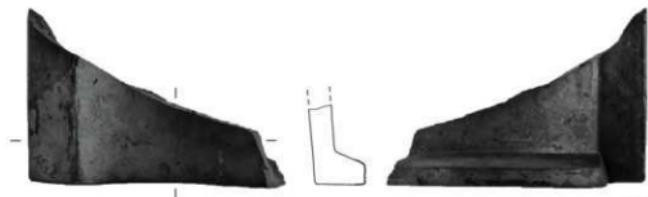
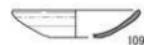
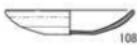
切岸・第VI郭出土土器・陶器・石鍋



各郭出土 織城以前の土器 1



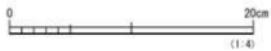
各郭出土 繁城以前の土器 2



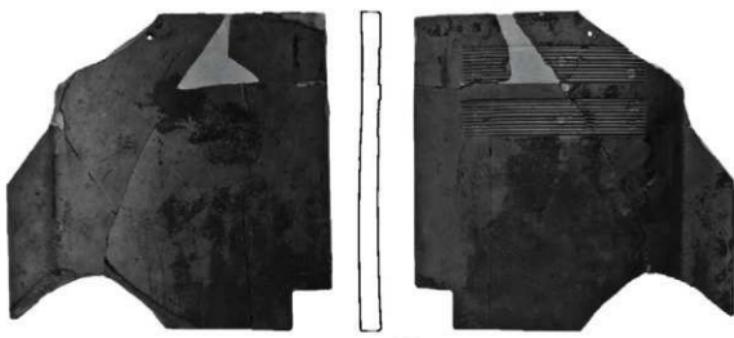
116



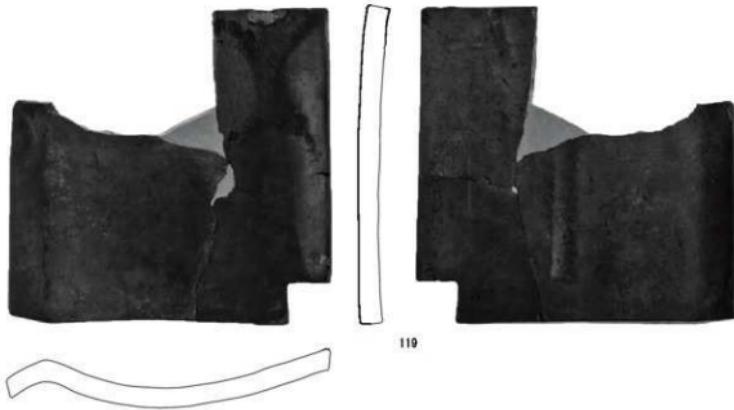
117



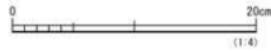
廣城以降山上講関係の出土陶器・磁器・瓦



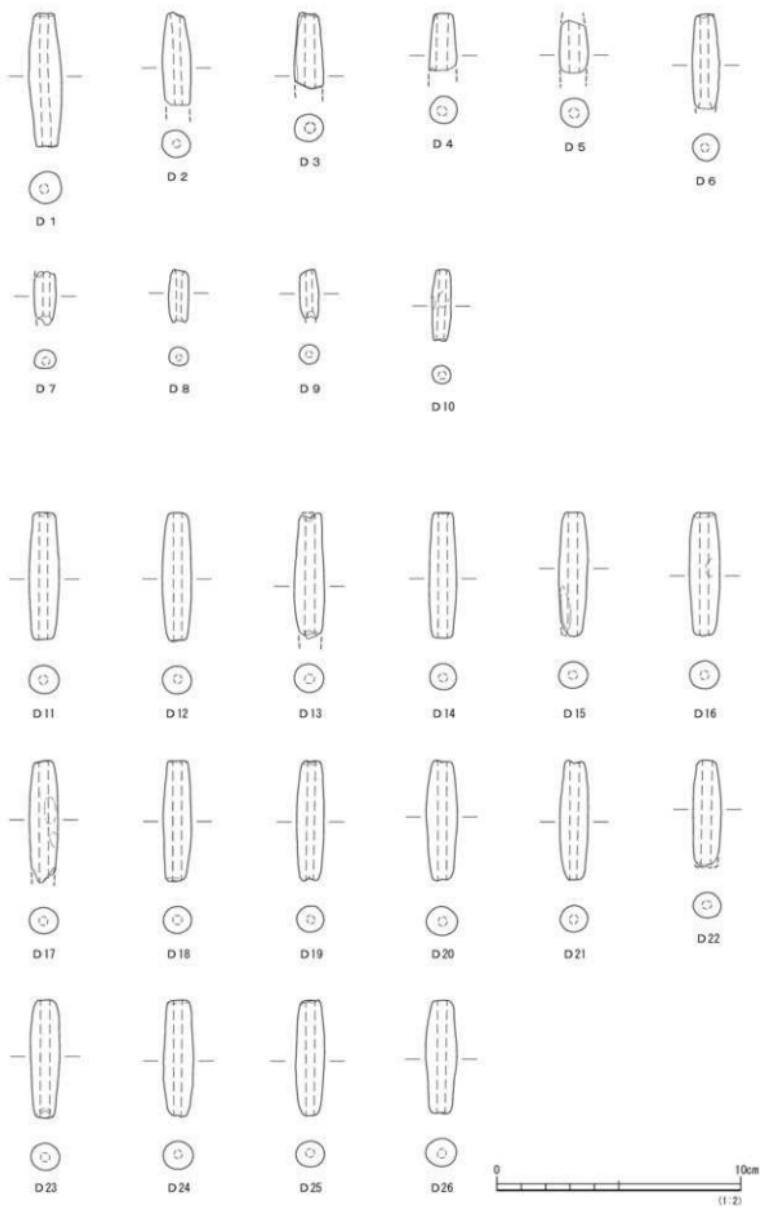
118



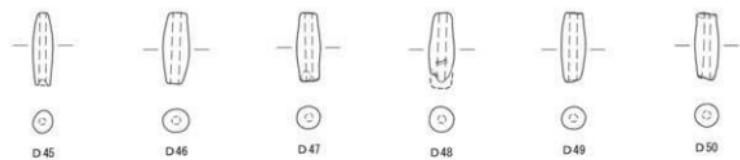
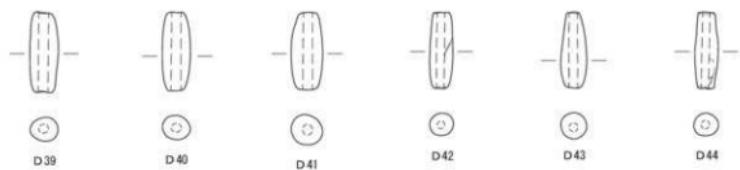
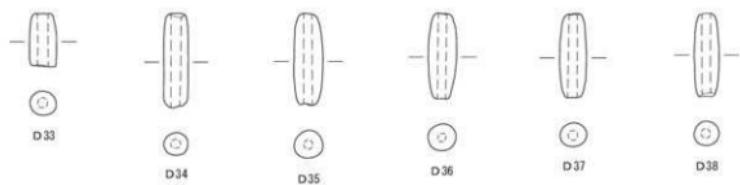
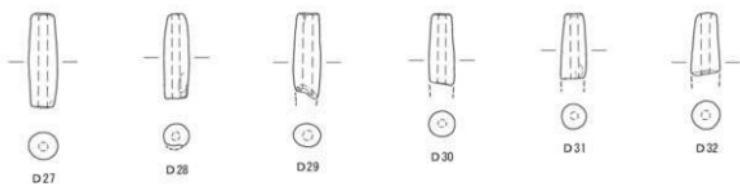
119



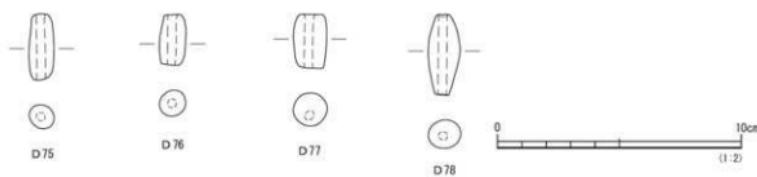
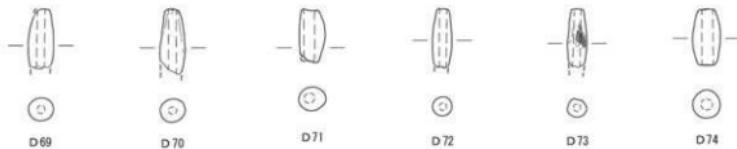
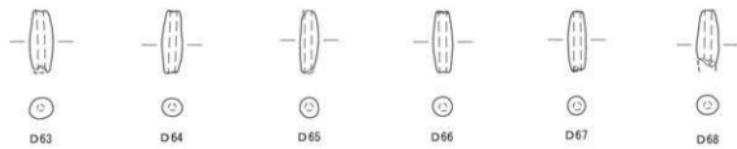
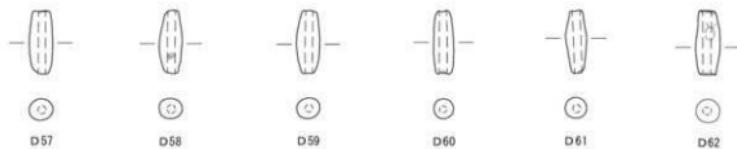
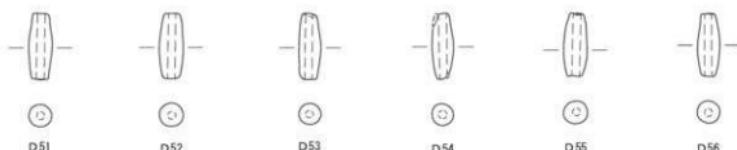
廃城以降山上講関係の出土瓦

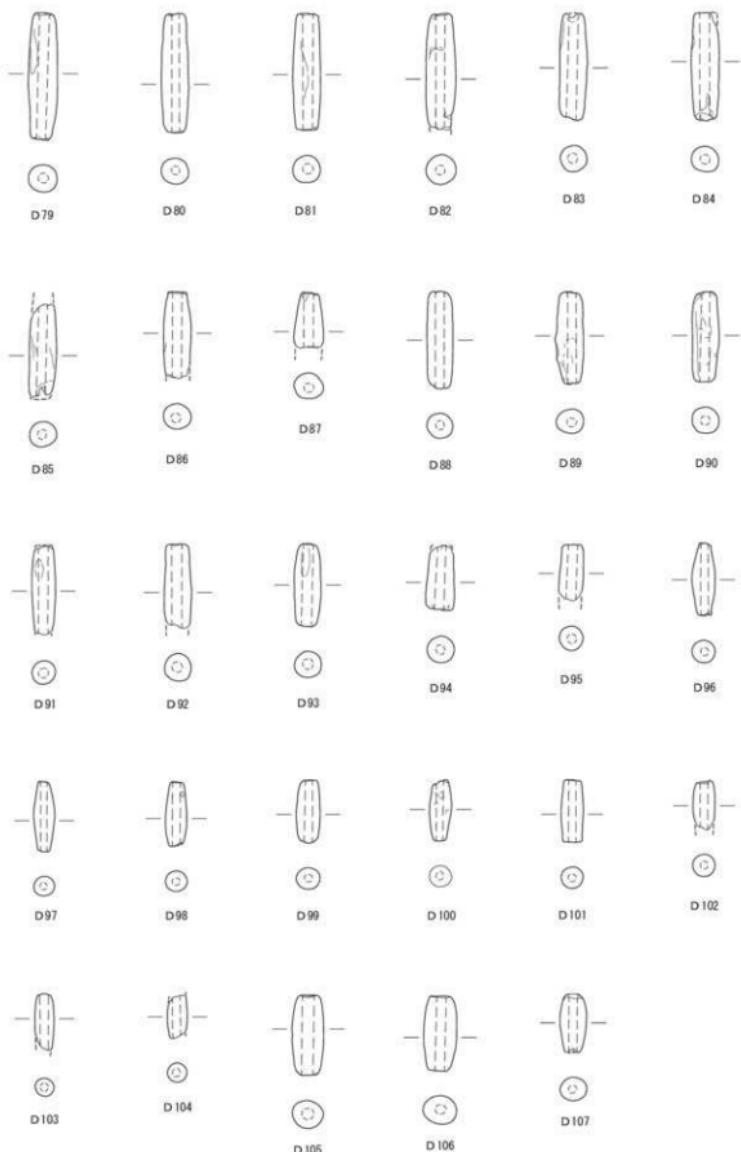


第Ⅱ郭・第Ⅲ郭土鐘群出土土鐘 1

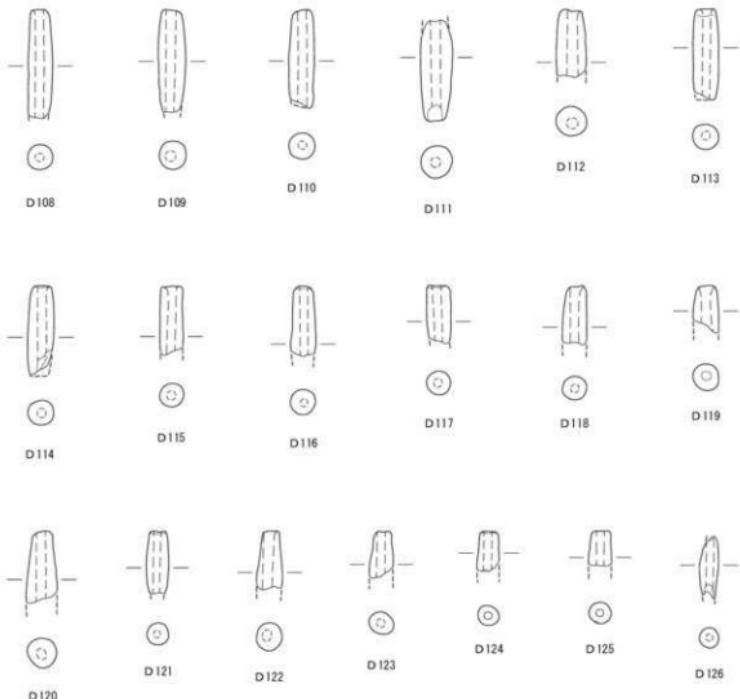


第三郭土錠群出土土錠 2

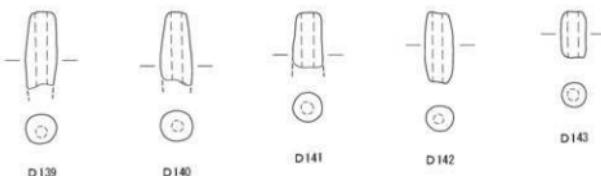
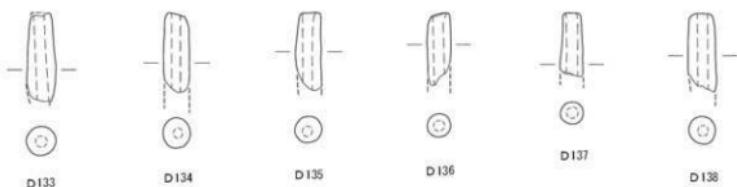
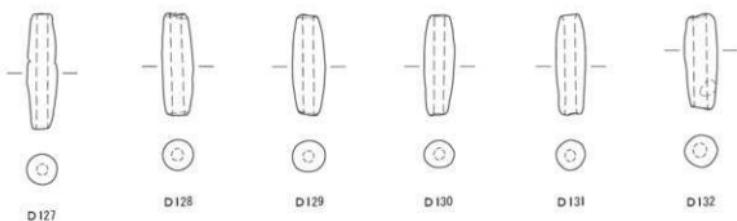




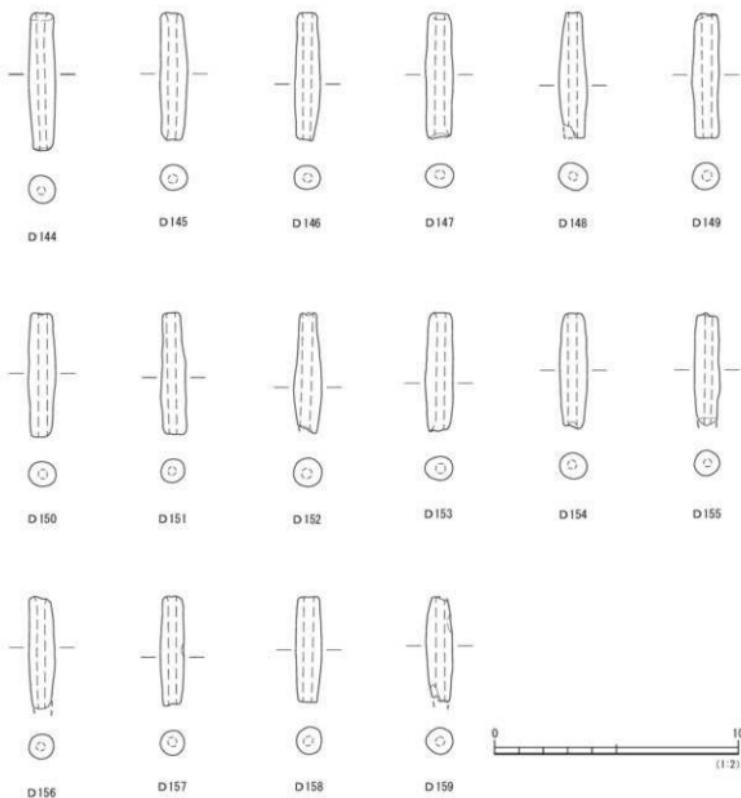
第三郭 主郭石積下出土土錐



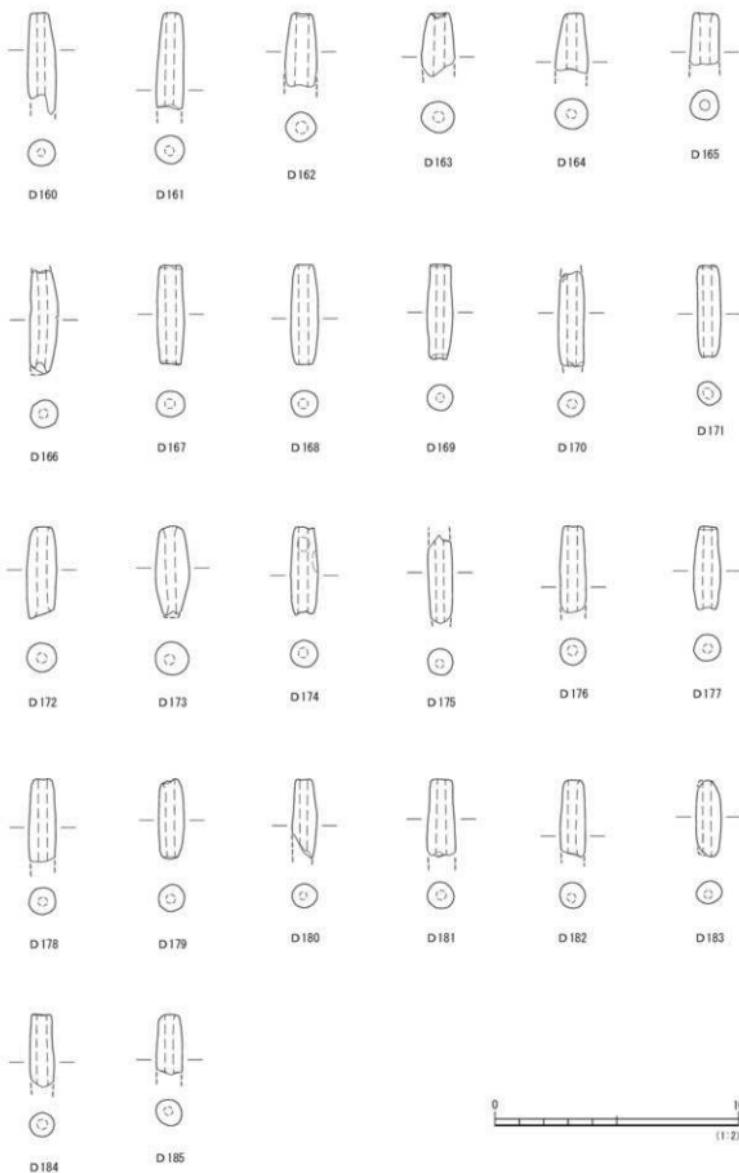
第三郭 主郭崩落土出土土縫



主郭北東部盛土出土土鐘

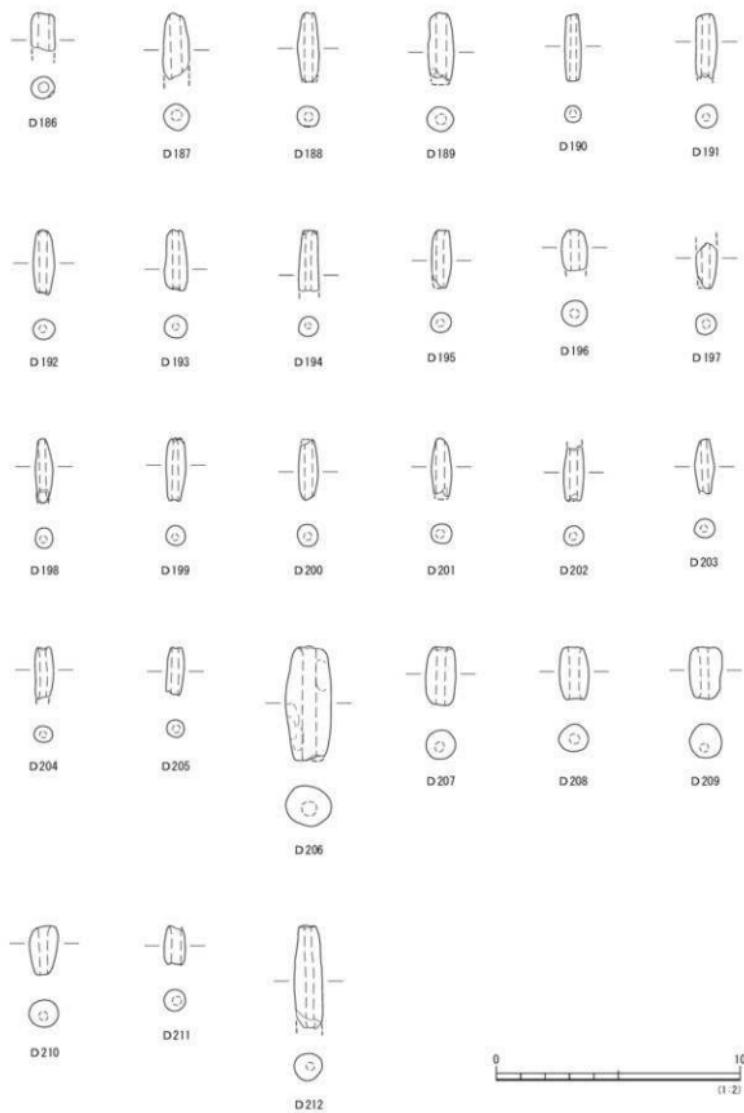


第三郭盛土・主郭崩落土出土土錐1

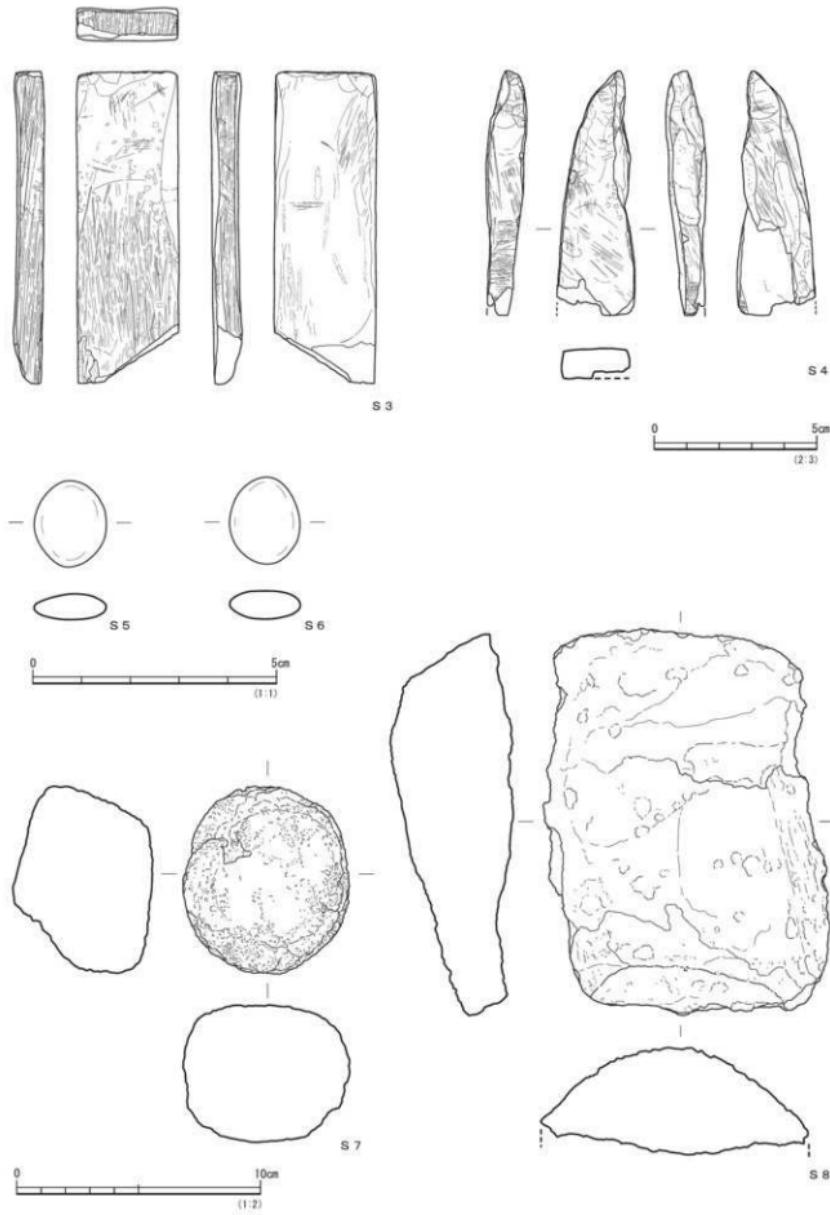


第Ⅲ郭壇土・主郭崩落土出土土錘2

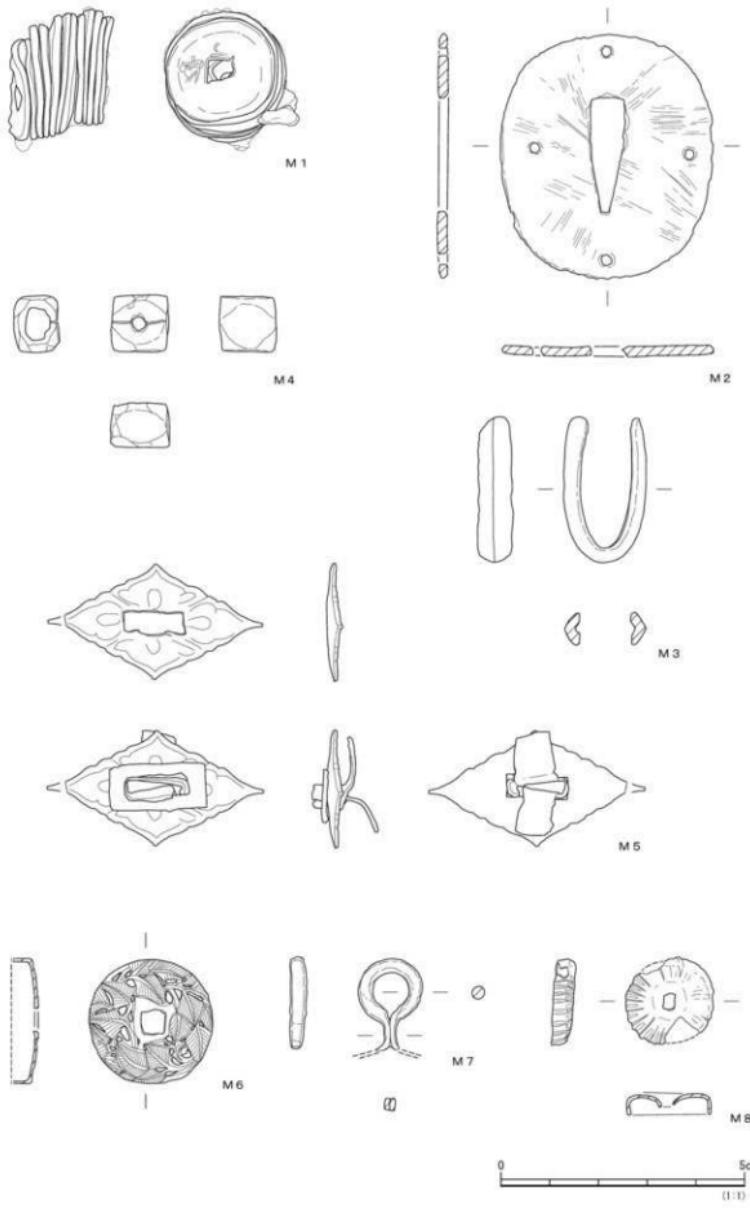
図版40



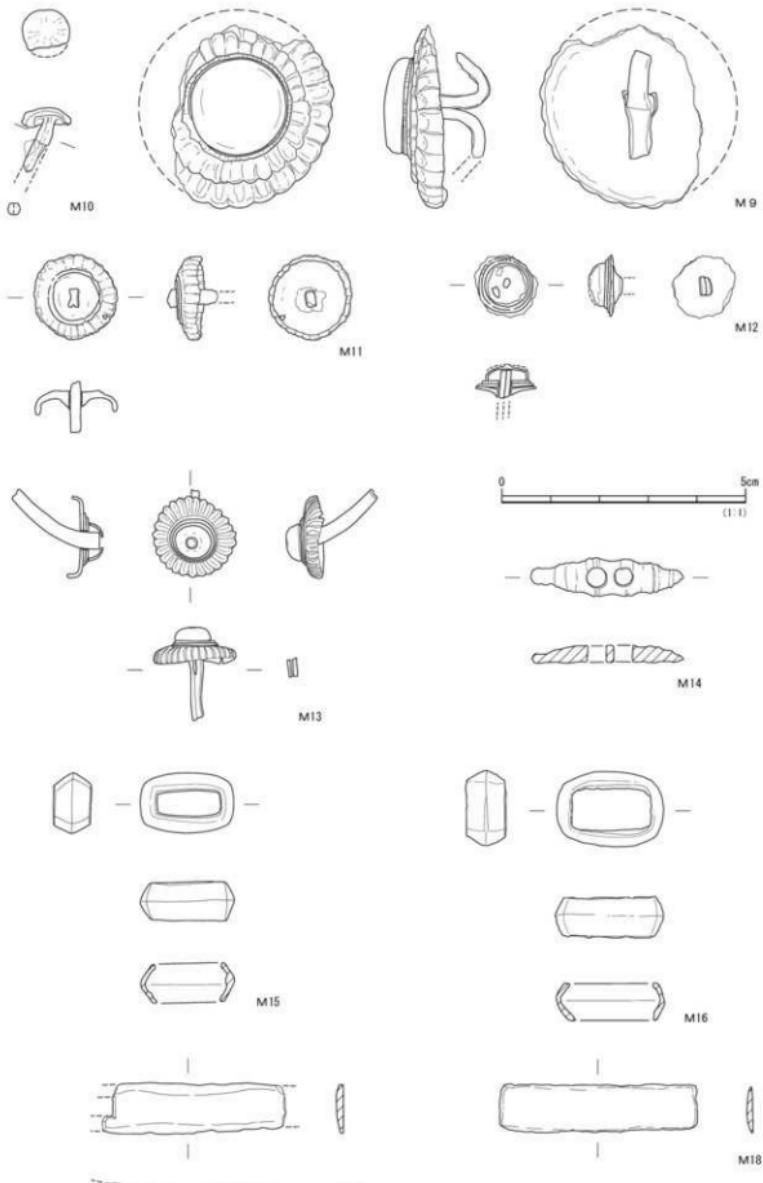
第Ⅲ郭盛土・主郭崩落土出土土鍾3・切岸出土土鍾



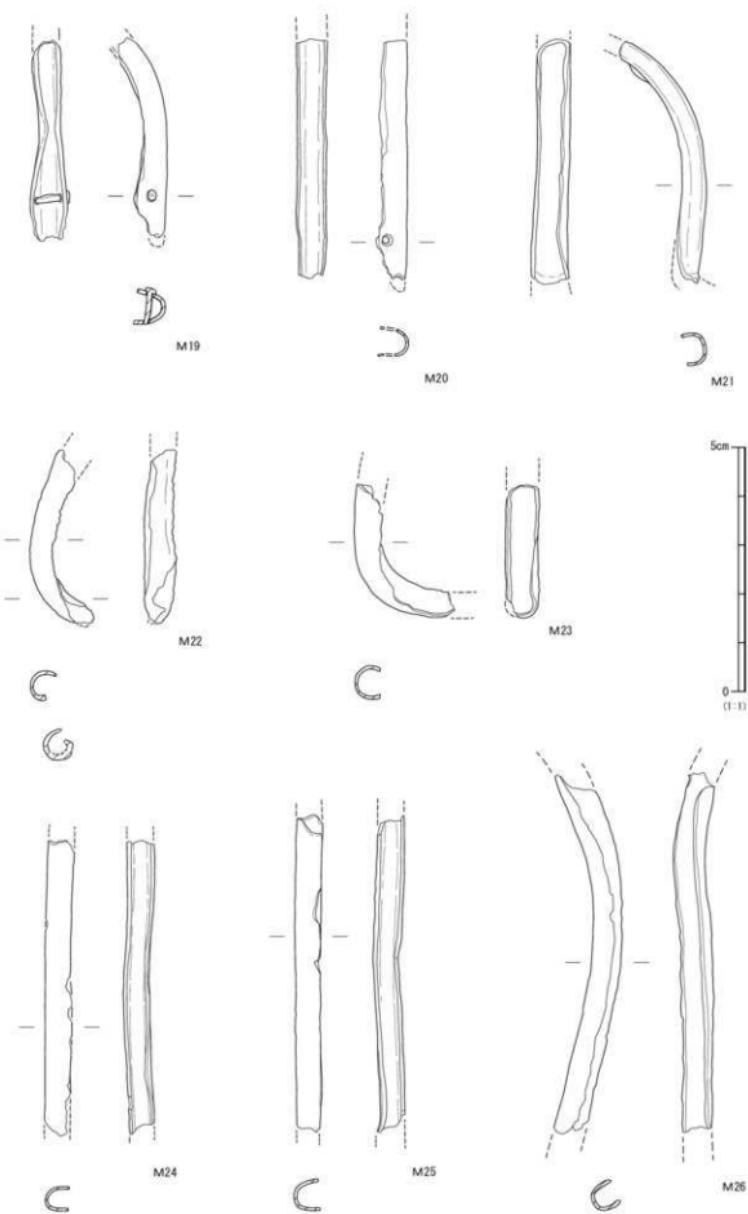
主郭表土・第Ⅱ郭盛土層出土石製品

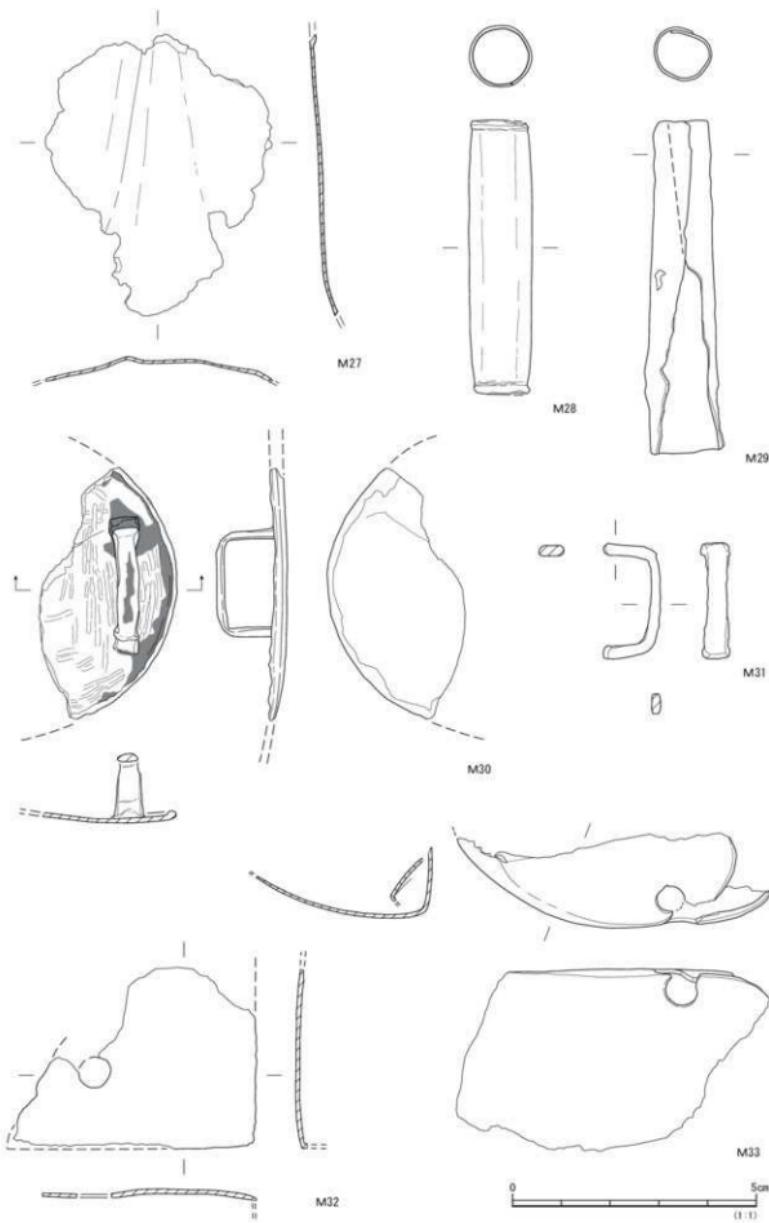


出土金属器 1

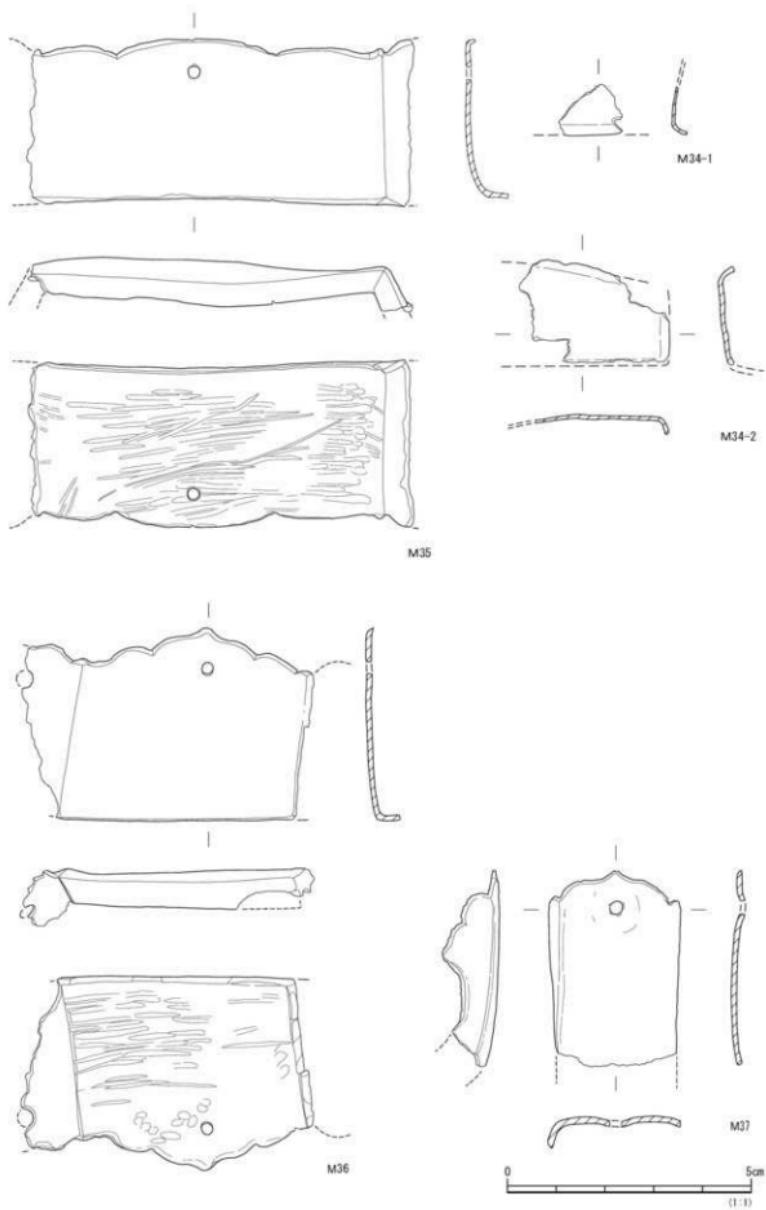


出土金属器 2

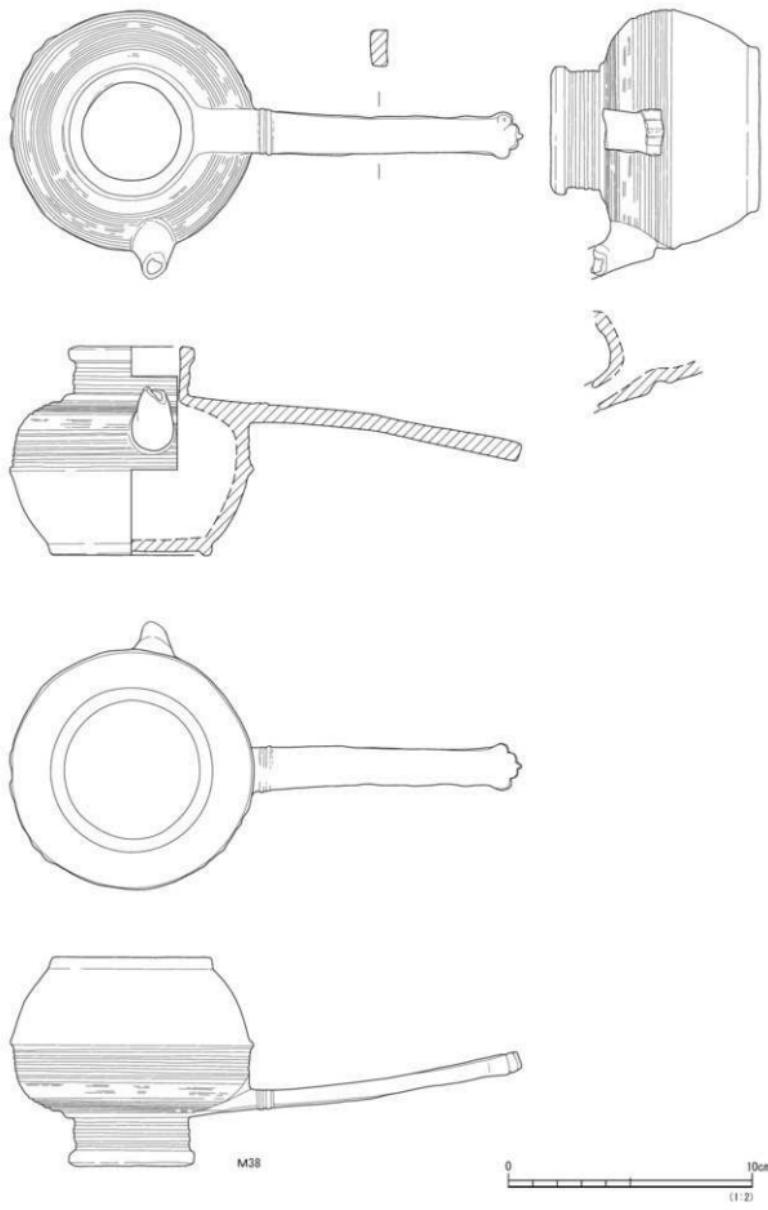




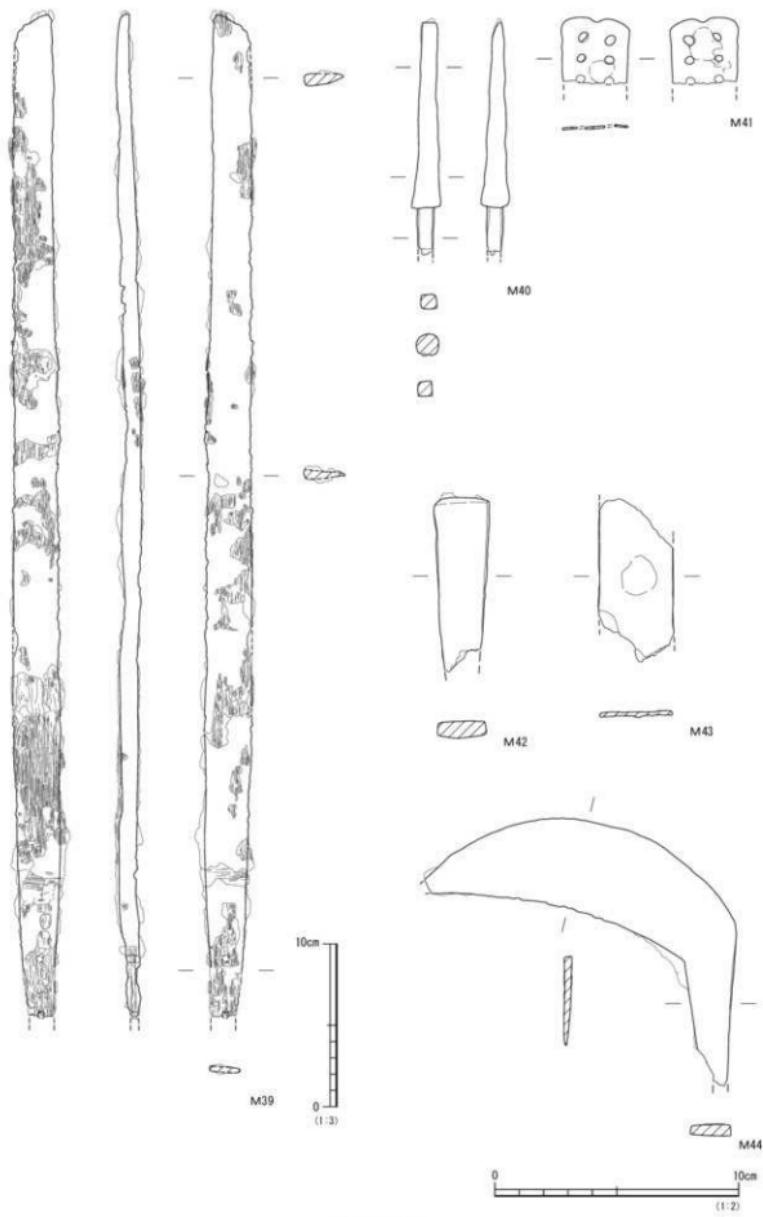
出土金属器 4



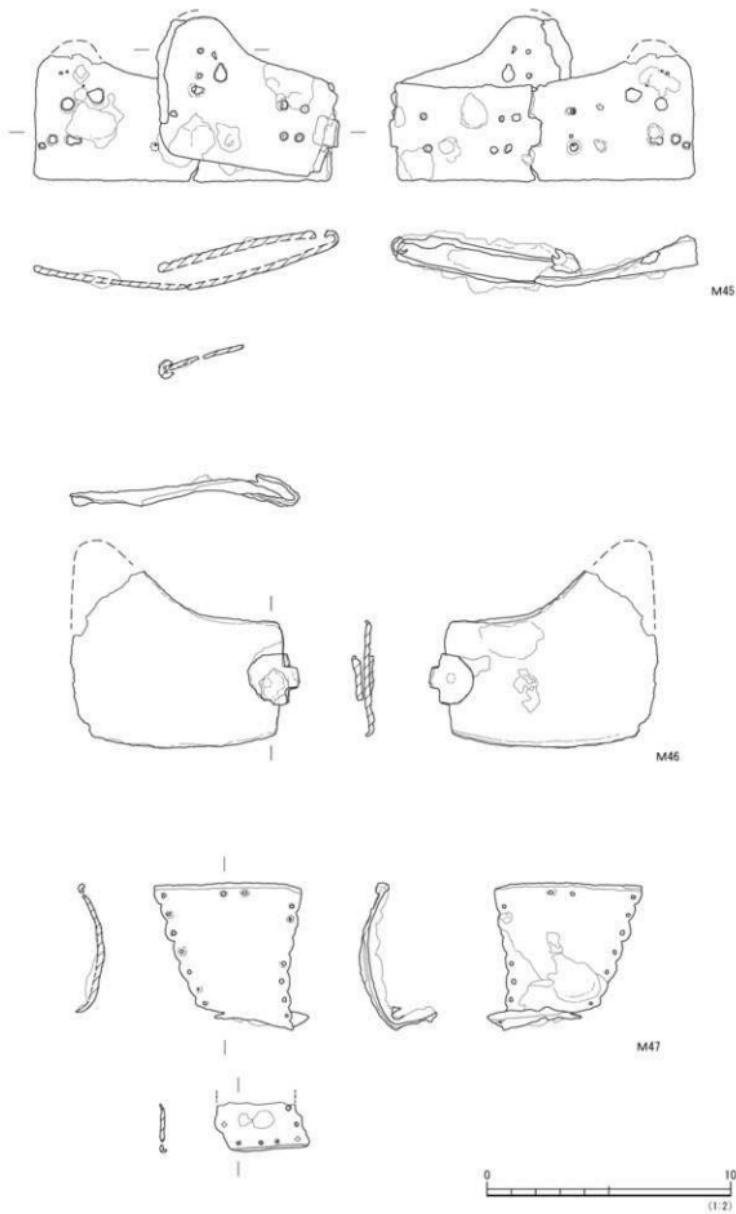
出土金属器 5



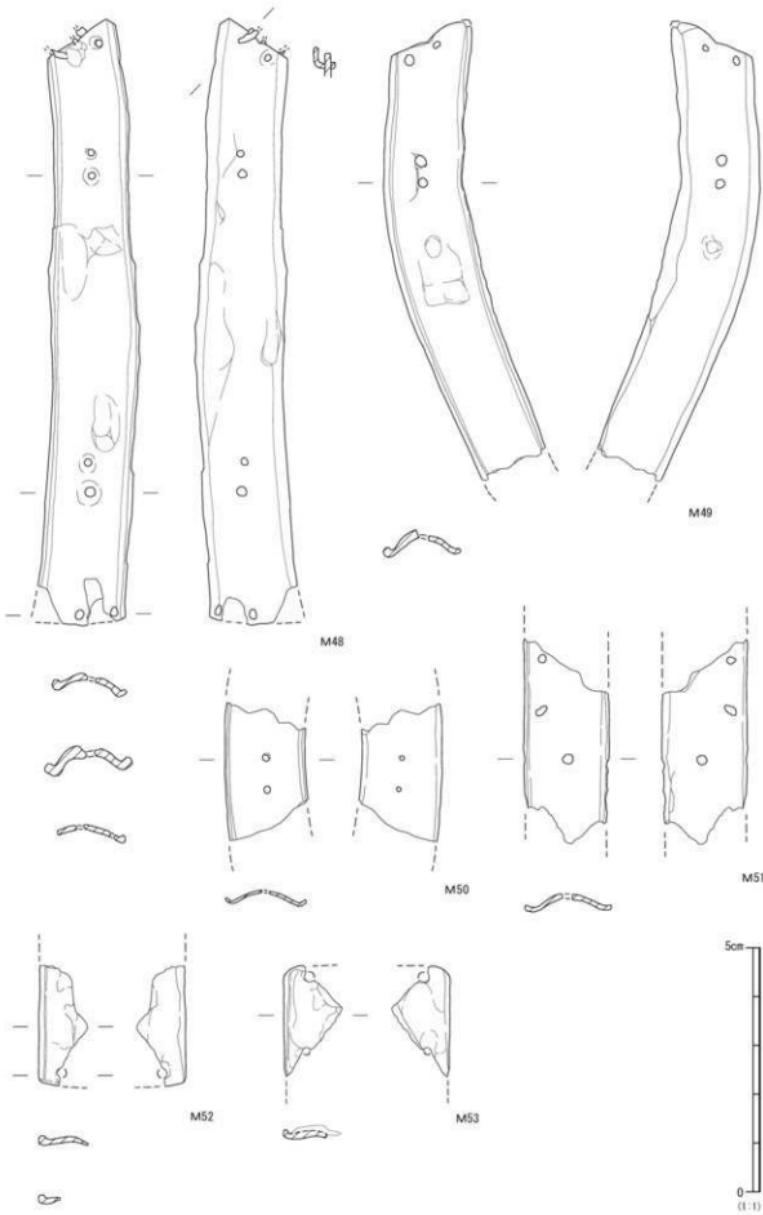
出土金属器 6



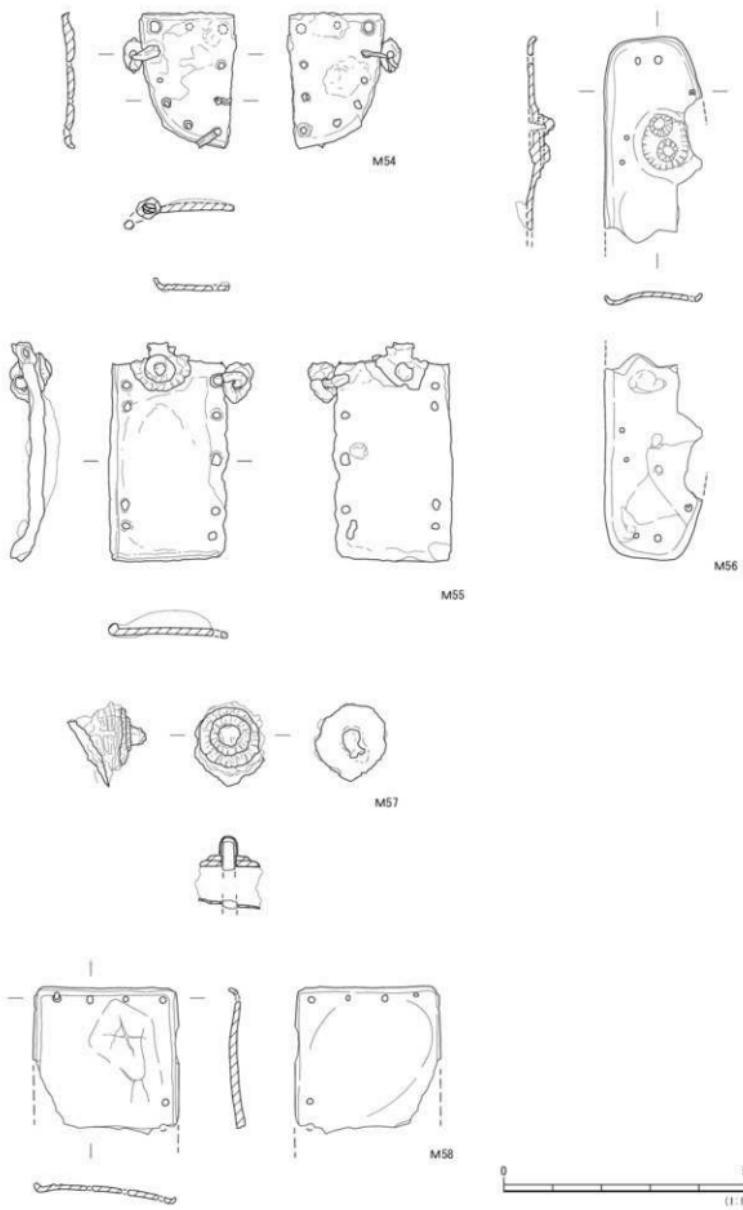
出土金属器 7



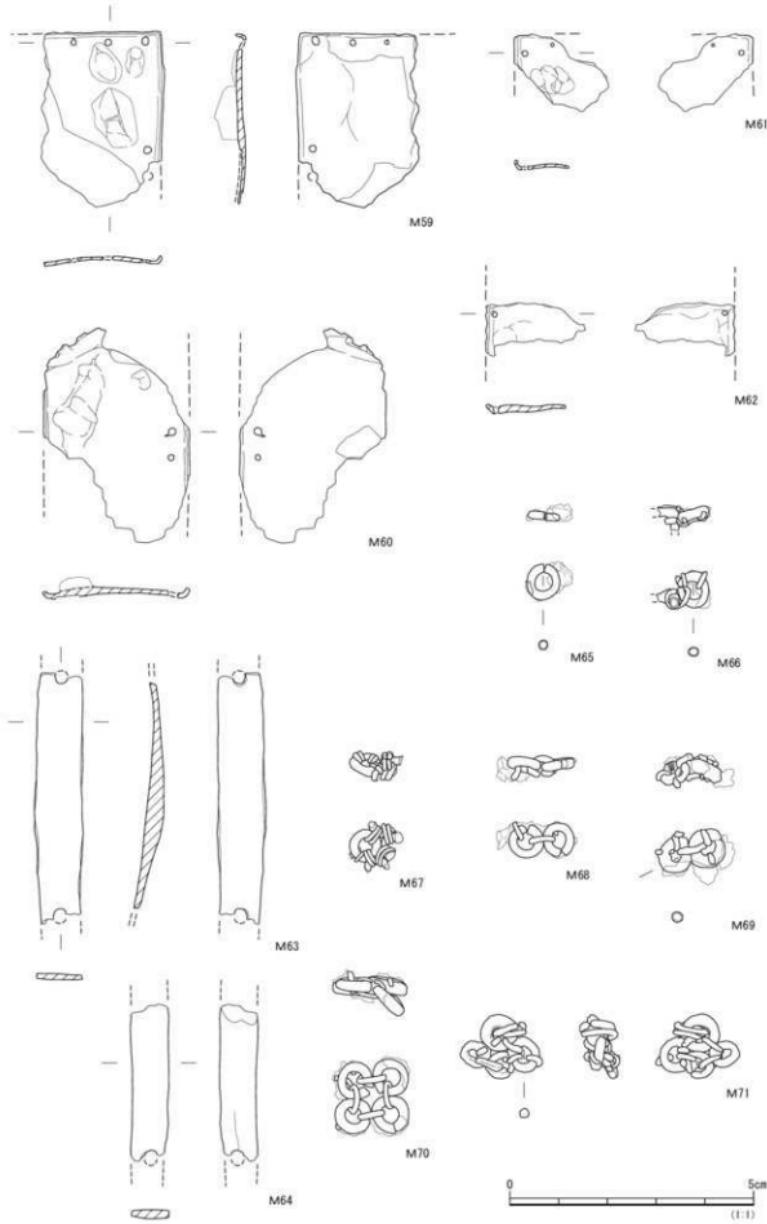
出土金属器 8



出土金属器 9



出土金属器 10





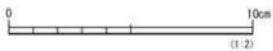
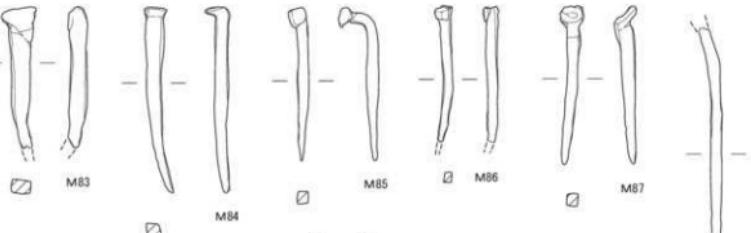
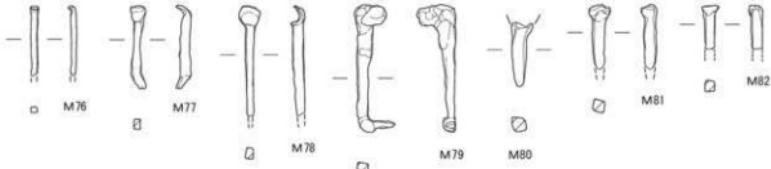
M73



M74



M75



出土金属器 12



# 写 真 図 版





調査前全景（北上空から）



調査後全景（北上空から）

写真図版2



遠景（南上空から）



遠景（南西上空から）



遠景（北西上空から）



遠景（西上空から）

写真図版4



近景（南上空から）



近景（北上空から）



調査前全景（東上空から）



調査前調査区全景（北上空から）

写真図版6



調査前全景（真上上空から・上が北）



調査前調査区全景（真上上空から・上が北）



調査後全景（東上空から）



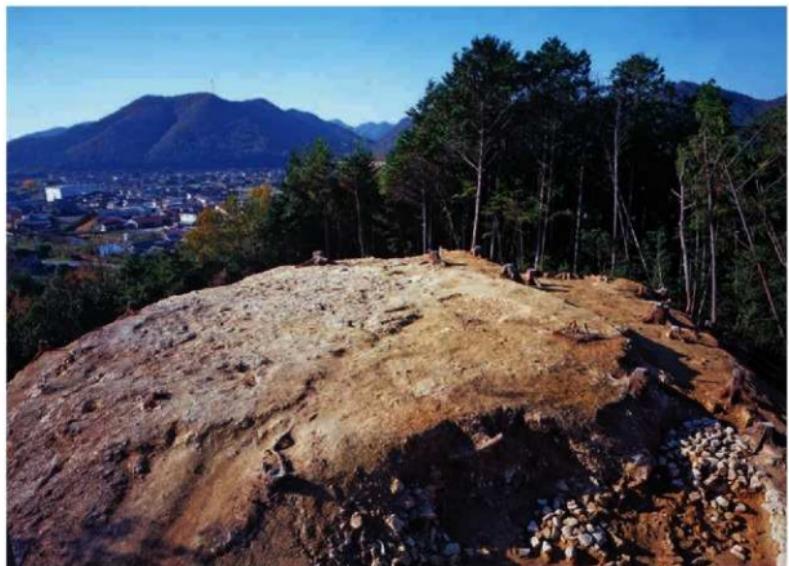
遠景（南麓から）



調査後全景（北から）



調査後調査区全景（北から）



主郭全景（東から）



主郭平坦面（西から）



急須形鉄製品出土状況（主郭・北西から）



① 急須形鉄製品出土状況（近接・西北西から）



② 急須形鉄製品出土状況（近接・東から）



③ 急須形鉄製品・石鍋出土状況（南から）



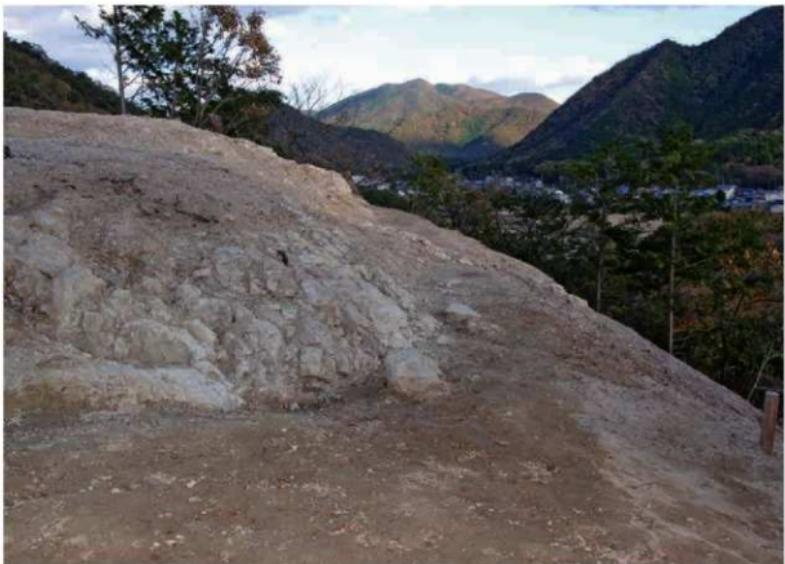
④ 石鍋出土状況（南から）



第Ⅱ郭全景（東から）



第Ⅱ郭北西部全景（北東から）



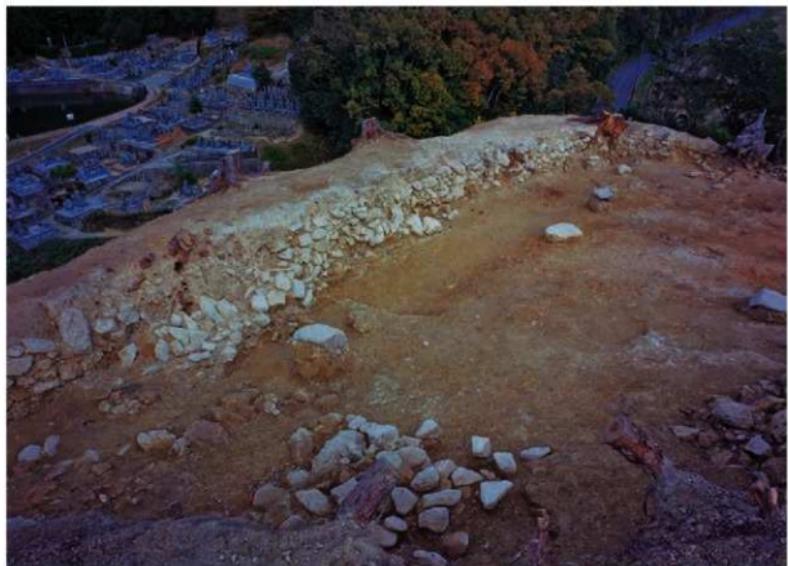
主郭南側の通路（旧第IV郭・西から）



主郭南東側の通路・斜路（西から）



第三郭全景（南西から）



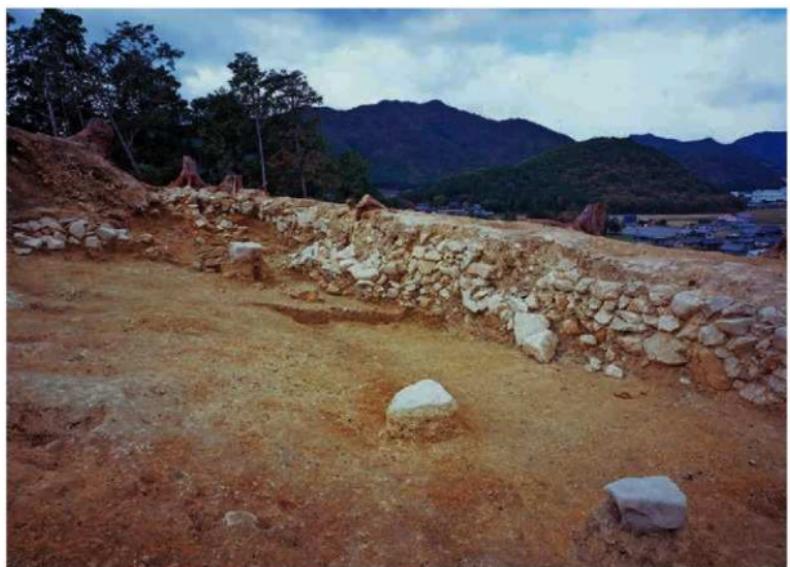
第三郭北辺土塁・石積（南西から）



第三郭土塁・集石（西から）



第三郭土塁と石積（東から）



第三郭内平坦部・土壘内面の石積（南東から）



第三郭土壘中央部石積（南から）



第Ⅲ郭土壘西端部石積（南東から）



第Ⅲ郭南東部の虎口石段（南東から）



主郭北東部斜面の石積（北東から）



第Ⅲ郭西端の集石（西から）



第Ⅲ郭全景（真上から・上が北）



① 第Ⅲ郭土壘（東から）



② 第Ⅲ郭土壘中央部截ち割り底面（南から）



③ 第Ⅲ郭南東部の虎口石段（西から）



④ 第Ⅲ郭南東部の虎口石段（北西から）



① 主郭北東部斜面の石積崩落状況（北西から）



② 第Ⅱ郭南側の通路埋土土層断面（北東から）



③ 第Ⅱ郭西部盛土土層断面（南から）



④ 第Ⅲ郭虎口石段截ち割り土層断面（南南西から）



⑤ 第Ⅲ郭集石截ち割り土層断面（東から）



⑥ 第Ⅲ郭土塁中央部截ち割り土層断面（南西から）



⑦ 第Ⅲ郭土塁東部截ち割り土層断面（北西から）



⑧ 第Ⅱ郭南側通路南斜面埋土土層断面（北西から）

写真図版20



① 主郭から第三郭の土層（南東から）



② 主郭の盛土と崩落土（東から）



③ 東西畔 主郭南側の通路の土層（北東から）



④ 主郭南側の通路下土層（東から）



⑤ 南北畔 主郭北側の土層（南東から）



⑥ 北側斜面の土層（北東から）



⑦ 第Ⅱ郭北半部下層の土層（南東から）



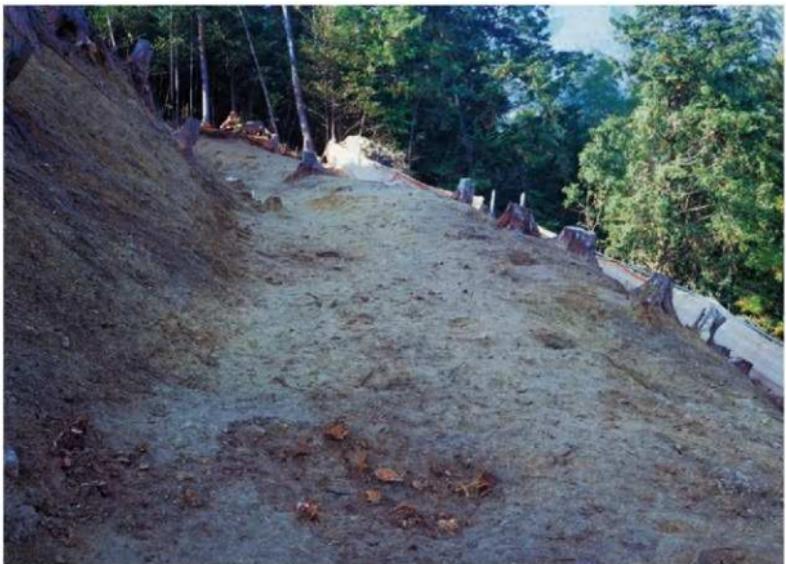
⑧ 第VI郭下斜面の土層（東から）



第VI郭西半部（西南西から）



第VI郭東半部（西から）



第VII郭西半部（東から）



第VII郭西端部（東北東から）



下層遺構全景（北西上空から）



下層遺構全景（西上空から）



下層遺構西部全景（東上空から）



下層遺構北西部（南南東上空から）



下層遺構北西部（北北西から）



北側斜面の下層遺構（南東から）



① 下層段状遺構 4 埋土土師器皿出土状況（南から）



② 下層段状遺構 4 土師器皿・鉄釘出土状況（南から）



③ 下層段状遺構 4 土師器皿・碁石出土状況（南から）



④ 第Ⅱ郭盛土内鉄釘出土状況（東から）



⑤ 下層段状遺構 4 碁石出土状況（南から）



⑥ 第Ⅱ郭出土鉄釘



⑦ 下層段状遺構 4 土師器皿・鉄釘出土状況（東から）



⑧ 第Ⅱ郭出土鉄釘



第Ⅲ郭崩落土内土錘群出土状況（北東から）



第Ⅲ郭崩落土内土錘群出土状況（北北東から）



第Ⅲ郭平坦面西部  
焼土検出状況（南から）



第Ⅲ郭平坦面西部  
焼土と土錐群の検出面  
(東から)



第Ⅲ郭西端集石部分  
青白磁出土状況  
(南西から)



第Ⅲ郭西端出土土師器皿出土状況



① 第Ⅲ郭土壘埋土内土師器皿出土状況  
(南東から)



② 第Ⅲ郭西端出土土師器皿と銅製品（M29）出土状況



③ 第Ⅲ郭 銭貨（M 1）出土状況



④ 第Ⅲ郭 刀装具（M 3）出土状況



第Ⅲ郭 切羽金具（M 2）  
出土状況



第Ⅲ郭 銀台（M 6）と  
鉄製品出土状況



第Ⅲ郭 菊重ね姫（M 9）  
出土状況



第三郭 金物（M15）・  
飾り金具（M35）・脇板  
（M45）・金物（M47）  
出土状況



第三郭 金物（M35）  
出土状況



第三郭 金物（M15）  
出土状況



第Ⅲ郭 飾り金具 (M36)  
出土状況



第Ⅲ郭 飾り金具 (M37)  
出土状況



第Ⅲ郭 覆輪 (M96)  
出土状況



第三郭 墓（M48）・  
脇板（M45）出土状況



第三郭 墓（M48）  
出土状況



第三郭 脇板（M45）  
出土状況



第三郭 土師器皿と巻貝出土状況（北から）



① 第三郭 巷貝出土状況



② 第三郭 土師器皿と巷貝出土状況



③ 第三郭 巷貝出土状況



④ 第三郭 巷貝出土状況



下層平坦面2と段状造構2（西南西から）



下層平坦面2と段状造構2（西から）



第Ⅱ郭北部盛土（段状遺構 2 埋土）土層断面（東北東から）



第Ⅲ郭土塁中央部截ち割り土層断面（東から）



下層段状遺構3（北東から）



下層段状遺構4（北東から）



下層段状造構 4 埋土中の礎（南東から）



下層段状造構 4 埋土中の礎（北西から）



第Ⅱ郭北西部盛土土層断面（南南西から）



第Ⅱ郭下層の石列1東半部（西から）



第Ⅱ郭下層の石列1  
全景（西から）



下層段状遺構3北西側  
の石列2（西南西から）



下層段状遺構3北西側  
の石列2（南南西から）





① 下層段状遺構 2 西半部（西南西から）



② 下層段状遺構 2 南西隅細部（北西から）



③ 下層段状遺構 1 北斜面下の柱穴状遺構（東から）



④ 下層段状遺構 3（南西から）



⑤ 下層段状遺構 4（東南東から）



⑥ 第Ⅱ郭下層の石列 1（南から）



⑦ 北側切岸下層の溝状遺構（南西から）



⑧ 下層堅堀状遺構 2 と溝状遺構（南東から）



① 山上講祠調査前現況（南南西から）



② 山上講前面の敷石（南南西から）



③ 山上講内部の石造品等（南から）



④ 主郭北西部のコンクリート塊（東から）



⑤ 祠内にあった石造品（不動明王）



⑥ 北側山麓の一石一塔  
(明治10年)



⑦ 北側墓地内の一石一塔  
(天明7年)



⑧ 兵主神社（南から）



⑨ 南側山麓の八幡神社（南西から）



① 第VI郭付近掘削状況（西から）



② 第III郭東部調査状況（南西から）



③ 第VI郭掘削前（南西から）



④ 北側切岸掘削状況（北西から）



⑤ 急須形鉄製品出土場所の精査状況（北から）



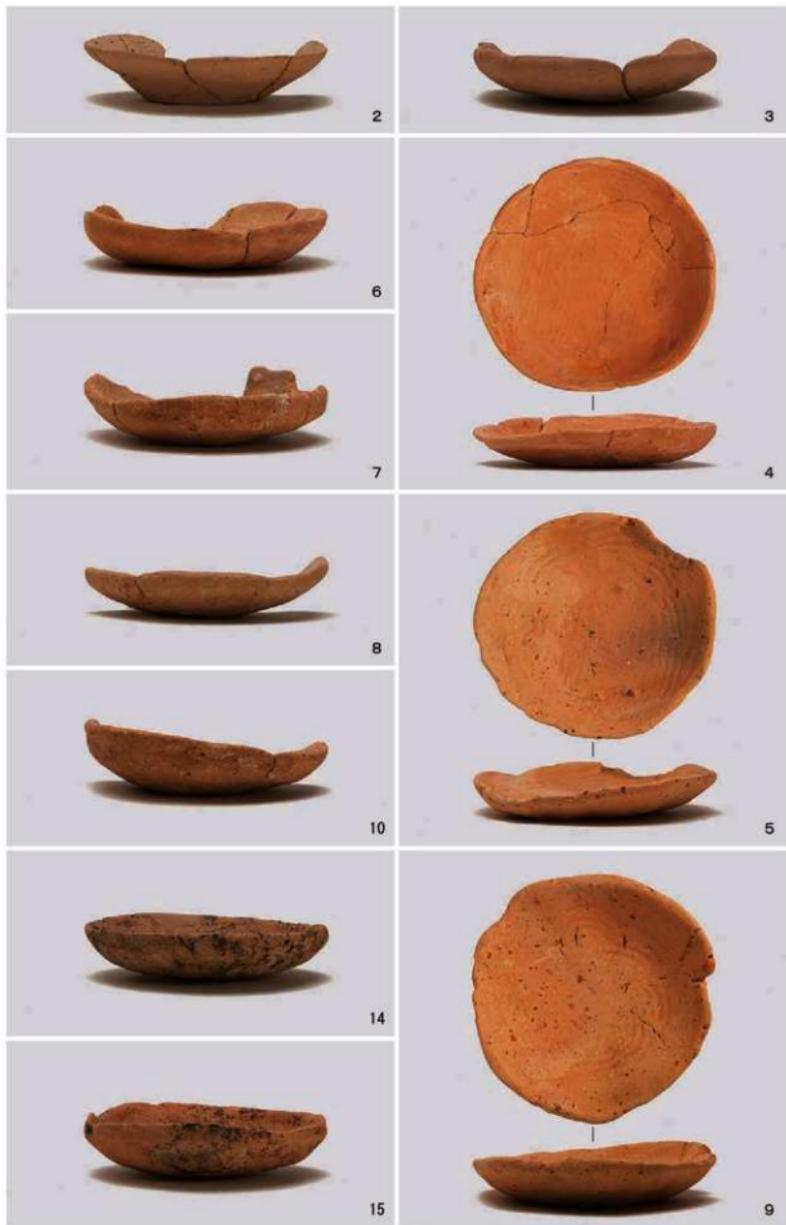
⑥ ラフタークレーンによるベルトコンベアの撤去状況



⑦ 現地説明会開催状況（第III郭・西から）



⑧ 現地説明会開催状況（第VI郭・東から）



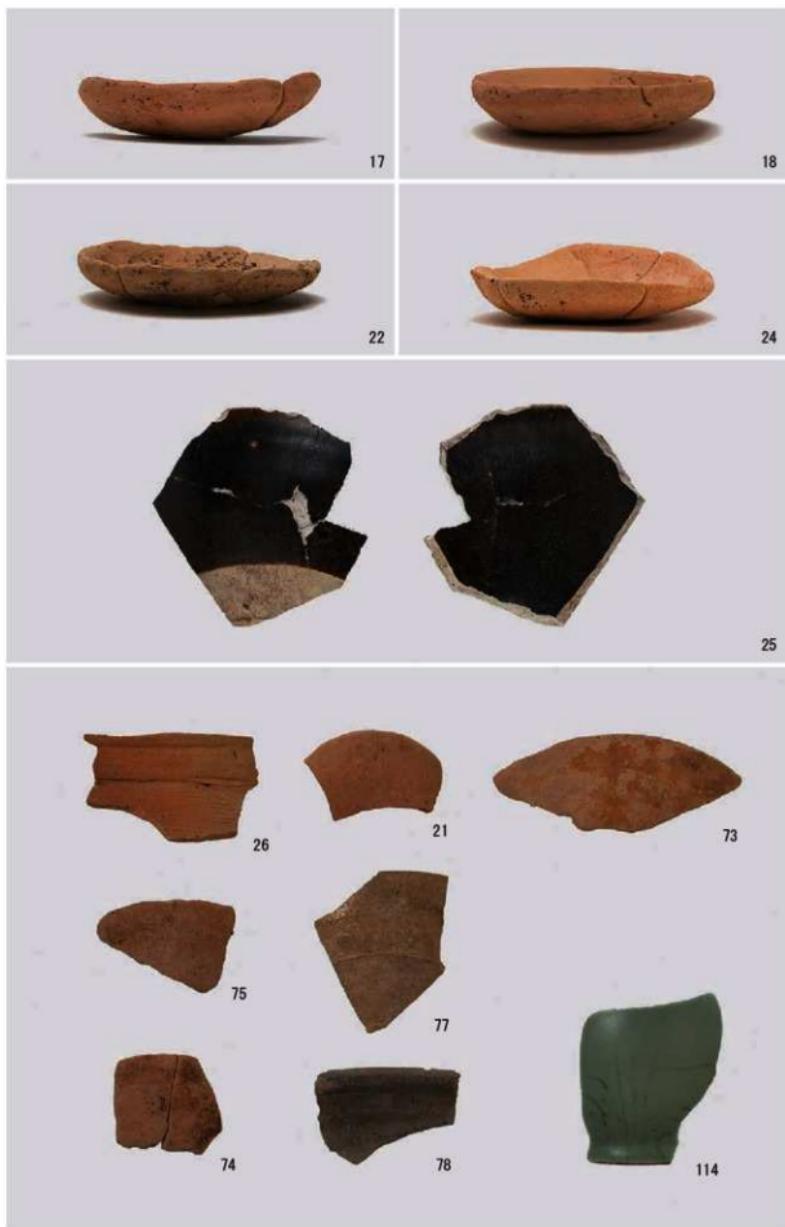
主郭・第Ⅱ郭出土土器器皿



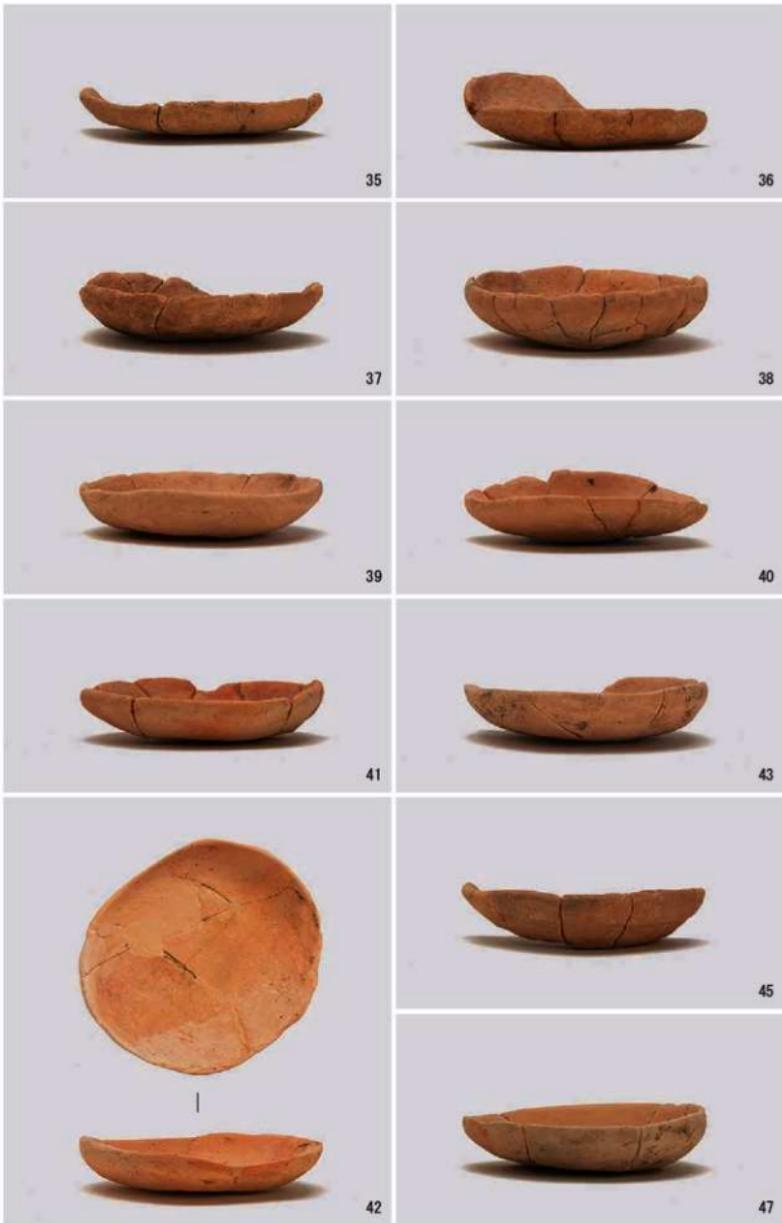
主郭出土土器・陶磁器



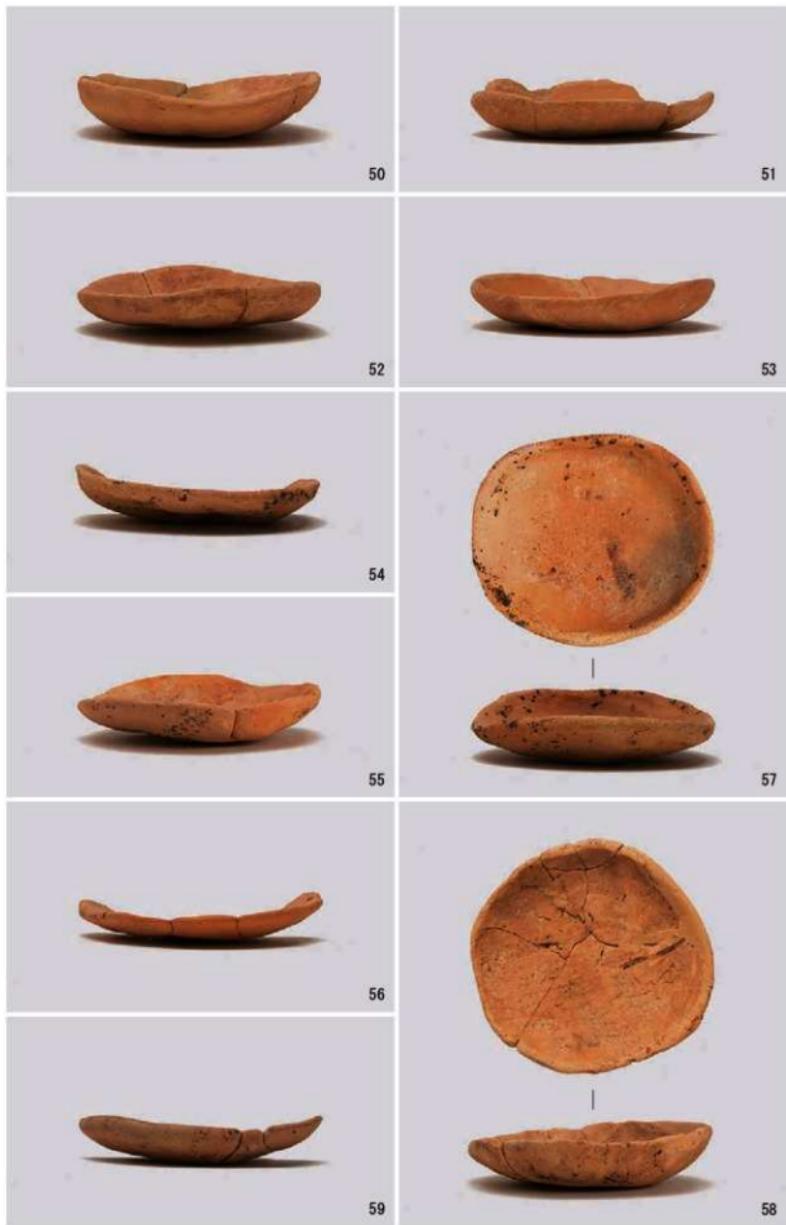
第Ⅱ郭・第Ⅲ郭出土土師器・須恵器・陶器



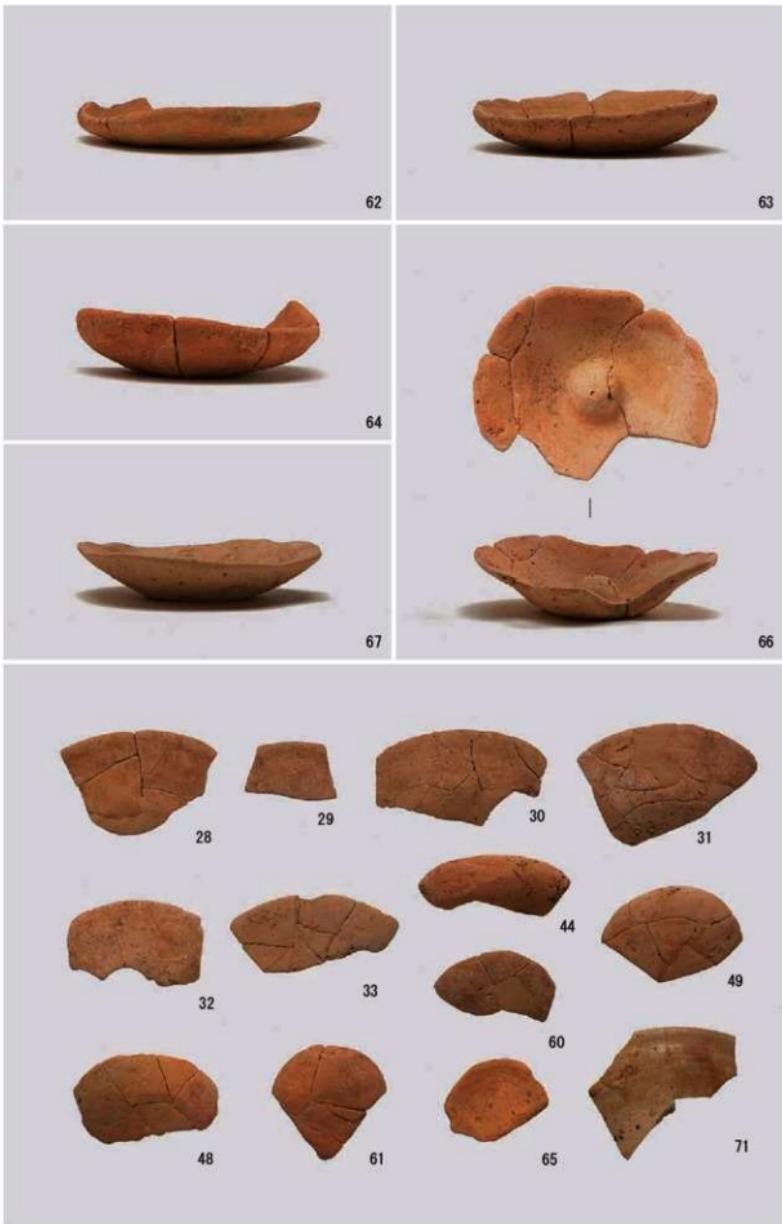
第Ⅱ郭・切岸出土土師器・須恵器・陶磁器



第Ⅲ郭出土土師器皿 1



第Ⅲ郭出土土師器皿2



第II郭出土土師器皿・陶器



68

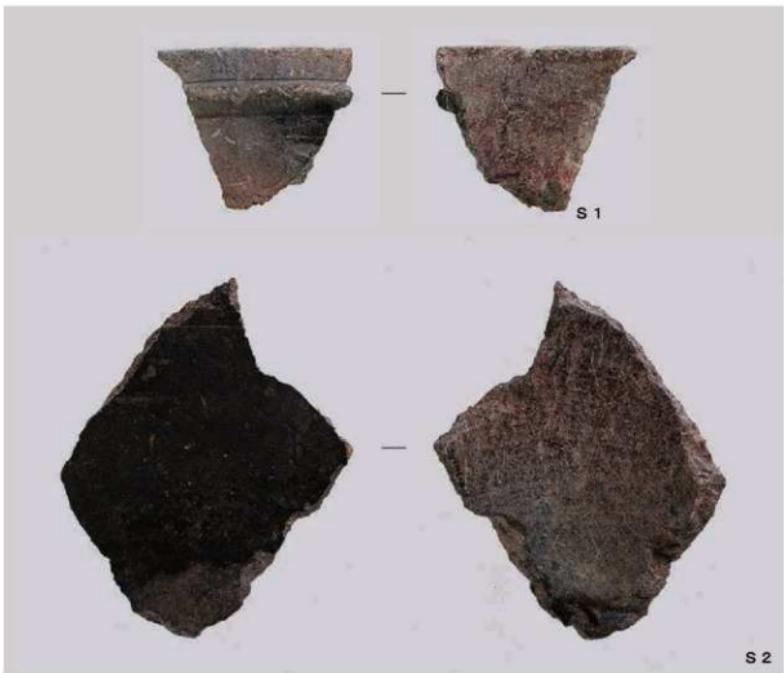


69

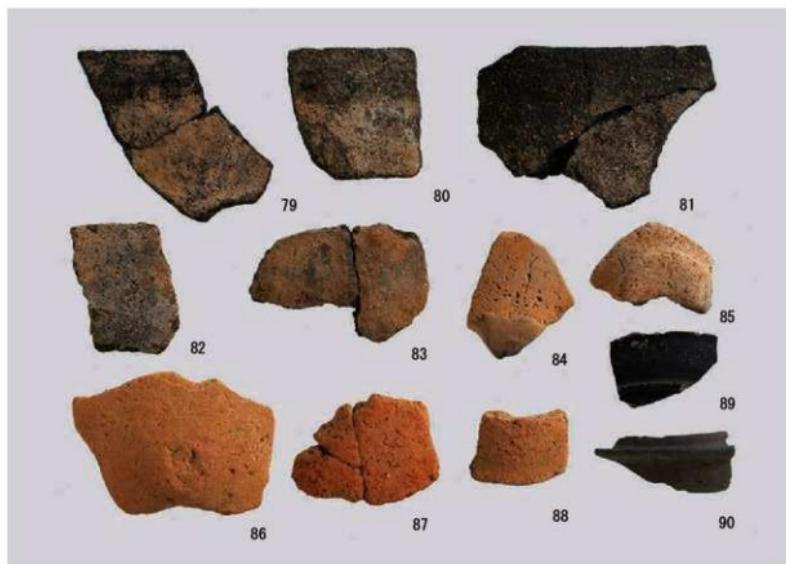
第Ⅲ郭出土青白磁



第Ⅲ郭・切岸出土陶器・瓦質土器



第Ⅱ郭・第Ⅵ郭出土石鍋



各郭出土築城以前の土器



各郭出土築城以前の土器・須恵器



96



107



110



103



111



104



105



106



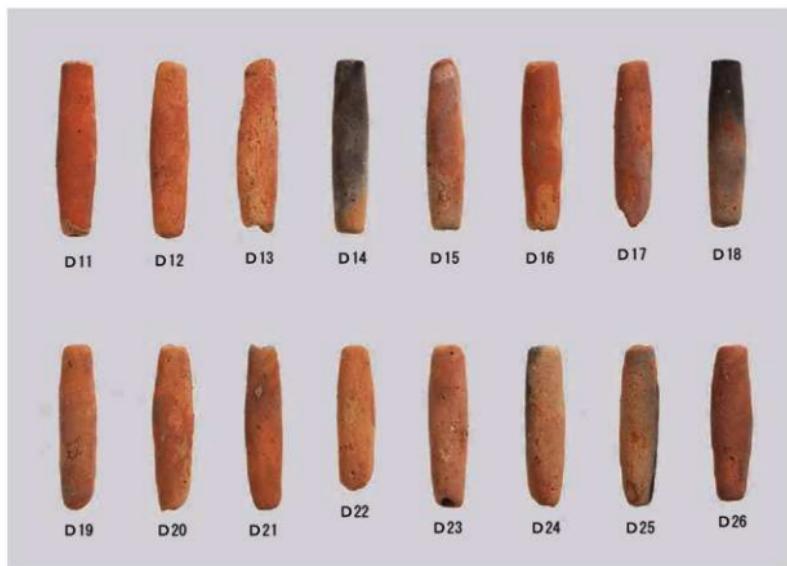
91



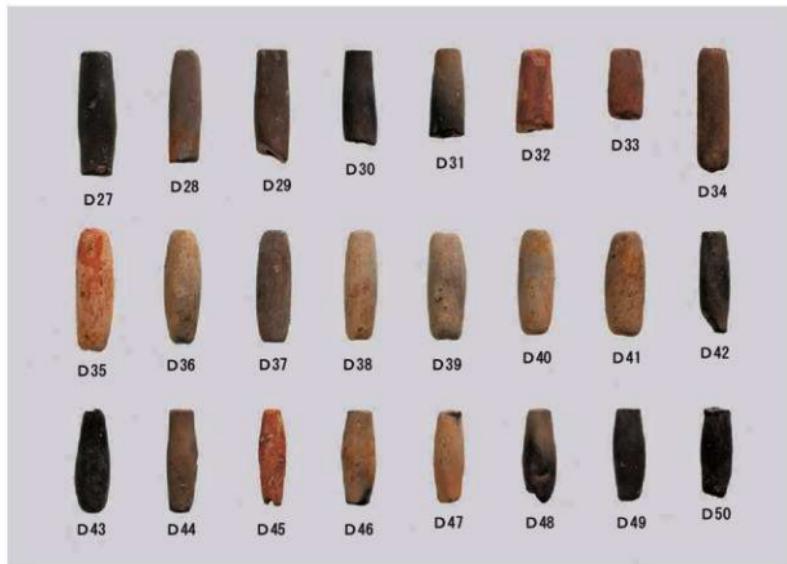
92



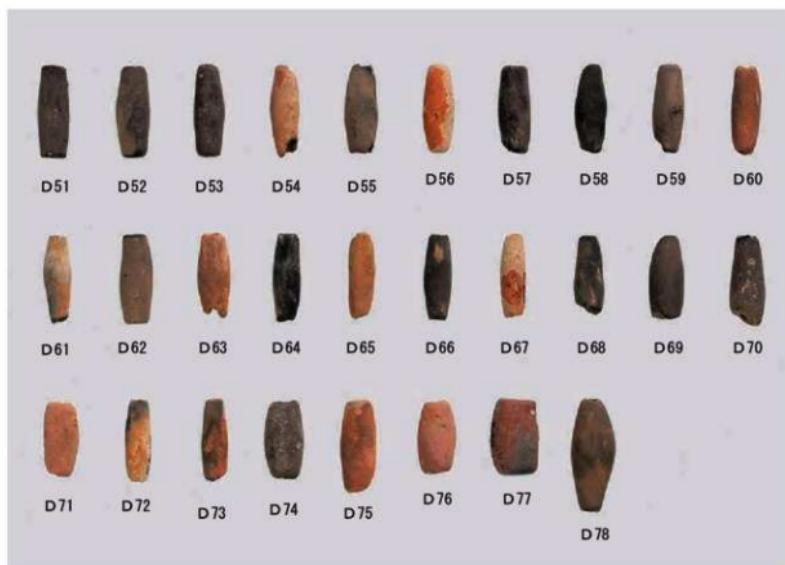
93



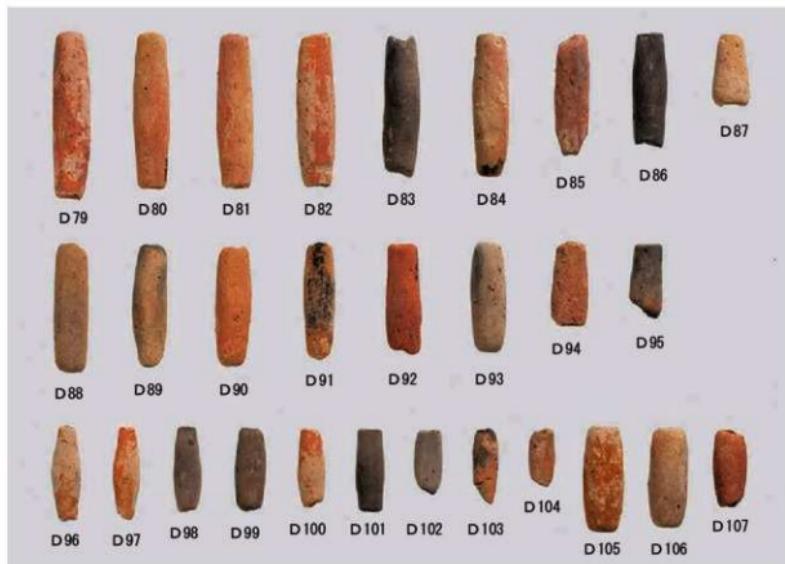
第三郭土錘群出土土錘 1



第三郭土錘群出土土錘 2



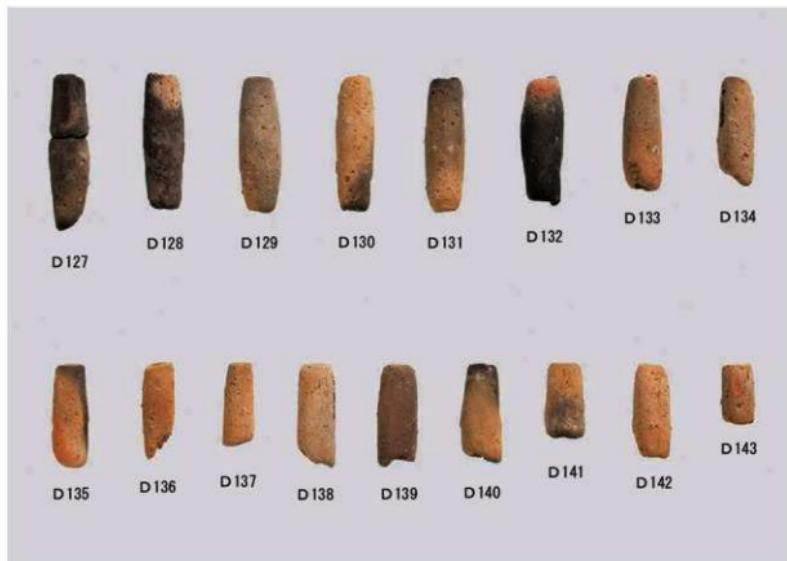
第三郭土鐘群出土土鐘3



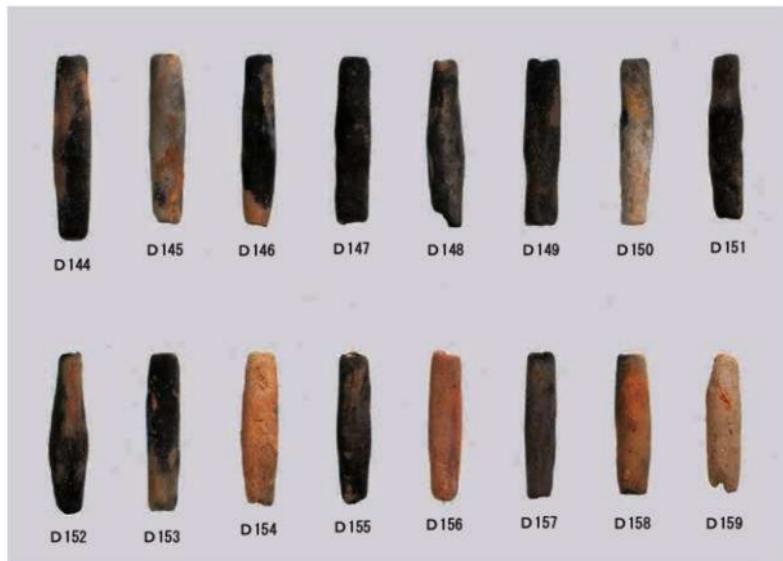
第三郭主郭石積下出土土鐘



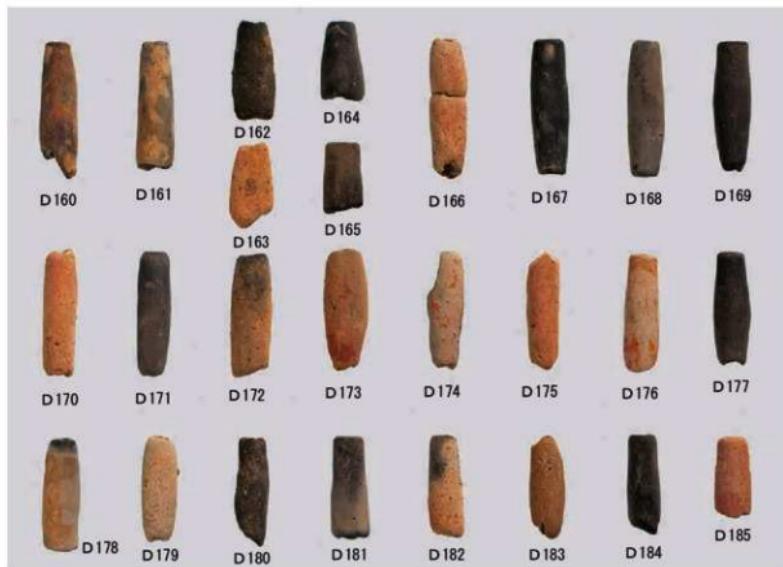
第三郭主郭崩落土出土土錘



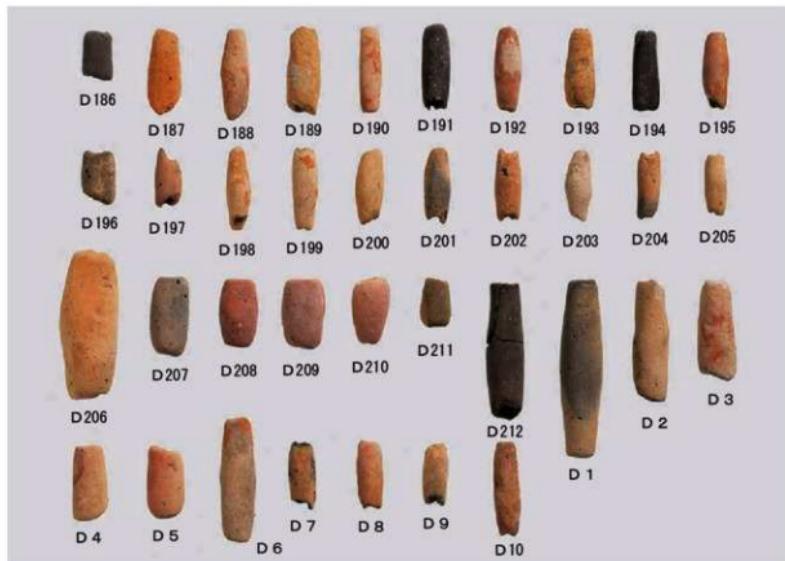
主郭北東部盛土出土土錘



第三郭盛土・主郭崩落土出土土錘 1



第三郭盛土・主郭崩落土出土土錘 2



第Ⅱ郭、第Ⅲ郭盛土・主郭崩落土、切岸出土土錘



第Ⅲ郭出土甲冑関連銅製品



主郭表土・第Ⅱ郭盛土層出土石製品



M 1



M91



|



M14



|



M16



|



M15



|



M4



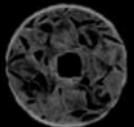
M 3



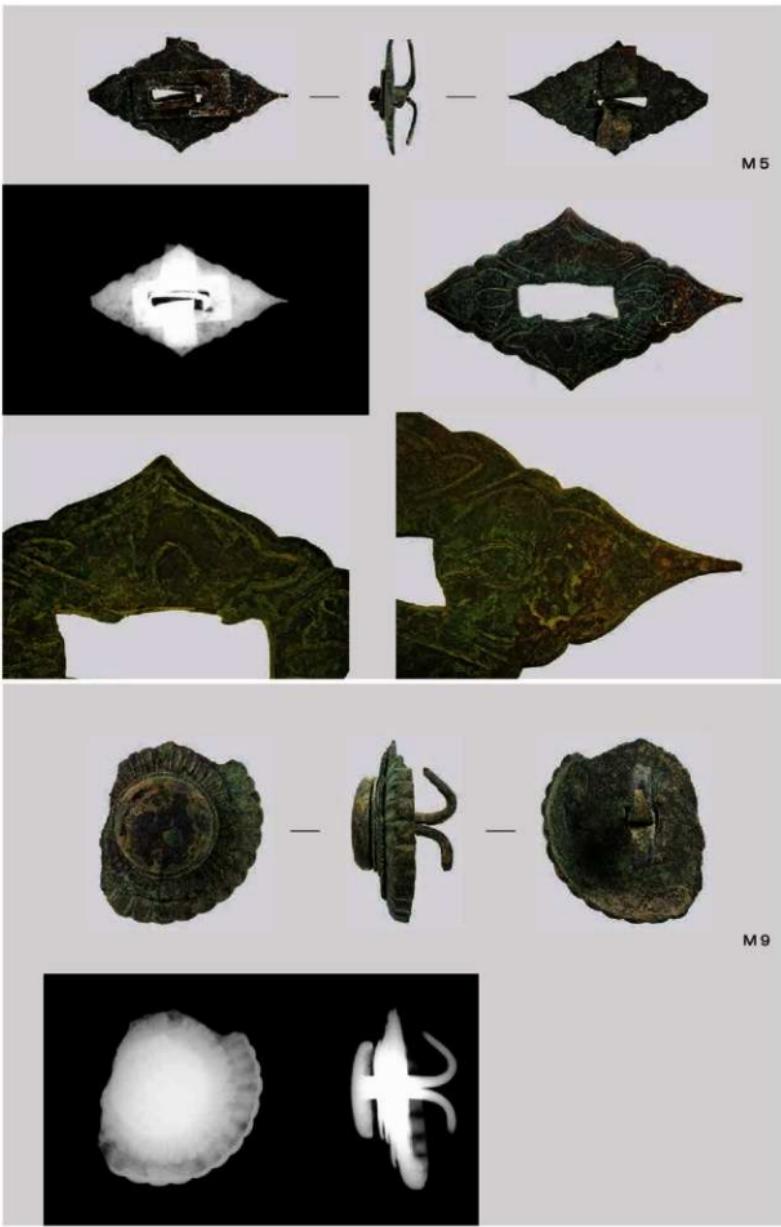
M 2



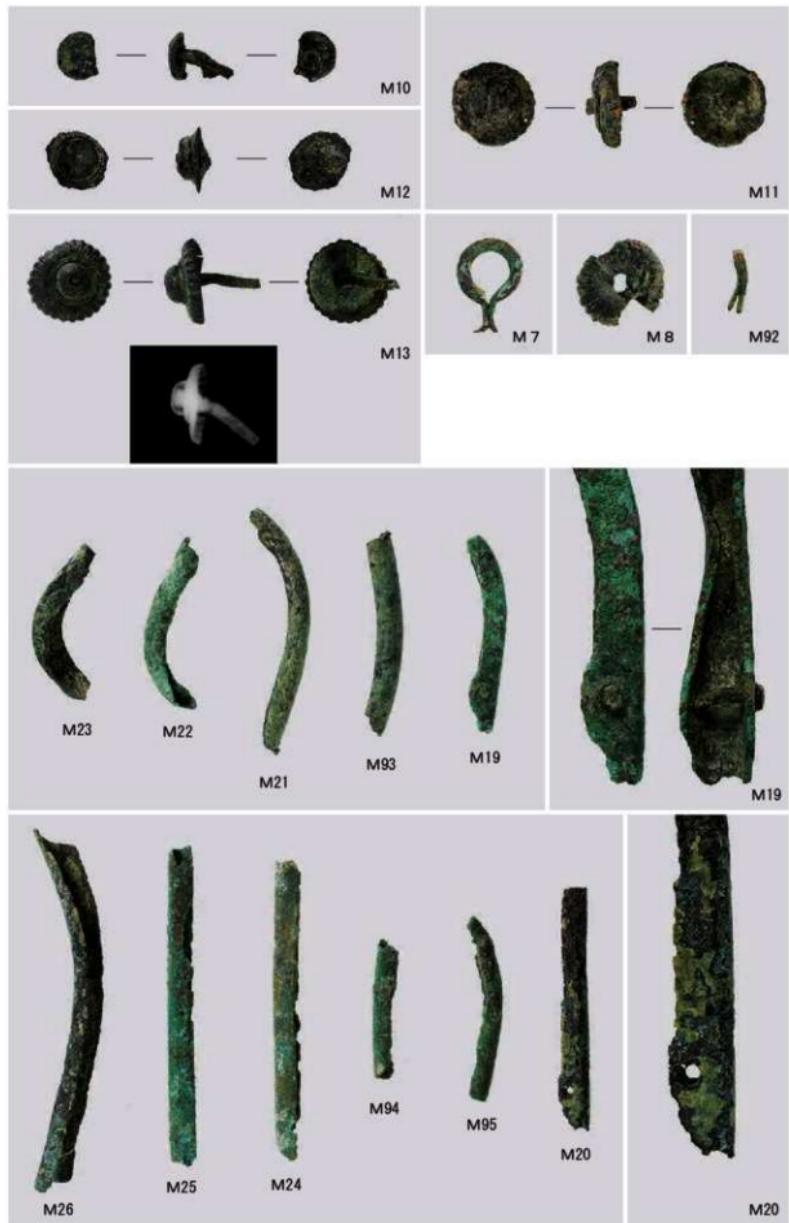
M 6



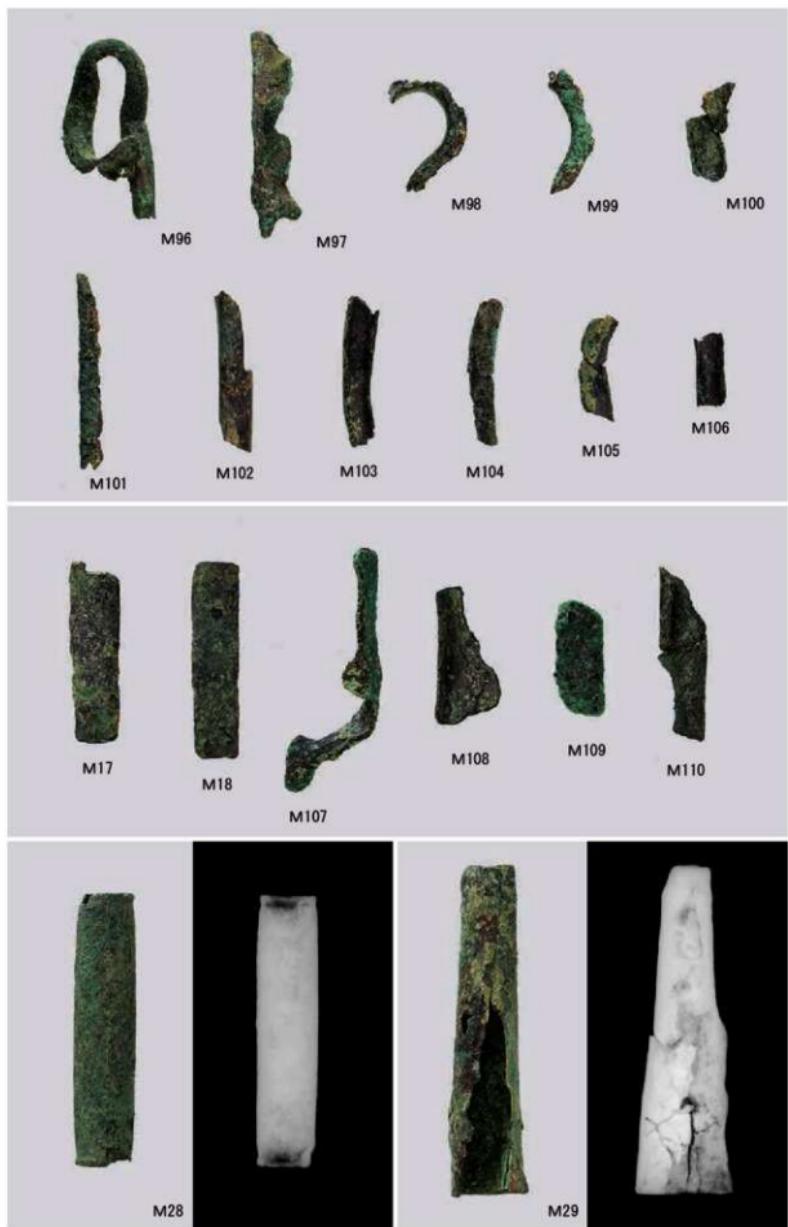
出土金属器 1



出土金属器 2



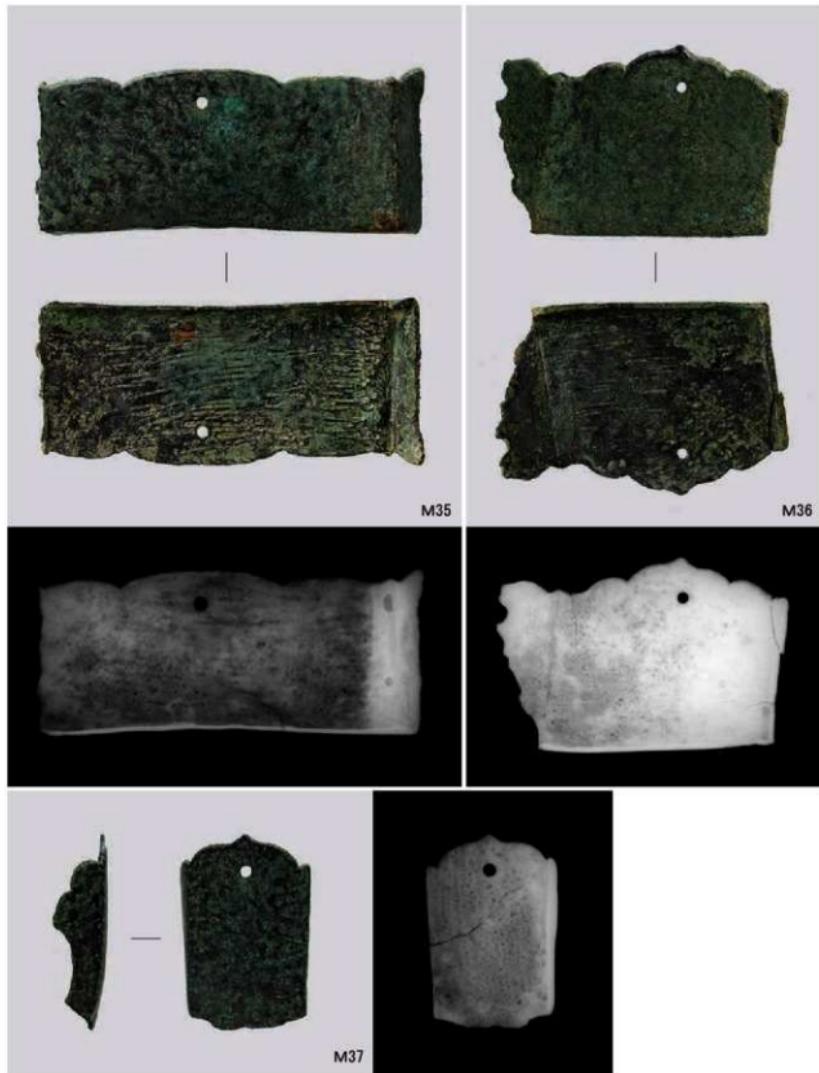
出土金属器 3



出土金属器 4

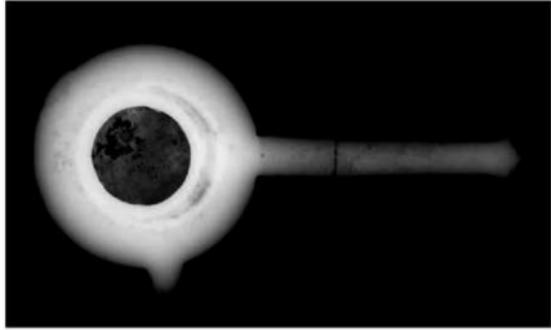


出土金属器 5



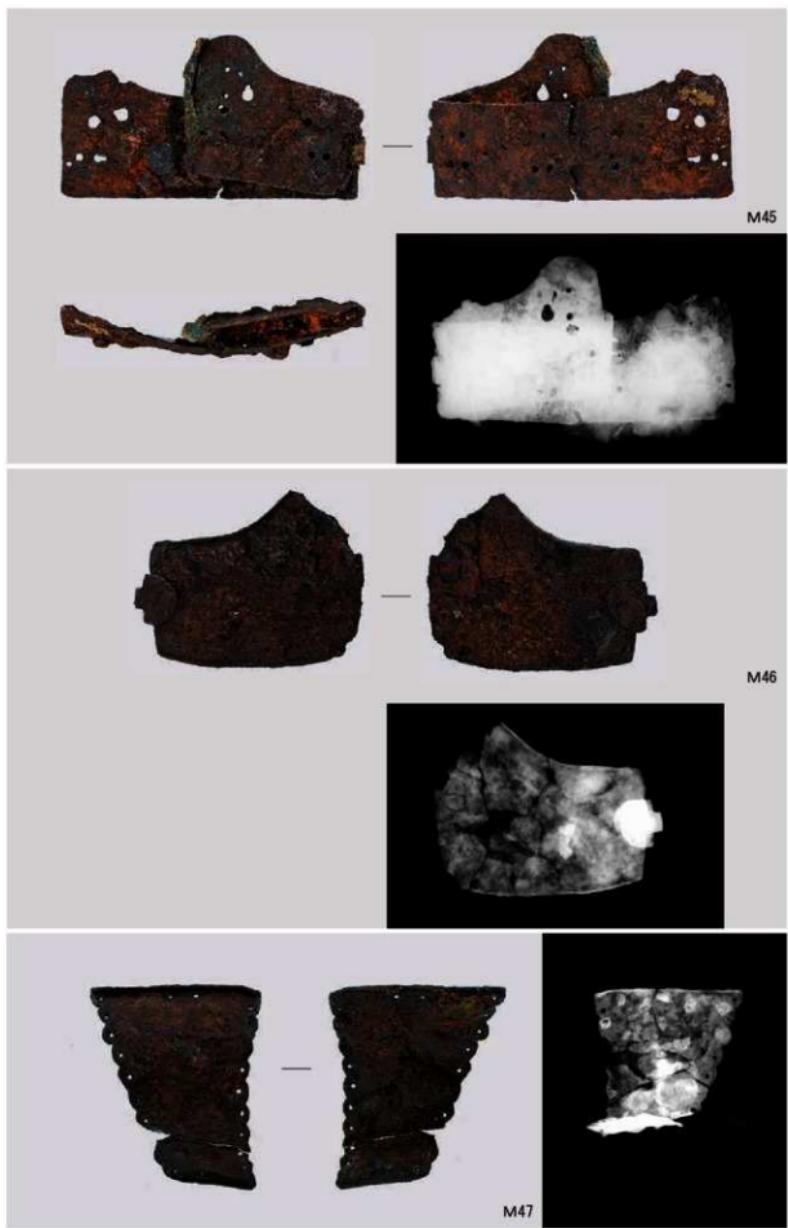


M38

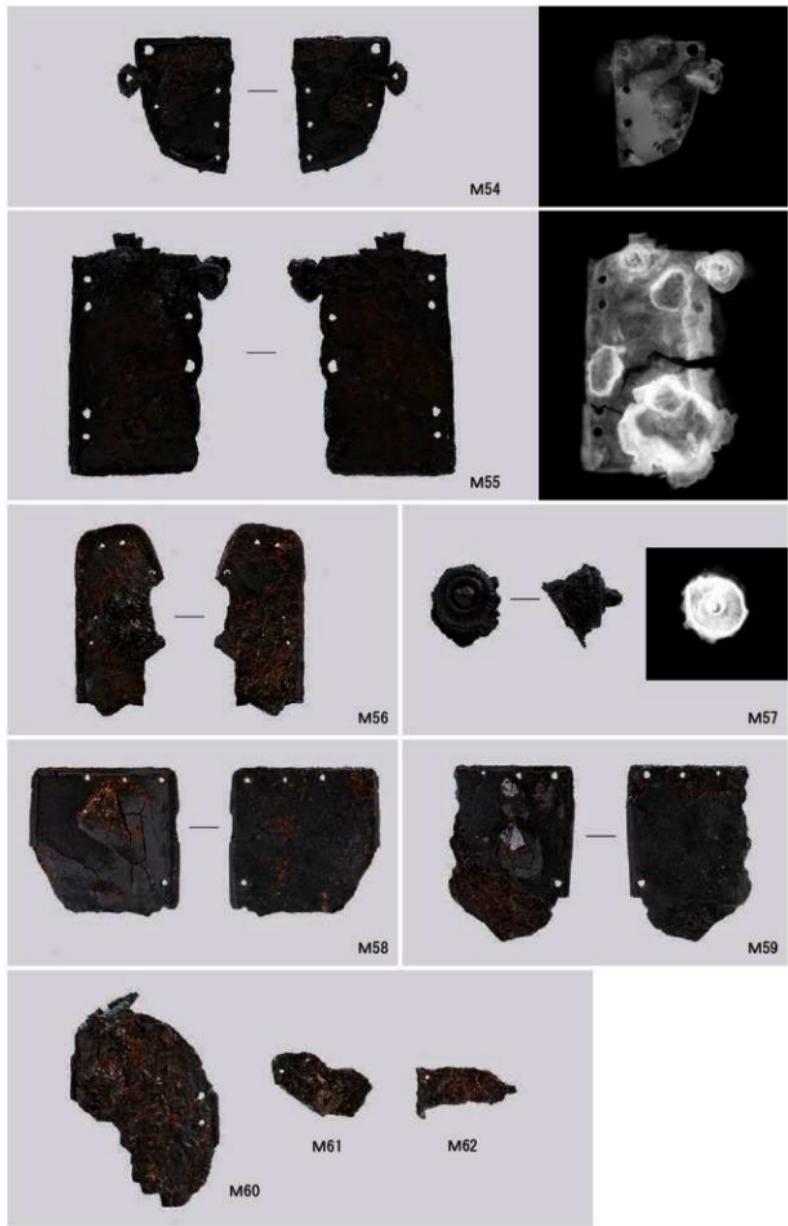


出土金属器 7



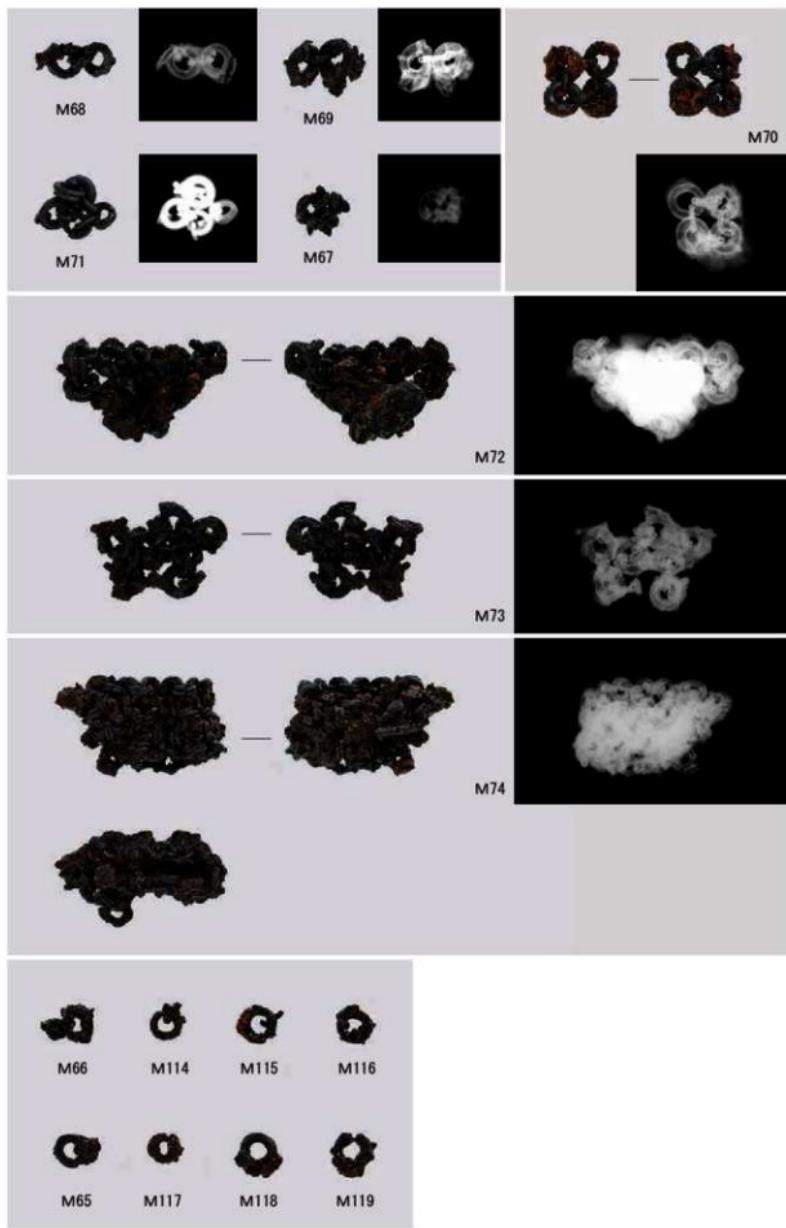


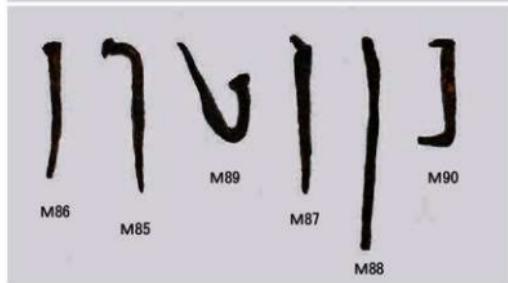
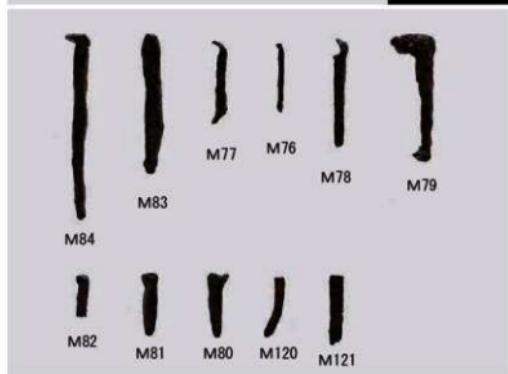
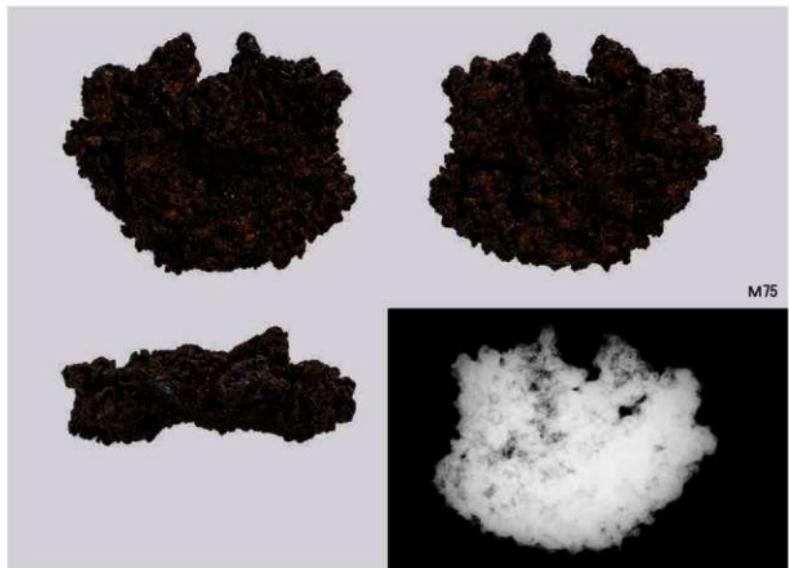
出土金属器 9



出土金属器10







出土金属器I3



---

兵庫県文化財調査報告 第512冊

西脇市黒田庄町

喜多・城山城跡

一般県道黒田庄多井田線道路改良事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和2（2020）年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部  
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号  
(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会  
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：福田印刷工業株式会社  
〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号

---



